918.6-G34イウ
1200500759124

始

25.11.'0

9875
12
納本
9186
G34
(31)

菊池寛集

31巻

杉浦非水装幀

改造社版

昭和三年
帝國圖書館

著者の近作を書齋に於て

欠

ある敵打の話

木八彌は十七歳の春、親の敵を打つ爲に、故郷讃州丸亀を後にした。

つい其年の正月迄は、八彌は自分に親の敵のある事を知らなかつたのである。自分の生れぬ以前に父を失うた事は、八彌の少年時代を通じての淡い悲しみではあつたが、其父が人手に掛つて非業の死を遂げた事は、その年の正月に八彌が元服をする迄は知らなかつたのである。

元服の式が終ると、母親は八彌を膝下に呼んで、父の彌門が同藩の前川孫兵衛に打たれた次第を語つて、八彌に復讐を誓はしめたのである。八彌は母の血走る眼を見た。而して自分の身體に重い責任の懸つて居る事を知つた。

九つの歳から、若殿の御傍に召し出されて、足掛十年近くも小姓を勤めて居た八彌は、まだ世間を知らぬ初心な少年であつた。其上一つ年上の若殿の氣に入つて、殆ど友人關係に立つて居た彼は、何の氣兼もなく若殿と破魔弓の的を競つたり、雙六の相手をしたり、追鳥狩や遊乘にも、一所に行つた。藩の文學の老儒の講義を若殿と、同席で聽いてしびれを切らして後で腹をかゝへて笑ひ合ふ時などは、其處に主從の關係は全く消滅して居た。八彌は城中と云ふ大家族の中に起臥して彼は割合に幸福であり氣樂であつた。十七になつて元服すると共に初て、ある特定の人間を殺してしまはねばならぬと云ふ、困難な緊張した仕事を與へられたのである。

* * * * * * *

實文の年號がまだ若いある年の三月に、八彌は馴れぬ草鞋に足を緊めて、只一人復讐の旅に立つたのである。多度津の港に船がかりをして居た金毘羅船は、八彌をその乘客の數に加へて、瀬戸の内海を吹く春風に帆を充分に孕つて、大阪表を指して海上を滑るやうに走つた。

* * * * * * *

彼は船の帆檣を背にしながら、若殿から拝領の天正融定の一刀を、肩にもたせながら、四つて居た。陸地から離れるに從つて彼の心の裡の激動が段々靜になつた。嚴しい母の訓戒や、若殿からの激勵の言葉などさへ、其の效果が夢のやうに薄らいで行つて、彼の心には昼餐の後に來る倦怠と淡い哀愁とがあつた。彼は自分が少しも關知しない生前の出來事が自分の生涯を支配して居ると云ふ事實を、痛切に感ぜずには居られなかつた。實際彼は今迄父親の事を餘り深く考へなかつたのである。彼の母は父親のない悲しみを、なるべく彼に味はしめぬやうにと、父と云ふ言葉を、彼の聽覺の裡で云ふ事を避けて居たのである、その上彼が若殿のお伽に召し出されてからは、父親に對する要求は殆ど感じなかつた。彼の生活は幸福であると共に、滿足であつたから。夫が今十七になると一時に今迄は殆ど意識になかつた父親に、子として充分な愛を持ち、今迄少しも知らない前川なにがしに敵として大なる憎惡を懷かねばならなかつた。が彼の教養と周圍とは、彼をして親の敵に對し充分な敵意を持つ事を教へて呉れたのである。

八彌は敵の姿を色々に想像した。何となれば、彼の母は敵の前川をさう深くは知らなかつた。前川と八彌の父とは又となき親友ではあつたが、結婚して間もない新家庭を、前川は訪問

欠

する事をなるべく遠慮して居たのである。

で、八彌は前川を知る誰彼を訪うて、彼の人相を尋ねゝばならなかつた。親切な人達は十七八年前の記憶を色々に搾り出して八彌に滿足を與へようとした。がその人達の舊い印象をどんなにつぎ合はしても、八彌は敵の顏容を思ひ浮べる事が出來なかつた。で八彌は仕方なく若殿の文庫の中にあつた藩のお繪師のかいた曾我物語にある工藤の顏を基本として夫に二三の修飾を施して、敵の顏を色々に想像するより外はなかつた。彼はなるべく夫を憎々しく想像する事を努めた、憎々しければ殺す張合があると思つたからである。がその人相の確實な唯一の特徴は、右の横顏にほくろがあると云ふ丈であつた。

船は暫くは、讃岐の海岸に添うたが、高松の港に寄つてから以一文字に浪華を指して走るのであつた。

葉が何んなに强いか、夫も八彌には分らなかつた。が彼は幼い時から一武藝の修業は何よりも大事ぢや一と云ふ母の教訓を守つて、劍法丈は一心に努めて來た。輕捷にして大膽なる太刀筋は藩の指南番の風くから認むる所であつた。八彌の母が彼に復讐の仕事を負せたのも、此指南番の保證を得たからである。

彼は復讐と云ふ事に多少の不安が伴つたものの、全體としては華やかな前途に、多くの勇ましい事と美しい事があるやうな氣がした。復讐と云ふ事が何んなに困難であるかは知らぬが然し夫は華やかな、人間としてやり甲斐のある仕事である事は確だと思つた。彼の心は自分の仕事に可なり熱狂する事が出來た。

安治川に着くと、彼は船宿に足を止めてから、浪華の町を見て歩いた。凡ての華な街々を彼は敵を探すと云ふ心持でのみ觀て歩いた。

一月ばかりの後に京へ出た八彌は、京都の美しい寺々を訪ねた。室町や烏丸通の雲華な町をも通つた。鴨川にかゝる四條、五條、三條の橋を日に〳〵幾度も越えて歩いて居た。物眞似狂言の笛や太鼓の音を耳にした。が京都の名所古蹟にも敵は居なかつた。敵の居らぬ祇園や島原や四條中島は、彼にとつて無味な乾燥な場所であつた。

彼が京を立つたのは初夏の一日であつた。萌えそめた鮮やかな、新綠の朝の裡にある京を捨てゝ、彼は江戸を志したのである。

京から大津を經て瀨田の橋袂に、彼は夕食の爲に茶屋を見附けたのである。まだ正午には少し間があつたが、彼は少しばかり渴を覺えたので休んで行く氣になつたのである。彼は此のあたりの名物の鮒ずしを食べた。茶屋の女が愛嬌に話しかけるのを外にしながら、彼は腰掛をして又も如何にして、敵を發見すべきかを考へて居たのである。ふと氣がつくと自分と同じ讃岐なまりの言葉が何處からともなく耳に附くのである。彼は早くも輕い興奮を覺えて、その聲の方を振向いた。夫は琵琶湖に面した離れ座敷から聞えて來た。物の云ひ方はまさしく武士である。讃岐訛言の武士、夫は彼が求ねる敵の一要件であつた。彼は思はず刀に手をかけた。彼は決定の一刀を引き寄せた。すると其途端に武士は女中を叱り附けながら、荒々しい物音を立てゝ離座敷から店の間に出て來たのである。可なり酩酊をして居たその武士は、泥酔者に特有な妙な歩き振で戸外へ出ようとしながら、ふと八彌と顏を見合せたのである。武士の心に輕い惡意が湧いた。

「見ればまだ、若年のお武士、初旅と見えるなう、ハハハヲ……」と彼は八彌を嘲笑するやうに笑つた。八彌はムッとした、そしてその優しい顏を引りながらその相手をぢつと見つめたのである。

彼はこの武士を憎悪せぬ譯には行かなかつた。頑骨が恐しく出て居た。其の鼻は中途で猶太人の鼻のやうに鼻梁が飛び出て居た。そして其の惡意のある眼附が八彌に充分な嫉妬の心を呼び起したのである。彼は自分の敵もこんな男であつて呉れゝばいゝと思つた。夫よりも此の男が前川孫兵衛であつて呉れゝばいゝと思つた。また實際その言葉遣から充分に夫を疑ひ得た。彼はムッとしたのを冷靜な意志で押へた、彼は此武士を探つて見たいと思つたのである。

「左樣でムります。初旅ぢやで何かと不自由致します」と彼はおとなしく答へた。

「肩に木刀を持つて居るのを見れば武者修行と見えるなう、ハハア　一通りは使ふかの」と、彼は弱少の八彌を他く迄からかつて行かうと云ふ意志が、充分に見え始めた。

が八彌は相手の素性を知らうとして、更に怒を押へた。

「率爾ながら御身樣は濃岐の御方と察しましたが」と、八彌は夫となく訊ひかけた。

「いかにも生駒浪人ぢや、人を殺して國を出た、敵を持つ身ぢやがまだ首が胴に附いて居る、親を打たれても當節の武士は安閑と致して居ると見える。いかにも天下太平の世ぢやテ、ハ、、、」と彼は敵を持つ人々を一般に侮辱したやうな嘲笑を洩した。生駒浪人であれば、或は自分の敵が、さうした偽名を名乘つて居るのかも知れぬと八彌は思つた。夫よりも敵を打ちに行く人々に對する侮辱が彼の心を沸かしたのである。平段である冷靜を、もつと繼けるには八彌はまだ若過ぎた。彼は脾を傷かしながら、ぢつと相手を見すゑたのである。

「ハ、ア見れば血相を變へたな、さては其方も敵持ちか、ハッハッハ、、、その剛膽では敵は思か狗一疋も切れまいて」と云ひながら、武士は自分自身の思ひ存分の痛罵に、快感を感じた如くカラ〳〵と哄笑した。

八彌はもう堪らなかつた。彼は敵を持つ大事な身であると云ふ事も忘れてしまつた。また この男が自分の敵の孫兵衛でない事は、腦都のほくろのないことで充分に明である事に氣が附いては居たが、まだ若くて感情の節制に乏しい彼は、怒にわなゝく自分の心を、冷靜に處置する事は出來なかつた。彼は刀を左の手に持つて突立ちながら、

「なゝ何と云はれる！　狗が斬れるか斬れぬか、ならばお目にかけようか」と叫んだ。彼の聲は稍々鄙へを帶びて居た。

武士は八彌の戰慄を、恐怖の夫だと考へて又更に嗤つた。

「面白い！　見せて貰はう」と、事もなげに云ひ放ちながら、茶店から、ひよろ〳〵と、往還の眞中に出て、長い無反りの佩刀を、エイッと拔聲をしながら、拔放つた。

八彌は流石に落着いて居た。肩に背負うた荷物を緩ばたに下して、草鞋の紐を結び直し、袖定の刀の目くぎを濕すと、其儘抜き放つて敵に走りかゝつた。

その武士は、最初は微笑を以つてあしらつたが、八彌が一太刀斬り込むと同時に武士は明かに狼狽した。彼は此少年の太刀先の餘りに鋭いのに驚いたのである。彼は自分の輕率を悔い始めた。而もそんな引け目の自覺は、益々此の武士を不利の地に置いた。彼は段々、八彌に誘込れて溝田の橋の柳干に追ひ詰められ、もう後退する餘地がなくなつた。命の危いのを感じた彼は、身を躍して柳干を越え河中に逃れようとした。が、彼の意志を遂行したのはその首級丈であつた。飛び込まうとする際を見かけて、八彌は水も堪らず横に拂つたのである。

八彌は此殺人を終つて、自分自身に歸つた時、彼は最初に後悔した。殊に敵が水中に逃げム

うとするのを追窮して迄、斬り下げた血氣を後悔した。が、遠くから見て居た人々は皆八彌の成功を祝つて異れた。そしてその内の好意のある人達は、八彌の身ごしらへを手傳ひながら、村役人が來て面倒の起らぬ前に、早く立ち退くやうに勸めるのであつた。

瀬田の橋を後にした八彌が草津にかゝる頃には、もう最初の悔悟は消えて居た。彼は人を殺す事が、如何にも容易な事であるのに驚いたのである。彼は今迄身に餘る重荷として感じて居た敵打が急にロマンチックな一つの冒險のやうに感ぜられた。山狩に行つて猪を追ひまはすやうな、血腥い多少危險の伴つた冒險として感ぜられるやうになつたのである。其上に彼は自分の腕に對する自信を得た。此上にも道中で修業をしたならば、どんな大敵でも物の見事に打ち取らうと云ふ華々しい野心が湧いたのである。彼は以前よりも、もつと復讐に熱狂して東海道を、江戸へと往還の土を强く踏んだのである。

が敵打は八彌が最初思つたほど、華やかなものではなかつた。夫は非常に根氣の入る一の勞働であつた。その年の夏の眞盛に江戸へ上つた彼は、年の末迄江戸に滯留して、敵の手がかりを求めたが、夫は空しい努力であつた。次の年は中仙道を大坂に下り故郷の山々を遠く見ながら山陽道を長州へと下つて見た。が、その旅も幻を追ふやうに徒勞であつた。第三年目の春は彼は北陸の路に二日三日と旅寢の夢を結んだが、到る處少しでも敵らしい疑を起させる人間にさへ逢はなかつた。二十の春を彼は仙臺の青葉城下に迎へたのである。もう四年目であつた。彼も、故郷を懷しがる日が多くなつた。一日も早く敵を打つて歸國の欣びを得たいと思つた。彼は、敵打そのものには、もう何んの不安をも感じなかつた。四年の遍歷修業は彼の胞衣を殆ど名人の域に持ち上げた。その上冒險的な旅行には夜盜を斬り山賊を殺す事などが多かつた。彼は敵が何んなに强くとも、助太刀が幾十人あらうとも、目指す敵を打つは掌を翻すよりも易いと思つた。

願くば、目覺しい働きをして本望を達したいと思つたが、敵を打つ資格の充分な彼にも、たゞ敵との邂逅が唯一の問題であつた。

二十一の春の初めであつた。八彌は再び中仙道から信越へ入るつもりで江戸を出た。上州間庭の渡口の道場に四五日滯在した後、彼は前橋の酒井侍從の城下に入つた。敵打の費用は、潔から充分に供給を受けて居た彼は、可なり上等な宿を取るのを常とした。其夜も脇本陣上野屋太兵衛の家に宿つたのである。

夕食がすむと、彼は習慣になつた旅日記を記してから、床に入るのが例である。彼が床に入らうとして日記の筆を擱いた時に、廊下に面した障子が靜かにスル〳〵と開いた。見ると其處に平伏して居るのは一人の按摩であつた。

「お客樣按摩の御用は如何でムりまするか」と云ひながら彼は再び頭を低く下げた。八彌は其日樋口の道場で、門人衆と十幾番の仕合をして居たので、彼の肩は可なり凝つて居たのである。

「あゝ按摩か、よい所へ參つたな、一揉もんで貰はうかな」と八彌は云つた。盲人は痛々しく慄慄した身體を靜に八彌に近づけて徐々に肩を揉み初めた。指先には餘り力がなかつたが、彼は急所を揉む事を解して居た。其上、此の按摩はよ宿々で見かける夫とは違つて、恐しく沈默であつた。主客の沈默の内に盲人は段々揉み進んで來た。八彌は少しく眠氣を催しかけた。そして其眠氣を拂ふ爲に盲人に話しかけた。

「そちは中年からの盲目と見えるな」

「御意で、三十三で明を失ひました。感が惡い爲、何かにつけて不自由を致しまする」彼はしわがれた聲で低く答へた。が、八彌は夫を訊く

と、此の盲人の語勢にふと不審を感じたのである。

「そちの生れ故郷は何處ぢや」と八彌の聲は稍興奮として居た。

「四國で」

「四國は孰らぢや」

「讃岐でムいます」

「高松領か丸亀領か」八彌はやゝせき込んで來たのである。

「丸亀領でございます」

「百姓か町人か孰れぢや」

「お恥しながら之でも元は武士でムる」と、盲人は其言葉の裡に、生れながら持つて居る威儀を幾分か閃かしたのである。

「武士と云へば京極殿の浪人だな」と云ひながら、八彌は振り仰いで盲人の顏を、ぢつと見つめたのである。行燈の光ではあつたが、盲人の青ざめた横顏に、敵の唯一の手がかりであるほくろを、歷々と見出したのである。

八彌は右の手を延ばして盲人の手頸をグッと掴んだ。

「汝は前川孫兵衛とは申さぬか、何うぢや」と云ひながら强く引いた。盲人は何の手答もなく、ひよろ〳〵と、へたばつてしまつた。

「何うぢや、前川孫兵衛とは申さぬか何うぢや」と、彼は再びせき込んだ。

盲人は、最初は少しく驚いて居たが、彼は直きに冷靜に返つた。

「お恥しながら、いかにも御意の通りでムる、して其方樣は」彼の聲は、少しも取り亂しては居なかつた。

「よく白狀致した、其方の爲に、非業な死を遂げた鈴木彌門の一子同前八彌と申すものぢや、もはや逃れぬところと尋常に覺悟いたせ」

盲人の驚愕は非常であつた。彼は暫くは茫然とした、その灰色の見えぬ眼に、强い感情が動いて居るのが看取された。が、その驚きは自分の身に、危險が迫つたのを知つての驚きではなかつたらしい。

「なに〳〵彌門どのに、一子がムつたとな、さてはあの時お八重殿が姙娠されて居たと見えるな……それでは其許は今年二十一でおぢやらう……捕者を敵打の事如何にも承知致した。漂泊の旅に明を失ひ命を持て餘して居た所でムる。捕者も之で死れが吹き申すわ」と、盲人の言葉は途切れ〳〵であつて、そしておしまひに淋しく笑つた。彼の全體の言葉は懷舊の情と、しつとりとした謙虛の感情で濕うて居るやうに思はれた。

八彌は凡てが意外であつた。彼は自分の敵として瀬田の橋で逢つたやうな剛情我慢の武士を期待して居た。その人間を見れば、憎惡と敵愾で心が一杯になるやうな武士を望んで居た。然るに、目前に見出した正眞正銘の敵は一個半死の盲人である。彼は非常な失望を感ぜずには居られなかつた。その上に此の盲人が八彌の父母の名を呼ぶ聲音には、無限の懷しみを湛へて居る。彼は今迄自分の父の名が之ほどの懷しみを持つて、發音されるのを聞いた事がないのである。八彌は敵と面しながら、今迄に自分が豫期しない感情に襲はれて餘儀なく沈默を續けて居た。すると盲人はまた語を次いで、

「彌門殿の遺れ片身の其方に、打たれるとなれば、思ひ殘す事はない。が、玆では捕者が多年世話をかけた宿屋に迷惑をかける、大儀ながら利根の河原は直く其處でムる故、夫へ御伴を致さう。さあお仕度なされい」

盲人は如何にも落着いて居た。八彌は一種の發作に陷つたやうに茫然と仕度をし、茫然として盲人に續いた。宿屋の人は妙な好奇心を以て二人を默送した。往來へ出ると二人は暫くは無言であつた。が、少し歩くと、

「率爾ながら母上は御丈夫か」と盲人は訊いた。
「息災でムる」と八彌は答へたが、もう先きのやうな嶮しい聲音ではなかつた。
「彌門殿と捕者とは世に云ふ竹馬の友でムる。何事にも相ずで、殿と形の如く馴れむつんだものでござるが、時の機みには魔がさすものか、其上あの夜は、二人とも酩酊致して居つた。あの過ちを致した後、其場を去らず割腹とは存じたが、母者人に止められて國遠致したのが、捕者一生の不覺でムる。今迄二十年一夜も彌門殿を殺した悔恨に苦しめられぬ日はムらぬ。彌門殿には一子もない爲、名乘つて打たれるすべもないと存じて居たが、思ひの外にそなたに廻り會うて罪亡しの出來るのは何よりの欣びでムる。武士たるものが町人共の情に依つて生き延びるのも心外と存じて居たが……もう此の笛も無用ぢや」と彼は、習慣上右に持つて來た笛を地上に捨てた。

八彌は先刻から、此盲人に對して敵愾心を持たうと努めても、夫が心の底の方から何時の間にか崩れて行くのを感じた。彼は親の敵に廻り合ひながら不甲斐なく挽ゆんでしまふ自分の心を、幾度か叱責しようとした。が、彼には何うしても此盲人の存在を認たうとする意志が起らなかつた。彼は今迄自分が色々の場合に、あんなに容易に殺人の出來た事が寧ろ不思議に思はれた。

盲人は河原へ出る迄數町の間、八彌の父の事を何かと語つた。彼は死際に青年時代の回想を懷しんで居るやうであつた。八彌は盲人の口から、初めて父の明かな性格を知つて新しい懷しみが湧くやうに思つた。が亡き父に對して新しい懷しみを懷く事が決して盲人に對する惡意とはならなかつた。そして盲人は最後に八彌を一目見ぬのが殘念だと云つた。

やがて此の異樣な同伴者の前に、月光に照された利根川の河原が現はれた。すると盲人は彼の杖を捨てながら、

「八彌どの、近頃半爾ながらその差添へをお貸しなされい。身共も武士でムる。たゞ手を拱いて犬死は致さぬぞ」と云ひながら、八彌に差添を借りて身構した。夫が八彌に對する好意の虚勢である事は餘りに見えすいて居た。

八彌は心の内で思つた。その過ちを後悔し、自分で自分の生存を否定しようとする人間を殺すのが何の復讐であらうかと思つた。

「八彌どの怯されたか、いざおかゝりなされい」と盲人は聲を勵まして叫んだが、その聲は夜の河原に物哀しい響を傳へた。八彌は腕組をしたまゝ考へ込んで居たのである。

その翌朝河原に近い人達は、其處に一の死體を見出した。然し夫が盲人孫兵衛の死體である事は後で漸く判つた。何んとなれば其死體には首がなかつたからである。而もその死體には、腹に一文字の傷があつて、當人の自殺であるやうにも思はれた。

八彌は敵の首を下げて歸郷した。そして百石ばかりの加增さへ得た、が彼は何處で敵を打つたのか、何時敵を打つたのかを明かにしなかつた爲、敵の首は僞首だと云ふ噂さへ立つた。そして敵を得打たぬ臆病者とそしるものさへあつた。その爲か何うかは知らぬが彼は間もなく浪人した。延寶の頃、江戸四谷加町に鈴木若狭と云ふ劍客があつて、勇名を府内にとゞろかして居た。之が八彌の後身であるとある人が云つた。

ゼラール中尉

リエージの町の人で、ゼラール中尉を知らぬ者はあるまい。中尉はリエージの周圍に、幾つも鉢んで居る堡壘の一つであるフレロン要塞の砲兵士官である。スタイルの素晴らしく水際立つた、立派な士官である。中尉の短く刈込んだ髭や、いつも微笑を湛へて居る蒼い眸や、一本一本手入れの屆いて居る褐色の頭髮などは、誰人にも快い感じを與へずには、居なかつたのである。

リエージにある、凡てのバアやカフェーの女は、調子のよいゼラール中尉を知つて居る。巴里からの新しい流行歌を、リエージで一番先に歌ふのも此中尉である。巴里下りだと云ふイカモノの歌劇歌姫に、一番に花輪を贈るのも此中尉である。其上に中尉は子供好きで、よくポケットの中に入れて居るボン〳〵を、道端で見かける、子供達に與れてやる。だからリエージの街の子供達の間にも、中尉の評判は頗るよいのである。隨つて、狹いリエージの町では、中尉ゼラールと云へば、誰でもよく知つて居る。

毎晩宵の九時頃には極まつて、ヴァルベノアの橋の袂にあるカフェー オートンヌで、ポンチ酒に酔つて獨唱をやつて居る中尉を、此邊の浮氣な女達は誰でも知つて居た。

フレロンの要塞の内部でも、ゼラール中尉は夫ほど評判の惡い方ではなかつた。兵卒などは、ハキ〳〵した中尉の命令に快く從つた、司令官の老大佐も中尉の事を惡くは思つて居なかつた。たゞゼラール中尉には不思議な事に、友人が一人も出來なかつたのである。

彼はフロレン要塞へ來てから三年近くにもなるが、未だに深い交友を得られなかつた。實際此要塞へ新しく來た士官などは、調子のよいゼラール中尉と一番先に心安くなる、そして最初は友情がグン〳〵發展しさうに見える。所が夫が一月ばかりすると妙にいぢけて、其儘に發達が止まつてしまふから不思議であつた。無論相手の方では、前と同じやうに、ゼラール中尉に挨拶をする、世間並の話も快活にやるが、夫より深くは一歩も踏み込まないやうに見える。それで間もなく、ゼラール中尉よりも、後から知り合になつた他の士官とより親密になつて、軍人同志の遠慮のない友情をゝんでしまふのである。

中尉は、いつも極つて取殘されるのであつた。彼は仕方なく、一人でカフェーへも行き、オペラへも行かねばならなかつた、が新しい士官が來ると、また定まつてゼラール中尉と知合になり、一月ばかりすると、また定まつてゼラール中尉から離れて行つた。だから一年中の大部分、中尉は孤獨であつた。

歐洲戰爭が始る少し前であつた。フレロン要塞へ、ガスコアンと云ふ若い大尉が轉任して來た。何でも今迄はブラッセルの陸軍大學の砲兵科の教官をして居たと云ふので、フレロン要塞の參謀の任に當つたのである。戰術に於ては、深い造詣があると云ふ評判の人であつた。

何時もの通り、新任のガスコアン大尉に取つて、一番取つき安く思はれたのは、ゼラール中尉であつた。二人は最初紹介された時、何かキビキビした挨拶を交はすと、もうお互に相手の談話振や、ウキットを心の内で賞讃し合つた。

夫から暫の間、カフェー・オートンヌではゼラール中尉は決して一人ではなかつた。彼と向

ひあつて新來のガスコアン大尉が坐つて居た。二人は快活に話しながら、幾度も、リキュルを乾すのであつた。

二人の交情は、間もなく要塞の士官連の目を驚かしめるほど、親密に發展して行かうとした。

が、一度ゼラール中尉と交際した事のある人達は、皆フヽンと云つたやうな微笑を以て、此の二人を見て居た。ガスコアン大尉に親しくしたいと願つた若い士官達も、安心して暫く自分の順番を待つて居るやうであつた。彼等は又自分達の番が、直ぐ廻つて來るのを、確信して居るやうであつた。

ガスコアン大尉とゼラール中尉との交情は、十日ばかりの間順當に發展した。が、その間に大尉は初は少しも氣が附かなかつた苦い涙が、中尉との交情の中にある事を見出したのである。

大尉は最初の内は、華やかな交情を得たことを欣んで居た。隨つて色々なものを其欣びの中に包んで居たが、その欣びに依つても紛らせ切れないものが、時々大尉の神經に觸り始めたのである。

夫は外でもない、中尉ゼラールは如何なる場合にも、自分の意志を徹すと云ふ殆んど病的に近い性癖を持つて居る事であつた。

カフェーへ行くと、中尉は極まつて、友人の賛同を待たずに「ポンチを二つ」と註文する。ガスコアン大尉の嗜好が何であるか、何を望んで居るか、何を飲む事を要求して居るかと云ふことは、殆ど、ゼラール中尉の念頭にはないやうであつた。何か喰ふ時にもまたさうである。

「鶏の蒸焼を二皿」とか「腸詰を二皿」とか、ゼラール中尉はいつも他人の分迄も註文した。が、時々ガスコアン大尉がキュラソの方を、より多く望んで居る時などに、

「僕はキュラソを飲みたいものだがネ」

と云ふ希望を婉曲に現すと、ゼラール中尉は、

「君！　このカフェーのキュラソは丸切り駄目なんだよ。玆はポンチがうまいんだ、玆ぢやポンチに限るんだよ」

と云ひながら、彼はうまさうにポンチをすゝつて見せるのであつた。こんな時にガスコアン大尉が强ひてキュラソを註文する事は、二人の間のまだ基礎の淺い友情を、傷ける事は勿論、普通一般の社交の精神にも反することである。で仕方なく大尉は心の裡の不平を殺しながら、體よく自分の要求を、曲げるより外に仕方がなかつた。ガスコアン大尉に段々かう云ふ事が判つた。夫は、ゼラール中尉と一所に居ると云ふことは、常に彼の意志や欲求のお招伴をすると云ふことであつた。中尉は常に二人が行動するプログラムを作つた。

「君今夜はオペラへ行かう」とか、「今日はマーズ河の堤を散歩しよう」とか云ふことを、彼は、巧みに而も執拗に相手に强ひた。而も夫を拒絶することは、大抵の場合に友情を害ふ危險を伴うて居ることが多かつた。十日と經ち、二十日と經つ裡に大尉はゼラール中尉と交情を保つて行くことは、自分の意志を中尉の意志の奴隷にするのと、餘り違はない事を沁々と悟つてしまつたのである。

大尉はポンの僅かな會話にもゼラール中尉の意志――我意が自分を壓伏しようとかゝつて來ることを、よく感じたのである。

ガスコアン大尉に取つて、ゼラール中尉との交情が嫌な荷物として、感ぜられるやうになつた動機の一つには、こんな事があつた。

ある日、二人は例の如くカフェー・オートンヌで葡萄酒を飲んで居た。二人の前の杯に、ゼラール中尉の註文に依つて、注がれた酒は地廻りの葡萄酒で、收穫の僅かな白國產の葡萄から

作つたもので、可なり上品な味を持つて居たが、巴里に二年も留學して、其所のカフェー生活に、耽溺したことのある大尉は、最初の一杯を飲み乾すと、

「うまいことはうまいが上等のボルドーにや、とても敵はないね」と云つた。之は平凡な事實を云つた迄に過ぎなかつた。がゼラール中尉は、

「いや、そりや君が一種の固定觀念に囚はれて居るからだよ、實際のところ葡萄酒の味は白國產の物が第一なんだ、無論產額の點ぢやボルドーには敵はないよ。が、量と質とは全く別問題だからね」と云ひながらゼラール中尉は、ハヽヽヽとわざとらしく哄笑した。

中尉の性格を、よほど理解しかけて居た大尉は、そのまゝ默つて居たかつたのであつたが、葡萄酒好きで、葡萄酒に對する議論を誇つて居る大尉は、何うしても中尉の獨斷的な反駁を、聞き流すには堪へなかつたのである。

「產額などは無論問題ぢやないよ、があのボルドーの上等！　無論千九百年代の僞造ぢや駄目だよ。少くとも千八百八十年から七十年酒の味。（大尉は實際その味を本當に味はつたことのある人丈が覗すやうな微笑を洩しながら）と云つたらまた別だよ、とてもこんな葡萄酒の味とは……」と云ひながら、少しの輕蔑を交へてその白國產の葡萄酒の壜を打振つた。すると、ゼラール中尉は横面を撲られたやうに、恐しく昂奮してしまつた。

「さう云ふ事を云ふ君は、葡萄酒の眞の理解者ではないね、この葡萄酒は穴藏の中に千年藏ひ込んであつたボルドーにだつて負けることではないよ、一體ベルギーの地質がだね……」と云ひながら、彼は白佛の地質比較論から、葡萄の栽培の適不適に及んで、地質の上から云つても、栽培法から云つても、釀造法から云つても、ベルギーの葡萄酒が上等だと主張した。その癖、ゼラール中尉は、自分がボルドーの上等を飲んだ事がない事に、氣が附いて居なかつた。大尉は少々馬鹿らしくなつた。世界の何人にも認められて居る事實を、自分の意地から反駁して居る相手の馬鹿々々しさを、憎むよりもむしろ憫む方が多くなつた。彼はもう少しも、うまくなくなつた葡萄酒を幾杯も重ねながら默つて、ゼラール中尉の議論を聽いて居た。そして早晩、この交情を體よく打切る方法を考へ始めたのである。ゼラール中尉は、ガスコアン大尉が沈默してしまふと、勝利者だと云ふ自覺を以て、三十分餘も彼の獨斷を主張したのである。

その翌日も二人は快活に挨拶した。世間話もした。が、ガスコアン大尉は、自分の意見を成るべく云ふことを避けて居た、たゞ爭はれない事實丈を話して居た。「二二が四」と云つたやうな事ばかりを話す事に努めて居た。彼はつまらぬ意見から、ゼラール中尉の反駁を惹起するのを恐れたからである。

が、こんな會話の上に、友情が育たないのは無論である。ゼラール中尉とガスコアン大尉は、目に見えて離れて行つた。無論ゼラール中尉は、同じ所に止まつて居たのであるが、ガスコアン大尉が段々後退をしたからである。大尉の方には見る〳〵裡に、新しい別な友人が幾人も出來た。

が、二人の友情の自然の結末がどうなつたかは分らなかつた。何となれば此二人の交情も、歐洲戰爭の渦卷の中に捲き込まれてしまつたからである。

千九百十四年の七月の下旬になると、リエージの人心は頗る悩々たるものであつた。リエージの要塞も私かに動員をして、彈藥の補充を行つた。が、誰人も歐洲列强の間の協約の

效力を充分に信じて、白耳義の中立が絶對に安全である事を信じて居たが、兵營の士官達の間には、獨軍が白耳義の中立を犯すと云ふ說を唱ふる者があつた。中でもゼラール中尉は其說の有力なる主張者であつた。

七月二十八日の夕方であつた。フレロン要塞の將校集會所で恐ろしい激論が始つた。激しい聲をきいた士官達は、急いで其處に駈け付けて見ると、激論をして居る士官はガスコアン大尉と、ゼラール中尉とであつた。

二人の主張はかうであつた。ゼラール中尉は、獨軍が佛國へ侵入する通路として白國の中立を破つて先づリエージを衝くと云ふのである。彼は戰術上から夫が獨軍の採るべき唯一無二の方法であると、極論した。が之に對してガスコアン大尉は協約の效力を力說して、獨逸が白國の中立を破ることは絕對にない、若しそんな事があれば夫は獨逸が世界を敵とする事で、たゞ自分で滅亡へ急ぐやうなものである、聰明な獨帝が、そんな暴舉に出る筈がないと云ふのである。

ガスコアン大尉は、此日も最初はいゝ加減な所で穩よく手を引く所であつたが、問題が自分達に本質的に關係して居るので、つい〳〵深入りをしてしまつたのである。二人は熱狂して卓を鳴しながら、政略上から、戰術上から、外交上から、散々に論じ合つた。

傍觀者も議論が口で行はれる以上、止める氣はなかつた。で二時間近くも論戰は續いた。もう二人とも云ふ事は何も殘つて居なかつた。

と、平常に似合はず蒼白して居たガスコアン大尉は、最後に、

「時が證明するのを待たう」と叫んだまゝスタスタと其室を出て行つた。

「無論！　お互にさ」とゼラール中尉の烈しい聲が、ガスコアン大尉を追つて行つた。その聲も數日も二人は挨拶もしなかつた。

八月一日、獨逸が佛國に向つて宣戰し、伸露が之に應じた。大仕掛の殺人事業の序幕が開かれたのである。

白國を衝くか衝かぬかは、白耳義にとつては死活の問題であつた。人々は皆獨帝の劍が、他を指すことを心私に祈つて居た。たゞ白國人の中でゼラール中尉一人丈は、獨軍の國境突破の報を今か今かと待受けて居た。

八月三日の日にゼラール中尉の期待が叶へられた。

白獨の國境からリエージ迄の地方は、ベサール河とゲエスドレ河の流域である。岸や山毛欅の森林に掩はれた丘陵が其間を點綴して居て、清い冷い流の激しい小川がその丘陵の間を幾條も流れて居た。

八月三日になると、もう茶色の軍服を着た獨の輕騎兵がその間に出沒し始めた。

四日の日は獨軍の縱隊が幾つも、銀のやうに輝いて流れるゲエスドレ河の谿谷に滑うてリエージに向つて來た。リエージを護る、ポンチス、ルマン、ロンサン、バルションの堡壘は、皆戰鬪準備にかゝつた。が何人も滑々と限りなく續く獨の大軍を見ては、不安と恐怖とに囚はれぬ譯には行かなかつた。

市民達には義勇兵に志願するものが多かつた。元來リエージの町は小銃製造地であつたので、どの家にも一挺や二挺の小銃はあつた。皆、夫を手にして思ひ〳〵の要塞へ駈け込んだ。

要塞の士官達も、皆決死の色を湛へて居た。獨軍の壓倒的の攻勢の前には、たゞ死があるやうにしか思へなかつた。士官や兵卒は沈默の裡に懸命の努力を盡して居た。たゞかうした悲觀的な緊張の中に、輕快に得意に立ち廻つて居る士官があつた。夫は無論ゼラール中尉で

ある。

獨軍が國境を越えたと云ふ報を、聞いた時の彼の感情は他の人達のとは違つて居た。無論彼は祖國にとつて忠な軍人ではなかつた。が、彼は祖國の運命を心配する感情の除に、自分の意見が適中した快感が、滲んで居るのを何うすることも出來なかつた。而も望遠鏡の裡に獨の騎兵の活動が見え出すと、彼の心の裡に憂慮と得意とが妙に混がらかつた。が、彼は周圍の反感を買ふのを恐れて、なるべく皆と心配を同じにするやうな顏をする事に努めた。

八月の最初の木曜日に、獨軍は第一砲彈をリエージに送つた。ポンチスの要塞が先づ之に應戰した。が、リエージの各要塞では二、三日前から實彈射擊演習を始めて居たので、何時迄が練習で、何時からが實戰になつたのか、只砲聲をきいて居る市民には判らなかつた。

ゼラール中尉はフレロン要塞の第二の砲臺を擔當して居た。夫は最も新しい式の隱塊砲臺であつた。遠方から見れば、芝生の大堤防であつた。が、內部で輕く電氣ボタンを押すと、三つの砲門が一種の呻りを立てながら、堂々たる姿を地上に現すのであつた。發射が終る瞬間、夫は再び急速に沖下するのであつた。

ゼラール中尉は獨兵が侵入して以來、何うに論の止めをさしたいと思つて居た。が、大尉は何となくゼラール中尉を避けて居るやうであつた。

次の日の金曜には、獨軍の砲擊は猛烈を極めて居た。フレロン要塞にも頻々として命中彈が演つた。第三と第七の砲臺が半以上破壞されてしまつた。

ゼラール中尉の奮戰は洵に見事であつた。彼の勇敢な而も沈着な態度は、部下の信賴を買ふのに充分であつた。

その日、ガスコアン大尉は司令官から各砲臺の視察を命ぜられたので、偶儀なく第二砲臺を訪はねばならなかつた。大尉と中尉とは暫く睨み合つて居た。公式上の應答が濟むと、ゼラール中尉は、

「何ですッ、時は正當な審判者ですね」と云ひながら敵意のある微笑を洩した。見ると、ガスコアン大尉の顏は怒に慄へて居た。大尉は國家の存亡の時に當つても、尙自分の意地を捨てない で、獨軍の侵入を欣んで居るやうなゼラール中尉を心から憎んだのである。彼は思はず佩劍の柄を握りしめた。

ゼラール中尉は、鼓で彼の怒を洩すことは、自分が議論に負けた餘憤を洩すやうに、解釋される事の恐れがあつたので、彼は激しい一言も殘したまゝ、物をも云はず出て行つてしまつた。

立ち去つて行くガスコアン大尉の後姿を見送るゼラール中尉は全く得意であつた。彼はガスコアン大尉の憤慨を、議論に負けた口惜しさの爲だと思つた。彼はよく透る聲を振りしぼりながら「二千米突、徒步兵の集團」と元氣よく發令を下して居た。

その日の夕暮の闇に乘じて、輕騎兵は堡壘と堡壘との間を十字火を浴びながら、リエージの町に向つて、突擊を試みた。ポンチスとバルションの堡壘はもうとつくに沈默してしまつて居た。フレロン要塞の直ぐ隣のロンサン堡壘の砲火も、もうめつきりと衰へて居た。リエージの命數は數へる事が出來た。

翌日は、獨の四十三聯隊が初て戰場に現はれた日である。

フレロン要塞も、見る影もなく打ち壞はされて居た。まだ應戰を續けて居たのはゼラール中尉の指揮して居る第二砲臺と、第八砲臺との二つ丈であつた。

其日の十時頃、敵の大砲彈が見事に第二砲臺

のベトンの掩堡を貫いて、内部で爆發をした。ガスコアン大尉は損害を視察する爲、急いで其處へ馳け附けた。見ると砲臺の内部は、ベトンの崩壞で滅茶々々になつて居た。血の附いたベトン　破片が其處にも玆にも散らかつて居た。眞夏の暑苦しい砲臺の空氣の裡に血腥い空氣が滅んで居た。そして死切れない重傷者の叫きが思出したやうに時々聞えて來た。ガスコアン尉は流石に、ゼラール中尉の生死が氣遣はれた。彼は倒れた死傷者を一人々々見て歩いた。そしてやつとの事で砲身の直ぐ横に血に塗つて、倒れて居る中尉を見出したのである。中尉は腹部に大きい砲彈裂傷を受けて居た。まだ息はあるやうであつたが、全く氣絶してしまつて居た。大尉の心にはもう中尉に對する憎惡は少しもなかつた。彼の頭の裡には國家の爲に奮鬪して倒れた勇士に對する純な尊敬と感謝と丈があつた。中尉の傍に蹲まつた彼は、水筒に入れてあつたブランデーを、負傷者の口に注ぎ入れた。すると强烈な酒に依つて刺戟された中尉の神經は、ホンの暫くの間ではあつたが、再び此世界に呼び戻された。大尉は聲を勵まして、

「僕だよ．ガスコアンだよ、氣を確にしたまへ、直ぐ擔荷をよこすからね」と中尉の耳近く叫んだ。すると中尉の朧げな意識の裡に、ガスコアンと云ふ名が浮んだのであらう。彼は囈言のやうに、

「ガスコアン君！　時は本當の審判者でない か」と囁いた。之は本當に囈言であつたかも知れない、また夫は聞き取れぬほどの低聲であつたが、ガスコアンは夫を聞くと忘れて居た不快な感情が再びムラ〳〵と歸つて來るのを覺えた。大尉は、死際になつても、まだ我儘を捨てない中尉を心から卑しみ、心から憎んだ。彼はつまらぬ暇潰をした事を、悔いて其處を去らうとした。

が、見ると中尉は何時の間にか、また昏睡に陷ちて居る。もう死骸に殆ど異らないゼラール中尉を見て居ると、大尉は自分の感情が段々和らいで行くのを知つた。そして、おしまひには國家の安危にも、自分の死際にも、呪はれた意地に附き纏はれて居るゼラール中尉を、憫まずには居られなくなつた。

無名作家の日記

九月十三日。

到頭京都へ來た。山野や桑田は、俺が彼等の壓迫に堪らなくなつて、京都へ來たのだと思ふかも知れない。が、何う思はれたつて構ふものか。俺は成る可く、彼等の事を考へないやうにするのだ。

今日初めて、文科の研究室を見た。思の外にいい本が澤山ある。蠹が桑の葉を貪るやうに、片端から讀破してやるのだ。研究と云ふ點に於ては、決して東京の連中に負けはしないと、俺はあの研究室を見た時に、全く心丈夫に思つた。

其上に、俺は京都其物が氣に入つた。殊に今日、大學の前を通つて居ると、清麗な水が淙々たる音を立てゝ、流れ下つて居る小溝に、白河の山から流れて來たらしい眞赤な木の實が、幾つも流れ下つて居るのを見た。東京の街頭などでは、夢にも見られないやうな、その新鮮な情趣が、俺の心を初秋の京都に惹き附けてしまつた。俺は京都が好きになつた。京都へ來た事を決して後悔はしない。

が、俺は此の頃、つくづくある不安に襲はれかけて居る。夫は外でもない、俺に將來作家として、立つて行くに十分な、天分があるか何うかと云ふ不安だ。少しの一憾れも交へずに考へると、俺にはそんな物が、一寸有りさうにも思はれない。東京にゐる頃は山野や桑田や杉野などに對する競爭心から、俺でも十分な自信があるやうな氣をして居た。が、今凡ての成心を去つて、公平に自分自身を考へると、俺は創作家として、何等の素質をも持つて居ないやうに思はれる。

俺は、文學に志す青年が、動もすれば犯し易い天分の誤算を、やつたのではあるまいかと、心配をして居る。此の事を考へると嫁になるが、青年時代に文學に對する熱烈な志望を語り合ひ、文壇に對する野心に燃えて居た男が、何時が來ても、世に現はれない事ほど、淋しい事はない。俺も、彼等の一人ではあるまいかと思ふ。人生の他の方面に志す人は、少し位は自分の天分を誤算しても、何うにか誤魔化しが附くものだ。金の力、或は血緣の力などが、天分の缺陷をある程度迄補つて呉れる。が、藝術に志す者に取つて、天分の誤算は致命的の失策だ。玆では、天分の缺陷を補ふ何等の資料も存在して居ないのだ。黃金だと思つて居た自分の素質が目を瞠るに從つて、銅や鉛であつた事に氣が附くと、もうおしまひだ。天分の誤算は、やがて一生の造算となつて、一度しか暮されない人生を、マザ〳〵と棒つてしまふのだ。昔から今迄、天分の誤算の爲に、身を誤つた無名の藝術家が、幾人居た事だらう。一人のシェクスピアが榮えた背後に、幾人の群小戯曲家が、無價値な、亡ぶるに定まつて居る戯曲を、書き續けた事だらう。一人のゲーテが、獨逸全土の賞讃に浸つて居る脚下に、幾人の無名詩人が、平凡な詩作に耽つた事だらう、無名にして終つた藝術家は、作曲家にも有つただらう、俳優にも無數に有つただらう。一人の天才が選まれる爲には、多くの無名の藝術家が、その足下に埋草となつて居るのだ。無名の藝術家でも、その藝術的向上心に於て、藝術的良心に於て、決して天才の士に劣つて居る譯はないのだ。彼等の缺點は只一つある。夫は、彼

等の天分が、何んなに焦きを掛けても無かない、鈴か鼠である事だ。

かう考へて來ると、俺は堪らなく自分が嫌になる。俺は、何うして創作家となる事を志したのだらう。何うして、文學を志したのだらう。夫を考へると、俺は何時も、自分の馬鹿らしさに愛想が盡きる。俺が文科を選んだのは、文學者崇拜と云ふ多數もない、少年時代の感情に支配されて居たに過ぎなかつた。もう一つ原因があつたつけ。夫は、俺が中學時代に、作文が得意であつたと云ふ、思にも附かない原因だつた。こんな、少年時代の出來心で選んだ生涯の道程を、今となつては是が非でも、遂行しなければならぬ羽目に居る俺を、つく〴〵情なく思ふ。

夫にしても、高等學校に居た頃は、少しは自信があつた。自信があつたと云ふよりも、自分の眞實の天分なり境遇なりを、自分で誤魔化して行く事が出來たのだ。殊に、山野や桑田などの、燃ゆるやうな文壇的野心や、自惚に近い自信が、俺にも幾何か移入されて居た故かも知れない。高等學校に居た頃、寫室で昇が一緒に、枕を並べて寢る時は、文壇に就いての話の外は、殆ど何にもしなかつた。殊に、川崎純一郎氏の活躍振が、よく我々の話題となつて居た。川崎氏は、俺達に一番近い目標であつた。あの人の陸しい程に燦然たる出世が、その頃の俺達の心を、何んなに驚つただらう。桑田は、そんな話が出ると、機ゆるやうな昨をして、

「なあに！　僕達の連中だつて、今に認められるさ。誰か一人有名になれば、もうしめたものだ。其奴が、殘りの者を順番に引立てゝ行けばいゝんだ」と、桑田は、その最初に名を成す者が、自分であるやうな自信を以て云つた。

「さうとも、文藝部で委員をして居た者は、皆文壇的に有名になつて居るんだ。矢部さんを見ろ！　小山さんを見ろ！　和田氏を見ろ！　近藤さんを見ろ！　皆、文藝部の先輩ぢやないか、なあに！　文壇なんて！　案外譯のない所さ」と、天才的で傲岸な山野が、桑田に合槌を打つたつけ。俺は、かうした會話を聽く度に、山野や桑田などの烈しい希望や、强い自信の一部が、俺の心にも移入されて、何となく頼もしく思はれたと同時に、將來の文壇に於て、眞に名を成す者は、桑田や山野などで、自分は何時迄も彼等の蔭に、無名作家として弱られるのではあるまいかと云ふ不安に、囚はれずには居なかつた。既にあの頃にも、山野は學校中を騷かしたやうな深刻な、皮肉な小說を文藝部の雜誌に載せて居たし、桑田は桑田で、同じ雜誌に脚本を幾つも發表して居た。而も、夫は洗練された技巧と、氣の利いた構想に於いて、全く水際立つた出來榮を示して居る。そして、二人とも文藝部の委員であつた。山野が、文藝部の委員をして居た者は、皆文壇的に有名になつて居るのだ」と云ふ事は、即ち現在委員をして居る山野が、將來容易に文壇に名を成す事が出來ると、宮言したのと全く同じであつた。

俺は、何時も山野が、自分の人格の强みを頼りとして、無用に他人を傷けるやうな、薄皮に出るのが不快だつた。が、夫にも拘はらず、彼奴の才分を認めない譯には、行かなかつた。山野でも桑田でも、確かに第一歩は踏み出して居るのだ。然るに俺は、あの頃は無論の事、今でも何もやつて居ない。その上、俺一人連中を離れて、文壇に出るのには非常に不利な、京都に來てしまつた。夫には經濟上の理由もあつた。が、他の有力な原因は、俺は山野や桑田などの間にあつて、彼等の秀れた天分から、絶えず受けて居る不快な壓迫に、堪らなくなつた爲だと、云へば云はれない事もない。殊に、山野となると、意識的に俺を壓倒しようと掛つて居

た。彼奴は、自分の秀れた素質を、自分より劣つた者に比較して、其處から生ずる優越感で以て、自分の自信を培つて居ると云ふ、性質の惡い男であつた。そして、その比較の對象となるのは、大抵の場合、俺だつたつけ。何時だつたか、俺が芳田幹三の「潮」を讀んで感心して居ると、彼奴は「何だ！『潮』が面白い！　そいつは、少し困つたなあ！」と嘲笑したつけ。彼奴の嘲笑は、人を突き放したまゝ、傍へ寄せ附けないと云つたやうな、辛辣な嘲笑だつた。彼奴は、俺が少しでも、甘さうな物を讀んで居ると、屹度前のやうな嫌がらせを云つた。夫と同時に、俺がイブセンの「ブラント」のやうに少し難解な物を、讀んで居ると、

「ほう！『ブラント』かい！　君に解るかい！」と云やあがつた。こんな時、俺は彼奴を殴り附けて、やりたいと思つたが、彼奴の日暮な顔と、聰明な眸とを見ると、ある威嚴を感じて、肉體的には俺よりも、よつぽど弱い彼奴を、何うともする事が出來なかつた。彼奴は、桑田、俺、杉野、川瀬などの創作家志望の連中ばかりが、集まつて居る時に、よくこんな事を云つた。

「俺達が、皆段々文壇に認められて行く。が、一人位は何だが、取殘されさうだよ。皆が、新進作家として、ワイ〳〵持てはやされて居る時に、自分一人が取殘されて居る。一寸變なものだらうな。が、その貧乏籤は、案外俺かも知れんて！」

彼はさう云ひながら、自信に充ちて哄笑した。そして、俺の方を意味有り氣に、チラッと見た。俺は、可なり嫌な氣持になつた。同じく創作家として、出立したものの内、その一人が何時迄も、取殘されると云ふ事は、如何にも皮肉な事で、殘される當人になつて見れば、全く堪らない事に相違なかつた。が、實際さうした場合は、容易に起り得る事だ。天分に一番自信のない俺は、そんな場合を想像する事を、努めて避けようとして居る。然るに、山野は俺や、俺と同樣に自信の薄い杉野などを、嫌がらせる爲に、そんな皮肉な場合を、想像して喜んで居たのだ。

唯一人、取殘される！　夫は考へて見ても、淋しい事に相違なかつた。俺は、東京に居て、山野や桑田などと、競爭的になるのが、不快で堪らなくなつた。彼等から間斷なしに受くる、不快な壓迫から逃れる丈でも、俺に取つて何れ丈、いゝ事か分らなかつた。京都に來て、彼等と全く違つた境遇に居れば、彼等に取殘された場合にも、云ひ譯は幾何でもある。又、京都に來た爲に、文壇に出る機會が、却つて延められるかも知れぬ見込が、臨げながらあつた。夫は中田博士が、京都の文科の教授である事であつた。博士は、もうよほど、文壇の中心からは離れて居る。が、夫でも文壇の一部とはある種の關係がある。博士の知遇を得さへすれば、案外早く文壇に紹介されて、俺の天分を飽く迄輕蔑して居る山野などを、アッと云はせてやる事も、決して不可能でない。俺が、京都へ來た理由は、さう云ふ點にも幾何かある。

十月一日。

何となく落着けない。殊に夕暮が來るとさうだ。青い絨毯を敷きつめたやうに、擴がつて居る比叡の山腹が、灰色に蒼茫と暮れ初むる頃になると、俺は立つても居ても、堪らないやうな淋しさに囚はれる。俺は自分で、孤獨を求めて來た。が、その孤獨は、直ぐ俺を反噬し始めた。而も、俺の孤獨の淋しさの裏には、烈しい焦燥の心が、潜んで居る。東京に居る山野や桑田などが、一日々々何んなに、成長して居るかと考へると、俺は一刻もヂッとしては、居られ

無名作家の日記
P.15.16は前頁3枚目の裏

ないと云ふ氣がする。俺が、研究室でバアナアド・ショオの全集を漁つて居る裡に、桑田は兼々書くと云つて居た三幕物の社會劇を、もうとつくに書き上げて居るかも知れない。俺が、教室で下らないノートを作つて居る間に、山野はもう半分以上譯了して居たハウプトマンの「織工」の出版書店を、見附けたかも知れない。さう思ふと、俺は愈々堪らない氣がする。今年中に、山野と桑田とは、文壇に兎も角も、一個の足掛を築くかも知れない。俺はもう決してヂッとして居られないのだ。

俺は、彼等に對抗する爲に、戯曲「夜の脅威」を書いて居る。が、俺の頭は高等學校時代の出鱈目の生活の爲に、全く消耗し切つて居る。此の戯曲の主題には、少しは自信がある。が、俺のペンから出て來る豪辯は月並の文句ばかりだ、中學時代に、自分ながら誇つて居た想像の富贍な事などは、もう俺の頭の中には、痕形もなくなつて居る。が、兎も角此脚本を書き上げる。脚本が出來上つたら、中田先生を訪問する事にしよう。先生の好意で、俺の前途は案外明るい物になるかも知れないから。

俺は今日偶然、吉野辰三君に逢つた。高等學校では、俺より一年上で、やつぱり京都の文科に來て居るんだ。吉野君と話して見ると、文壇に出ようとして蹟いて居る者は、決して俺一人でない事を知つて少しは安心した。吉野辰三！以前俺はあの人を、何んなに崇拜したか分らない。明治四十年頃の文學世界の讀者に取つて、あの人の名は何んなに輝き、何んなに魅力を持つて居ただらう。田山花袋選の懸賞小説に幾度も投書して、成功しなかつた俺は、吉野君の華やかな活躍振を何んなに羨望したか分らなかつた。

が、天才とまで激賞された吉野君は、その後文學世界の投書を止してから、もう何年になるかも知れないが、杳として文壇に名を現す所がない。文學志望を廢したのかと云へば、さうでもない。現に文科に居て、文壇に出る機會を待つて居る。が、その機會は此の人に容易に與へられさうもない。話して見ると、吉野君も猛烈に焦せつて居る。が、あの人が「僕だつて、之でも新進作家と云はれた事があるんだからな」と云つた時には、俺は少し淋しい氣がした。吉野君は、昔の夢を修程誇張して居るのだ。何でもあの頃、文學世界の當選小説ばかりを蒐めた短篇集が、世に出た事がある。その標題に、新進作家と云ふ肩書が附いて居たやうに記憶する。が、投書家として榮えた事を、一かどの作家でもあつたやうに幻想して、樂しんでゐる吉野君に對して、俺は氣の毒なやうな淋しいやうな氣がした。然し、俺は吉野君に逢つてから、何だか輒もしいやうに思ひ出した。少年時代に、十分な才華を輝したあの人が、まだ少しも出られないで居る、夫を思ふと、俺は少し安心した。

が、此の大學の文科の連中は、何うしてあゝ、揃ひも揃つて救はれない人間ばかりが、集まつて居るのだらう。殊に俺のクラスの奴等はヒドい。廣島の高師を出て來たと云ふ男は、昨日黒板に書いた佛の詩人ボードレールの名を、バウドレアと獨逸讀みにして、得々として居やがつた。もう一人の男は、中田博士の質問に答へて、モンナ・ヴァンナはメエテルリンクの小説だと答へて居た。俺は、奴等全體を輕蔑してやる。高等學校に居た頃には、教室も寄宿舍も、凡てが文藝至上主義で一貫されて居た。藝術の名に依つて、學課や教室を無視する事が出來た。然るに、玆の文科の教室の空氣は、極度に散文的だ。一人として藝術の話をする奴が居ない。高等學校出身の人達は、大抵病身の爲に文科

を選んだとか、哲學科で一年落第した爲に、文科へ轉じたと云ふ連中だ。高師出身の者にも、入學資格がある爲に、彼等は學士號を得る爲に、丹念にノートを作つて居るのに過ぎないのだ。文科的な自由な清新な空氣は、教室の何處にも存在しなかつた。こんな連中を前にして、文學がどうの、藝術が何うのと云つて居る中田博士は、丸切り豚に眞珠を撒いて居るやうなものだ。俺は、博士が氣の毒になつた。

十一月五日。

俺は今日偶然、同じクラスの佐竹と云ふ男と話をした、俺は今迄クラスの奴をスッカリ輕蔑して居たが、あの男丈は決して俺の輕蔑に値して居ない事を知つた。つい俺が創作の話を持ち出すと、あの男は突然こんな事を云つた。

「僕も、實は昨日百五拾枚ばかりの短篇を、書き上げたのだが、何うも餘り滿足した出來榮とは思はれないのだ」と、如何にも落着いた態度で云つた。百五拾枚の短篇！　夫丈でも俺は可なり威壓された。俺が今書きかけて居る戯曲「夜の脅威」は、三幕物でも而も僅かに七十枚の豫定だ。而も俺は夫を可なりの長篇と思つて居る。然るに此の男は百五拾枚の小説を短篇だと云つた上、まだこんな事を云つた。

「實は今、僕は六百枚ばかりの長篇と、千五百枚ばかりの長篇とを書きかけて居るのだ。六百枚の方は、もう二百枚ばかりも書き上げた。百枚の方は、何かの形式で發表する心算だ」と、云ふ事が大きい上に、如何にも落着いて居る。自分の力作に十分な自信を持つて居て、俺のやうに決して焦せつて居ない。俺は此男に威壓されると同時に、一種の親もしさを感じた。京都にもかうした眞摯な作家が居るのだ。恐らく此の男の名前は、文藝雜誌などには、六號活字ででも出た事はあるまい。が、此男は默々として、長篇の創作に從事して居るのだ。此男の書いた物を一行も讀んで居ないから、此男の創作の質に就いては一言も云はれないが、六百枚、千五百枚と云ふ量から云つて、此男は何かの偉さを持つて居るに違ない。が、あの男はその次ぎにこんな事を言つた。

「僕は小説家の林田章人を知つて居る。あれは僕の國の先輩だ。今度文科へ入るに就いて、ワザ〳〵上京してあの人と會つて來たのだ。快く會つて呉れた上に、馬鹿に話がはずんでね。よく評の解る人だよ。今度書き上げた百五拾枚の小説も、實はあの人の所へ送つて置く積りだ。多分何處かへ、推薦して呉れるから」俺は佐竹君を可なり尊敬し始めたが、之を聞くと、少し此の人が氣の毒に思はれた。たゞ同縣人で一面識しかない林田章人を頼りにして、濟して居られる此人の呑氣さは、少し淋しかつた。全く無名の作家たる佐竹君の、百五拾枚の小説を、林田氏の紹介に依つてオイソレと引き受ける雜誌が、中央の文壇に在るだらうか。又門弟でも何でもない佐竹君の物を、林田氏が氣を入れて推薦するだらうか？　あの人は、投書家から色色な原稿を、讀まされるのに飽き切つて居る筈だ。こんな當にならない事を當にして、直ぐにも華々しい初舞臺が出來るやうに思つて居る、佐竹君の世間見ずが、俺は少し氣の毒になつた。實際、本當の事を云へば、文壇でズボラとして有名な林田氏が、百五拾枚の長篇を讀んで見る事さへ、考へて見れば怪しいものだ。佐竹君の考へて居るやうに、凡てがさう易々と運ばれて堪るものかと思つた。

十二月二十九日。

俺は、今日東京の山野から、不快極まる手紙を受取つた。夫は、俺に挑戰し俺を侮辱し、俺

の感情を滅茶苦茶に傷けてやらうと云ふ惡意に充ちた手紙だ。文句はかうだつた。

（何うだい！　馬鹿に默つて居るね。京都にも、少しは文學らしいものがあるかい。僕達此方に居る連中は、もう今迄のやうにたゞぼんやり、外國文學の本などを、弄ぢり廻す事に飽いてしまつたのだ。僕達が、高等學校時代に神聖視して居た「文學研究」なども、考へて見れば下らない事ぢやないか。僕達は、自分で創作しなければ偽だ。創作は黃金だ。外の凡ては銀だ。否夫以下の銅か鉛かだ。僕達は、もうヂッとしては居られないのだ。高等學校時代のやうに、何時迄も呑氣に構へては居られないのだ。僕達の計畫は、もうスッカリ定まつて居る。僕達は來年の三月から同人雜誌を出すのだ。同人の顏觸は、桑田、岡本、杉野、川瀨、夫に僕、此の外に僕達より一年上の井上君、芳島君が加はる。雜誌の名は多分「×××」と附くだらう　三月の一日に初號を出す、出版元は日本橋の文耕堂だ。もう、皆は初號の原稿に忙しい。〆切は一月三十日限だ。まあ刮目して、僕達の活動振を見て呉れ給へ。僕達は本當に鑒明が來たと云ふ氣がする）

おしまひ迄、讀み了つた俺は、烈しい嫉妬と憤とを感ずると同時に、突き放されたやうな深い淋しさを、感ぜずには居られなかつた。

この手紙の何處にも、君も同人になつては何うかとか、君も書いては何うかと云ふやうな文句は、破片さへも、は入つて居ないのだ。凡ては山野の遊戯的な惡意から出た手紙だ。同人雜誌の發行を、凱旋的に報じて孤獨に苦しんで居る俺を、飽く迄傷けてやらうと云ふ彼の性質の惡い惡戯だ。同人に加へない俺には、少しの必要もない初號の〆切期日などを報じて、俺を焦燥だたしてやらうと云ふ彼奴の惡意が、歷然と見え透いて居る。

山野が豫期して居たよりも以上に、此の手紙は俺を傷けた。京都へ來てからまだ半年にもならない間に、俺と東京に殘した友達との間に、早くもある間隔が作られつゝある事を、悲しまずには居られなかつた。同人雜誌の出版！夫は何んなに華々しい事であらう。文壇に時めいて居る我々の先輩たる川崎も、矢部も、辻田も初は雜誌「×××」の同人としてその若々しい名を、文壇に認められて行つたのだ。山野や桑田が認められる順番も、もう決して遠き未來ではない。山野桑田は勿論、俺とは天分に於いて、餘り相違はないと思はれる岡本や川瀨や杉野でさへ、之でもう的確に、文壇に打つて出る第一歩を踏み出して居るのだ。然るに俺は山野が手紙の中にあれ程輕蔑した「文學研究」を唯一の本領として、獨ぼつちで、捨てられて居るのだ。

俺は、山野や桑田が俺を同人から除外したにしろ、俺とは可なり親交のある川瀨や杉野迄が何等の好意を示して呉れなかつた事を、恨まずには居られなかつた。

俺は山野の手紙を、ズタ〳〵に引き裂くと共に、絶望的な勇氣を振ひ起した。彼等が同人雜誌で打つて出るのなら、俺は單獨で、出て見せる。そして奴等の鼻を空かして、アッと云はせてやらう。が、さう決心して居る裡にも、深い淋しさがひし〳〵と俺に迫つて來た。俺に獨力で出る力があるか、俺は自分の天分を、夫れ程迄信ずる事が出來るだらうか。俺が、山野や桑田などに反感を懷いて、彼等を遠ざかれば遠ざかる程、文壇に出る機會から遠ざかつて居るのではあるまいか。今度でも杉野にでも泣き附いて、同人に加へて貰ふ方が、俺に取つては得策ではあるまいか。が、俺を馬鹿にし切つて居る山野は、「富井などが、同人になるのなら、俺は差し控へた方が、いゝかも知れない」位の毒言

は、必ず云ふに定まつて居る。さうなれば、却つて取をかきに出るやうなものだ。俺はやつぱり、獨立してやつて見よう。「夜の脅威」を書き上げたら、早速中田さんに見て貰ふのだ。彼等が、同人雜誌などで、もがいて居る裡に、俺の物は一躍して相當な文學雜誌に紹介される。俺は、夫を考へて居ると、手紙を讀んだ時に受けたむしやくしやが、少しは癒えて行くやうな氣がした。

其處へひよつくり、吉野君が訪ねて來た。俺は、早速東京の連中が、同人雜誌を出す事を話した。俺の口調は、全く平靜を缺いて居た。吉野君は、何時ものやうに「朝日」を悠然と吸ひながら、

「なに君！　同人雜誌などへは、幾何書いても仕方がないものだよ。やつぱり大きい雜誌に、書かなければ駄目さ。まあ桑田君などに、大にやらせて見るのだね。案外、さうお安くは問屋で卸さないから。僕は、同人雜誌などで、騒がないで、いゝ物が出來れば、文學世界あたりへ持ち込むよ。昔の縁で、嫌とは云ふまいから」

俺は、吉野君が、同人雜誌を貶し附けるのを聽いて、幾何か安心した。そして、心の裡で山野等の「×××」が、一日も早く廢刊する事を祈つた。そして「×××」が、成る可く文壇から注目されない事を祈つた。實際俺は、俺の全人格で以て、同人雜誌「×××」を呪つて居たのだつた。

一月三十日。

俺は、今宵初て中田博士を自邸に訪うた。俺は感激に充ちて居た。が、考へて見れば、感激した俺の方が馬鹿だつたのだ。中田博士の方から云へば、たゞ一人の學生の訪問を受けたのに過ぎないのだ。

俺は、挨拶が濟むと直ぐ、俺の脚本を出した。

「是非一つ御覽になつて下さい。出來は餘りよくありませんが、處女作ですから」

「なるほど」と、博士は獨の筋肉一つ動かさずに云つた、そして、一寸二三枚めくつて見てから、

「執れ弁見して置きませう」と、靜かに、附け加へた。俺が、山野等の同人雜誌に對抗する爲に、生命の力を注いだ力作を、博士は何の感激もなしに、俺の手から受取つた。俺は夫が可なり淋しかつた。

「よかつたら、何處かの雜誌へ」と、そんな事は、口に出す勇氣さへなかつた。俺は、手持無沙汰になつて歸らうとした。そして歸り際に、

「英國の近代劇の研究には、何んな參考書がいいでせうか」と訊いた。すると博士は言下に、

「マリヨ・ボルサがいゝでせう」と云つた。俺は、夫を聞くと少々落膽した。マリヨ・ボルサは、俺が高等學校時代に讀んだ本だ。ホンの手引草に過ぎない本だ。

俺は、博士が詩に熱心で、戲曲には冷淡だと云ふ風評を、幾度聽いたかも分らない。然し、之程博士が、戲曲に冷淡だとは思つて居なかつた。俺は、「夜の脅威」が、博士から受くる待遇に就いて全く心細くなつてしまつた。

二月二十日。

中田博士と、教室で度々顏を合すけれども、俺の戲曲に就いては何も云はない。而も博士は講義の時間にイブセンの「幽靈」を散々に罵倒した。俺の戲曲は、實を云へば「幽靈」からヒントを得て居るので、俺はイブセンに對する博士の罵倒から、可なり傷けられた。博士は、恐らく夫を故意にやつたのではあるまい。が、俺は兎に角不快だつた。

佐竹に會つたが、彼奴は林田草人に送つた小説に就いて、林田から何も云つて來ないので、可なり氣を惡くして居るらしい。が、彼奴が、自分の小説が直ぐ林田の好意ある推薦を受けるとでも、思つて居るのは、彼の無智から出た自惚だ。

三月五日。

到頭、同人雜誌「×××」が出た。迫に俺にも一部送つて來た。俺は、夫を開いた時、今迄にない不快な壓迫を感じた。夫は、山野から受けた夫よりも、もつと不快な而も現實的なものであつた。同人の連名を見た時に、俺は到頭奴等に捨てゝ置かれたと思つた。俺は、何れ程嫉妬に燃えただらう。俺よりも天分に於いては、劣つて居ると思ふ岡本など迄が、俺より急に偉くなつたやうに思はれて仕方がない。

俺は卷頭に載せられた山野の小説「飢」を、恐る〳〵讀んだ。俺は夫が不出來で、愚作で全然彼の失敗である事を祈りながら讀んだ。が、その一分も隙のない、纏つた書き出しに俺は先づ氣押されてしまつた。殊に一句々々、蜘蛛の絲のやうに粘り氣があつて、而も光澤のある文章が、山野一流の異色ある思想を、グン〳〵と表現し行く邊、俺は彼奴に對して益々强い反感を感ずると同時に、彼奴の魅力ある筆致に依つて、グイ〳〵頭を押さへられてしまつた。殊に「飢」の主題は、今の文壇には、一度も現はれなかつたやうな、奇拔な而も深刻味のある哲學だつた。若し「飢」が、山野否俺の友人の作品でなかつたら、俺は何んなに驚喜した事だらう。夫が、俺の競爭者而も俺を踏み附けようとする山野の作品である爲に、俺は全力を盡くして、その作品から受くる感銘を排斥しようとした。が、俺は山野の作品の價値を認めぬ譯には行かなかつた。が、夫から連想される事は、山野が一躍して文壇に認められはしまいかと云ふ事だ。俺は夫を考へると、いゝ氣はしなかつた。山野が一旦認められるとなると、彼奴は俺に對して何んな侮蔑をやるかも知れない。同人雜誌の發行を知らして來たやうな手緩るいものではない、俺は夫を思ふと黯然たる氣持がする。が、俺を壓迫したのは、山野の作品ばかりではない、その次ぎに載つて居る桑田の小説「闖入者」だつて、漠然として纏つた小品だ。彼奴のきび〳〵した筆致を見た時、俺は桑田にだつても敵はないと思つた。が、俺はその事をなるべく認めまいと努力した。が、實際俺の「夜の脅威」を「飢」や「闖入者」に比べると、作者の俺が何んなに、暴眉眼に見ても、奴等の物が段違にいゝ。俺は、夫を考へると、少し絶望的になる。が、山野や桑田の作品がよいばかりでなく、杉野や岡本のものでも、中々纏つた出來榮だ。俺は杉野や岡本などの素質を、俺以下のものと見積つて、やつと安心して來たが、その安心も何うやら根柢から搖いで來たやうだ。俺は雜誌「×××」を手にしたまゝ午後三時頃から、七時頃迄夕食も喰はないで、ぼんやり考へ込んで居た。すると其處へヒョックリ吉野君がやつて來た。

俺は、此時位吉野君を憎もしく思つた事はない。俺は、吉野君と一緒に「×××」の惡口を云ひたかつたからである。吉野君も恐らく、同じ目的で、俺を訪問したのかも分らなかつた。

「やあ！　君も『×××』を讀んで居たのか。僕も今朝本屋で買つたよ。案外いゝものはないね」と吉野君は、座に着くと直ぐ、其處に落ちて居た「×××」を弄くりながら話し出した。俺は、吉野君の總括的の貶し方が、可なり氣に入つた。が、俺は「本當だ」とも合槌を打てなかつた、實際俺は何の作品も感心して居たのであるから。俺は恐々ながら「山野の『飢』は何う

だい」と訊いた。

「輕妙だ。然しあんなものは、誰にだつて書けるぢやないか。少くとも江戸つ子には書けるね」と、江戸つ子たる吉野君は昂然として云つた。俺の良心は、吉野君の云つて居る事に、全然反對した。が、俺の感情は吉野君の云つた事に滿腹の贊意を表した。

「桑田君の『闖入者』も餘りよくないね。古い！　まるで、自然主義から一歩も出て居ないのだ」

俺は段々心强くなつた。俺は、今日程吉野君を尊敬した事はなかつた。吉野君は、最後にこんな事を附け加へた。

「要するに高等學校の雜誌に、少し毛が生えた程度のものだよ。あれで、文壇に出ようと思つて居るのは、少し蟲が好過ぎるね。やつぱり、同人雜誌なんかに、幾何書いても駄目だよ。相當位置のある雜誌で、發表しなければ駄目だよ」と、吉野君は最後に自分の持論を繰返した。

俺は、吉野君の辛辣な批評を聽いて、救はれたやうな心持になつた。

が、吉野君が歸つてしまふと俺は又、淋しい心持に襲はれた。見ると、吉野君に散々叩かれた雜誌「×××」は、洋燈の暗い光の裡に、放り出されてある。俺は、創作は黃金だといつた山野の言葉を思ひ出した。そして、譬ひ小雜誌にせよ、活字になつて居る以上は、夫はもう立派に完成された、表現の形式である。夫が文壇的に認められる、十分な機會を備へて居た。殊に、文科大學學生の同人雜誌として、何んなに新鮮な感興を、文壇の一角に、感ぜしめて居るかも知らなかつた。俺は無名の作家達が、文壇の流行兒の惡口を、思ふ存分に云ひ合つて、自分達の認められない腹癒せをする場合を、考へる事が出來た。俺と吉野君との會話も、殆ど夫に近かつた。夫は弱者の弱い反抗に相違なかつた。さう考へて來ると、また空虛な感じに襲はれた。夫にしても中田博士は、俺の「夜の脅威」を、何時迄捨てゝ置くのだらう、俺は、博士の無頓着に對して、輕い反感を懷かずには、居られなくなつた。

三月十日。

俺は、今日學校で佐竹君に逢つた時、

「おい、君の長篇小説は、何うしたい」と訊いた。すると、あの男は、暗い顏を一寸明るくしながら、

「四百五十枚迄書いた。もう百五十枚書けばいい。この頃は創作熟が丸切り旺盛なのだ。毎晩三十枚は缺かした事はない」と、昂然たるものがあつた。

「何うしたい！　林田の所へ送つて置いた小説は」かう訊くとあの男は急に顏を暗くした。

「送り返して來たよ。雜誌には長すぎるからだつて。片々たる短篇ばかりを載せたつて、一體何うすると云ふのだ。だから、日本にどつしりした長篇が出ないのだ」

が、俺は佐竹君の小説が、送り返される事を豫期して居たので、少しも驚かなかつた。そして百五十枚の長篇、而も無名作家のものが、さう容易に紹介されて堪るものかと云ふ氣がした。が、俺は、此の人の旺然たる創作熱には、何時もながら、敬意を表する。何時か、あの男の部屋を訪問した時、實際あの男は、もう三百枚もあると云ふ草稿を俺に見せた。その上、少年時代からズーッと書き溜めたと云ふ高さ三尺に近い原稿を、俺の前に積み上げた。

「百枚位のものなら、七つ八つありますよ。此内で、一番長いのは五百枚の長篇で僕の少年時代の初戀を取扱つたもので、幼稚でとても發表する氣にはなれませんよハ、、、」と笑つたつけ。俺は、あの人の多産に感心すると共に、その呑氣さにも感心した。發表する氣にはならな

いと云つて、若し發表する氣にさへなれば直ぐにも出版の書店でもが見附かるやうな、呑氣な事を考へて居るのだ。俺はあの男のやうに、發表と云ふ事や、文壇に出ると云ふ事に就いて、少しの苦勞もない心理狀態が、可なり不思議に思はれる。あの男は、只書いて居さへすれば夫で滿足して居られるのかしら。

三月十五日。

雜誌「×××」の評判が、素晴らしく好い。殊に山野の「飢」の評判がいゝ。俺は、なるべく新聞の文藝欄を見まいとした。「×××」が評判されるのが、癪だからである。が、何となく「×××」の評判が氣になつて仕方がない。俺は、白狀するが、もう三日ばかり、續けて圖書館に通つた。そつと「×××」の評判を讀む爲めにである。最初にI新聞が、六號活字ではあつたが、雜誌「×××」の創刊を祝福した、そして山野の「飢」を特に激賞した。が、夫ばかりではなかつた。夫から、三日ばかりしてT新聞の文藝欄で批評家H氏が、山野の「飢」を激賞した。俺は、夫を讀んで心の奥から、こみ上げて來る嫉妬を、何うする事も出來なかつた。到頭、彼奴に踏み躪られたと思つた。俺は、此二三年、憂慮して居た運命が、もう的確に、實現するやうに思つた。山野や桑田が文壇の花形として持てはやされ、俺が無名作家として、永久に葬られる事、夫はもう「×××」の發行で、早くも實現の第一段に、到達したのだ。

俺は、山野の天分の力に、何うして對抗しようと云ふのか、山野の天分が認められると云ふ事が、當然であればある程、俺の反抗は、無意味で目茫しかつた。俺はもう目を閉ぢて、彼奴の華々しく打つて出るのを、辛抱するより外に、何うとも仕方がないのだ。たゞ、彼奴に對抗する唯一の方法は、俺が彼奴と同時に、文壇へ出て行くと云ふ事であつた。俺は、さう考へると、再び俺の創作「夜の脅威」の事を思ひ出した。夫は餘りに、頼りにならない物に相違なかつた。が、文壇の水準以下のものとは何うしても思はれなかつた。俺は、今宵は圖書館を出ると、直ぐ中田博士の家へ急いだ。「夜の脅威」に就いての批評を聞いた上、是非共何處かの雜誌へ、推薦を依頼する心算であつたのだ。

中田博士は、都合よく在宅した。

俺は、博士と向ひ合ふと直ぐ、

「如何です、何時かお願ひしました脚本は、讀んで下さいましたでせうか」と切り出した。

「あ！」と、博士は一寸當惑の色を示したが直ぐ、「あゝあれでしたか。つい忙しくつて、讀みかけのまゝですが、孰れゆつくり讀んだ上で、謹つた批評をしませう」と、平素ものやうに、悠然と答へた。が、俺は、博士がまだ一枚も讀んでくれて居ない事を直覺した。俺が、之程焦燥の裡に、努力して書き上げた作品を、一ヶ月半もの間、一讀もしないで、置きつ放しにして置いた博士を、俺は少し呆氣に取られて見た。が、博士には、夫が、餘り不自然ではないらしいと見えて、直ぐ話題を換へて話し出した。

「佛蘭西の近代劇の中にも、中々いゝものがありますよ。近代劇と云へば、北歐の專賣のやうに思つて居るから、困りますよ。何と云つても、芝居は佛蘭西が元祖で、イブセンなども、やはり作劇術の點に於ては、明かに佛蘭西劇の影響を受けて居ますよ」

俺は、佛蘭西劇の話などを聽くやうな心持とは丸切り懸け放れて居た。中田博士の手の中に在る俺の「夜の脅威」は、一體何時が來たら、日の目を見るだらうと、夫ばかりを心配して居た。俺は、一層の事、貰つて歸らうかと思つた。が、實際中田博士の手を經ずして、文壇に一指を屆かす事さへ、俺には難かしい事であつ

た。

俺は、佛蘭西劇の話を、一時間ばかり仕樣事なく聽いた後、博士の家を辭した。俺は、もうスツカリ絶望して居た。中田博士を通じて、俺が文壇に望を繋いだのは、全く俺の第二の誤算に近かつた。俺は、もう手を拱ねいて、山野や桑田の華々しい出世を、見るより外に仕樣がないかも知れない。家へ歸つてから、暫くは何も手に附かなかつた。偶然の機會が突發しない限は、俺にはもう何等の機會も、殘されて居ないやうな氣がする。

四月五日。

「×××」は、第二版を發行した。山野は「邂逅」と云ふ短篇を發表した。俺は又夫を、飛び附くやうにして讀んだ。さう佳作ばかりが、讀む譯はないと思つたからである。が、俺の安心は直ぐ裏切られた。手堅く而も底光りのする彼奴の技巧が、又グン〳〵俺をやつ附けてしまつた。殊に主題は前の「飢」の夫に勝るとも決して劣らぬほどの光つたものだつた。俺は山野に對する反抗の角を折らうかとさへ思つた。俺の彼奴に對する反抗は、凡人が天才に對して懷く無意味な反感で、全く俺自身の心得違ではあるまいかと、思ひ直さうとした。が、山野の皮肉な笑顔を思ひ浮べると、直ぐムラ〳〵とした嫉妬と反感が俺の全身を襲ふ。俺は何うしても彼奴の作品に頭を下げる氣にはなれないのだ。

四月十六日。

山野の「邂逅」が又評判がいゝ。殊に文壇の老大家たるK氏が、彼奴の「邂逅」を激賞したと云ふ噂を、新聞で讀んだ時、俺はもう一萬事休す矣」だと思つた。もう、彼奴の聲價は定まつた。彼奴が不意に死なない限り、文壇に認められるのは既定の事實だ。俺は、もう仕方がないと諦め始めて居る。實際、俺の嫉妬を除いて考へれば、彼奴が認められるのは至當な事かも知れない。が、至當であるかあるまいかは、問題でない。たゞ彼奴が認められる事が不快なんだ。山野が認められたとすると、桑田の順も決して遠くはない。岡本、杉野、川瀬なども皆相當の所へ行くに違ない。「たゞ一人取殘される者」、夫は何う考へても、俺に相違なさうだ。

俺は、今日短い原稿を今度創刊になる雜誌「群衆」に送つた。僅か七枚ばかりの小品だ。俺は此の「群衆」を主幸して居るI氏に、たつた一度逢つた事があるのだ。俺の小品が採用されたら、山野等に對して少しの反抗は爲し得た事になるのだ。

五月三日。

俺は今朝、新聞の廣告を見た時、今月の雜誌「△△△△」の小說欄に、山野の小說「癩人」が載つて居るのを見た時、俺はアッと驚いたまゝ、暫くは茫然とした。俺は鐵槌で殴ぐられたやうな打擊を感じながら、まだ自分の觀覺を疑つた。何んなに評判がよくても、文壇の中央へ乘り出すのには、間があるだらうと高を括つて居たのは、俺の誤だつた。彼奴は、俺のさうした豫想を、見事に裏切つてしまつた。もう、彼奴が流行作家で、俺が無名作家である事は、歴として動すべからざる事實だ。俺は歯ぶしい物を見るやうに、あの廣告を見た。山野敏夫——と云ふ三號の活字が、寃ら俺を嘲笑して居るやうに感じた。題名の「癩人」は、作家としては「癩人」に近い俺を、モデルにしたのではないかとさへ思つた。が、俺は之程反感を持つて居る彼奴の作品が、一刻も早く讀みたくなるから不思議だつた。山野の作品を讀む爲に「△△△△」を買ふ

事、換言すれば彼奴の作品の爲に、「△△△△」が一部でも多く賣れる事は、考へて見れば少し不快だつたが、夫でも俺は彼奴の作品が、讀みたくて堪らなかつた。

俺は見たくもない物をオヅ〳〵と見るやうな心持で、彼奴の作品を讀んだ。讀んで見ると、彼奴の作品は、俺の嫉妬や競爭心を押除けて置いて、俺にグイ〳〵と迫つて來やがる。俺は、殘念で堪らない。彼奴に對する反感が、彼奴の作品の力に押し除けられて、譯もなく感心してしまふのだ。彼奴に反感を持たない一般の批評家が、感心するのも尤もな話だ。夫を思ふと俺は情なくなる、俺は「△△△△」を手にしながら、彼奴に絕對的に打ち負かされた事を明に感得した。

俺は「△△△△」と共に、自分が寄稿した「群衆」を買つて來た。俺の小品も編輯者の好意で、二段組ではあつたが掲載されて居た。が、「△△△△」と「群衆」！　夫は雜誌としての勢力に於て、無限大の隔たりが在つた。俺は山野が偶然に「群衆」を手に取つて、俺の作品に氣が附いた時、「ふゝん」と嘲弄の微笑を洩す、その顏附迄が歷然と感ぜられた。

もう「勝負は在つた」と云ふ氣がする。俺の負は俺自身にさへ明かだ。なあに！　初から勝負になつて居なかつたのだ。「△△△△」の彼奴の小說の第一頁を、ヂッと見詰めて居ると、無念と絕望の涙が頰を傳つて流れた。

俺が「△△△△」を見て居ると、偶然佐竹君がやつて來た。そして又何時ものやうに創作の話を始めた。

「六百枚の方は、一昨日到頭書き上げてしまつた。僕は此二三日その爲に愉快で堪らないのだ。少し靜養したら、愈々千五百枚の物にかゝるんだ。此方が完成したらもうしめたものさ」と相變らず元氣な事を云つて居たが、ふと「△△△△」が佐竹君の目に入ると、

「山野君の『廢人』が載つて居たね。ありやさう恐るゝに足るものぢやないね。たゞ思附ばかりのものだ。藝術としては寧ろ邪道だね」と、云つた。が、俺はもう此男の罵倒から、何等の慰安をも感じなかつた。思附ばかりでもいゝ、藝術の邪道でもいゝ、文壇に認められる方が、何れ程いゝ事か分らなかつた。六百枚の長篇を終つて、千五百枚の大作にかゝつて居る佐竹君よりも、三十枚ばかりの器用な短篇を書いて、一躍して認められた山野の方が、俺には何れほど羨しいか分らなかつた。

俺は、夫から意外な事に氣が附いた。俺は何氣なく佐竹君に、「群衆」を見せて俺の僅か七枚の小品を指し示すと、夫を見た佐竹君の瞳は、異樣な輝きを帶びた。

「何だ！　こんな短篇か！」と、彼は叱き出すやうに云つた。

「此の雜誌は一體、誰が編輯して居るのだ！一人として碌な奴が書いて居ないぢやないか！草田花子！　あ！　此奴か！　こりや君！　此間、山本と云ふ男と、作品の賞め合ひをしたかと思ふと、無のやうに直ぐくつ附き合つた女ぢやないか。こんな女が小說を書いて居るんだね」と、佐竹君は、「群衆」の寄稿者を悉く罵倒した。そして「群衆」と云ふ雜誌が低級な雜誌で、夫に書いて居る者が、悉く碌でもない奴等であると結論した。

俺は、俺の僅か七枚の小品が、之ほど佐竹君を激昂させた事を驚いた。此男は雜誌「群衆」を貶す事に依つて俺の作品を無視しようとかゝつたのだ。が、夫は全く反對の事實を語つて居る。俺の小品が七枚でも活字になつた事は、佐竹君に取つて決して愉快な事ではなかつたのだ。俺が山野の作品に依つて感じて居るやうな反感と無燥とを、佐竹君もやつぱり感じて

居るのだ。六百枚の長篇を書き上げて、堂々と小說の大道を歩んで居る菅の佐竹君が、活字になつた俺の僅か七枚の作品から脾迫を受けるとは、考へて見れば不思議な事だつた。

が、俺は俺の小品を無視しようとした佐竹君を、決して憎めなかつた。俺は山野より天分が劣つて居る事を自覺しながら、尙山野の出世を呪つて居るのだ。まして、自分の作品に十分の自信を持つて居る佐竹君が、自分の作品が活字になる前に、俺の片々たる作品が活字になつたのを不快に思ふのは、寧ろ當然の事かも知れない。

が、俺は考へた。創作と云ふ事が、ある人々の考へて居るやうに絕對のものなら、何故に人は只創作する丈で滿足する事が出來ないのだらう。佐竹君の如きは、六百枚の長篇を書き上げた事其物に依つて、十分藝術慾を滿足して居なければならない筈だ。夫が、何うして發表する事に就いて、あゝした苦悶があるのだらう。殊に俺などは創作と云ふよりも、先きに發表と云ふ事に就いて、悶えて居る。本當の藝術慾よりも文壇的名聲と云つたやうなものに囚はれて居る。が、佐竹君のやうに長篇を書き上げて居る人でさへ、活字になつた俺の七枚の小品を見ると、取り憂すのだから、俺が山野の作品が出る事に血眼になるのも、或は當然の事であるかも知れない。

五月十五日。

俺は、今日久し振で山野の手紙を受取つた。何うせ俺を嘲笑し揶揄する爲の、手紙だらうと思つたから、俺は一寸開封する氣にならなかつた。が、夕方になつて漸く開けて見ると、割合に親切な文面であつた。

（君も知つて居る通、同人雜誌「×××」は、創刊以來割合世間の注目を惹いて居る。もう根氣よくさへ續けて行けば、皆ある程度迄出られると云ふ氣がする。從つて、皆油が乘りかつて居る。夫に就いては君だが、僕達は君が京都で、獨ぼつちで居る事に對し大に同情をして居る。「×××」發刊の時にも、君を是非同人に入れなければならないのだが、君が東京に居らぬ爲、つい色々な差支へがあつて、止むなく君を入れる事が出來なかつた。僕達は、夫を非常に遺憾に思つて居る。が、此頃は僕も外の雜誌から原稿を輕まれるし、桑田も近々外の雜誌に書くだらうから、「×××」は自然紙面に餘裕が出來るので、君の作品も紹介し得る機會が度々來るだらうと思ふ。だから、君もいゝ物があつたら、遠慮しないでどし〳〵送つて異れ給へ。無論僕リヒドイものは困るが、水準以上のものなら欣んで紹介するから）

此手紙を讀んだ時、俺は今迄山野に對して、懷いて居た嫉妬や反感を恥しいとさへ思つた。俺が山野の世に現はれて行くのを、呪つて居る間に、山野は俺の爲に好意ある配慮を爲す事を忘れなかつたのだ。彼等に對して意地を立てゝ居るよりは、彼等に接近して「×××」に作品を發表した方が、何れ程よい事だか分らなかつた。山野の手紙を見た時、今迄俺には遮ぎられて居た光線が、初て溫く俺の身體を包むやうな氣がした。俺は直ぐ返事を書いた。餘り昂奮して、彼奴に笑はれはしまいかと思はれるほど、昂奮に充ち感激に充ちた手紙を書いた。そして直ぐ後から作品を送る事を云ひ添へた。俺の手紙は、明かに卑しい哀願の調子を交へて居た。俺は自分の態度の裡に、征服された弱者が强者に阿ねつて居るやうな、さもしい態度を感づいた。今迄、極端に呪詛して居た彼の、華々しい初舞臺に對してさへ、賞讃の言葉を連ねた。が、俺には夫を卑しむべき事として、思ひ止まり得る程の餘裕はなかつたのだ。山野の好意に縋る

事は、現在の俺に取つては唯一の機會だと云つてもよかつたのだ。

俺は手紙を出した後で、直ぐ中田博士を訪問した。俺の脚本の「夜の脅威」を、買ひに行つたのだ。博士の所へ持つて行つてから、もう三ケ月以上になる。博士はもうとつくに、俺の脚本の事などは、忘れてしまつたと見え、個々俺に言葉を掛ける事などがあつても、脚本の事は、曖にも出さなかつた。が、今度山野の所へ作品を送るとしても、一番劃つて居るものは「夜の脅威」であつた。考へて見れば、俺は發表の事ばかりに氣を取られて、本質的の創作には全く呑氣であつたのだ。默々として、千五百枚の大作にかゝつて居る佐竹君の事を考へると、可なり恥しく思ふ。

中田博士は、何時ものやうに在宅した。俺が來意を述べると、

「さう〳〵、君の脚本を預かつて居たつけ」と、云ひながら立つて、書棚の一隅を探ぐつて呉れた。そして、恐らく俺が持つて來た時の儘らしい俺の脚本を、取り出して呉れた。俺は、夫でも「夜の脅威」と云ふ表題を見ると、舊知にあつたやうに懷しく思つた。俺が此の三四ケ月間、焦慮に焦慮を重ねて居る間にも、俺の作品は中田博士の書棚の一隅で、悠々たる閑日月を送つて居たのだつた。

「愈〳〵發表する事になつたのですか。夫は結構です。活字になつた上で、纏つた批評をしませう」と、お世辭を云つて呉れた。俺は中田博士の、極度に無關心な態度を寧ろ尊敬した。歸つてから一度讀み直すと、直ぐ書留にして山野に送つた。

五月廿五日。

山野から手紙が來た。俺は夫を何等の感情を交へずに、此日記に再錄して置かうと思ふ。此の手紙を見た時の、俺の感情は、玆には何うしても表現する事が出來ないから。

（僕達は皆、君の「夜の脅威」を讀んだ。そして云ひ合はしたやうに、多大な失望を感じた。僕は遠慮なく云ひたい、世間並のお世辭を云つて始まらないから。僕は第一、あの作の主題に失望した。あれは全然借り物ぢやないか。君自身、本當の君自身から出たものではないだらう。僕はあの主題を、君が何から借用したか、的確に指摘する事が出來る。が、主題を借りたのはいゝとして、あの作品の全體に亙つて居る低級な感傷主義は、一體何だ！　君は高等學校の一年生時代から、思想的には一歩も進歩して居ないね。僕達は、あの頃の思想からは、もうスヲカリ卒業してしまつて居るのだ。僕は君の脚本から、何等のいゝ所も見出さなかつた。然し、夫は恐らく僕一人の不公平な評價だと思つたので、君の脚本を桑田、岡本、杉野などにも讀ませたよ。が、彼等が君の作品に下した評語は、君に知らせる事は見合はせよう。夫は餘りに、君を傷ける心配があるからだ。で、僕達は遺憾ながらあの作品を、「×××」に載せる事は見合はす事にした。君が、僕の此の苦言に憤慨して、折返し傑作を寄せて呉れゝば幸ひだ。）

嗚呼！　俺は確かに山野の掛けた罠に掛つたのだ！　彼奴は自分の華々しい成功に浸りながら、その意識をもつと高調させる爲に、俺を傷けて見たくなつたのだ。彼奴は桑田などに、「何うだらう！　富井の奴、京都で何をやつて居るのだらう。相變らず例の甘い脚本か何かを、書いて居るに違ない。何うだい！　『×××』に載せてやるとか何とか云つて、彼奴の作品を取寄せて、皆で試驗をしてやらうぢやないか」と、云つたに違ない。人の好い杉野や岡本などが、心配して止めると、彼奴は尚面白がつて、實行に取りかかつたのだ。彼奴に似合はない親切な手紙は、かうした動機からでなければ、書かれる譯のものでない。山野に對する憎惡、永久に妥協の餘地のない憎惡が、前よりも十倍烈しい勢で、俺の心の裡にこみ上げて來るのを感じた。が、山野のトリックに掛つて、旨々と「夜の脅威」を、得意になつて差出した俺の弱さ加減を考へると、俺は自分の身をいとほしむ涙が双頰を濕すのを感じた。

×月×日。

もう「×××」が出てから、二ケ年半になる。「×××」はもう、とつくに廢刊してしまつた。が、山野や桑田や岡本や杉野は、作家として立派に登錄を濟まして、「×××」同人として文壇を濶歩して居る。殊に、山野は一作毎に文壇を騷がして、今では、押しも押されぬ位置を占めてしまつた。

俺と彼等との距離は、もう絶對的に擴がつてしまつた。却つて、かうなると、もう競爭心も、嫉妬も起らない。俺は彼等が流行作家として、持てはやされる事實を、平靜に眺めて居る事が出來る。一人の天才が生れる爲に、百の凡才が苦しむ事が必要だ。山野や桑田などが、持てはやされる蔭には、俺一人位の犠牲は寧ろ當然かも知れない。が、永久に無名作家として終る者は、俺一人ではあるまい。千五百枚の長篇が完成したか何うかは、訊いて見ないから分らないが、佐竹君は相變らず晴い顔をして居る。さうして、文壇に新進作家が出る毎に、猛烈に肥し附けて居る。同人雜誌を貶し附けた吉野君も、相變らず健在である。が、あの人の創作が、相當な文藝雜誌に載つた事はまだ一度もない。

文壇に於ても、運が或る點迄、重要な働きをして居るのだ。さうでも思つて、俺は諦めて居るのだ。が、俺はもう文壇に就いて、考へる事はよさう。作家としての生活以外に、意義のある生活がないやうに思つて居たのは、俺の迷妄だ。

俺は此間、ヴェルレーヌの傳記を讀んで居ると、あのデカダンスの詩人が晩年に「平凡人としての平和な生活」を、痛切に望んだと云ふ事實を知つて、俺は可なり心を打たれた。俺のやうに天分の薄いものは、「平凡人としての平和な生活」が、恰好の安住地だ。學校を出れば、田舍の教師でもして、平和な生活に入るのだ。

流行作家！　新進作家！　俺は、そんな空虛の名稱に憧れて居たのが、此頃では少し恥しい。明治大正の文壇で名作として殘るものが、一體幾何あると思ふのだ。俺は、何時かアナトール・フランスの作品を讀んで居ると、こんな事を書いてあるのを見出した。

（太陽の熱が、段々冷却すると、地球も從つて冷却し、終には人間が死に絶えてしまふ。が、地中に住んで居る蚯蚓は、案外生き延びるかも知れない。さうするとシェクスピアの戯曲や、ミケロアンゼロの彫刻は蚯蚓に嚙はれるかも知れない。）何と云ふ痛快な皮肉だらう。天才の作品だつて何時かは蚯蚓に嚙はれるのだ。まして山野なんかの作品は今十年もすれば、蚯蚓にだつて嚙はれなくなるんだ。

忠直卿行狀記

一

家康の本陣へ呼び附けられた忠直卿の家老達は、家康から一渝りもなく叱り飛ばされて散散の首尾であつた。

「今日井伊藤堂の勢が苦戰したを、越前の家中の者は畫寢でもして、知らざつたか。兩陣の後を詰めて城に迫らば大坂の落城は目前であつたに。大將は若年なり、汝等は日本一の臆病人ゆゑ、あたら戰を仕損じてしまふたわ」と苦り切つて罵つたまゝ、家康はつと座を立つてしまつた。

國老の本多富正は、今日の合戰の手に合はなかつた事に就ては、多少の云ひ譯は持ち合はして行つたのだが、かう家康から高飛車に出られては、口を出す機會さへなかつた。

で、仕方がないと云ふよりも、這々の體で本陣を退つて、越前勢の陣所へ歸つて來たものの主君の忠直卿に復命するのに、何う切り出してよいか、悉く當惑した。

越前少將忠直卿は、二十一になつたばかりの大將であつた。父の秀康卿が慶長十二年閏四月に薨ぜられた時、僅十三歳で、六十七萬石の大封を繼がれて以來、今迄此世の中に、自分の意志よりも、もつと强力な意志が存在して居る事を、全く知らない大將であつた。

生れたまゝの自分の意志——と云ふよりも我意を、高山の頂に生ひたつた杉の樹のやうに蓬々と沖らして居る大將であつた。今度の出陣の布令が越前家に達した時も、家老達は願れも觸るやうに恐る〳〵御前にまかり出でて、

「御所樣から、大坂表へ御出陣あるやう御懇篤な御依賴の書狀が到着致しました」と、言上した。家老達は、今迄にその幼主の意志を、絶對のものにする癖が附いて居た。

夫が、今日は家康の叱責を是非とも忠直卿の耳に入れねばならない。生れて以來叱られるなどと云ふ感情を、夢にも經驗した事のない主君に對して、大御所の烈しい叱責がどんな效果を及すかを、彼等は悔々として考へねばならなかつた。

彼等が歸つて來たと聞くと、忠直卿は直ぐ彼等を呼び出した。

「お祖父樣は何と仰せられた。定めし、所勞のお言葉をでも賜はつたであらう」と、忠直卿は機嫌よく微笑をさへ含んで訊いた。さう訊かれると、家老達は今更の如く狼狽した。が、漸く覺悟の臍を決めたと見えて、その中の一人は恐る〳〵、

「いかいお思召違ひに御座ります。大御所樣には、今日越前勢が合戰の手に合はざつたを、お怒に御座ります」と、云つたまゝ、色を易へて平伏した。

人から非難され叱責されると云ふ感情を、少しも經驗した事のない忠直卿は、その感情に對して何等の抵抗力も、節制力も持つて居なかつた。

「えい！　何と云ふ仰せだ。此忠直が御先を所望してあつたを、お許されもせいで、左樣な無體を仰せらるゝ。所詮は、忠直に死ね！　と云ふお祖父樣の謎ぢや。其方達も死ね！　我も死ぬ！　明日の戰には、主從擧つて鋒鏑に血を注ぎ、城下に尸を晒すばかりぢや。軍兵にも、さう傳へて覺悟致させよ」と、叫んだ忠直

卿は膝に置いて居た兩手をぶる〳〵と顫はせたかと思ふと、何うにも堪らないやうに、小姓の持つて居た長光の佩刀を拔き放つて、家老達の面前へ突き附けながら、

「見い！　此長光で秀賴公のお首をいたゞいて、お祖父樣の胴に突き附けて見せるぞ」と、云ふかと思ふと、その太刀を二三度、坐りながら打ち振つた。まだ二十を出たばかりの忠直卿は、時々かうした狂的に近い發作に囚はれるのであつた。

家老達も、御父君秀康卿以來の癇癪を知つて居る爲に、たゞ疾風の過ぎるのを待つやうに耳を塞いで、俯伏して居るばかりであつた。

元和元年五月七日の朝は、數日來の陰天名殘なく晴れて、天色殊の外和淸であつた。

大坂の落城は、もう時間の問題であつた。後藤又兵衛、木村長門、薄田隼人正等、名ある大將は、六日の戰に多くは覺悟の討死を遂げてしまつて、たゞ眞田左衛門や長曾我部盛親や、毛利豐前守などが、最後の一戰を待つて居るばかりであつた。

將軍秀忠は、此日寅の刻に出馬した。松平筑前守利常、加藤左馬之助嘉明、黑田甲斐守長政を第一の先手として、旗を岡山の方へと進めた。

家康は卯の刻、輿にて進發した。藤堂高虎が來合はせて、

「今日は御具足を召さるべきに」と、云ふと家康は例の、狡さうな微笑を洩しながら、

「大坂の小倅を討つに、具足は不用ぢやわ」と云つて、白袷に茶色の羽織を着、下結りの袴を穿いて、手には拂子を持つて絕えず群がつて來る飛蠅を拂つて居た。內藤帶部頭正成、植村出羽守家政、坂倉內膳正重昌等近臣三十人ばかり輿に從つて進んだ。

本多佐渡守正純は、家康と寸も違はぬ服裝で、山輿に乘つて家康の後に、直ぐ引き添うた。

見ると、岡山口から天王寺口にかけて、十五萬に餘る惣軍は、旗差物を初夏の風に飜し、兜の前立物を日に輝し、隊伍を整へ陣を堅めて、攻擊の合の下るのを今や遲しと待つて居た。

が、攻擊の合は容易に下らないのみか、御所の使番が三騎、白馬を飛ばして、諸陣の間を駈け廻りながら、

「義直賴宣の兩卿を、とりかはせ給ふに依り、先手軍を始める事暫く延引し、馬をば一二町も退け、人々馬より下り、鎧を手にし重ねての命を待つべし」と、布令渡つた。

家康も、今日を最後の手合せと見て、愛子の義直賴宣の二卿に兜首の一つでも、取らせてやりたいと云ふ心があつたのだらう。が、此布令を聞いた氣早の水野勝成は、使番を尻目にかけながら、

「はや巳の刻に及び候、茶臼山の敵陣次第にかさみ見えて候、速に戰を取結びて然るべしと大御所に傳へよ」と怒鳴つた。が、此二人の使番が引取つたかと思ふと、再び四騎の使番が惣軍の間を縱橫に飛び違つて、

「方々、合戰をとりかくべからず、閑に重ねての命を待つべし」と、ふれ渡つた。

併し、昨夜の昂奮を持ち續けて、殆ど不眠の有樣で、今日の手合せを待つて居たわが越前少將忠直卿は、かゝる布令を聞かればこそ、家老吉田修理に眞先かけさせ、國老の兩本多を初め、三萬に近い大軍を、十六段に分け、加賀勢の備へたる眞中を駈け拔け、加賀勢の怒り止むるに答へず、無二無三に天王寺の方、茶臼山の前迄おし詰め、此地の先手本多出雲守忠朝の備より少し左に、鶴翼に陣を張つた。

此時初めて、將軍から、

「城兵は寄手を引き寄せて、夜を待つ様に見え候、早く戰ひを命すべし」と、云ふ軍令が諸陣の間にふれ渡された。

が、忠直卿は軍令の出づるのを、待つては居なかつた。本多忠朝の先手が、二三發敵にさゞりの鐵砲を放つと等しく越前勢忽ち七八百挺の鐵砲を一度に打ち掛け、立ち籠めた烟の中を潜つて、十六段の軍勢林の動くが如く一同茶臼山に打つてかゝつた。

青屋口から茶臼山にかけての軍勢は、眞田左衛門尉幸村父子、少し南に伊木七郎右衛門遠雄、渡邊内藏助糺、大谷大學吉胤等が堅めて、惣勢六千を僅かに出て居るに過ぎなかつた。

殊に越前勢は目に餘る大軍なり、大將忠直卿は今日を必死の覺悟と見えて、馬上に軍配を捨てゝ大身の槍を扱きながら、家臣の止むるを聞かず、先へ〳〵と馬を進められた。

大將が、此有樣であるから、軍兵悉く奮ひ立つて火水になれと戰つたから、越前勢の向ふ所、敵勢草木の如く靡き伏して、本多伊豫守忠昌が、城中にて擊劍の名と得たる、念流左太夫を討ち取つたを初とし、青木新兵衛、乙部九郎兵衛、萩田主馬、豐島主膳等功名する者數多にて、茶臼山より庚申堂に備へたる眞田勢を一氣に斬り崩し、左衛門尉幸村をば西尾仁左衛門討ち取り、御宿越前をば野本右近討ち取り、逃ぐる城兵の後を慕うて、仙波口より黑門へ押入り旗を立て、城内所々に火を放つた。

敵の首を取る三千六百五十二級、此日の功名忠直卿の右に出づるはなかつた。

忠直卿は茶臼山に駒を立てゝ居たが、越前勢の旗差物が潮のやうに流を塞き、曲輪に溢れ、寄手の軍勢から一際鋭角を作つて、大坂城の中へ楔の如く喰ひ入つて行くのを見ると、多數もない兒童のやうに鞍壺に躍り上つて欣んだ。

先手の者が聽せ顧つて、

「青木新兵衛大坂城の一番乘仕つて候」と、注進に及ぶと、忠直卿は相好を崩されながら、

「新兵衛の武功第一ぢや——五千石の加增ぢやと早々傳へよ」と、勇み立たうとする乘馬を、乘り靜めながら狂氣の如くに叫んだ。

武將として何と云ふ光榮であらう。寄せ手をあれ程に馳け惱ました左衛門尉の首を獲るさへあるに、諸家の軍勢に先だつて一番乘りの大功を我軍中に敢むるとは、何と云ふ光榮であらうと、忠直卿は思つた。

忠直卿は家臣等の奇蹟のやうな働きを思ふと、夫が凡て自分の力、自分の意志の反映であるやうに思はれた。昨日祖父の家康に依つて彼の自尊心に蒙らされた傷が、拭ひ去られた如く消失したばかりでなく、忠直卿の自意心は前よりも數倍の强さと烈しさを加へた。

大坂城の寄手に加つて居る百に近い大名の中、功名自分に及ぶ者は一人もないと思ふと、忠直卿は自分の身體が輝くかと思ふばかりに、滿々たる心持になつて居た。が、夫も決して無理ではない、驍勇無雙の秀康卿の子と生れ、德川の家には綿々の自分であると思ふと、今日の武勳の如きは當然過ぎる程、當然のやうに思はれて、忠直卿は得々たる感情が心の裡に淘湧するのを制し兼ねた。

「お祖父樣は此忠直を見損うて、おはしたのぢや。御本陣に見參して何と仰せられるか聽かう」と、思ひ附くと、忠直卿は岡山口へ本陣を進めて居た家康の膝下に急いだのである。

家康は牀几に倚つて、諸大名の祝儀を受けて居たが、忠直卿が到着すると、わざ〳〵牀几を離れ、手を取つて引き寄せながら、

「天晴仕出かした。今日の一番功ありてこそ誠にわが孫ぢやぞ。御身の武勇唐の樊噲にも右わ勝りに見ゆるぞ、まことに日本樊噲とは御身の事ぢや」と、向う樣に賞め立てた。

一本氣な忠直卿は、かう賞められると、涙が出るほど嬉しかつた。彼は同じ人から、昨日叱責された恨みなどは、もう雲塵も殘つて居なかつた。

彼はその夜、自分の陣所へ歸つて來ると、家臣を莫めて大酒宴を催した。自分が何者よりも强く、誰人よりも勝つて、祖父家康の賞め言葉の「日本樊噲」と云ふ言葉が、まだ物足りぬやうにさへ思はれ出した。

彼は、大坂城が全く暮れてしまつた空に、まだ所々眞紅に燃え盛つて居るのを見ながら、夫を今日の自分の大功の表章として享樂しながら、頻に大杯を重ねるのであつた。

得意な上づつた感情の外には、忠直卿の心には何物も殘つて居なかつた。

超えて翌月の五日に城攻めに加つた諸侯が、京の二條城に群參した時に家康は忠直卿の手を執りながら、

「御身が父秀康世にありしほどは、よく、我に忠孝を盡して呉れたるわ、汝は又此度諸軍に秀れし軍忠を現したること、滿足の至りぢや。之に依つて感狀を授けんと思へど、家門の中なれば夫にも及ぶまい。わが本統のあらん限り越前の家また磐石の如く安泰ぢや」と云ひながら、

祕藏の初花の茶入を忠直卿に與へた。忠直卿は此上なき面目を施じて、諸大名の列席の中に自分の身の榮として光を放つ如く覺えた。彼は天下に缺くる物もないやうな足り充ちた感情が、胸の裡にムヅ〳〵と溢れて來るのを覺えた。元より彼の意志が何等の制限を蒙らず、彼の感情が常に豐滿して居る事は、決して今に始まつた事ではなかつた。幼年時代からも彼の意志と感情とは、外部からは何等の抑制も被らず、思ふ儘に伸び思ふ儘に溢れて居たのであつた。彼は今迄如何なる事に與はつても人に劣り、人に負けたといふ記憶を持つて居なかつた。幼年時代には破魔弓の的を懸へば勝利者は必ず彼であつた。福井の城下へも京の公卿が蹴鞠の戲れを傳へて、夫が城中にも屢々行はれた時、最も巧みに蹴る者は彼であつた。圍棋將棋雙六と云ふもてあそびものに於ても、彼は大抵の場合勝者であつた。元より弓馬槍劍と云つたやうな、武士に必須な技術に於いては彼の技倆は忽ちに上達して、最初同格であつた近習達をグン〳〵追ひ越して、家中に於いて其道に名譽の若武士達にも忽ちに打ち勝つ程の上達を示すのを常とした。

かうして、周圍の者に對する彼の優越感情は年と共に培はれて來た。そして、自分は家臣共からは、全く賞の適つた優良な人格者であると云ふ確信を、心の奥深く養つてしまつたのである。

が、忠直卿の心には、家中の人間の誰よりも立ち勝つて居ると云ふ確信はあるものの、今度大坂に出陣して以來は、功名を競ふ相手は、自分と同格な諸大名であるので、若しや自分が彼等の何人かに劣つて居はしまいか、殊に武將としては最も本質的な職務たる戰爭に於て、思はざる不覺を取りはしまいかと、少しく憂慮を懷かぬ譯には行かなかつた。果して五月六日の手合せには、遂に出陣の時刻を遲らせた爲に、思はぬ不覺を取つて、今迄懷いて居つた强い自信を危く挫がせようとしたのであつたが、同じ七日の城攻めの功名に依つて傷ついた自信は名殘なく償はれたばかりでなく、一番乘りの功を敢めて、越前勢の武名惣軍を壓するに至つたのであるから、自分が家臣の誰人よりも秀れて居ると云ふ忠直卿の自信が、今ではもつと擴大して、自分は城攻めに働はつた六十諸侯の何人よりも秀れて居ると云ふ自信に移りかけて居た。大坂陣を通じて三千七百五十級の首級を擧げ、然も城將左衛門尉幸村の首級を擧げた

ものは、忠直卿の軍勢に相違なかつたのだ。

忠直卿は初花の茶入と、日本樊噲と云ふ美稱とを、自分が何人よりも秀れたる人間であると云ふ、證券として心の裡に銘じた。

晴々とした心持であつた。そこに並んで居る大名小名百二十名は、悉く忠直卿に讃美の眸を向けて居る樣に思はれた。

彼は、今迄自分の臣下の何人よりも、自分が優秀な人間であることを誇りとして居た。が、比べて居る相手は、悉く自分の臣下であることが物足らなかつた。然るに、今は天下の諸侯の何人よりも眞先に、大御所から手を執つての歡待を受けて居る。

自分には伯父に當る義直卿も頼宣卿も、何の功名をも擧げて居ない。まして同じく伯父に當る、越後侍從忠輝卿は七日の合戰の手に合はず放々の不首尾である。伊達、前田、黑田と云ふ聞えた大藩の勳功も越前家の功名の前には、月の前の螢火よりもまだ弱い。

かう考へると、忠直卿は家康の過ぐる日の叱責に依つて、一旦傷けられようとした他人に對する優越感が、見事に恢復されたばかりでなく、一旦傷けられた丈にその反動として、恢復された丈は以前のものよりも、もつと鄭やかしい力强いものであつた。

かうして越前少將忠直卿は、天下第一人と云つたやうな誇を持しながら、その年八月末を辭して、揚々とした心持で、居城越前の福井へ下つた。

二

越前北の庄の城の大廣間に、今銀燭は眩ゆいばかりに數限りもなく燃え旺つて居る。その白蠟が解けて流れて、蠟受けの上にうづ高く溜つて居るのを見れば、餘程酒宴の刻が移つて居るのであらう。

忠直卿は國に就かれて以來、書間は家中の若武士を選めて弓馬槍劍と云つたやうな武術の大仕合を催し、夜は彼等をその儘に引き止めて、一大無禮講の酒宴を開くのを常とした。

忠直卿は、祖父の家康から日本樊噲と蝋びられた名が、心を溶かすやうに嬉しくて堪らなかつた。彼は家中の若武士と槍を合はし、劍を交じへ、彼等を散々に打ち負すことに依つて、自分の誇を養ふ日々の糧として居たのであつた。

今も、忠直卿を上座として、一段下つた廣間に大きい圓形を繞いて居る若武士は、數多い家中の若者の中から選ばれた武藝の達者であつた。まだ前髮のある少年も打ち交じつて居たが、執も筋骨逞ましく潑剌たる眸を持つて居る。

が、城主の忠直卿の風貌は、彼等よりも一段秀れて颯爽たるものであつた。稍肉落ちて蕭洒たる姿ではあるが、その烱々たる眸は殆ど怪しき迄に鋭い力を放つて、精悍の氣眉宇の間に溢れて見えた。

忠直卿は、今微醉の廻りかけて居る眼を開いて、一座をズーッと見廻はされた。

其處に居並んで居る百に餘る青年は、皆自分の意志に依つては、水火をも辭さない人々であることを思ふと、彼は心の内から、こみ上げて來る權力者に特有な誇を、感ぜずには居なかつた。

が、彼の今宵の誇は夫丈には止まつて居なかつた。彼は武士としての實力に於ても、技に蒐つて居る凡ての青年に打ち勝つたと云ふことが、彼の誇を二重のものにしてしまつた。

彼は今日も亦、家臣を集めて槍術の大仕合を催した。夫は家中から槍術に秀れた青年を蒐めて、夫を二組に別けた紅白の大仕合であつた。

そして、彼自ら紅軍に大將として出場したのである。仕合の形勢は始終紅軍の方が不利であつた。出る者も、出る者も、敵の爲にバタバタと倒されて、紅軍の副將が倒れた時には、白軍には尙五人の不戰者があつた。

其時に、紅軍の大將たる忠直卿は、自ら三間柄の大身の槍をリュウ〳〵と扱いて勇氣凛然と出場した。洵に山の動くが如き勢であつた。白軍の戰士は見る〳〵裡に威壓された。最初に出た小姓頭の男は兼々忠直卿の猛勇を怖れて居る丈に、槍を合はすか合はさぬかに、早くも持つて居た槍を捲き落されて、脾腹の邊を突かれると、悶絶せんばかりに平たばつてしまつた。續く馬廻りの男と、お納戸役の男も一合も滴りもなく突き伏せられてしまつた。が、白軍の副將の大島左太夫と云ふ男は、指南番大島左膳の嫡子であつて、槍を取つては家中無雙の名譽を持つて居た。

「殿のお勢も、左太夫にはちと難しからう」と、云ふ囁きが何處ともなく起つた。が、烈しく七八合槍を合はせたかと見ると、左太夫は、したゝかに腰の邊を一突き突かれて、よろめく所をつけ入つた忠直卿の爲に、再び眞正面から胸の急所を突かれて居た。見物席に居た家中一統は、思ふ存分に喝采した。忠直卿は、稍息のはずまれるのを、制しながら靜かに、相手の大將の出るを待つた。心の裡は何時ものやうに、得意の絶頂であつた。

白軍の大將は小野田右近と云つた。十二の年から京に於ける槍術の名人權藤左門の門に入つて、二十の年には、師の左門にさへ突き勝つ程の修練を得て居た。が、忠直卿は何物をも怖れない。「えい！」と鋭く聲を掛けられると、猛然として突き掛つた。たゞ技術の力と云ふよりも、そこには六十七萬石の國主の勢さへ加はる如く見えた。二十合にも近い烈しい戰が續いたかと思ふと、右近は右の肩先に忠直卿の烈しい一突きを受けて、一間ばかり退くと、「參りました」と、平伏してしまつた。

見物席の人々は、北の庄の城の崩づるゝばかりに喝采した。忠直卿は得意の絶頂にあつた。

「皆の者大儀ぢや、いで之から慰勞の酒宴を開くと致さうぞ」と、叫んだのであつた。

彼は近頃にない上機嫁であつた。酒宴の邊むに連れ、寵臣は代る〳〵彼の前に進んだ。

「殿！　大坂陣で矢石の間を往來せられましていら以來は、また一段と御上達遊ばされましたな。我等如きはもはや殿のお相手は仕り兼ねます」と申し上げた。大坂陣の話をさへすれば、忠直卿は多愛もなく機嫁がよかつた。

が、忠直卿もいたく醉つてしまつた。一座を見ると、正體もなく醉ひ潰れて居る者が、大分多くなつて居る。管を捲く者もある、小唄で隆達節を唄つて居る者もある。酒宴の興は殆ど、盡きかけて居る。

忠直卿はふと奥殿に渙つて居る異性の事を思ひ出すと、男ばかりの酒宴が殺風景に思はれて來た。彼はつと立つて、

「皆の者許せ！」と云ひ捨てたまゝ座を立つた。道に醉ひ潰れて居た者も、居住ひを正して平伏した。今迄眠りかけて居た小姓達は、ハッと目を覺して主君の後を追つた。

忠直卿が、奥殿へ續く長廊下へ出ると、冷い初秋の風が頰に快かつた。見ると、外は十日ばかりの薄月夜で、萩の花がほの白く咲きこぼれて居る邊から、蟲の聲さへ聞えて來る。

忠直卿は、庭へ下りて見たくなつた。奥殿からの迎ひの侍女達を歸して、小姓を一人連れたまゝ、庭に下り立つた。庭の面には、夜露がしつとりと降りて居る。微かな月光が城下の街

を、玲瓏と澄み渡る夜の大氣の裡に、靄繪の如く浮ばせて居る。

忠直卿は久しぶりに、かうした靜寂の境に身を置くことを欣んだ。天地は寂然として靜である。たゞ彼が見捨てゝ來た城中の大廣間からは、雜然たる饗宴の叫びが洩れて來る。夫も彼が座を立つてからは、一段と酒席が擾れたと見え、吾妻拳を打つ掛聲迄が交じつて聞える。が、夫も餘程の間隔があるので、さう五月蠅くは耳に響いて來ない。

忠直卿は蔡の中の小徑を傳ひ、泉水の緣を廻つて小高い丘に在る四阿へと、はいつた。其處からは、信越の山々が、微かな月の光を含んで居る空氣の中に、朧ろに浮いて見える。忠直卿は、今迄の大名生活に於いて、未だ經驗した事のないやうな、感傷的な心持に囚はれて、思はず其處に小半刻を過した。

すると、ふと人聲が聞える。今迄寂然として、蟲の聲のみが淋しかつた庭に、人聲が聞え出した。聲の樣子で見ると、二人の人間が話しながら、四阿の方へ近よつて來るらしい。

忠直卿は、今自分が享受して居る靜寂な心持が、不意の侵入者に依つて搔き擾されるのが、厭であつた。

併し、小姓をして、近寄つて來る人間を追はしむる程、今宵の彼の心は荒んでは居なかつた。二人は話しながら、段々近づいて來る。四阿の裡へは、月の光が射さぬので、其處に彼等の主君が居ようとは、夢にも氣附いて居ないらしい。

忠直卿は、その二人が誰であるか、見極めようとは思つては居なかつた。が、二人の聲が段々近づいて來ると、夫が誰と誰とであるかが自然と判つて來た。稍酒れたやうな聲の方は、今日の大仕合に自軍の大將を勤めた小野田右近である。狂亂い上づつた聲の方は、今日忠直卿に一氣に突き伏せられた白軍の副將大鳥左太夫である。二人は先刻から　何でも今日の紅白仕合に就いて話して居るらしい。

忠直卿は、大名として生れて初て、立聞きをすると云ふ不思議な興味を覺えて、思はず注意を、その方へ集注させた。

二人は、四阿からは三間は離れない泉水の汀で、立ち止まつて居るらしい。左太夫は、心持聲を潛めたらしく、

「時に殿の御腕前を何う思ふ？」と、訊いた。

右近が、苦笑をしたらしい氣勢がした。

「殿のお噂か！　聞えたら、切腹物ぢやなう」

二藤では公方のお噂もする。何うぢや、殿の御腕前は？　爲實の御力量は？　と、左太夫は、可なり眞剣に訊いて、ぢつと息を凝して、右近の評價を待つて居るやうであつた。

「さればぢやなう！　いかい御上達ぢや」と、云つたまゝ右近は、言葉を切つた。忠直卿は、初て臣下の僞らざる眞實を聞いたやうに覺えた。が、右近はもつと言葉を續けた。

「以前ほど、勝を御譲り致すのに、骨が折れなくなつたわ」

二人の若武士は、其處で顔を見合はせて會心の苦笑をしたらしい氣勢がした。

右近の言葉を聞いた忠直卿の心の中に、そこに突如として感情の大渦卷が聲を立てゝ流れ始めたのは無論である。

忠直卿は、生れて初て、土足で以て、頭上から蹂み躙られたやうな心持がした。彼の胸は、ブル〳〵と顫へ、全身の血潮が煮えくり返つて、グン〳〵頭へ逆上するやうに思つた。

右近の一言に依つて、彼は今迄自分が立つて居つた人間として最高の脚臺から、引きずり下ろされて、地上へ投げ出されたやうな、名狀し難い衝動を受けた。

夫は、確に激怒に近い感情であつた。併し、

心の中の有り餘つた力が、外にハミ出したやうな激怒とは、全く違つたものであつた。その激怒は外面は、旺んに燃え狂つて居るものの、中核の所には癒しがたい淋しさの空虛が、忽然と作られて居る激怒であつた。彼は世の中が、急に頓りなくなつたやうな、今迄の凡ての生活、自分の持つて居た凡ての誇が、悉く僞の土臺の上に立つて居た事に氣が附いたやうな淋しさに、ひし〳〵と襲はれて居た。

彼は小姓の持つて居る、佩刀を取つて、卽座に兩人を切つて捨てようかと、息込んだが、さうした熱しい意志を遂行する强い力は、此時の彼の心の裡には少しも殘つては居なかつた。

其上、主君として臣下から僞りの勝利を飾びられて得意になつて居た自分が淺ましいと同時に、今兩人を手刃して、その淺ましい事實を、自分が知つて居ると云ふ事を、家中の者に知らせるのも、彼にとつては可なりの苦痛であつた。

忠直卿は、胸の内に湧き返る感情をぢつと抑へて、如何なる行動に出つるのが、一番適當であるかを考へた。餘りに不用意にかうした經驗に出會した爲、たゞさへ昂奮し易い忠直卿の感情は收拾の附かぬほど混亂した。

忠直卿の傍に、先刻から置物のやうにぢつとして蹲まつて居た聰明な小姓は、遂に此危機を十分に知つて居た。二人の男に、玆に彼等の主君が居ることを敎へねば、何んな大事が起るかも知れぬと思つた。彼は、主君の凄まじい顏色を窺ひながら、二三度小さい咳をした。

小姓の小さい咳は、此場合甚だ有效であつた。右近と左太夫とは、附近に人が居るのを知ると、ハッとしてその冒瀆な口を緘んだ。

二人は云ひ合はしたやうに足早く大廣間の方へと去つてしまつた。

忠直卿の眸は、怒に燃えて居た。が、その頬は凄じい迄に蒼ざめて居る。

彼の少年時代からの感情生活は、右近の一言に依つて、物の見事に破産してしまつて居た。彼が幼にして、遊戯をすれば近習の誰よりも巧みであつた事や、破魔弓の的を競へば近習の何人よりも多く命中矢を出した事や、習字の稽古の筆を取れば、祐筆の老人が膝頭を叩いて、彼の手蹟を賞讃した事などが、皆不快な記憶として彼の頭に一時に、蘇つて來た。

武術の方面に於いても、さうであつた。個を取つても、槍を取つても、忽ち相手をする若武士に打ち勝つ程の腕に瞬く間に上達した。彼は今迄自分を信じて來た。自分の實力を飽く迄信じて來た。今右近等の冒瀆な蔑口を耳にしても、夫が彼等の負け惜しみであるとさへ、ともすれば思ふ程である。

併し、今日の右近の言葉は、その言葉が發せられた時と場合とを考へれば、決して冗談でもなければ僞でもなかつた。

自信に充ち滿ちて居た忠直卿の耳にも正眞の事實として、聞えぬ譯には行かなかつた。

右近の言葉は、彼の耳朶の裡に彫り附けられたやうに、殘づて居る。

考へて見ると、忠直卿は今日の華々しい勝利の中でも、何處迄が本當で、何處からが僞だか判らなくなつた。否今日のみではない、生れて以來幾度も試みた遊戯や仕合で、自分が占めた數限りのない勝利や、優越の中で、何れ丈が本當の物で何れ丈が僞のものだか、判らなくなつた。さう考へると、彼は心の中を搔きむしられるやうな、烈しい焦燥を感じた。彼とても、臣下の凡てから僞の勝利を奪つて居るのではない。否その中の多くの者には、正當に勝つて居るのだ。それだのに右近や左太夫などの不埒者の居る爲に、自分の勝利が、凡て不純な色彩を帶びるに至つたのだと思ふと、彼は今右近と左太夫とに對し、旺然たる憎惡を感じ始めたの

である。

が、夫ばかりではなかつた。かうなると、つい三月ばかり前に、大坂の戰場に立てた偉勳さへ、何んだか怪しげな、正體の判らぬもののやうに、忠直卿の心の中に思はれた。彼が、今迄誇りとして居た日本奬喩と云ふ帶、呼さへ、何だか人を馬鹿にしたやうな、誇張を伴うて居るやうにさへ思はれ出した。家臣どもから、いゝ加減に扱はれて居た自分は、お祖父樣からも手輕に、操られて居たのではないかと思ふと、忠直卿の眸には初て、不覺の涙が滲じみ始めた。

三

無禮講の酒宴に、グタ〳〵に醉つてしまつた若武士達は、九つのお土圭が鳴るのを合圖に聽立になつて退出しようとすると、急にお傍用人が奥殿から駈け附けて來た。

「各々方、靜まられい！　殿の仰せらるゝには、明日は大遊物のお催しがあるべき筈の所、急に御變改があつて、明日も、今日同樣、槍術の大仕合を催せらるゝ、時刻と番組とは凡て今日に變らぬとの仰せぢや」と、雙手を揚げて大聲にふれ廻つた。

若武士の中には「やれ〳〵明日もか」と思ふ者もあつた。今日の勝利を、もう一度繰返すのかと、北叟笑む者もあつた。が、多くの者は、酒を呑んだ後の勇ましい元氣で、

「明日續かうとも結構ぢや。明日もまたお振舞酒に思ひ切り醉ふ事が出來る」と、勇み立つた。

その翌日は、昨日と等しく城中の兵法座敷は、美しく掃き淨められて、紅白の幔幕が張り渡され、上座には忠直卿が昨日と同樣に座を占めたが、始終下唇を噛むばかりでなく、眸が爛々として燃えて居た。

勝負は、昨日と殆ど同樣な情勢で進展した。が、昨日の勝敗が昔の心にマザ〳〵と殘つて居るので、組合せの多くは一方に取つて雪辱戰であつたから、拳け聲は昨日にも勝して烈しかつた。

紅軍は、昨日よりも更に旗色が惡かつた。大將の忠直卿が出られた時には、白軍には大將副將を初め、六人の不戰者があつた。

見物の家中の者共が、不思議に思ふ程、直忠卿は興奮して居た。タンポの附いた大身の槍を、熱に浮かされ男のやうに妄に打ち振つた。最初の二人は頂れ物にでも觸るやうに、恪々として立ち向ふた。が、主君の烈しい槍先に忽ちに突き竦められて平伏してしまふ。次の二人も、主君の凄じい氣勢に恐ち怖れて、たゞ慄ばかりに槍を振つた丈であつた。

五人目に現はれたのは、大島左太夫であつた。彼は今日の忠直卿の常軌を逸したとも、思はれる振舞に就いて、微かながら杞憂を懷く一人であつた。無論、彼は自分の主君が、自分達の昨夜の立話を立聞きした當の本人であらうとは、夢には思つて居なかつた。が、昨夜夜更けの庭に耳にした嗄拂ひの主が、主君に自分達を讒したのではあるまいかと、云ふ微かな懸念は抒つて居た。彼は常よりも更に肅然として、主君の前に頭を下げた。

「左太夫か！」と、忠直卿はある落着きを、示さうと努めたらしいが、その聲は妙に上づつて居た。

「左太夫！　槍と云ひ劍と云ひ、正眞の眼前は眞槍眞劍でなければ判らない！　タンポの附いた稽古槍の仕合は、所詮は偽の仕合ぢや、負けても傷が附かぬとなれば、仕宜に依つては、負けても差支へがない譯となる！　忠直は偽の仕合にはもう飽いて居る。大坂表に於て手馴れた眞槍を以て、立ち向ふ程に其方も眞槍を以て來い！　主と思ふに及ばぬ、陳があらば遠慮致さずに突け！」

忠直卿の眼は上づつて、言葉の末が顫へた。左太夫は色を變へた。左太夫の後に控へて居る小野田右近も、左太夫と同じく色を變へた。

が、見物席に居る家中の者は、忠直卿の心の裡を解するに苦しんだ。殿御狂氣と怖氣を顫ふものが多かつた。

忠直卿は、之迄は癇癖にこそあつたが、平常至極温厚であり、稍和暴の樣こそあつたが、非道無殘な振舞は寸毫もなかつたので、今日の忠直卿の振舞ひを見て家中の者が、色を變じたのも無理ではなかつた。

が、忠直卿が今日眞槍を手にしたのは、左太夫右近に對する消し難い憎しみから出たとは云へ、一つには自分の正眞の腕前を知りたいと、云ふ希望もあつた。眞槍で立ち向ふならば、彼等も無下に負けはしまい、秘術を盡くして立ち向ふに違ひない、さすれば自分の眞の力量も判る。若しその爲に、自分が手を負ふ事があつても、偽りの勝利に狂喜して居るよりも、何れ程氣持がよいか知れぬと、心の裡で思つた。

「それ！　眞槍の用意致せ！」と、忠直卿が命ずると、俄て用意がしてあつたのだらう、小姓が二人各々一本の大身の槍を、重たさうにもたげて、忠直卿主從の間に持ち出した。

「それ！　左太夫用意せい！」と、云ひながら、忠直卿は手馴れた三間柄の長槍の穂鞘を拂つた。槍鍛冶の名手備後貞包の鍛へた七寸に近い鋒先から、迸る殺氣が、一座の人々の心を冷めたく颯した。

今迄、ぢつとして主君忠直の振舞を看過して居た國老の本多土佐は、主君が鋒先を拂はれるや否や、突如として忠直卿の御前に出でた。

「殿！　お氣が狂はせられたか、大切の御身を以て、安に劍戟を弄ばれ家臣の者を傷けられては、公儀に聞えても容易ならぬ儀で御座る。平にお止り下されい」と、老眼をしばたゝきながら、必死になつて申し上げた。

「爺か！　止めだて無用ぢや。今日の眞槍の仕合は、忠直六十七萬石の家國に易へても、思ひ立つた一儀ぢや。止め立て一切無用ぢや」と、忠直卿は凛然と云ひ放つた。其處には秋霜の如く犯し難き威嚴が伴つた。かうした場合、之迄も忠直卿の意志は絶對のものであつた。土佐は口を緘んだ儘、悄然として引き退いた。

左太夫は、もう先刻から十分に覺悟をして居た。昨夜の立話が、殿のお耳に入つた爲の御成敗かと思へば、彼には何とも文句の云ひやうはなかつた。夫は家來として當然受くべき成敗であつた。夫をかゝる眞槍仕合に、假託けての成敗かと思へば、彼は其處に忠直卿の好意を感するやうに思つた。彼は主君の眞槍に貫かれて、潔く死にたいと思つた。

「左太夫如何にも眞槍を以て、お相手を致しまする」と、思ひ切つて云つた。見物席に左太夫の不遜に對する叱責の聲が洩れた。忠直卿は苦笑をした。

「夫でこそ忠直の家臣ぢや。主と思ふな、陳があれば、遠慮致さず突け！」

から云ひながら　忠直卿は槍を扱いて二三間後へ退りながら、位を取られた。

左太夫も、眞槍の鞘を拂ひ、

「御免！」と、叫びながら主君に立ち向つた。

一座の者は、凄じい殺氣に閉ぢられて、身の毛をよだち、息を詰めて、たゞ茫然と、主從の決鬪を見守るばかりであつた。

忠直卿は、自分の本當の力量を、如實にさへ知ることが出來れば、思ひ殘すことはないとさへ、思込んで居た。從つて國主と云ふ自覺もなく、對手が臣下であると云ふ考もなく、たゞ勇氣凛然として立向はれた。

が、左太夫は、最初から覺悟を極めて居た。

三合ばかり槍を合すと、彼は忠直卿の槍を左の高股に受けて、どうと地響打たせて、のけ様に倒れた。

見物席の人々は一齊に深い溜息を洩した。左太夫の傷ついた身體は同僚の誰彼に依つて、忽ち運び去られた。

が、忠直卿の心には、勝利の快感は少しもなかつた。左太夫の負が、昨日と同じく意識しての負であることが、マザ〳〵と判つたので、忠直卿の心は昨夜にも勝して淋しかつた。左太夫奴は、命を賭して迄、偽りの勝利を主君に喫はせて居るのだと思ふと、忠直卿の心の焦燥と淋しさと頼りなさは、更に底深く植え附けられた。忠直卿は、自分の身を危險に置いても、臣下の身體を犠牲にしても、尙本當の事が知りがたい自分の身を恨んだ。

左太夫が倒れると、右近は少しも怯れた様子もなく、蒼白な顔に覺悟の眸を輝しながら、左太夫の取り落した鎗を携げて其處に立つた。

忠直卿は、右近奴は、昨夜あのやうに、思ひ切つた言葉を吐いた男であるから、必死の手向ひをするに相違ないと、消えかゝらうとする勇氣を奮して立ち向つた。

が、此男も左太夫と同じく、自分の罪を深く心の裡に感じて居た。そして、謹く主君の長槍に貫かれて、自分の罪を謝さうとして居た。

忠直卿は、五六合立ち合つて居る裡に、相手の右近が、急所と云ふべき胸の邊へ、幾度も隙きを作るのを見た。此男も、自分の命を捨てゝ迄主君を欺き終らうとして居るのだと思ふと、忠直卿は不快な淋しさに襲はれて來た。そして、相手にうま〳〵と乘せられて、勝利を得るのが、馬鹿々々しくなつて來た。

が、右近は一刻も早く、主君の槍先に貫かれたいと思つたらしく、忠直卿が突き出す槍先に故意に身を當てるやうにして、右の肩口を、グサと貫かれてしまつた。

忠直卿は、見事に昨夜の鬱憤を晴した。が、夫は彼の心に、新しい淋しさを、植え附けたに過ぎなかつた。左太夫も右近も、自分の命を賭して迄、彼等の偽を守つてしまつた事である。

忠直卿は、その夜遲く、傷のまゝ自分の屋敷に運ばれた右近と左太夫との二人が、時刻を前後して、腹を割いて死んだと云ふ報知を聽いて、黯然たる心持にならずには居られなかつた。

忠直卿は、つく〳〵考へた。自分と彼等との間には、虚偽の膜が、かゝつて居る。その膜を、その偽の膜を彼等は必死になつて支へて居るのだ。その偽は、浮ついた偽でなく、必死の懸命の偽である。忠直卿は、今日貫槍を以て、その偽の膜を必死になつて、突き破らうとしたのだが、その破れは彼等の血に依つて忽ち修繕されてしまつた。自分と家來との間には、依然としてその膜がかゝつて居る。その膜の向うでは、人間が人間らしく本當に交際て居るが、彼等が一旦自分に向ふとなると、皆その膜を頭から被ぶつて居る。忠直卿は自分一人、膜の此方に、取殘されて居ることを思ひ出すと、焦々した淋しさが、猛然として自分の身心を襲つて來るのを覺えた。

四

眞槍の仕合があつて以來、殿の御癇癖が募つたと云ふ警報が、一城の人心をして、忠直卿に對して惻々たらしめた。殿の御前だと云ふと、小姓達は眸を据ゑ息を凝して働動さへ、おろそかにはしなかつた。近習の者も一足退み一足退くにも、儀禮を正しうして微瑕だに犯さぬ事を念とした。君臣の間に、多少は存在して居た心易さが跡を滅して、君前には肅殺たる氣が

漂うた。家臣達は君前から退くと、今迄にない心身の疲勞を覺えた。

併し君臣の間がかうして萎み始めようとするのに氣が着いたのは、決して家來の方ばかりではなかつた。忠直卿は、ある日近習の一人が、自分に家老達からの書狀を捧げるとて、四五段の彼方からゐざり寄らうとするのを見て、

「ずつと遠慮致さず前へ出よ！　さやうな禮儀には及ばぬぞ」と、云つた。が、夫は好意から出た注意と云ふよりも、焦燥から出た叱責に近かつた。侍臣は、主君の言葉に依つて、元の心易さに歸らうとした。が、さうした意識を伴つた心易さの奥には、ゴツと〳〵した骨があつた。

眞槍の仕合以來、忠直卿は忘れたかのやうに、武術の稽古から身を遠ざけた。毎日日課のやうに、續けて居た武術仕合を中止したばかりでなく、木刀を取り稽古槍を、手にする事さへ無くなつた。

武藝つては居たが寛濶で、亂暴ではあつたが、無邪氣な青年君主であつた忠直卿は、ふつつりと木刀や半弓を、手にしなくなつた代りに、酒杯を手にする日が多くなつた。少年時代から、豪酒の素質を持つては居たが、酒に淫することなどは、決してなかつたのが、今では大杯を頻りに傾けて、亂酒の萌が漸く現はれた。

ある夜の酒宴の席であつた。忠直卿の機嫌が、何時になく晴々しかつた。すると、彼にとつては、第一の寵臣である增田勘之介と云ふ小姓が、彼の大杯になみ〳〵と酌をしながら、

「殿には、何故此頃兵法座敷には渡らされませぬか。先頃のお手柄に、ちと御慢心遊ばしての御怠慢かと、お見受け申しまする」と、云つた。彼は、かう云ふ事に依つて、主君に對する親しみを、十分見せた積であつた。

すると、思ひがけもなく、忠直卿の顔は、急に色を變じた。つと、傍にあつた杯盤を、取るよりも早く、勘之介の面上を目がけて、發矢と ばかりに投げ附けた。主君から、豫期せざる暴行を受けて、勘之介はハツと色を變じたが、忠義一途の彼は、決して身體をかはさなかつた。彼はその杯盤を、眞向に受けて、白い面から血を流しながら、其場に平伏した。

忠直卿は、物をも云はず、立ち上ると、其儘奥殿へ、は入つてしまつた。同僚の誰彼が、駈け寄つて慰めながら、勘之介を引き起した。

勘之介は、その日病と稱して、宿へ下つたが、その夜の明くるを待たず切腹した。

忠直卿は、夫を聞くと、たゞ淋しく苦笑したばかりであつた。

その事があつてから、十日ばかりも經つた頃だつた。忠直卿は、老家老の小山丹後と碁を圍んで居た。老人と忠直卿とは、相碁であつた。が、二三年來老人は段々負越すことが多かつた。その日も、丹後は忠直卿の傷に、三回ばかり續けざまに敗られた。すると、老人は人の好ささうな微笑を示しながら、

「殿は近頃、いかい御上達ぢや、老人ではとてもお相手がなり申さぬわ」と、云つた。

と、今迄晴やかに續けざまの快勝を享樂して居たらしい忠直卿の面を、暗鬱な陰影が掠めたかと思ふと、彼はいきなり立ち上つて、二人の間に置かれて居る碁盤を足蹴にした。盤上に並んで居た黑白の石は跳び散つて、その二三は丹後の顔を打つた。

丹後は、勝負に勝ちながら、怒り出した主君の心を解するに苦しんだ。彼は、叩頭に立ち去らうとする忠直卿の袴の裾を捕へながら、

「如何遊ばされた！　殿には御亂心か、何樣の御趣意あつて、丹後奴に斯樣な恥辱を與へらるる？」と、狂氣の如くに叫んだ。一徹な老人の心には、忠直卿の不當な仕打に對する怒が、炎の如く燃えた。

が、忠直卿は、老人の怒りを、少しも介意せず、「えい！」と、袴を捕へた手を振り放ちながら、つッと奥へ去つてしまつた。

老人は、幼年時代から手鹽にかけて守り育てた主君から、理不盡な恥しめを受け、老の眼に涙を流しながら、口惜しがつた。彼は、故中納言秀康卿が、在りし世の寛仁大度な行蹟を想ひ起しながら、永らへて恥を得た身を悔いた。正直な丹後は、盤面に向つて迫従負けをするやうな卑劣な心は、毛頭持つて居なかつた。

が、もう忠直卿の心には、家臣の一擧一動は、凡て一色にしか映らなくなつて居た。

老人は、その日家へ歸ると、式服を着て、遺書を正し、皺腹をかき切つて、惜しからぬ身を捨てゝしまつた。

忠直卿御亂行と云ふ噂が、漸く封境の内外に傳はるやうになつた。

勝氣の忠直卿は、之迄は、仙人に對する憂慮を享受する爲に、よく勝負事を試みたが、此の事があつて以來は、その方面にも、ふつつりと手を出さなくなつた。

かうなると、忠直卿の生活が段々荒んで行くのも無理はなかつた。城中に在つては、爲す事のない儘に酒食に耽り、色を漁つた。そして、城外に出ては、狩獵にのみ日を暮した。野に鳥を追ひ、山に獸を狩り立てた。道に鳥獸は國主の出獵であるが爲に、忠直卿の矢面に好んで飛び出すものはなかつた。人間の世界から離れ、かうした自然界に對する時、忠直卿は自分を圍ふ僞の膜から、身を脱出し得たやうに、すがすがしい心持がした。

五

之迄の忠直卿は、國老達の云ふ事は、何かにつけてよく聽かれた。まだ長吉丸と云つて居た十三歳の昔、父秀康卿の臨終の床に呼ばれて、「父の亡からん後は、國老共の申すことを父が申す事と心得て、よく聽かれよ」と、諭された事を大事に守つて居た。

が、此頃の彼は、國政を聽く時にも、凡てを僞んで解釋した。家老達が、ある男を推薦して賞め立てると、彼はその男が嘘はせ者のやうに思はれて、その男を用ふる事を、意地にかゝつて拒んだ。國老達が、ある男の行蹟の非難を申上げて、閉門の至當である事を主張すると、忠直卿は、その男が硬直な士であるやうに思はれて、いつかな閉門を命ずる事を許さなかつた。

城前領一揆、その年は近年稀な凶作で、百姓の困苦一方ではなかつた。家老達は、補を連ねて忠直卿の御前に出で、年貢米の一部免除を願ひ出でた。が、忠直卿は、家老達が、口を酸くして說けば說くほど、家老達の建言を採用するのが、嫌になつた。彼自身心の裡では、百姓に相當な同情を懷きながら、家老達の云ふ儘になるのが不快であつた。そして、家老達が、くど〳〵と說くのを聽き流しながら、

「ならぬ！　ならぬと申せば、しかと相ならぬぞ」と、怒鳴り附けた。何の爲に拒んだのか、彼自身にさへ分らなかつた。

かうした感情の喰違ひが、主從の間に深くなるに連れ、國政日に荒んで、越前侯亂行の噂は、江戸の柳營にさへ達した。

が、忠直卿のかゝる心持は、彼のもつと根本的な生活の方へも、段々喰ひ入つて行つた。

ある夜の事であつた。彼は宵から、奥殿にたて籠つて、愛妾達を前にしながら、頻りに大杯を重ねて居た。

京からはるゝ〳〵と、召し下した絹野と云ふ美女が、此頃の忠直卿の寵幸を身一つに蒐めて居た。

忠直卿は、その夜は暮れて間もない六つ半刻から九つに近い深更迄、酒を飲み續けて居るが、酒を飲まぬ愛妾達は、彼の盃に酒を注ぐと云ふ單調な仕事を、幾回となく繰返して居る丈である。

忠直卿は、ふと醉眼を剖いて、彼に侍坐して居る愛妾の絹野を見た。所が、その女は連夜の酒宴に疲れはてたのだらう、主君の御前と云ふ事も、つい失念してしまつたと見え、その二重瞼の美しい眼を半眼に閉ぢながら、うつらうつらと假睡に落ちようとして居る。

ぢつと、その面を見て居ると、忠直卿は又更に、新らしい淫惑に囚はれてしまつた。たゞ、主君と云ふ絶大な權力者の爲に、身を委して朝暮自分の意志を、少しも働かさず、たゞ傀儡のやうに扱はれて居る女の淋しさが、その不覺な假睡の裡にまざ〳〵と現はれて居るやうに思はれた。

忠直卿は思つた。此女も自分に愛があると云ふ譯では、少しもないのだ。此女の嫣然たる姿態や、妖艶な眉は皆上部ばかりの技巧なのだ。たゞ、大金で退引ならず身を賣はれ、國主と云ふ大權力者の前に引き据ゑられて是非もなく、出來る丈その權力者の歡心を得ようと云ふ、切羽詰まつた最後の逃げ路に過ぎないのだ。

が、此女が自分を愛して居ないばかりでなく、今迄自分を心から愛した女が一人でもあつただらうかと、忠直卿は考へた。

彼は今迄、人間同志の人情を少しも味はずに來た事に、此頃漸く氣が附き始めた。

彼は、友人同志の情を、味つた事さへなかつた。幼年時代から、同年輩の小姓を、自分の周圍に幾人となく見出した。が、彼等は忠直卿と友人として、交はつたのではない。たゞ服從をした丈である。忠直卿は、彼等を愛した。が、彼等は決してその主君を愛し返しはしなかつた。ただ義務感情から服從した丈である。

友情は、兎も角、異性との愛は、何うであつただらう。彼は、少年時代から、美しい女性を、幾人となく自分の周圍に支配した。忠直卿は彼等を愛した。が、彼等の中の何人が、彼を愛し返しただらう。忠直卿が愛しても、彼等は愛し返さなかつた。たゞ、唯々として服從を提供した丈である。彼は今も自分の周圍に多くの人間を支配して居る。が、彼等は忠直卿に對して、人間としての人情の代りに、服從を、提供して居る丈である。

考へて見ると、忠直卿は戀愛の代用としても、服從を受け、友情の代りにも服從を受け、親切の代りにも服從を受けて居た。無論、その中には人情から動いて居る本當の戀愛もあり、友情もあり、純な親切もあつたかも知れなかつた。が、忠直卿の今の心持から見れば、夫が混沌として一樣に、服從の二字によつて掩はれて見える。

人情の世界から一段高い所に、放り上げられ、大勢の臣下の中央に在りながら、寂莫たる孤獨を感じて居るのが、わが忠直卿であつた。

かうした意識が萌ずるに連れ、彼の奥殿に於ける生活は、砂を噛むやうに落莫たるものになつて來た。

彼は、今迄自分の愛した女の愛が、不純であつた事が、もう見え透くやうに思はれた。

自分が、心を掛けると何の女も、唯々諾々として自分の心のまゝに從つた。が、夫は自分を愛して居るのではない、たゞ臣下として君主の前に義務を盡くして居るのに過ぎなかつた。彼は、戀愛の代りに、義務や服從を喫するのに、飽き果てゝしまつて居た。

彼の生活が荒むに從つて、彼は單なる傀儡であるやうな異性の代りに、もつと彈力のある

女性を愛したいと思つた。彼を、心から愛し返さなくてもいゝから、せめては人間らしく反抗を示すやうな異性を愛したいと思つた。

其爲に、彼は家中の高祿の士の娘を、後房へ連れて來させた。が、彼等も忠直卿の云ふ事を、殿の侮せとばかり、唯不可抗力の命令のやうに、何の反抗をも示さずに忍從した。彼等は靈驗あらたかな神の前に捧げられた人身御供のやうに、純な犧牲的な感情を以て忠直卿に對して居た。忠直卿は、その女達と相對して居ても、少しも淫蕩な心持にはなれなかつた。

彼の物足りなさは、倘止まなかつた。彼は夫の定まつて居る女なら、少しは反抗もするだらうと思つた。彼は、命じて許嫁の夫ある娘を物色した。が、さうした女も、忠直卿の豫期とは反して、主君の意志を絶對のものにして、忠直卿を人間以上のものにまつり上げてしまつた。

もう此頃から、忠直卿の放埒を非難する聲が、家中の士の間にさへ起つた。

が、忠直卿の亂行は、倘止まなかつた。許嫁の夫ある娘を得て、少しも慰まなかつた彼は、更に非道な所業を犯した。夫は、家中の女房で艶名のあるものを、私に探らしめて、その中の三名を、不時に城中に召し寄せたまゝ、歸さなかつた事である。

主君の御亂行玆に極まるとさへ、歎くものがあつた。

夫からの數度の歎願に拘はらず、女房は返されなかつた。重臣は、人倫の道に悖る所業として忠直卿を强諫した。

が、忠直卿は重臣が諫むれば諫むる程、自分の所業に興味を覺ゆるに至つた。

女房を奪はれた三人の家臣の中、二人迄忠直卿の非道な企の眞相を知ると、君臣の義も之迄と思つたと見え、云ひ合せた如く、相續いて割腹した。

横目附から、その屆出があると、忠直卿は手にして居た杯を、グッと飲み干されてから、微かな苦笑を洩されたまゝ、何とも言葉はなかつた。家中一同の同情は、翕然として死んだ二人の武士の上に注がれた。「迫は武士ぢや、見事な最期ぢや」と、賞めそやす者さへあつた。が、人々は此二人を死せしめた原因を、只不可抗力なる運命のやうに思つて居た。

二人が前後して死んで見ると、家中の人々の興味は、妻を奪はれながら、只一人生き殘つて居る淺水與四郎の身に蒐つて居た。

そして、妻を奪はれながら、腹を得切らぬその男を、臆病者として非難するものさへあつた。

が、四五日してから、その男は飄然として登城した、そして、忠直卿にお目通を願ひたいと、目附まで申し出でた。が、目附は淺水與四郎を色々に宥め賺さうとした。

「何と申しても、相手は主君ぢや、お身が今、お目通に出たら必定お手打ぢや。殿の御非道は、我人共によく判つて居る、が何と申しても相手は主君ぢや」

が、與四郎は茫然として云ひ放つた。

「縱令如何ならうとも、お目通を願ふのぢや。縱令身は八傷きにされようとも、念ない事ぢや。是非お取次ぎ下されいと、必死の色を示した。

目附は、仕方なく白書院に詰めて居る、家老の一人へ其歎願を傳へた。夫を聞いた老年の家老は、

「與四郎奴は、血迷うたと見えるな。主君の御無理は判つて居る事ぢやが、此場合殿をかつ切つて死諫を進めるのが、臣下としての本分ぢや。他の二人は、よう心得て居るに與四郎奴は、女房を取られたので血迷うたと見える。か程の不

覺人とは思はなかつたに」と、嘯いた。

家老は、何ブツ〳〵と口小言を云ひながら、小姓を呼んでその事を濕々ながら、忠直卿の耳に傳へしめた。

すると、忠直卿は、思の外に機嫌斜めならずであつた。

「ハヽ、與四郎奴が、參つたか。よくぞ參り居つた。直ぐ通せ！　目通り許すぞ」と、叫ばれたが、此の頃絶えて見えなかつた晴がましい微笑が、頰の邊に漂うた。

暫くすると、忠直卿の目の前に、病夫のやうに呆けた與四郎の姿が現はれた。數日來の心勞に疲れたと見え、色が蒼ざめて、瘦中に何處となく殺氣が漂つて居る。そして、その眸の中には、二筋も三筋も血を引いて居る。

忠直卿は生來初て、自分の目の前に、自分の家臣が本當の感情を隱さず、瘦に現はして居るのを見た。

「與四郎か？　近う進め！」と、忠直卿は溫顏を以てかう云はれた。何だか、自分が、人間として他の人間に對して居るやうに思つて、與四郎に對して、一種の懷しさをさへ覺えた。主從の境を隔つる襖が除れて、たゞ人間同志として、向ひ合つて居るやうに思はれた。

與四郎は、疊の上を三反ばかり滑り寄ると、地獄の底からでも、洩れるやうな呻き聲を出した。

「殿！　主從の道も人倫の大道よりは、小事で御座るぞ。妻を奪はれましたお恨み、かくの如く申上げまするぞ」と、云ふかと思ふと、與四郎は飛燕の如く身を躍らせて、忠直卿に飛びかかつた。その右の手には、早くも匕首が光つて居た。が、與四郎は輕捷な忠直卿に躱もなく、利腕を取られて、其處に捻ぢ伏せられてしまつた。近習の一人は、氣を利かした積で、小姓の持つて居た忠直卿の佩刀を、彼に手渡さうとした。が、忠直卿は却て其男を斥けた。

「與四郎！　迫に其方は武士ぢやなう」と、云ひながら、忠直卿は取つて居た與四郎の手を放した。與四郎は、匕首を持つたまゝ、面をも揚げず、其處に平伏した。

「其方の女房も、迫に命を召さるゝとも、余が言葉に從はぬと申し居つた。余の家來には珍らしい者共ぢや」と、云つたまゝ、忠直卿は心からいと快げに哄笑した。

忠直卿は、與四郎の反抗に依つて、二重の歡びを得て居た。一つは、一個の人間として、他人から恨まれ殺されんとすることに依つて、初て自分も人間の世界へ一足踏み入れる事が、許されたやうに覺えた事である。もう一つは、家中に於いて打物取つては、俊捷第一の聞ある與四郎が、必死の匕首を物の見事に、取押へた事であつた。此勝負に、偽や伴があらうとは思へなかつた。彼は、久し振に勝利の快感を、何等の疑惑なしに、樂しむ事が出來た。忠直卿は、此頃から胸の裡に腐り附いて居る鬱懷の一端が解け始めて、朗かな光明を見たやうに思はれた。

「たゞ此儘にお手打を」と、歎願する與四郎は何のお咎もなく下げられたばかりでなく、與四郎の妻も、即刻お暇を賜つた。

が、忠直卿の此の歡びも、決して長くは續かなかつた。

與四郎夫婦は、城中から下げられると、その夜、枕を並べて覺悟の自殺を遂げてしまつた。何の爲に死んだのか、確には分らなかつたが、恐らく相傳の主君に刃を向けたのを、恥ぢたのと、かつは彼等の命を救つた忠直卿の寬仁大度に、感じた爲であらう。

が、二人の死を聽いた忠直卿は、少しも歡ばなかつた。與四郎が覺悟の自殺をした所から考へると、彼が匕首を以て忠直卿に迫つたのも、

何うやら怪しくなつて來た。忠直卿に潔く、手刃されん爲の手段に過ぎなかつたやうにも思はれた。若しさうだとすると、忠直卿が見事にその利腕を取つて捻ぢ伏したのも、紅白仕合に敵の大將を見事に敗つて居たのと、餘り違つた罪のものではなかつた。さう考へると、忠直卿は再び暗澹たる絶望的な氣持に、陷つてしまつた。

忠直卿の亂行が、其後益々進んだ事は、歴史にある通である。最後には、家臣を擅に手刃するばかりでなく、無辜の良民を捕へて、之に兒刃を加へるに至つた。殊に口碑に殘る、石の「知」の云ひ傳は、百世の後尚人に面を背けさせるものである。が、忠直卿が、かゝる殘虐を敢てしたのは、多分臣下が忠直卿を人間扱ひにしないので、忠直卿の方でも、おしまひに臣下を人間扱ひにしなくなつたのかも知れない。

六

併し、忠直卿の亂行も無限には續かなかつた。放埒が度重るに連れて、幕府の執政たる土井大炊頭利勝、本多上野介正純は、私に越前侯廢絶の策を廻らした。が、剛强無雙の上に、德川家には嫡々たる忠直卿に正面から事を計つては、如何なる大變を、惹き起すかも分らぬので、遂には忠直卿の御生母なる清涼尼を、越前へ送つて將軍家の意を夫となく忠直卿に傳へる事にした。

忠直卿は、母君との絶えて久しき對面を欣ばれたが、改易の沙汰を思ひの外に容易く聽き入れられ、六十七萬石の城を、弊履の如く捨てられ、配所たる後鄕國府内に赴かれた。途中敦賀にて入道され法名を一伯と附けられた。時に元和九年五月の事で、忠直卿は三十の年を越したばかりであつた。後に鄕後府内から同國津守に移されて臺所料として、幕府から一萬石を給され、晩年を事もなく過し、寛安三年九月十日に薨じた。享年五十六歳であつた。

忠直卿の晩年の生活に就いては、何等の史實も傳はつて居ない。たゞ、忠直卿警護の任に當つて居た府内の城主竹中采女正重次が、その家臣をして忠直卿の行狀を錄せしめて、幕府の執政たる土井大炊頭利勝に送つた「忠直卿行狀記」の一冊があるばかりである。その一節に、

「忠直卿常國津守に移らせ給うて後は、些の荒荒しき御振舞もなく安けく暮され申候。兼々仰せられ候には六十七萬石の家國を失ひつる折は、惡夢より覺めたらんが如く、たゞすがすがしうこそ思ひ候へ。生々世々國主大名などに再びとは生れまじきぞ。多勢の中に交じりながら、孤獨地獄にも陷ちたらんが如き苦患を受くる事屢々なりなど仰せられ、御改易の事に就いては、些の御後悔だに見えさせられず候。……徒然の折には、村年寄僧侶などさへお手近く召し寄せられ、圍棋のお遊びなどあり、打ち興ぜさせ給ふ有樣、殿の紂王にも勝れる暴君よなど、嘆せられ給ひし面影更に見え給はず、殊に津守の淨建寺の洗山老衲とは、いと入懇に渡らせられ、老衲が、「六十七萬石も持たせ給へば、誰も紂王の眞似なども致したくなるものぞ。殿の惡しきに非ず」など、聞え上げるに、お怒りの樣もなく笑はせ給ふ。末には百姓町人の賤しきをさへお目通に引き給ひ、無禮に無なく申し上ぐる事を、いと興がらせ給へり。御身はよろづ、お慣しみ深く、近侍の者を憫み、領民を愛撫し給ふ有樣、六十七萬石の家國を失ひたる無法人とも見えずと人々不審しく思ふ事今に止まず候」と、あつた。

恩讐の彼方に

一

市九郎は、主人の切り込んで來る太刀を受け損じて、左の肩から頸へかけて、微傷ではあるが、一太刀受けた。自分の罪を――綾合向うから挑まれたとは云へ、主人の寵妾と非道な戀をしたと云ふ、自分の致命的な罪を、意識して居る市九郎は、主人の振り上げた太刀を、必至な刑罰として、譬ひその切先を避くるに努むる迄も、夫に反抗する心持は、少しも持つては居なかつた。彼はたゞかうした自分の迷から、命を捨てることが、如何にも惜しまれたので、出來る丈は逃れて見たいと思つて居た。それで、主人から不義を云ひ立てられて斬り付けられた時、有合せた燭臺を、早速の飛物として、主人への鋭い太刀先を避けて居た。が、五十に近いとは云へ、まだ筋骨のたくましい相手が、疊みかけて切り込む太刀を、攻撃に出られない悲しさには、何時となく受け損じて、最初の一太刀を、左の肩に受けたのである。が、一旦血を見ると、市九郎の心は、忽ちに變つて居た。彼の分別のあつた心は、闘牛者の槍を受けた牡牛のやうに荒んでしまつた。何うせ死ぬのだと思ふと、其處に世間もなければ、主從もなかつた。今迄は、主人だと思つて居た相手の男が、たゞ自分の生命を、脅さうとして居る一個の動物――夫も兇惡な動物としか、見えなかつた。彼は奮然として、攻撃に轉じた。彼は、「おう」と叫きながら、持つて居た燭臺を、相手の面上を目がけて投げ打つた。市九郎が、防禦の爲の防禦をして居るのを見て、氣を許してかゝつて居た、主人の三郎兵衛は、不意に投げ付けられた燭臺を受けかねて、鑢受けの一角が、したゝかに彼の右眼を打つた。市九郎は、相手のたじろぐ隙に、脇一おのれ、手向ひするか！」と、三郎兵衛は激怒した。市九郎は無言で付け入つた。主人の三尺に近い太刀と、市九郎の短い脇差とが、二三度烈しく打ち合うた。

主從が必死になつて、十數合太刀を合はす間に、主人の太刀先が、二三度低い天井をかすつて、朧々太刀を操る自由を失はうとした。市九郎は其處へ付け入つた。主人は、その不利に氣が付くと自由な戸外へ出ようとして、二三歩後退りして縁の外へ出た。その際に市九郎が、何も付け入らうとするのを、主人は「えい」と焦だつて切り下した。が、焦だつた餘りその太刀は、縁側と、座敷との間に垂れ下つて居る鴨居に、不覺にも二三寸切り込まれたのである。

「しまつた！」と、三郎兵衛が、太刀を引かうとする際に、市九郎は踏み込んで、主人の胸廣を思ふ樣横に薙いだのであつた。

敵手が倒れてしまつた瞬間に、市九郎は愕然として我に復つた。今迄昂奮して驅驅として居た意識が、漸く落着くと、彼は、自分が主殺しの大罪を犯したことに、氣が付いて、後悔と恐怖との爲めに、其處に平臥つてしまつたのである。

夜は初更を過ぎて居た。母屋と、伸間都屋とは、遠く隔つて居るので、主從の恐ろしい格闘は、母屋に住んで居る女中以外、まだ何人にも知られなかつたらしい。その女中達は、此の烈しい格闘に氣を奪はれ一間の内に集まつて、ただ身を顫はせて居る丈であつた。

市九郎は、深い海槻に囚はれて居た。一個の落兒であり、無頼の若武士ではあつたけれども、まだ惡事には馴れて居なかつた。まして八逆の第一である主殺しの大罪を犯さうとは、彼の思ひも付かぬ事だつた。彼は、血の付いた脇差を取り直した。主人の妾と密通を通じて、その爲に成敗を受けようとした時、却つてその主人を殺すと云ふことは、何う考へても、彼にいゝ所はなかつた。彼は、まだビク〳〵と動いて居る、主人の死體を冴眼にかけながら、靜に自殺の覚悟を堅めて居た。すると、その時、次の間から、今迄の大きい壓迫から、逃れ出たやうな女の聲がした。

一ほんとにまあ、何うなる事かと思つて心配したわ。お前が眞二つにやられた後は、私の番ぢやあるまいかと、先刻から、屏風の後で息を凝して見て居たのさ。が、ほんたうにいゝ按排だつたね。かうなつちや、一刻も猶豫はして居られないから、在金をさらつて逃げるとしよう。まだ仲間達は氣が付いて居ないやうだから、逃げるなら今の潮さ。乳母や、女中などは、臺所の方でガタ〳〵頭へて居るらしいから、私が行つて、じたばた騒がないやうに云つて來ようよ。さあ！　お前は在金を探して下さいよ」と、云ふその聲は、確に蛇へを帶びて居た。が、さうした飢へを、女性としての强い意地で抑制して、努めて平氣を裝つて居るらしかつた。

市九郎は――自分で何うしようと云ふ考を、スツカリ失くして居た市九郎は、女の聲を聽くと、蘇へつたやうに活氣づいた。彼は、自分の意志で働くと云ふよりも、女の意見に依つて動く傀儡のやうに立ち上ると、座敷に置いてある桐の茶箪笥に手をかけた。そして、眞白い木目に、血に汚れた手形をベタ〳〵と付けながら、引出しをあちこちと探し始めた。が、女――主人の妾のお弓が歸つて來る迄に、市九郎は、二朱銀の五兩包を、たゞ一つ見付けたばかりであつた。お弓は、臺所から引返して來て、その金を見ると、

「そんな端した金が、何うなるものかね」と、云ひながら、今度は自分で、自暴に引出しを引掻き廻した。しまひには、鏡臺の中迄探したが、小判は一枚も出て來はしなかつた。

「名うての始末屋だから、瓶にでも入れて、土の中へでも埋めてあるのかも知れない」さう忌忌しさうに云ひ切ると、金目のありさうな衣類や、印籠を、手早く風呂敷包にした。

かうして、この盜夫盜婦が、淺草田原町の旗本中川三郎兵衛の家を出たのは、安永三年の秋の初めであつた。後には、當年三歳になる三郎兵衛の一子實之助が、父の非業の死も知らず、乳母の懷ろにスヤ〳〵と眠つて居るばかりであつた。

二

市九郎とお弓とは、江戸を逐電してから、東海道は態と避けて、人目を忍びながら、東山道を上方へと志した。男は、主殺しの罪から、絶えず良心の苛責を受けて居た。が、いろは茶屋の女中上りの、莫連者のお弓は、市九郎が少しでも沈んだ樣子を見せると、

「何うせ兇狀持ちになつたからには、いくらくよ〳〵しても仕樣がないぢやないか。度胸を据ゑて、世の中を面白く暮すのが上分別さ」と、市九郎の心に、明暮惡の拍車を加へた。信州から木曾の野原の宿迄來た時には、二人の路用の金は、百も殘つて居なかつた。二人は、窮するに逃れて、惡事を働かねばなら最初はかうした男女の組合せとし

し易い美人局を稼業とした。さうして、信州から尾州へかけての宿々で、往來の町人百姓の路用の金を奪つて居た。初の程は、女からの

烈しい數唆で、つい惡事を犯し始めて居た市九郎も、遂には惡事の面白さを味ひ始めた。浪人姿をした市九郎に對して、被害者の町人や百姓は、金を取られながら、頗る柔順であつた。

惡事が段々進歩して行つた市九郎は、美人局からもつと單純な、手數のいらぬ强請をやり、最後には、白取强盜を正當な稼業とさへ心得るやうになつた。

彼は、何時となしに信濃から木曾へかゝる東山道の切所である、鳥居峠に土着して居た。そして畫は茶店を開き、夜は强盜を働いた。

もうさうした生活に、何の躊躇をも、不安をも感じないやうになつて居た。金のありさうな旅人を狙つて、殺害して金と衣類とを奪ふと巧みにその死體を片附けた。一年に三四度、さうした犯罪を犯すと、彼は優に一年の生活を支へることが出來た。

彼等が江戸を出てから、三年目になる春の頃であつた。參觀交替の北國大名の行列が、二つばかり續いて通つた爲、木曾街道の宿々は、近頃になく賑つた。殊にこの頃は、信州を始め越後や越中からの伊勢參宮の客が、街道に續いた。その中には、京から大坂へと、遊山の旅を延す者も多かつた。市九郎は、彼等の二三人を殺して、その年の生活費を得たいと思つて居た。

木曾街道の杉や檜に交つて咲いた山櫻が散り始める夕暮のことであつた。市九郎の店に男女二人の旅人が立寄つた。夫は明かに夫婦であつた。男は三十を越して居た。女は二十三四であつただらう。伴を連れない氣樂な旅に出た、信州邊の富農の若夫婦らしかつた。

市九郎は、二人の身裝を見ると、彼は此二人を今年の犠牲者にしようかと、心の内で思つて居た。

「もう野原の宿迄は、何程もあるまいな」かう云ひながら、男の方は、市九郎の店の前に、草鞋の紐を結び直さうとした。市九郎が、返事をしようとする前に、お弓が臺所から出て來ながら、

「左樣でムいます、もう此の峠を降りますれば半道もムいません。まあゆつくり休んでからになさいませ」と、云つた。市九郎は、お弓の、この言葉を聞くと、お弓が既に恐ろしい計畫を、自分に勸めようとして居るのを覺えた。野原の宿迄には、まだ二里に餘る道を、もう何程もないやうに云ひくるめて、旅人に氣をゆるさせ、彼等の行程が、夜に入るのに乘じて間道を走つて、宿の入口で襲ふのが市九郎の平素の手段であつた。その男は、そんな恐ろしい計畫には、夢にも氣付かないで、お弓の言葉を聽くと、

「そんならば、茶なと一杯所望しようか」と、云ひながら、もう彼等の第一の穽に陷つてしまつた。女は赤い紐の付いた菅笠を取り外づしながら、夫の傍に寄り添うて、腰をかけた。

彼等は、此處で小半刻も、峠を登り切つた疲れを休めると、鳥目を置いて、柴に暮れかゝつて居る小木曾の谷へ向つて、峠を降りて行つた。

二人の妻が夕靄の中に見えなくなると、お弓はそれとばかりに合圖をした。市九郎は、脇差を腰にすると、獲物を追ふ獵師のやうに一散に二人の後を追うた。本街道を右に折れて、木曾河の流に添うて、嶮しい間道をひた走りに急いだ。

市九郎が、野原の宿の手前の並樹道に來た時には、春の長い日が全く暮れて、十日ばかりの月が昇らうとして、ほの白い月しろが、木曾の山々を微かに浮ばせて居た。

市九郎は、街道に添うて生えて居る、一叢の丸葉柳の下に、身を隱しながら、夫婦の近づくのを徐ろに待つて居た。段々兇惡になつて來

た彼も心の底では、幸福な旅をして居る二人の男女の生命を、不當に奪ふといふことが、どんなに罪深いかと云ふことを、考へずには居られなかつた。が、一旦爲しかゝつた仕事を、中止して歸ることは、今でも彼の上手に居るお弓の手前、彼の心に委せぬ事であつた。が、彼は此の夫婦の血を流したくはなかつた。成るべく相手が、自分の脅迫に二言もなく服從して呉れゝばいゝと、思つて居た。若し彼等が路用の金と、衣裝とを出すならば決して殺生はすまいと、思つて居た。

彼の決心が漸く固まつた頃に、街道の彼方から、急ぎ足に近附いて來る男女の姿が見えた。

二人は、峠からの道が、覺悟の外に遠かつた爲、疲れ切つたと見え、お互に助け合ひながら、無言の儘に急いで來た。

二人が、丸葉柳の茂みに近附いた時、息を凝らして待つて居た市九郎は不意に街道の眞中に躍り出た。そして、今迄に幾度も口にし馴れて居る脅迫の言葉を浴せかけた。が、男は彼の豫期したやうに怖れないで、却つて必死になつたらしく、道中差を拔くと、妻を後に庇ひながら身構へをした。市九郎は、一寸出鼻を折られた。が彼は聲を勵まして、

「いやさ、旅の人、手向ひしてあたら命を落すまいぞ。命迄は取らうと云はぬのぢや。在金と衣類とを大人しく出して行け」と、叫んだ。その顏を、相手の男は、ぢーつと見て居たが、ふと思ひ付いたらしく、

「やあ！　先程の峠の茶屋の主人ではないか」と、叫ぶと、その男は憤然として飛びかゝつて來た。市九郎は、もう之迄だと思つた。自分の顏を見覺えられた以上、自分達の安全の爲、もう此の男女を生かすことは出來ないと思つた。

相手が必死に斬り込むのを、巧みに引はづしながら、一刀を相手の首筋に浴せた。男は「あつ！」と悲鳴を揚ると、のけ樣に倒れてしまつた。見ると、連の女は氣を失つたやうに道の傍に蹲くまりながら、ブル〳〵顫へて居た。

市九郎は、女を殺すに忍びなかつた。が、彼は自分の危急には代へられぬと思つた。男の方を殺して、殺氣立つて居る間にと思つて、血刀を振り翳しながら、彼は女に近づいた。女は、兩手を合はして、市九郎に命を乞うた。市九郎は、その眸に見つめられると、何うしても刀を下ろせなかつた。が、彼は殺さねばならぬと思つた。此の時市九郎の慾心は此の女を斬つて、女の衣裝を奪なしにしてはならないと思つた。

さう思ふと、彼は、腰に下げて居た手拭を外づして、後に廻りながら女の首を絞つた。

市九郎は、二人を殺してしまふと、急に人を殺した怖しさを感じて、一刻もその場所に居た堪まらないやうに思つた。彼は、二人の胴卷と、衣類とを奪ふと、あたふたとして、その場から一散に逃れた。後から何物かに追はれて居るやうな焦燥を感じた。彼は、今迄十人に餘る人殺をしたものの、夫は皆半白の老人とか商人とか、さうした階級の者ばかりで、若々しい夫婦連などを自分に手にかけたことはなかつた。

彼は、深い良心の苛責に囚はれながら、自分の家に歸つて來た。そして家に這入ると、直ぐ樣、男女の衣裝と金とを、汚らはしいものか何かのやうに、お弓の方へ投げやつた。が、お弓は平素の彼女であつた。悠然とした落着いた手付で、先づ金の方を調べて見た。所持金は彼等が思つたより少く、二十兩を僅に越して居るばかりであつた。

お弓は殺された女の着物を手に取ると、

「まあ、黄八丈の着物に紋縮緬の襦袢だね」と、衣裝に對する女性に特有な感嘆の聲を洩した。が直ぐ「だが、お前さん！　此女の頭の物は、何うおしだい」と、彼女は詰問するやうに、九市

郎を顧みた。

「頭の物！」と、市九郎は女の質問の眞意を解しかねて、生返事をした。

「さうだよ。頭の物だよ。黄八丈に紋縮緬の着付ぢや、頭の物だつて、櫛や笄ぢやあるまいぢやないか。わたしは、先刻あの女が菅笠を取つた時に、ちらと覗んで置いたのさ。瑇瑁の櫛に相違なかつたよ」と、お弓はのしかゝるやうに云つた。殺した女の頭の物の事などは、夢にも思つて居なかつた市九郎は、何とも答へるすべがなかつた。

「お前さん！　まさか、取るのを忘れたのぢやあるまいね。瑇瑁だとすれば、七兩や八兩は確だよ。驚け出しの泥棒ぢやあるまいし、何の爲に殺生をするのだよ。あれ丈の衣裝を着た女を、殺して置きながら、頭の物に氣が付かないとは、お前さんは、何時から泥棒稼業にお成りなのだえ　何と云ふどぢをやる泥棒だらう。何とか、云つて御覽！」と、お弓は、威丈高になつて、市九郎に喰つてかゝつて來た。

二人の若い男女を殺してしまつた悔に、心の底迄冒されかけて居た市九郎は、女の言葉から、深く傷けられた。彼は、頭の物を取る事を、忘れたと云ふ盜賊としての失策を、或は無能を、悔ゆる心は少しもなかつた。自分は、二人を殺した事を、惡い事と思へばこそ、殺す事に氣も顫動して、女がその頭に十兩にも近い裝飾を、付けて居る事を全く忘れて居たのだと思つた。市九郎は、今でも忘れて居た事を後悔する心は起らなかつた。强盜に身を落して、利慾の爲に人を殺して居るものの、惡鬼のやうに相手の骨迄は、しやぶらなかつた事を考へると、市九郎は惡い氣持はしなかつた。夫にも拘はらず、お弓は、自分の同性が無殘に殺されて、其の身に付けた下衣迄が、殺戮者に對する貢物として、自分の目の前に晒されて居るのを見ながら、尚その飽き足らない慾心は、惡人の市九郎の眼をこぼれた頭の物に迄及んで居る。さう考へて來ると、市九郎はお弓に對して、ある淺ましさを感ぜずには居られなかつた。

お弓は、市九郎の心にかうした激變が、起つて居るのを全く知らないで、

「さあ！　お前さん！　一走り行つておいでよ。折角、此方の手に入つて居るものを遠慮するには、當らないぢやないか、遠慮をする柄でもないぢやないか」と、自分の云ひ分に十分な條理がある事を信ずるやうに、勝誇つた表情をした。

が、市九郎は默々として應じなかつた。

「おや！　お前さんの仕事のアラを拾つたので、お氣に觸つたと見えるね。本當に、お前さん！　行く氣はないのかえ。十兩に近いまうけ物を、みす〳〵ふいにしてしまふ積かい」と、お弓は重ねて市九郎に迫つた。

何時もは、お弓の云ふ事を、唯々として聽く市九郎ではあつたが、今彼の心は烈しい動亂の中にあつて、お弓の言葉などに應ずるには餘りに驚けはなれた方面に動いて居た。お弓は市九郎の默つて居るのを見て、焦々して來たらしく、

「いくら云つても、行かないのだね。それぢや、私が一走り行つて來ようよ。場所は何處なの。矢ッ張り何時もの處だらうね」と、お弓が云つた。

お弓に對して、抑へ難い嫌惡を感じ始めて居た市九郎は、お弓が一刻でも自分の傍に居なくなることを、むしろ欣んだ。彼はお弓を一刻でも自分の傍を離すつもりで、

「知れたことよ。何時もの通、藪原の宿の手前の松並樹さ」と、吐き出すやうに云つた。

「ぢや、一走り行つて來よう。幸ひ月の夜で戸外は明るいし……。ほんたうに、世話のやける

お泥棒様だ。へまな仕事をするつたら、ありやしない」と、口汚く罵りながら、お弓は裾をはしをつて、草履をつつかけると月明りの道を一散に駆け出した。

市九郎は、お弓の後姿を見て居ると、淺ましさで、心が一杯になつて来た。死人の髪の物を剝ぐ爲に、血眼になつて駆け出して行く女の姿を見ると、市九郎はその女に、曾て愛情を持つて居た丈けに、心の底から淺ましく思はずには居られなかつた。その上、自分が惡事をして居る時、縱令無殘にも人を殺して居る時でも、金を盜んで居る時でも、自分がして居ると云ふ事が、常に不思議な分疎になつて、その淺ましさを感ずることが少なかつたが、一旦他人が惡事をして居るのを、靜かに傍觀するとなると、その恐ろしさ、淺ましさが、飽くまでも明かに、市九郎の目に映らずには居なかつた。自分が、命を賭して迄得た女が、僅か五兩か十兩の瑞珊の爲に、女性の優しさの凡てを捨てゝ、死骸に付く狼のやうに、殺された女の死骸を惑うて駆けて行くのを見ると、市九郎は、もう此の女と一緒に此罪惡の棲家に、一刻も居た堪まれなくなつた。さう考へ出すと、彼の今迄に犯した惡事が、一々蘇つて彼の心を喰ひ割き始めた。絞め殺した女巡禮の眸き聲や、血みどろになつた讃商人の呻き聲や、一太刀浴びせかけた白髪の老人の悲鳴などが、一團になつて市九郎の良心を襲うて來た。彼は罪の怖しさに戰きながら、一刻も早く自分の過去から逃れたかつた。彼は、自分自身からさへも、逃れたかつた。まして自分の凡ての罪惡の、萌芽であつた女から、極力逃れたかつた。彼は、決然として立ち上つた。二三枚の衣類を風呂敷に包んだ。先づ の男から盜つた胴卷を、當座の路用として懷ろに入れた。彼は血に汚れて居る衣物も着更へずに戸外へ飛び出した、が、十間ばかり走り出した時、ふと自分の持つて居る金も衣類も、悉く盜んだものであるのに氣が付くと、蹤ね返されたやうに立ち戻つて、自分の家の上り框へ、衣類と金とを、力一杯投げ付けた。

彼は、お弓に逢はないやうに、道でない道を木曾川に添うて、一散に走つた。何處へ行くと云ふ當もなかつた。たゞ自分の罪惡の根據地から、一寸でも、一尺でも遠い所へ逃れたかつたのである。

三

市九郎は、山野の分ちなく、只ひた走りに走つた。二十里に餘る道を、只一息に走せて、翌日の夕暮には美濃國大垣在に辿り着いて居た。彼は、玆へ來る迄何處へ止まらうと云ふ當もなかつた。何人を頼らうと云ふ當もなかつた。ただ、妄に逃げ走りたかつた。一途に今迄の自分の生活から逃れたかつたのである。

彼はふと、大垣在の淨願寺と云ふ大寺の門前へ出た。殷々と鳴り響いてゐる暮六つの鐘を聽いた時に、彼の頼りない心は、端なくも縋るべき最後のものを、見付けたのである。

淨願寺は、美濃一國眞言宗の總寺であつた。市九郎は、現住明遍上人に、必死の教化を求めて、心からの懺悔をなした。上人は迫に、此極重惡人をも捨てなかつた。市九郎が懺悔をした後に、有司の下へ自首しようと云ふのを止めて、

「重ね〳〵惡業を重ねた汝ぢやから、有司の手に依つて、身を梟木にかけられ、現世の報いを自ら受くるのも罪亡しの一法ぢやが、それでは未來永劫焦熱地獄の苦患は免れぬぞよ。それよりも佛道に歸依し、衆生濟度の爲に身命を捨て、諸人を救ふと共に、汝自身を救ふのが肝心ぢや」と、教化した。

市九郎は上人の言葉を聽いて、又更に懺悔の

火に心を焦らせて、當座に出家の志を堅めた。彼は、上人の手に依つて得道して、了海と法名を呼ばれ、只管佛道修業に肝膽を碎いた。道心勇猛の爲だらうか、僅か半年に足らぬ修業に、行業は氷霜よりも皎くなつた。朝には三密の要法を凝し、夕は秘密念佛の安座を離れず、智度の心早くも萌して、天晴の智識となり濟した。彼は、自分の道心が定つて、もう動かないのを自覺すると、師の坊の許しを得て、諸人救濟の大願を起し、諸國雲水の旅に出たのであつた。

美濃の國を後にして、先づ京洛の地を志した。彼は、幾人もの人を殺しながら、縱令僧形の姿になつたとはいへ、自分が生き永らへて居る事を心苦しく思はずには居られなかつた。彼はさうした心持からも諸人の爲、身を粉々に碎いて、自分の罪障の萬分の一をでも償ひたいと思つて居た。殊に自分が、木曾山中にあつて、行人をなやませたことを思ふと、道中に廻り合ふ人々に對して、償ひ切れぬ負擔を持つて居るやうに思はれた。

行住坐臥にも、人の爲を思はぬことはなかつた。道路に難渋の人を見ると、彼は、手を引き、腰を押して、その道中を助けた。病に苦む老幼を負うて、數里に餘る道を遠しとしなかつたこともあつた。本街道を離れた村道の橋でも、破壞されて居る時は、彼は自ら山に入つて、樹を切り、石を運んで修繕した。路の崩れたのを見れば、土砂を運び來つて繕うた。かうして、後内の國々から、中國一帶の雲水の旅に只管善根を積むことに腐心した。が、身に重なれる罪は、山よりも高く、積む善根は土堆よりも低きを思ふと、彼は今更に、半生の惡業の深きを悲しんだ。自分の行つて居るやうな些細な善根によつて、自分の極惡が償ひ切れぬことを知つて、彼は心を暗うした。逆旅の宿の寂寞には、かゝる報償をしながら、尙ほ生を貪つて居ることが、甚だ腑甲斐ないやうにさへ思はれて、自ら命を縮めたいと思つたことさへあつた。が、その度毎に不退轉の勇を振ひ興し、諸人救濟の大業を爲すべき機緣の疎らんことを新念した。

享保九年の秋であつた。彼は、赤間ケ關から小倉に渡り、豐前の國宇佐八幡宮を拜した後、山國川を溯つて耆闍崛山羅漢寺に詣でんものと、四日市から南に赤土の茫々たる野原を過ぎ、道を山國川の溪谷に添うて辿つた。

筑紫の秋は、驛路の宿り毎に更けて、雜木の林には櫨赤く燃れ野には稻黃色く實り、農家の軒には、此の邊の名物の柿が、眞紅の珠を聯ねて居た。

夫は、八月に入つて間のないある日であつた。彼は、秋の朝の光に輝く、山國の流れを右に見ながら、三口から佛坂の山道を超えて、午近き頃櫨田の驛に着いた。淋しい驛で粟食の膳に有り付いた後、再び山國路に添うて南を指した。櫨田驛から出外れると、道は又山國川に添うて、火山岩の河岸を傳うて走つて居た。

歩み難い石高道を、市九郎は、杖を頼りに辿つて居た時、ふと道の傍に、此の邊の農夫であらう、四五の人々が屬り慇いで居るのを見た。

市九郎が近付くと、その中の一人は、早くも彼の姿を見付けて、

「御出家様、之は、よい所へ來られた。非業の死を遂げた、哀れな亡者ぢや。通りかゝられた縁しに、一遍の回向をして下され」と、頼んだ。

非業の死だと聞いた時、剽賊の爲にあやめられた旅人の死骸ではあるまいかと思うた市九郎は、自分の過去の惡業を想起して、刹那に湧く悔恨の心に、兩脚の竦むのを覺えた。が、それは水死した男の死骸であつた。

「見れば水死人のやうぢやが、所々皮肉の破れて居るのは、如何した仔細ぢや」と、市九郎は、恐る〳〵訊いた。

「御出家は、旅の人と見えて、御存じあるまいが、此の川を半町も上れば、鎖渡しと云ふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が、悉く難儀する所ぢやが、此の男は此の川上の椎坂郷に住んで居る馬士ぢやが、今朝鎖の渡しの中途で、馬が狂うた爲、五丈に近い所を眞逆樣に落ちて、見られる通の無殘な最期ぢや」と、その中の一人が云つた。

「鎖渡しと申せば、兼々難所とは聞いて居たが、斯樣なあはれを見ることは、度々でムるかの」と、市九郎は、死骸を見守りながら、打ちしめつて聞いた。

「一年に三四人、多ければ十人も、思はぬ憂目を見ることがある。無雙の難所故に、風雨に桟が朽ちても、修繕も思ふに委せぬのぢや」と、答へながら、百姓達は死骸の始末にかゝつてゐた。

市九郎は、此の不幸な遭難者に、一通の經を讀み了ると、足を早めてその鎖渡しへと急いだ。

其處迄は、もう一町と隔つて居なかつた。見ると、川の左に聳えて居る山が、山國川に臨む所で、十丈に近い絶壁に斫り截たれて、其處に灰白色のギザ〳〵した、襞の多い肌を露出して居るのであつた。山國川の水は、其の絶壁に吸ひ寄せられたやうに、此處へ惹ひ寄つて、その裾を洗ひながら、濃綠の色を湛へて、渦卷いて居るのであつた。

里人等が、鎖渡しと云つたのは之だらうと、市九郎は思つた。平坦な道は、その絶壁に絶たれてしまつて、その中腹を、松、杉などの丸太を、鎖で聯ねた棧道が、危ふげに傳つて居る。かよわい婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見、仰いで頭を擡する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え、心戰くも理であつた。

市九郎は、岩壁に縋りながら、戰く足を踏みしめて、漸く渡り終つて其の絶壁を振向いて見た。其の刹那であつた。彼の心に咄嗟にある大誓願が、勃然として萌したのである。

積むべき贖罪の餘りに小さかつた彼は、自分が精進勇猛の氣を試すべき、難業に逢ふことを祈つて居た。今目前に行人が艱難し、一年に十に近い人の命が奪はれる難所を見た時、自分の身命を捨てゝ、此の難所を除かうと云ふ思付が、旺然として起つたのも無理ではなかつた。二百餘間に餘る絶壁を刳貫いて道を通じようと云ふ、不敵な誓願が、彼の心に浮んで來たのも無理ではなかつた。

市九郎は、自分が求め歩いたものが、漸く玆で見付かつたと思つた。一年に十人を救へば、十年に百人、百年、千年と經つ内には、千萬の人の命を救ふことが出來ると思つたのである。

かう決心すると、彼は一途に實行に着手した。その日から、羅漢寺の宿坊に宿りながら、山國川に遙うた村々を勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めたのである。

が、何人も、此邊には馴染のない此の風來僧の言葉に、耳を傾けなかつた。

「三町をも超える大磐石を、刳貫かうと云ふ瘋狂人ぢや、ハヽヽ」と、嘲ふものは、まだよい方であつた。

「大騙りぢや、針のみゝから天をのぞくやうな事を云ひ前にして、金を集めようと云ふ、大騙りぢや」と、市九郎の勸說に、迫害を加ふる者さへあつた。

市九郎は、一月にも近い間、勸進に努めたが、何人もが耳を傾けぬのを知ると、奮然として、獨力此の大業に當ることを決心した。彼は、石工の持つ槌と、鑿とを手に入れると、自分たつた一人で此の大絶壁の一端に立つた。夫は、一

個のカリカチュアであつた。削落し易い火山岩であるとは云へ、川を匝して聳え立つ巍々たる大絶壁を、市九郎は、自分一人の力で、刳貫かうとするのであつた。

「到頭氣が狂つた！」と、行人は、市九郎の姿を指しながら嘲つた。

然し、市九郎は屈しなかつた。山國川の清流に沐浴して、觀世音菩薩に祈誓を籠めた後、渾身の力を籠めて、第一の槌を下したのである。が、夫に應じて、たゞ二三片の碎片が、飛び散つたばかりであつた。再び力を籠めて第二の槌を下した。更に二三片の小塊が、巨大なる無限大の大塊から、分離したばかりであつた。が、市九郎は少しも失望しなかつた。第三、第四、第五と彼は懸命に槌を下した。空腹を感ずれば、近郷を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向つて槌を下した。懈怠の心を生ずれば、眞言を誦へて、勇猛の心を振ひ起した。一日、二日、三日、市九郎の努力は間斷なく續いた。旅人は、その傍を通る度に、嘲笑の聲を送つた。が、市九郎の心は、その爲に須臾も撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に槌を持つ手に力を籠めた。

やがて、市九郎は、雨露を凌ぐ爲に、絶壁に近く木小屋を立てた。朝は、山國川の流が、星の光を寫す頃から起き出で、夕は瀨鳴の音が寂靜の天地に澄みかへる頃迄も、槌を振ふ手を止めなかつた。が、行路の人々は尙嗤笑の言葉を止めなかつた。「身の程を知らぬたわけぢや」と、市九郎の努力を眼中に置かなかつた。

が、市九郎は一心不亂に槌を振つた。槌を振つて居さへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺した悔恨も、其處に無かつた。極樂に生れようと云ふ、欣求もなかつた。たゞそこに、晴々した精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以來、夜毎の寢覺めに、身を苦しめた自分の惡業の記憶が、日に薄らいで行くのを感じた。彼は益々勇猛の心を振ひ起して、一向專念に槌を振つたのである。

新しい年が來た。春が來て夏が來て早くも一年が經つた。市九郎の努力は、空しくはなかつた。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれて居た。夫は、ホンの小さい洞窟ではあつたが、市九郎の强い意志は、最初の爪痕を明かに止めて居た。

が、近郷の人々はまだ市九郎を嗤つた。

「あれ見られい！　狂人坊主が、あれ丈掘り居つた。一年の間、もがいて、たつたあれ丈ぢや……」と、嗤つた。が、市九郎は自分の掘り穿つた洞窟の裡

洞窟の外には、日が輝き月が照り、雨が降り嵐が荒んだ。が、洞窟の中には、間斷なき槌の音のみがあつた。

二年の終にも里人は尙嗤笑を止めなかつた。が、夫はもう、聲に迄は出て來なかつた。たゞ、市九郎の妻を見た後、槌を見合せて、互に嗤ひ合ふ丈であつた。が、更に一年經つた。市九郎の槌の音は、山國川の水聲と同じく、不斷に響いて居た。村の人達は、もう何とも云はなかつた。彼等が、嗤笑の表情は何時の間にか、驚異の夫に變つて居た。市九郎は、長い間梳らない爲に頭髮は何時の間にか、伸びて雙肩に掩ひかゝり、浴せざれば垢づきて、人間の姿とも見えなかつた。彼は自分が掘り穿つた洞窟の裡

に、獣の如く蠢めきながら、狂氣の如くその槌を振ひつゞけて居たのである。

里人の驚異は何時の間にか、同情に變り始めて居た。市九郎が暫しの暇を窃んで、托鉢の行脚に出かけようとすると、洞窟の出口に思ひがけなく、一椀の齋を見出すことが、多くなつた。市九郎はその爲に、托鉢に費すべき時間を、更に絶壁に向ふ事が出來た。

四年目の終が來た。市九郎の掘り穿つた洞窟は、もはや五丈の深さに達して居た。が、その三町を超る絶壁に比ぶれば、それは物の數でもなかつた。里人は市九郎の熱心に驚いたものの、未だ、かくばかり見えすいた徒勞に合力するものは、一人もなかつた。市九郎は、たゞ獨りその努力を續けねばならなかつた。が、もう掘り穿つ仕事に於て、三昧に入つて居た市九郎は、たゞ槌を振ふ外は何の存念もなかつた。土鼠のやうに、命のある限り、掘り穿つて行く外には、何の他念もなかつた。彼は、只一人拮々として掘り進んだ。洞窟の外には春が去り秋が來て、四時の風物が移り變つたが、洞窟の中には不斷の槌の音のみが響いた。

「可哀さうな坊樣ぢや。物に狂つたと見え、あの大磐石を穿つて行くわ。十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終らうものを」と、行路の人々は、市九郎の空しい努力を、悲しみ始めた。が、一年經ち二年經ち、丁度九年目の終りに、市九郎の穿つた穴は入口より奥迄、二十二間を計る迄に掘り進んで居た。

樋田郷の里人は、始めて市九郎の事業が可能であるのに氣が付いた。一人の乞食僧が九年の力で、之迄掘穿ち得るものならば、人を增し、歲月を重ねたならば、此の大絶壁を穿ち貫く事も必ずしも不思議な事ではない、と云ふ考が里人等の胸の中に銘ぜられて來た。九年前、市九郎の勸進を擧つて斥けた山國川に添ふ七郷の里人は、今度は自發的に開鑿の寄進に付き始めた。數人の石工が市九郎の事業を、援ける爲に雇はれた。もう、市九郎は孤獨ではなかつた。岩壁に下す多數の槌の音は、勇ましく賑やかに、洞窟の中から、洩れ始めたのである。

が、翌年になつて、里人達が工事の進み方を測つた時、夫がまだ絶壁の四分の一にも達して居ないのを、發見すると、彼等は再び落膽疑惑の聲を洩した。

「人を增しても、とても成就はせぬ事ぢや。あたら、了海どのに騙かされて入らぬ物入をした」と、彼等は捗どらぬ工事に、何時の間にか倦き始めて居つた。市九郎は、又獨り取殘されねばならなかつた。彼は、自分の傍に槌を振る者が、一人減り二人減り、遂には一人も居なくなつたのに氣が付いた。が、彼は決して去る者は追はなかつた。默々として、自分一人その槌を振ひ續けて行くのであつた。

里人の注意は、全く市九郎の身邊から離れてしまつた。殊に洞窟が、深く穿たれゝば、穿たれるほど、その奥深く槌を振ふ市九郎の姿は、行人の眼から遠ざかつて行つた。人々は、闇の裡に閉された洞窟の中を透し見ながら、

「了海さんは、まだやつて居るのかなあ」と、疑つた。が、さうした注意も、しまひには、段々薄れてしまつて、市九郎の存在は、里人の念頭から、屢々消え失せようとした。が、市九郎の存在が、里人に對して沒交渉であるが如く、里人の存在も亦市九郎に沒交渉であつた。彼にはたゞ、眼前の大岩壁のみが、存在するばかりであつた。

市九郎は、洞窟の中に端坐し始めてから、もはや十年にも餘る間、暗い冷めたい石の上に、坐り續けて居た爲に、軀は色蒼ざめ、雙の眼は窪んで、肉は落ち骨は露はれ、此の世に生ける人の姿とも見えなかつた。が、市九郎の心に

は、不退轉の勇猛心が頻りに燃え旺つて、たゞ一念に穿ち進む外には、何物もなかつた。一分でも、一寸でも岩壁の削り取られる毎に、彼は歡喜の聲を揚げた。

市九郎は、たゞ一人取殘されたまゝに、又三年を經た。すると、何時の間にか里人達の注意は、再び市九郎の上に歸りかけて居た。彼等が、ホンの好奇心から、洞窟の深さを測つて見ると、全長六十五間。川に面する岩壁には、採光の窓が一つ穿たれ、もはや、此の大岩石の三分の一は、主として市九郎の腹腕に依つて、貫かれて居る事が判つた。

彼等は、再び驚異の眼を刮いた。過去の無智を恥ぢた。市九郎に對する尊崇の心が、再び彼等の心に復活した。やがて、寄進された十人近い石工の槌の音が、再び市九郎の夫に和した。

又一年經つた。一年の月日が經つ裡に、里人達は、何時かしら目先の遠い出費を、悔い始めて居た。寄進の人夫は、何時の間にか、一人減り二人減つて、おしまひには、市九郎の槌の音のみが、洞窟の闇を打ち顫はして居た。が、傍に人が居ても、居なくても、市九郎の槌の力は變らなかつた。彼は、たゞ機械の如く渾身の力を入れて、槌を擧げ、渾身の力を以て、之を振り降ろした。彼は、自分の一身をさへ忘れて居た。主を殺した事も、剽賊を働いたことも、人を殺したことも、凡ては、彼の記憶の外に薄れてしまつて居た。

一年經ち、二年經つた。一念の動くところ、彼の痩せた腕は、鐵の如く屈しなかつた。丁度、十八年目の終であつた。彼は、何時の間にか、岩壁の二分の一を穿つて居た。

里人は、此の恐ろしき奇蹟を見ると、もはや市九郎の仕事を、少しも疑はなかつた。彼等は、前二回の懺悔を、心から恥ぢ、七郷の人人が合力の誠を盡くして、擧つて市九郎を援け始めた。その歲、中津藩の郡奉行が、巡視して、市九郎に對して、賞美の言葉を下した。近郷近在から、三十人に近い石工が、荒められた工事は、枯葉を焼く火のやうに進んだ。

人々は、衰殘の姿いたゞくしい市九郎に、

「もはや、そなたは石工共の統領を、なさりませ。自ら槌を振ふには及びませぬ」と、勸めた。が、市九郎は頑として應じなかつた。彼は、殘るれば槌を握つたまゝ倒れたいと、思つて居るらしかつた。彼は、三十の石工が、傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れ、懸命の力を盡すこと、少しも前と變らなかつた。

が、人々が市九郎に、休息を勸めたのも、無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奥深く、坐り續けた爲であらう、彼の兩脚は、永い端坐に傷み、何時の間にか屈伸の自在を缺いて居た。僅かの歩行にも杖に縋らねばならなかつた。

その上、長い間、闇に坐して日の光を見なかつた爲であらう、また不斷に、彼の身邊に飛び散る碎けた石の碎片が、その眼を傷けた爲でもあらう、彼の兩眼は、朦朧として光を失ひ、物のあいろも辨へかねるやうになつて居た。

道がに、不退轉の市九郎も、身に迫る老衰を痛む心はあつた。身命に對する執着はなかつたけれど、中道にして殘れることを、何よりも無念と思つたからであつた。

「もう二年の辛抱ぢや」と、彼は心の裡に叫んで、身の老衰を忘れようと、懸命に槌を振ふのであつた。

冒し難き大自然の威嚴を示して、市九郎の前に、立ち寒がつて居た岩壁は、何時の間にか衰殘の乞食僧の鐵のやうな心に貫かれて、その中腹を穿つ洞窟は、命ある者の如く一路その核心を貫かうとして居るのであつた。

四

刳貫の工事が、成就に近づくに從つて市九郎の健康は、過度の勞働に依つて、痛ましく傷けられた。が、彼に取つて、夫よりももつと恐ろしい敵が、彼の生命を狙つて居るのであつた

市九郎の爲に、非業の横死を遂げた中川三郎兵衛の、家臣の手にかゝつた事から、家事不取締とあつて、家は取潰されてしまつて、その時三歳であつた一子の實之助は、縁者の爲に養ひ育てられる事になつたのである。

實之助は、十三になつた時、彼は初て、自分の父が非業の死を遂げたことを聞いた。殊に、相手が對等の士人でなくして、自分の家に養はれた奴僕であることを知ると、少年の心は無念の憤りに燃えた。彼は、即座に復讐の一儀を、肝深く銘じた。彼は、柳生の道場に入つて劍道の修業に肝膽を碎いた。十九の年に免許皆傳を許されると、彼は欣び勇んで報復の旅に上つたのである。若し、首尾よく本懐を遂して歸れば、一家再興の肝膽もしようと云ふ、親類一同の激勵の言葉に送られながら。

實之助は、馴れぬ旅路に、多くの艱難を苦しみながら、諸國を遍歴して、只管敵市九郎の所在を求めた。市九郎を、たゞ一度さへ、見た事もない實之助に取つては、夫は雲を摑むが如き覺束なき捜索であつた。五畿内東海東山山陰山陽北陸南海と、彼は漂泊の旅路に、年を送り年を迎へ、二十七の年迄空しく遍歴の旅を續けた。敵に對する怨も、憤も、旅路の艱難に消磨せんとすること度々であつた。が、非業に殁れた父の無念を思ひ、中川家再興の重任を考へると、奮然と志を振ひ興すのであつた。

江戸を立つてから、丁度九年目の春を、彼は福岡の城下に迎へた。本土を空しく尋ね歩いた後に、遂陸の九州をも探つて見る氣になつたのである。

福岡の城下から、中津の城下に移つた彼は、二月に入つた一日宇佐八幡宮に參して、本懐の一日も早く達せられんことを祈念した。實之助は、參拜を終へてから境内の茶店に憩うた。其時に、ふと彼は傍の百姓體の男が、居合せた參詣客に、次ぎのやうに話すのを聞いたのである。

「その御出家と云ふのは、元は江戸から來たお人ぢやげな。若い時に、人を殺したのを懺悔して、諸人濟度の大願を起したさうぢやが、今云うた樋田の刳貫は、此の御出家一人の力で出來たと云うてもよい位ぢや」と、百姓が云つた。

此の話を聽いた實之助は、九年此方未だ感じなかつたやうな興奮を覺えた。彼は、やゝ急き込みながら、

「率爾ながら、少々物を訊ねる。その出家と申すは、年の頃は何程位ぢや」と、訊いた。その男は、自分の談話が武士の注意を惹いた事を、光榮であると思つたらしく、

「左樣でムいますな。私はその御出家を拜んだ事はムいませぬが、人の噂ではもう六十に近いと申します」

「丈は高いか、低いか」と、實之助は疑みかけて訊いた。

「夫もしかとは、判りませぬ。何樣、洞窟の奥深く居られる故、しかとは判りませぬ」

「その者の俗名は、何と申したか存ぜぬか」

「夫も、とんと判りませぬが、お生れは、越後の柏崎で、若い時に、江戸へ出られたさうでムります」と、百姓は答へた。

玆迄聽いた實之助は、躍り上つて欣んだ。彼が、江戸を立つ時は、親類の一人は、敵は越後

柏崎の生れ故、故郷へ立ち廻るかも計りがたい、越後は一入心を入れて探索せよと云ふ、注意を受けて居たのであつた。

實之助は、之ぞ正しく、宇佐八幡宮の神託ではあるまいかと勇み立つた。彼はその老僧の名と、山國谿に向ふ道を訊くと、もはや、八つ刻を過ぎて居たにも拘はらず、必死の力を雙脚に籠めて、敵の所在へと急いだ。そしてその日の初更近く、樋田村に着いたのである。彼は、直ちに洞窟へ立ち向はうかと思つたが、焦つてはならぬと思ひ返して、その夜は樋田驛の宿に、焦慮の一夜を明すと、翌日は早く起き出でて、輕裝して樋田の刳貫へと向つた。

刳貫の入口に着いた時、彼はそこに石の碎片を運び出して居る石工に訊ねた。

「此の洞窟の中に、了海と云はるゝ御出家が、おはすさうぢやが夫に相違ないか」

「おはさないで何としよう。了海樣は、此の洞の主も同樣な方ぢや。へ、ゝ、ゝ」と、石工は心なげに笑つた。

實之助は、本懐を達する事はや眼前に在りと、欣び勇んだ。が、彼は周章てゝは、ならぬと思つた。

「して、出入の口は玆一箇所か」と、訊いた。敵に、逃げられてはならぬと思つたからである。

「夫は知れた事ぢや。向う へ口を開ける爲に、了海樣は 塗岩の苦しみを爲さつて居るのぢや」と、石工が答へた。

實之助は、多年の怨敵が、嚢中の鼠の如く、目前に置かれてあるのを欣んだ。嘗ひ、その下に使はるゝ石工が、幾人居ようとも、斬り殺すに何の造作もあるべきと、勇み立つた。

「其方に少し頼みがある。了海どのに、御意得たい爲、遽々と尋ねて參つたものぢやと、傳へて呉れ」と、云つた。石工が、洞窟の中へはひつた後で、實之助は一刀の目くぎを濕した。彼は、心の裡で、生來初て廻り逢ふ敵の容貌を想像した。洞門の開鑿を、統領して居ると云へば、五十は過ぎて居るとは云へ、筋骨たくましき男であらう。殊に、若年の頃には、兵法に疎からざりしと云ふのであるから、ゆめ油斷はならぬと思つて居た。

が、暫くして實之助の面前へ、洞門から出て來た一人の乞食僧があつた。夫は、出て來ると云ふよりも、蕉の如く這ひ出て來たと云ふ方が、適當であつた。夫は、人間と云よりも、むしろ人間の殘骸と云ふべきであつた。肉悉く落ちて骨露はれ、脚の關節以下は處々爛れて、永く正視するに堪へなかつた。破れた法衣に依つて、僧形とは知れるものの、頭髮は永く延びて皺だらけの額を掩うて居た。老僧は、灰色を爲した眼をしばたゝきながら、實之助を見上げて、

「老眼衰へはてまして、孰れの方とも辨へ兼ねする」と、云つた。

實之助の、極度に迄張り詰めて來た心は、此の老僧を一目見た刹那タヂ〳〵となつてしまつて居た。彼は、心の底から憎惡を感じ得るやうな惡僧を、欲して居た。然るに彼の前には、人間とも死骸とも付かぬ、半死の老僧が蹲まつて居るのである。實之助は、失望し始めた自分の心を嘲まして、

「そのもとが、了海と云はるゝか」と、息込んで訊いた。

「如何にも左樣でムります。して其許は」と、老僧は呼しげに實之助を見上げた。

「了海とやら、如何に僧形に身を窶すとも、よも忘れは致すまい。汝市九郎と呼ばれし若年の砌、主人中川三郎兵衛を打つて立退いた覺えがあらう。某は、三郎兵衛の一子實之助と、申すものぢや。もはや、逃れぬ所と、覺悟せよ」と、實之助の言葉は、飽く迄落着いて居たが、其處に一歩も許すまじき嚴正さがあつた。

が、市九郎は實之助の言葉を聽いて、少しも驚かなかつた。

「いかさま、中川樣の御子息の實之助樣か。いや御父上を、打つて立退いた者、此の了海に相違ムりませぬ」と、彼は自分を敵と狙ふ者に逢つたと云ふよりも、舊主の遺兒に逢つた親しさを以て答へた。が、實之助は、市九郎の聲音に欺かれてはならぬと思つた。

「主を打つて立ち退いた非道の汝を打つ爲に、十年に近い年月を艱難の裡に過した。玆で會ふからは、もはや逃れぬ所と尋常に勝負せよ」と、云つた。

市九郎は、少しも怯びれなかつた。もはや、期年の裡に成就すべき大願の成るを見果てずして、死ぬことが稍悲しまれたが、夫もおのれが惡業の報ゆであると思ふと、彼は死すべき覺悟を定めたのである。

「實之助樣。いざお斬りなされい。お聞き及びもなされたらうが、之は了海奴が、罪亡しに、掘り穿たうと存じた洞門でムるが、十九年の歲月を費して、九分迄ほ竣工致した。了海身を果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり、此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思ひ殘すこともムりませぬ」と、云ひながら、彼は見えぬ眼をしばたたいたのである。

實之助は、此の半死の老僧に接して居ると、親の敵に對して懷いて居た憎しみが、何時の間にか、消え失せて居るのを覺えた。敵は父を殺した罪の儀悔に、身心を粉に碎いて、半生を苦しみ拔いて居る。而も、自分が一度名乘りかけると、唯々として、命を捨てようとして居るのである。かゝる半死の老僧の命を取ることが、果して復讐であらうかと、實之助は考へたのである。が、然し此の敵を打たない限りは、多年の放浪を切り上げて、江戸へ歸るべきよすがは、なかつた。まして、家名の再興などは、思ひも及ばぬ事であつたのである。實之助は、憎惡よりも、むしろ打算の心から、此の老僧の命を縮めようかと思つた。が、烈しい燃ゆるが如き憎惡を感ぜずして、打算から人間を殺すことは、實之助に取つて忍びがたい事であつた。彼は、消えかゝらうとする憎惡の心を、瞬ましながら、打ち甲斐なき敵を打たうとしたのである。

その時であつた。洞窟の中から、走り出て來た五六人の石工は、市九郎の危急を見ると、驚いて彼を庇ひながら、

「了海樣を何とするのぢや」と、實之助を睨めると、その時に、市九郎は、しはがれた聲を張り上げた。

「皆の衆、お控へなされい。了海、打たるべき覺え十分御座る。此の洞門を穿つことも、たゞその罪滅しの爲ぢや。今かゝる孝子のお手にかゝり、半死の身を終る事、了海が一期の願ぢや。皆の衆妨げ無用ぢや」かう云ひながら市九郎は、身を挺して實之助の傍に、ゐざり寄らうとした。衆々、市九郎の强い意志を、知りぬいて居る周圍の人々は、彼の決心を觀へすべき由もないのを知つた。市九郎の命は、玆に了るかと思はれた。その時に、石工の統領が、實之助の前に進み出でながら、

「御武家樣も、お聞き及びでも厶らうが、此の刳貫は了海樣、一生の大誓願にて、二十年に近き御辛苦に身心を碎かれたのぢや。いかに、御自身の惡業とは云へ、大願成就を目前に置きながら、お果てなさるゝこと、如何ばかり無念であらう。我等の事つてのお願ひは、長くとは申さぬ、此の刳貫の通じ申す間、了海樣のお命を我等に預けては下さらぬか。刳貫さへ通じた節は、即座に了海樣を存分になさりませ」と、彼は誠を表して哀願した。群衆は、口々に、

「ともわりぢやゝ」と、贊成した。

實之助も、さう云はれて見ると、その哀願を聽かぬ譯には、行かなかつた。今此處で、仇を討たうとして、群衆の妨害を受けて不覺を取るよりも、刳貫の竣功を待つたならば、今でさへ自ら進んで討たれようと云ふ市九郎が、義理に感じて首を授けるのは、必定であると思つた。又さうした打算から離れても、仇とは云ひながら此の老僧の大誓願を遂げさせてやるのも、決して不快なことではなかつた。實之助は、市九郎と群衆とを等分に見ながら、

「了海の僧形にめでて、その願ひ許して取らさう。東へ行く事を忘れまいぞ」と、叫んだ。

「念もないことで御座る。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の刳貫が向う側へ通じた節は、その場を去らず了海樣を討たさせ申さう。夫迄はゆる〳〵と、此の邊りに御滯在なされませ」と、石工の頭梁は、穩かな口調で云つた。

市九郎は、此の紛擾が無事に解決が付くと、夫に依つて徒費した時間が、如何にも惜しまれるやうに、にじりながら洞窟の中へ這入つて行つた。

實之助は、大切の場合に思はぬ邪魔が入つて、目的が達し得なかつたことを、憤つた。彼は如何ともし難い鬱憤を抑へながら、石工の一人に案内せられて、木小屋の裡へ入つた。

自分一人になつて考へると、仇を目前に置きながら、討ち得なかつた自分の腑甲斐なさを、無念と思はずには居られなかつた。彼の心は何時の間にか焦ら立たしい憤りで一杯になつて居た。彼は、もう刳貫の竣成を待つと云つたやうな、敵に對する緩かな心を全く失つてしまつた。彼は今宵にも洞窟の中へ忍び入つて、市九郎を討つて立ち退かうと云ふ決心の臍を固めた。が、實之助が市九郎の張り番をして居るやうに、石工達は實之助をそれとなく見張つて居た。

最初の二三日を、心にもなく無爲に過したが、丁度五日目の晩であつた。夜の事なので、石工達も警戒の眼を緩めたと見え、丑に近い頃には何人も深い眠に入つて居た。實之助は、今宵こそと思ひ立つた。彼は、瓦破と起き上ると、枕元の一刀を引き寄せて、靜に木小屋の外に出た。夫は早春の夜の月が冴えた晩であつた。山國川の水は月光の下に蒼く渦巻きながら流れて居た。が、かうした周圍の風物には眼も呉れず、實之助は、足を忍ばせて靜かに洞門に近づいた。削り取つた石塊が、所々に散らばつて、歩を運ぶ度毎に足を痛めた。彼等の面には仕宜に依つては、許すまじき色が、歴々と見えた。

「仔細あつて、その老僧を敵と狙ひ、端なくも今日廻り合うて、本懐を達するものぢや。妨げ致すと、餘人なりとも容赦は致さぬぞ」と、實之助は凛然と云つた。

が、その裡に、石工の數は殖え、行路の人々が、幾人となく立ち止つて、彼等は實之助を取卷きながら、市九郎の身體に、一指をも、觸れさすまいと、銘々に敢囲き始めた。

「敵を打つ打たぬなどは、夫はまだ世に在る裡の事ぢや。見らるゝ通、了海どのは、染衣蘿蔓の身である上に、此山國豁七郷の者に取つては、持地菩薩の再來とも仰がれる方ぢや」と、その中のある者は、實之助の敵打を、叶はぬ非望であるかのやうに云ひ張つた。

が、かう周圍の者から、妨げられると、實之助の敵に對する怒は何時の間にか、蘇つて居た。彼は、武士の意地として、手を拱ぬいて立ち去るべきではなかつた。

「譬ひ沙門の身であらうとも、主殺しの大罪は免れぬぞ。親の敵を打つ者を妨げ致す者は、一人も容赦はない」と、實之助は一刀の鞘を拂つた。實之助を圍ふ群衆も、皆惡ゝ身構へた。

洞窟の中は、入口から來る月光と、所々に刳り明けられた窓から射し入る月光とで、所所ほの白く光つて居るばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探り〳〵奥へ〳〵と進んだ。

入口から、二町ばかりも進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、クヮッ〳〵と間を置いて響いて來る音を耳にした。彼は最初夫が何であるか判らなかつた。が、一歩進むに從つて、その音は擴大して行つて、おしまひには洞窟の中の夜の靜寂の裡に、こだまする迄になつた。夫は、明に岩壁に向つて鐵槌を下す音に相違なかつた。實之助は、その悲壯な、凄みを帶びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近附くに從つて、玉を打ち碎くやうな、鋭い音は洞窟の周圍にこだまして、實之助の聽覺を、猛然と襲つて來るのであつた。彼は、此の音をたよりに進ひながら、近づいて行つた。此の槌の音の主こそ、敵了海に相違あるまいと思つた。私に一刀の鯉口を寛げながら、息を潜めて寄り添うた。その時、ふと彼は槌の音の間間に囁くが如く、うめくが如く、了海が、經文を誦する聲を聞いたのである。

そのしはがれた悲壯な聲が、水を浴びせるやうに實之助の心に徹して來た。深夜、人去り、草木眠つて居る中に、たゞ暗中に鐵坐して鐵槌を振つて居る了海の姿が、闇の如き闇にあつて何、實之助の心眼に、歴々として映つて來た。夫は、もはや人間の心ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつて、たゞ鐵槌を振つて居る勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は、握りしめた太刀の柄が、何時の間にか緩んで居るのを覺えた。彼はふと、自分自身を顧みた。既に佛心を得て、衆生の爲に、碎身の苦を嘗めて居る高德の聖に對し、深夜の闇に乘じて、ひはぎの如く獸の如く、贓悪の徒を抜きそばめて近寄らうとする自分を顧みると彼は強い顫慄が身體を傳うて流れるのを感じた。

洞窟を搖がせる力強い槌の音と、悲壯な念佛の聲とは、實之助の心を散々に打ち碎いてしまつた。彼は、潔く嫉功の日を待ち、彼との約束を果さるゝのを、待つより外はないと思つた。

實之助は、深い感激を懷きながら、洞外の月光を目指して、洞窟の外に這ひ出たのである。

その事があつてから、實之助は洞窟の外の木小屋の内に、朝夕を送りながら、心靜かに刹眞の成就されるのを待つて居た。彼は、もう老僧を打つて立ち退かうと云ふやうな險しい心は、少しも持つて居なかつた。了海が逃げも隱れもせぬ事を知ると、彼は好意を以て、了海がその一生の大願を成就する日を待つてやらうと思つて居た。

彼一人が、爲すこともなく暮して居るにも拘はらず、周圍の石工達は、寸隙をも惜しんで懸命に働いて居た。了海の不斷の精神が、何時の間にか石工達の心にも、浸み渡つて居るやうであつた。

彼等は、實之助に對して朝夕、快い挨拶を贈つた。

「お武家樣、今日は何處へおはせられた」など、問ひかけられる度に、實之助は自分の所在のない生活が氣になつて居た。周圍の人々が凡て、狂氣のやうに働いて居る中に、自分一人漠然と暮して居る事が、彼に心苦しく思はれ始めた。二月も、かうして漠然と暮して居る内に、彼はふと思付いた。かうして爲す事もなく待つて居るよりも、自分も此の大業に一臂の力を盡すことに依つて、幾何でも成就の日が早められるのではないかと思つた。それと同時に、復讐の期日が縮められるのではないかと思つた。さう思ふと、彼はその日から、石工の群に伍して、

槌を振ひ始めたのである。

かうして、敵と敵とが、相並んで槌を下し始めたのである。實之助は、本懷を達する日が、一日も早かれと懸命に槌を振ふのであつた。了海は、實之助が出現してからは、一日も早く大願を成就して、惜しからぬ命を、孝子の手に授けてやりたいと思つたのであらう、彼は、今迄にも見られなかつたやうな、烈しさで、狂人のやうに岩壁を打ち碎いて行くのであつた。

その裡に、月が去り月が來た。最初は、自分自身の爲に槌を振つて居た實之助も、此の刹眞の大業を、爲し甲斐のある仕事であるとさへ思ふやうになつて居た。阿修羅の如く槌を振つて居る了海の姿を見て居ると、彼はその勇猛心に動かされて、兎もすれば讐敵の恨みを忘れがちであつた。

石工どもが、晝の疲れを休めて居る眞夜中にも、此の敵同志は、默々として槌を振ふことなどもあつた。

夫は、了海が樋田の岩壁に第一の槌を下してから、丁度二十一年目、實之助が了海に廻り逢うてから、一年六ヶ月を經た延享三年九月十日の夜であつた。此の夜も石工どもは、悉く小屋に退いて、了海と實之助のみが、終日の疲勞に めげず、懸命に槌を振つて居た。その夜九つに近い頃であつた。了海が、力を籠めて振り下した槌が、朽木を打つが如く何の手答もなかつたので、思はず力餘つて、槌を持つた右の掌が巖に當つた。その時であつた。彼は「アッ」と、思はず聲を上げた。了海の朦朧たる老眼にも紛れなく、その槌に破られた小さい穴から、月の光に照された山國川の姿が、歴々と映つたのである。了海は「おう！」と、全身を顫はせるやうな、名狀しがたき叫聲を擧げたかと思ふと、夫につゞいて狂したかと思はれるやうな歡喜の泣笑ひが、洞窟を物凄く動搖めかしたのである。

「實之助どの、御覽なされい。二十一年の大願、今、端なくも成就いたした」かう云ひながら、了海は實之助の手を執つて、小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黑ずんだ土の見えるのは、岸に添ふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とは、そこに手を執り合うて、大歡喜の涙に咽んだのである。が、暫くすると了海は身を退いて、

「いざ、實之助殿、約束の日ぢや。お斬りなされい。かるゝ法悅の最中に往生致すなれば、未來は淨土に生るゝこと、必定疑ひなしぢや。

いざお斬りなされい。明日ともなれば、石工共が、妨げを致さう、いざお斬りなされい」と、彼のしはがれた聲が洞窟の夜の空氣に響いたが、實之助は、了海の前に手を挑ぬいて坐つたまゝ、涙に咽んで居るばかりであつた。心の底から湧き出づる歡喜に響く凋びた老僧の顔を見て居ると、彼を敵として殺す事などは、思ひ及ばぬ事であつた。敵を打つなど云ふ心よりも、此の羸弱い人間の二つの腕に依つて、成し遂げられた偉業に對する、驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。彼はねざり寄りながら再び老僧の手を取つた。二人は其處に凡てを忘れて、感激の涙に何時迄も浸つて居たのであつた。

出世

譲吉は、上野の山下で電車を捨てた。

二月の終で、不忍の池の面を、撫でて來る風は、まだ冷めたかつたが、薄吸い早春の日の光を浴びて居る、楓や櫻の大樹の梢はもうほんのりと赤みがかつて居るやうに思はれた。

隨分圖書館へも來なかつたなと、譲吉は思つた。圖書館で、ゆつくりと半日を暮し得るほどの暇もなかつた過去一二年の生活が、今更のやうに振りかへられた。それと同時に、さうした繁劇な生活から、やつと逃れる事が出來て、呑氣に圖書館へでも來られるやうになつた現在の境遇を欣ばずには居られなかつた。

もう一二年も來なかつたかも知れない。いや職業を得てからは、一度も來なかつたかも知れないなど、彼は思つた。兎の耳のやうに、ひつそいだやうに突立つて居る白い建物、安定を保つて居るやうで、その癖今にも落ちかゝりさうに思はれるあの白煉瓦の建物にも、長い間足踏みもしないなゝ思つた。

圖書館の事を考へ出すと、彼はその中で過したいろ〳〵な時代の自分の姿が、ひつきりなしに頭の中に浮んで來た。彼が、初て東京へ出て來てから、六七年間の、暗いみじめな學生々活の、何の時代の事を考へても、あの圖書館の中で暮した半日なり一日なりの有樣が、ハツキリと頭の裡に、浮んで來ないことはない。

彼が田舍の中學を出て、初て東京へ來た時、最初には入つた公共の建物は、やつぱりあの圖書館であつた。本好きの彼に取つては、場所にも人にも、何の馴染のない東京の中では、圖書館が一番勝手が判るやうであつた。

田舍の中學生に有勝な、東京崇拜に原因して居るいろ〳〵な幻影が、東京に於ける實際の風景、人物に接して、悉く崩れて行つてしまつた中でも、圖書館に對する滿足だけは、何時迄も殘つて居た。田舍の設備の不充分な藏書の少い圖書館丈しか知らなかつた譲吉の眼には、あの圖書館がどんなに宏大に完成されて見えただらう。その頃の彼には、東京に於けるいろ〳〵な設備の中では、圖書館の有難さ丈が一番身に染みて感ぜられた。

その時以來、どんなにあの圖書館の世話になつたことだらう。最初入學した專門學校を退學されて、行き所もなくブラ〳〵と半年ばかりの月日を、殺さなければならなかつた時には、どんなにあの建物の有難さが判つただらう。

高等學校へは入つてからも、幾度通つたかも分らない。まだ、そればかりではない。つい二年前、大學を出てから職業に、ありつく迄の半年間を、彼はやつぱり圖書館で暮して居たのだ。その時代の圖書館通ひは、彼に取つては一番みじめな事であつた。

大學を出ても、まだ他人の家に厄介になつて居て、何等の職業も、見つからないのに、彼の故郷からは、もう夙くから、金を送るやうに云つて來て居た。大學を出さへすれば、直ぐにも金が取れるやうに彼の父や母は思つて居た。またさう思はずには、居られなかつたのだらう。

「譲吉が學校を出るまで」と云ふ言葉を、彼等は窮乏から來る苦しみを逃れる、唯一つのまじないのやうに思つて居たのだから。譲吉は、自分が就職難に苦しんで居る最中に、早くも金を送れと云つて來る母の無理解さに、いら〳〵しながら、自分が學問をしたそのために、家に負

はした經濟的な致命傷のことを思ふと、さうした性急な催促も、尤もと思はずには居られなかつた。

それで仕方なしに、彼は何うにかして、金を儲けることを考へた。さうして、こんな場合に、多少文筆の素養があるものが、考へつくやうに、翻譯をやつて見ようと思つた。彼は、友人の紹介で、ある書店から出版されて居る「西洋美術叢書」の一卷を翻譯させて貰ふことにした。それは、ガアデナアと云ふ人の書いた「希臘彫刻手記」と云ふ本であつた。金色の唐草模樣か何かの表紙の付いた六七百頁の本であつた。又その活字が、邦字の六號活字に比敵するほどの小さい羅馬字で、その上ベツタリと一面に組んであるのであつた。一頁を譯するのにも、一時間近くもかゝつた。その六七百頁を、悉く譯し了つて、所定の稿料を貰へる日は、茫漠として何日の事だか判らなかつた。それでも彼は、勇敢にその仕事を續けて行つた。その仕事をする外には、金を取れる當は、少しもなかつたから。彼は、毎日のやうに、厄介になつてる家からは比較的に近い、日比谷の圖書館へ行つて、翻譯を續けてやつた。

その翻譯が、やつと六七十枚位、出來上つた頃だらう。ある日の事、彼は例の「希臘彫刻手記」と原稿紙と鞄當とを、一緒に包んだ風呂敷を携げて、日比谷の圖書館へ行つたが、圖書館へ行つて、仕事に取りかゝる前に一休みにと、その日の新聞を讀んで居たときに、ふと自分が携げて來た筐の風呂敷包が、無いのに氣が付いた。彼は、驚いて身のまはりを探し廻つた。が、彼の座席にも、新聞閲覧室の何處にも見當らなかつた。よく氣を落着けて、考へて見ると、電車から降りるときに、もうあの包みを持つて居なかつたのに氣が付いた。電車に乘る時に買つた新聞を讀む時に、風呂敷包みが邪魔になつたので、自分の背と車臺の羽目板の間に置いたことに氣が付いた。内幸町で周章てゝ降りた時に、スッカリ忘れてしまつたのだと思つた。

彼は、その場合にそれほど大切な品物を、ぼんやり忘れてしまふ自分の腑甲斐なさが、しみじみとなさけなかつた。こんなに、ぼんやりとして居て大切な品物を、容易に忘れてしまふやうでは、俺は劇しい世の中に立つては、とても存在して行かれない人間ではあるまいかとさへ思はれた。

彼は茫然とした淋しい情ない心持で、先づ三田の車庫へ行つて見た。が、其處に居た監督は、「巣鴨行の電車なれば、春日町の車庫か、巣鴨の車庫かへ、車掌が屆けて居るでせう。そんな風呂敷包みなら誰も持つて行かないでせう」と云つた。

彼は、監督の言葉で、やつと安心して、直ぐ引返して春日町へ行つた。三田から春日町迄のあの長い丁場を、彼はどんなにいら〳〵した心持で乘つた事だらう。が、春日町へ着いて見ると、「希臘彫刻手記」は、其處へも來て居なかつた。

「あゝきつと、本郷廻りの電車でせう。それだと、巣鴨の車庫へ屆けたのでせう」と、其處の監督が、彼の希望を繫いで呉れた。が、巣鴨まで行つて見ると、其處にもやつぱり「希臘彫刻手記」は來て居なかつた。

「見付けた車掌が持つて來たんでせうが、出發を急いだので、茲へは屆けずにまた持つて行つたんでせう。それだと、もう一度三田の車庫へ行つて見たら何うです」と、其處の監督が、また彼の消えかゝつた希望を繫いで呉れた。彼は、又巣鴨から三田までの長い線路を——東京の殆ど端から端を、飜りない不快で乘つた。が、三田の車庫にもやつぱり彼の風呂敷は見出されなかつた。

「電氣局へ明日あたり行つて御覽なさい。電車内へ遺失したものは、一度は必ず彼處へ集りますから」と、前のと違つた車掌が、又彼に一證の望みを傳へて呉れた。

誰かに持つて行かれたのだなと云ふ疑ひが、だん〳〵明かな形を取り出した。さう思ふと、自分の横に坐つて居た印半纏の男が、淺つて行つたのかも知れないと思つた。が、あの男が家へ歸つて「希臘彫刻手記」と原稿紙と鞄當とを見出して、一體それを何にするであらうかと思つた。他に、こんなに迷惑をかけながら、向うでは少しも利益をしない、罪惡の中でもかうした罪惡が、結果的には一番性質の惡いやつかも知れないと、讓吉は思つた。

本屋から貸して呉れた原稿を無くしたこと、それは少しの義理を缺けば、濟むことだが、自分の金働けの希望を、それほど些細に手輕に、ふいにしてしまつたことが、彼には堪らなく不快であつた。が、まだ丸切り失望するには當らない。明日電氣局へ行けば、都合よく屆け出されてあるかも知れないと思つた。

が、翌日電氣局へ行つて見たが、やつぱり無かつた。念のために、警視廳の拾得係へ行つて見たが、やつぱり無かつた。もう盜られたのに違ひなかつた。困つて居る他に取つては、あんなに大切のものを、ホンの出來心で盜る奴があると思ふと、讓吉は何となく腹立たしかつた。

が、丸善にでもあれば、さう失望するには當らない。五圓か六圓かの金を、何うにか都合して買へばいゝのだと思つた。彼は、さう思ひ付くと、その足で丸善へ行つて見た。が、やつぱり徒勞であつた。

「その本なら、去年あたり二三部來ましたが、とつくに賣切れてしまひました。御註文なら、取寄せます」と、云つたが、その頃は戰爭の影響で、英國から本を取寄せるには、少くとも三四ケ月、長ければ半年もの、時間がかゝつた。さうした餘裕が、この場合にある譯はなかつた。

彼は丸善を出てから、また新しい希望を見出した。

「あゝ若しかしたら、古本屋にあるかも知れない」

彼は、直ぐ神田へ行つた。そして、多くの古本屋を殆ど軒並に探して見た。が、あの金色の唐草模樣は何處にも見出されなかつた。本郷も同じ事だつた。彼が、足と眼とをさんざんに疲らせて、その日の捜索をあきらめて、三田行の電車に乘つた時、また彼の頭には、新しい希望が湧いた。

「あゝ圖書館にあるかも知れない」

こんなに考へ付き易い事を、今迄考へ付かなかつた自分の迂遠さが、少し馬鹿らしくなつた。彼は電車が内幸町へ來ると、急いで飛び降りて、日比谷の圖書館へ行つて見た。が、其處のカタローグには、幾度繰り直しても、見出されなかつた。

「あゝ土野、彼處が唯一のしかも最後の希望だ」彼はもう日が暮れかゝつて居たにも拘はらず、後へ引つ返した。あの鐵の三層の階段を、どんなに急いで駈け昇つたか。そして、どんなにときめく心と險しい眼付とを以て Fine Arte.—Sculpture の項を、探つたことだらう。そこで、運よく、本當に運よく Gardener—The Manuscript of Greek Sculpture と云ふ字を見出した時に、讓吉の心はどんなに嬉しかつただらう。

「あゝやつと、救はれたな」と、思つた。

彼は、その翌日から毎日のやうに、上野の圖書館へ通つた。が、その仕事がどんなに退屈で、不便であつただらう。自分が本を持つて居た時には、朝起きた時のしばらくとか、床に就く前の二三時間などに執る筆が、どんなに仕事を進捗

せしめた事だらうが、仕事の場所が制限され、從つて時間が制限されることに依つて仕事は少しも捗らなかつた。と、同時に仕事〻のものが、愈々苦しくなつて行つた。

が、彼は根よく二三ケ月間、毎日、その仕事をつゞけて行つた。彼は、唯一つの金働けの方法として、その仕事を續けて行つた。その後、その書肆が破產した爲に、本當は一文にもならなかつた仕事を、一生懸命に熱心に續けて行つたのだつた。

彼は、弗佛の前を動物園の方へと、道を取りながら、そんな事を取りとめもなく考へて居た。その頃のみじめな自分の事を考へると、現在の自分の境遇が、別人のやうに幸福に思はれた。月々貰つて居た五圓の小遣から、毎日の電車賃と、閱覽券の費用とを引いた殘りで、時々喰つて居た圖書館の中の賣店の六錢のカツレツや三錢のさつま汁の事まで、頭の中に浮んだ。あの慣ましかつた自分の心持を思ふと、その頃の自分が、いとしく思はずには居られなかつた。

晝でも蝙蝠が出さうな暗い食堂や、取つく島もないやうに冷淡に、眞面目に見える閱覽室の構造や、百書參達のセピヤ色い厚紙服などが、頭に浮んだ。その人達の類も、大抵は宙で想ひ浮べることがあつた。

「あゝさう〳〵あの下足番も居るなあ」と思つた。あの下足の爺、あいつの事は、時々思ひ出して居つた、と思つた。それは、讓吉が高等學校に居た頃から、あの暗い地下室に頑張つて居る爺だつた。

上野の圖書館へ行つたものが、誰も知つて居るやうに、正面の入口に面して、右へ階段を下りると、其處に乾燥床があつて、其處から地下室の下足に、は入るやうになつて居る。その入口には晝でもガスが灯つて居る。その瓦斯の灯の下を潜るやうにしては入ると、そこに薄暗いしかし宏濶な下足があつた。讓吉はそこに働いて居る二人の下足番を知つて居た。殊に讓吉の頭にハツキリと殘つて居るのは大男の方であつた。六尺に近い大男で、眉毛の太い一癖あるやうな面構へであつたが、もう六十に手が屆いて居たらう。もう一人の方は、頭のテカテカ禿げた小男であつた。

二人は恐ろしく無口であつた。下足を預ける閱覽者に對しても、殆ど口を利かなかつた。廚場や、物の上でも殆んど口を利かなかつた。廚場や、寄席、公會場の下足番などが、客の脱ぎ放した下駄を取り上げて預かるやうになつて居るのと違つて、玆では閱覽者自身に下駄を取り上げさせた。又さうしなければならぬやうな設備になつて居た。若し初ての入館者などが下駄を脱いだまゝぼんやり立つて居る場合などに、此の大男の爺は、彼でその脱いだ下駄を指し示した。二人は如何なる場合にも、大抵は口を利かなかつた。二人の間でも、殆んど言葉を交はさなかつた。深い海の底に居る魚が、だんだんその視力を無くするやうに、かうした暗い地下室に、他人の下駄をいぢると云ふ賤役に長い間從つて居るために、何時の間にか嫌人的になり、口を利くのが嫌になつて居るやうであつた。

二人はまた極端に、利己的であるやうに、讓吉には思はれた。二人は、入場者を一人隔きに引き受けて居るやうであつた。從つて、大男の順番に當つて居る時に、入場者が小男の方に下駄を差し出すと、彼はそしらぬ顏をして、大男の方を顎で指し示した。小男の順番に當つて居る時、大男の方へ下駄を差し出した場合も、やつぱりさうであつた。彼等は、下足の一事を正確に二等分して、各自の配分の外は、少しでも他人の仕事をすることを拒んだ。入場の

場合は、それでもあまり大した不都合も起らなかつたが、退場者の場合に、大男の受持の札の者が、五六人もドヤ〳〵と續けて出て大男が目の廻るやうに、立廻つて居る時などでも、小男は、濟し返つて居た。小さい火鉢にしがみつくやうにして悠然と腰を下して居た。が、大男の方も、小男の手傳ひせぬことを、當然として恨みがましい顏もしなかつた。

讓吉は、その頃よく彼等の生活を考へて見た。同じ下足番であつても、劇場の下足番や、寄席の下足番とは違つて、華やかな所が少しもなかつた。その上に彼等の社會上の位置を具體化したやうに、何時も暗い地下室で仕事をして居る。下足番と云ふ職業が持つて居る本來の風塵の上に、まだ暗い地下室で、一日中蠢めいて居る。勤務時間が、何う云ふ風であつたかは知らないが、讓吉が夜遅く歸る時でも、やつぱり同じく彼等が殘つて居たやうに思ふ。來る年も、來る年も、來る月も來る月も、毎日々々働人の下駄をいぢると云ふ、單調な生活を繰り返して行つたならば、何んな人間でもあの二人の爺のやうに、意地惡に無口に、利己的になるのは當然なことだと思つた。何時まで、あんな仕事をして居るのだらう。恐らく死ぬまで續くに違ひない。恐らく彼等が死んでも、入場者の二三人が、

「この頃あの下足番の顏が見えないな」と、懷かしげに思ふに止まるだらう。先きの短い年であり乍ら、殘り少い月日を、一日々々あした土の牢で暮さねばならぬ彼等に、讓吉は心から同情した。

圖書館の下足の爺何時迄か

下駄をいぢりて世を終るらん

これは、讓吉がいつだつたか、ノートの端にかき付けた歌だつた。もとより拙かつた。が、自分の心持、下足番の爺に對する同情的な心持丈は、出て居るやうに思つて居た。

あの爺も不相變居るに違ひないと思つた。まだ他の顏も、見忘れては居まいと思つた。高等學校時代に絕えず通つて居た上に、讓吉は彼等と一度いさかひをした事があつた。それは、何でも高等學校の二年の時だつたらう。

彼は、其の日何でも非常に汚い尻切れ草履をはいて居た。その頃、彼は下駄などは殆んど買つたことがなく、大抵は同室者の下駄をはき廻つたのだつたが、その日は日曜か何かで、皆が外出したので、はくべき下駄がなかつたのであらう。彼が、平素の通、その汚い草履を手に取つて大男の方へ差し出すと、彼はそれを受け取つて、直ぐ自分の足のもとに置いたまま、しばらく待つても下足札を呉れようとしなかつた。

「何うしたんだ？　札を呉れないか」と、讓吉は少しムッとしたので、荒つぽく云つた。

「いや判つて居ます」と、大男はいかにも、呑み込んだやうに、首を下げて見せた。

「君の方で判つて居ようが居まいが、札を呉れるのが規則だらう」

「いや間違へやしません。あなたの顏は知つて居ます」

「知つて居ようが、居まいが問題ぢやない。札を呉れたまへ。規則だらう」

「いくら規則でも、あんまりひどい草履ですからね」と、彼は煙管を、火鉢の緣にやけに叩いた。

「人を馬鹿にするな。何だと思ふんだ。幾ら汚くても履物は履物だぜ」讓吉は本當に憤慨して云つた。

「あなたの帽子が、何處の學校の帽子か位は知つて居る。が、何も札を上げなくたつて、問題はないと云ふんだから、いゝでせう」と、爺は

まだ頑固に抗辯した。讓吉は、自分の方に、十二分の理由があるのを信じたが、大男の足の直ぐ傍に、置かれて居る自分の草履を見ると、何うもその理由を正當に主張する勇氣までが、碎けがちであつた。下足に供へてある上草履のどれよりも、貧弱だつた。先方から借りる上草履よりも、わるい草履を預けながら、下足札を要求する權利は、本當から云へば存在しないのかも知れなかつた。

その時の喧嘩の結末が、何う着いたか、讓吉はもう忘れて居る。自分の方が勝つて下足札を貰つたやうにも思ふし、自分の方が負けて到頭下足札を貰へなかつたやうにも思へる。

が、兎に角あの事以來、あの大男の爺は自分の顏を、ハッキリと覺えて居るに違ひないと彼は思つた。無論、讓吉はさうした喧嘩をした爲に、あの男に對する同情を、少しも無くしはしなかつた。あゝした暗い生き甲斐のない生活を、あはれむ心は、少しも變つて居なかつた。

彼が、どんなに窮迫して居る時でも、圖書館へ行つて、彼等が昔しながらに、あの暗い地下室で、蠢めいて居るのを見ると、俺の生活がこの先どんなに迫行くのにはまだ間があると云ふやうな、妙な慰めを感ずると同時に、生涯日の目も見ずに、あの地下室で一生を送らねばならぬ彼等を、傷ましく思はずには居られなかつた。

あの二人は、やつぱり居るに違ひない。小さい火鉢にぶつりとも云はずに、くすんだ顏をして向ひ合つて居るに違ひない。あの生活から脫却する機會は死ぬまで彼等には來ないのだと讓吉は思つた。あの圖書館へ來る幾百幾千と云ふ青年が、多少の落伍者はあるとして、それ〴〵目的を達して、世の中へ打つて出るにも拘はらず、あの爺は永久に下足番をして居る。あの暗い地下室から、永久に選ひ出されずに居る。さう思ふと、讓吉は自分の心がだん〴〵暗くなつて行つた。二年前迄は、ニコ〳〵の絣を着て、穴のあいたセルの袴を着て、ニッケルの辨當箱を包んで、毎日のやうに通つて居た自分が、今では高貴織の揃か、何かを着て、この頃新調したラクダの外套を着て、金緣の眼鏡をかけて、一個の紳士と云つたやうなものになつて、下足を預ける。自分の顏を知つて居るかも知れないあの大男は、一體どんな氣持で自分の下駄を預るだらう。あの尻切草履を預けて、下足札を貰へなかつた自分と、今の自分とは夢のやうにかけはなれて居る。あの草履の代りに、柾目の正しく通つた下駄を預けることが出來るが、預る人はやつぱり同じ大男の爺だ。さう思ふと、讓吉はあの男に、心からすまないやうに思はれた。何うか、自分を忘れてしまつて居て呉れ、自分がすまなく思つて居るやうな氣持が、先方の胸に起らないで呉れと讓吉は願つた。

そんな事を思ひながら、何時の間にか、美術學校に添うて、圖書館の白い建物の前に來て居た。左手に婦人閱覽室の出來て居るのが、日新しい丈で、門の石柱も玄關の樣子も、閱覽券賣場の樣子も少しも變つては居なかつた。彼は閱覽券賣場の窓口に、近づいて十錢札を出しながら、

「特別一枚！」と、云つた。すると、思ひがけなく、

「やあ長い間、來ませんでしたね」と、中から挨拶した。讓吉は驚いて、相手を凝視した。それはまぎれもなくあの爺だつた。あの下足の爺だつた。

「あゝ君か！」と、讓吉も少しあわてゝ頓狂な聲を出した。向うはその太い眉をちよつと微笑するやうな形に動かしたが、何も云はずに青い

切符と、五錢白銅とを出した。

讃吉は、何とも云へない嬉しい心持がしながら、下足の方へと下つた。死ぬまで、下足をいちつて居なければなるまいと思つたあの男が、立派に出世をして居る。それは、判任官が高等官になり勅任官になるよりも、もつと仕甲斐のある出世かも知れなかつた。獄か何かのやうに、年百年中薄闇にうごめいて居るのとは違つて、蒲團の上に坐り込んで、小綺麗な切符を扱つて居ればいゝ。月給の昇級はホンの僅かでも、あの男に取つては、どれほど嬉しいか判らない。あんなに無愛想であつた男が、向うから肇をかけたことを考へても、あの境遇に充分滿足して居るに違ひないと思つた。人生のどんな隅にも、何んなつまらなさうな境遇にも、やつぱり望みはあるのだ。さう思ふと讃吉は世の中と云ふものが、今迄考へて居たほど暗い陰慘な所ではないやうに思はれた。彼は平素よりも、晴々とした心持になつて居る自分を見出した。

が、それにしても、もう一人の禿頭の小男は、どうしたらうと思つて注意して見ると、その男もやつぱり下足には居なかつた。無論、圖書館の中でなくてもいゝが、あの男も世の中のどこかで、あの男相當の出世をして居てくれゝばいゝと、讃吉は思つた。

蘭學事始

一

杉田玄白が、浜大横の中邸を出て、本石町三丁目の長崎屋源右衛門方へ着いたのは、巳刻を少し廻つたばかりだつた。

が、顔馴染の番頭に案内されて、通辭西善三郎の部屋へ通つて見ると、昨日と同じやうに、良澤はもうとつくに來たと見え、悠然と坐り込んで居た。

玄白は、善三郎に挨拶を濟すと、良澤の方を振向きながら、

「お早う！　昨日は、失禮致し申した」と、挨拶した。

が、良澤は、光澤のいゝ總髮の頭を、輕く下げた丈で、その白皙な鼻の隆い、薄菊石のある大きい顔を、ニコリともさせなかつた。

玄白は、無度のことだつたが、一寸嫌な氣がした。

彼は、中津侯の醫官である前野良澤の名は、獨てから知つて居た。そして、その篤學の評判に對しても、可なりな敬意を拂つて居た。が、親しく會つて見ると、不思議に、此の人に親しめなかつた。

彼は今迄に五六度も、玆で良澤と一座した。去年加比丹が、此の客館に逗留して居た時にも、二度ばかり落合つたことがある。今年も月の廿日に加比丹が、江戸に着いてから、今日で七日にもなる間、玄白は三四度も、良澤と一座した。

それで居て、彼はどうにも此の人に親しめなかつた。それかと云つて、彼は良澤を嫌つて居るのでもなかつた。たゞ、一座する度に、彼は良澤から、妙な感じを感じた。彼は、良澤と一座して居ると、良澤が居ると云ふ意識が、彼の神經にこびり付いて離れなかつた。良澤の一擧一動が氣になつた。彼の一顰一笑が氣になつた。彼が、氣にしまいとすればするほど、氣になつて仕方がなかつた。

それだのに、相手の良澤が、自分のことなどは、殆ど眼中に置いて居ないやうな態度を見ると、玄白は良澤に對する心持を、愈々こじらせてしまはずには居られなかつた。

長崎表での驛館への出入は、常法があつて、可なり嚴しく取締られて居たが、加比丹が、江戸に逗留中の旅宿である、此の長崎屋への出入は、暫くの間の事として、自然何の構もなき委であつた。

從つて、和蘭陀流の醫術、本草、物產、究理の學問に志ある者を、私、好事の旅本宿向の輩までが毎日のやうに、押しかけて居た。

殊に御醫師の、野呂玄丈や、山形侯の醫官安富寄碩、同藩の中川淳庵、藤前の札差で、好事の名を取つた青野長兵衛、讃岐侯の浪人平賀源内、御坊主の細井其庵、御儒者の大久保水湖などの顔が見えぬことは、稀だつた。

さうした一座は、寧東ない内通辭を通じて、加比丹にいろ〳〵な質問をした。それが、大抵は阿蘭陀の異風異俗に就ての、たわいもない愚問であることが多かつた。加比丹の答に依つて、それが愚問であることが分ると、皆は腹を抱へて笑つた。

また、ウエールガラス（晴雨計）や、テルモメートル（寒暖計）や、ドンドルガラス（電雷驗器）などを、見せられると、彼等は、子供が珍らしい玩具にでも、接したやうに欣んで騒いだ。

が、こんな時、一座を冷然と見下すやうに坐つて居るのは良澤だつた。彼は、みんなが發するやうな問は、決して發しなかつた。彼は、初から終まで、冷笑とも微笑とも付かない薄笑ひを、唇の端に浮べながら默つて聽いて居た。

一座が、たわいもなく笑つても、彼のしつかりと、閉された口は、容易にほころびなかつた。

が、ある問題で、一座が問ひ疲れて、自然に靜かになつた頃に、良澤は定まつて、一つ二つ問ひ質した。一座の者には、その質問の意味が、分らないことさへ多かつた。が、加比丹が、通辭から、その質問を受取ると、彼はいつも、駭いたやうに、目を刮りながら、急に眞面目な態度になつて、長々と答へるのが常だつた。

一座の者は、良澤のさうした——彼一人高しとして居るやうな態度を、少しも氣に止めて居ないらしかつたが、玄白丈はそれが、妙に氣になつて仕方がなかつた。

つい、昨日もこんな事があつた。それは云つて見れば、何でもないことだが、加比丹のカランスが、座興の爲だつたのだらう、小さい袋を取り出して、皆に示した。通辭は、加比丹の意を受けて、こんなことを云つた。

「カランス殿の云はれるには、此の袋の口を、試みに開けて御覽じませ。見事明けた方に此の袋を進ぜられるとあるのぢや」

カランスは、一面に髯の生えた顔の相好を崩して、ニコ〳〵笑つて居た。

一座は、可なり打ち興じた。一番に、細井其庵が、手に取り上げた。が、性急な彼は、暫らくいぢつて居たかと思ふと、直ぐ投げ出してしまつた。

「どれ〳〵拙者が」と、安富寄碩が、仔細らしく取上げたが、これも暫らく考へて居たかと思ふと、思案に餘つて投げ出してしまつた。その袋は、一座の者の手から手へ渡つた。一人一人失敗する毎に、一座は聲高く笑つた。カランスは皆が開けかねて居るのを、嬉しさうに、ニコ〳〵見て居た。

玄白の手許に來たとき、彼もニコ〳〵笑ひながら取り上げた。袋の口には、金具が付いて居た。それは、恐らく智慧の輪の仕掛になつて居たのだらう。玄白は、所々を押したり引いたりして見たが、口は一分も開かなかつた。

彼は、到頭持て餘した。彼は、苦笑しながら、それを次ぎの者に讓らうとした。がその時に、一座の者は、大抵それを試みて居た。たゞ玄白の右手に、坐つて居る良澤丈には、彼が餘り纔然と控へて居るために、誰もがそれを手渡し兼て居た。

「前野氏、如何で御座る？」

玄白は、氣輕にそれを良澤に、手渡さうとした。が、良澤は、冷然として、それを受取らうとはしなかつた。彼は、恐らく一座の者が、つまらない玩び物で、打ち興じて居ることが、餘りに苦々しく思はれたのだらう。否、士大夫ともあるべきものが、つまらない玩び物で、加比丹から弄よく飜弄されて居ることを苦々しく思つたのだらう。彼は、玄白が差し出したその袋を、見向かうともしなかつた。

その袋は、玄白と良澤との中間に、置かれたまゝ、一座は一寸白けかゝつて居た。

が、丁度その時、折よく平賀源内が、遲れては入つて來た。彼は、その袋の事を、一座の者から聽くと、それを無造作に、取上げたかと思ふと、忽ち口を開けてしまつた。

一座は、源内の奇才を賞する聲で、充ち滿ちた。彼の奇才は、一座の白けかゝるのを救つたのである。

が、玄白の良澤に對する、意地とも反感とも付かぬ物は、彼の心の中で、此時からだん〳〵判然とした形を、取りかけて居た。

玄白は、良澤が一座に居ると、心に思ひ浮ぶ質問の半分も、口に出すことが、出來なかつた。良澤には、自分の訊いて居ることが、もうとつくに解つては居はしないかなどと思ふと、質問をすることが、良澤の前で、自分の無智を告白して居るやうで、何うにも氣が進まなかつた。玄白は、さうした外聞とか見得とか云つたやうな心持を、心の裡で可なり恥ぢて居た。が、恥ぢながらも、それに拘泥らずには居られなかつた。彼は、阿蘭陀の事物、學術殊に醫術に對する知識慾に渴ゑながら、妙な意地から、心のまゝに、質問することが出來なかつた。

その日も、彼は皆が來ない前、特に良澤の來ない前に、自分一人で、善三郎に會ひたかつたのである。彼は阿蘭陀文字を讀まうと云ふ自分の豫てからの宿願を遂べて、その志願の可能不可能を、善三郎に質して見たかつたのである。

そのために、昨日よりは半刻も早く來た玄白には、良澤が自分よりも早く來て居たことが、可なりの打擊だつた。

が、彼は、良澤に介意ひすぎる自分の心持を恥ぢた。彼は、良澤たゞ一人しか居ないのを幸ひに、自分の素志を遂べて見た。

「西氏！　今日は、ちと御邊に折入つてお訊ねしようと思ふことが御座るのぢや、それは餘の儀では御座らぬ。總體、阿蘭陀の文字と申すものは、われら異國の者にも、讀めるもので御座らうか。それとも、いかほど刻苦いたしても讀めないもので御座らうか。有樣にお答へ下されい。われら存ずる仔細も御座るほどに」

玄白の問には、眞摯な氣が、充ちて居た。西は玄白の熱心を嘉みするやうに、二三度肯いた。が、彼の與へた答は否定的だつた。彼は、西海の人に特有な快活な調子で答へた。

「さればさ。それは、三四の方々からも訊ねられた事で御座る。なれど、われら答へ申すには、たゞ御無用になされと申す外は御座らぬ。いかほど、辛勞なされても、所詮及ばぬことで御座る。有樣を申せば、われら通辭の者にても、阿蘭陀の文字を心得居るものは、われら一兩人の外は、とんと御座らぬ。餘の者は、番ばかりを假名で書き留め、口づから記憶じ申して、折々の御用を辨じ居るので御座る。彼の國の言葉を、一々に理會いたさうなどは、われら異國人には、所詮及ばぬことで御座る。例へて申さうなら、彼の國の加比丹又はマダロスなどに、湯水又は酒を呑むを何と申すかと、訊ね申すには、最初は手眞似にて問ふ外は、御座らぬ。茶碗などを持ち添へ、注ぐ眞似を致し、口に付けて、これはと問へば、デリンキと教へ申す。デリンキは、呑むことと承知いたす。茲までは、仔細御座らぬ。なれど、今一足進み申して、上戸と下戸との區別を、問はうには、ハタと當惑いたし申す。手眞似にて問ふべき仕方は御座らぬ。屢々、呑む眞似をいたして、上戸の體を示し申しても、相手にはとんと通じ申さぬ。さればぢや、多く呑みても、酒を好まざる人あり、少く呑みても、好む人あり、形丈にては上戸下戸の區別は、とんと付き申さぬ。かやうに、情の上のことは、いかやうに手眞似を盡くしても、問ふべき仕方は御座らぬ」

「なるほどな。御尤もで御座る」

玄白も、相手の返事の道理を、肯かずには居られなかつた。

玄白が、首肯するのを見ると、西はやゝ得意に語りつゞけた。

「阿蘭陀の言葉の、むつかしき例には、かやうな事も御座る。アーンテレッケンと申す言葉が御座る。好き嗜むと云ふ言葉で御座るが、われら、通辭の家に生れ、幼少の折より、この言葉を覺え、幾度となく使ひ申したが、その言葉の意は、一向悟り申さなんだところ、年五十に及ん

で、此度の道中にて、やつと會得いたして御座る。アーンは、元と云ふ意で御座る。テレヲケンとは、引くと云ふ意で御座る。アーンテレヲケンとは、向うのものを手元へ、引きたいと思ふ意で御座る。酒を好むとは、酒を手元へ引きたいと云ふ意で御座る。故郷をアーンテレヲケンするとは、故郷を手元へ引き寄せたいほど、懐しむと云ふ意で御座る。斯樣に、一つの言葉にても、むつかしきものに御座れば、われらの如き、幼少より阿蘭陀人に朝夕いたし居る者にても、なか〳〵會得いたし兼て御座る。況んや、江戸などに御座しては、所詮叶はぬことで御座る。御存じでも御座らう。野呂玄丈殿、青木文藏殿など、御用にて、年々當旅宿へ、お越しなされ、一方ならず御出精なされても、はかばかしう御合點も參らぬやうで御座る。其許も、さ樣な思召立は、必ず御無用になされた方が、よろしからう」

西は、自分自身も、とつくに諦め切つて居るやうに云つた。

「なるほど。道理で御座る」

玄白も、さう答へる外はなかつた。相手が切に止めるものを、强ひて學習の方法などを訊く譯にも行かなかつた。

「なるほど。大通辭の御邊が、左樣に思うて居らるゝことを、われらが如何やうに思ひ立つても、及ばぬことで御座る。所詮は、思ひ切る外は御座らぬ」

玄白が、何氣なくさう云つた時だつた。今まで默つて、西と玄白との問答を聽いて居た良澤が、急に口を挾んだ。

「いや、御兩所のお言葉では御座るが、われらの存ずる仔細は別ぢや。凡そ、紅毛人とは申せ、同じ人間の作つた文字書籍が、同じ人間に會得出來ぬと云ふ道理は、更々御座らぬわ。われらが、平生讀み書きいたし居る漢字漢語も、又われら士大夫が、實踐いたし居る孔孟の教も、傳來の初には、只今の阿蘭陀のか字同樣一切不通のものであつたに相違御座らぬわ。それを、われらの遣つ組どもが、刻苦いたして、一語半語づつ理會いたして參つたに相違御座らぬ。遣つ組どもの苦心があればこそ、二千年この方、幾百億の人々が、その餘澤に潤うて御座るのぢや。良澤の志は、其處で御座る。われらは、此後に來る者のために、肝心鏤骨の苦しみも、厭ひ申さぬ覺悟で御座る。杉田氏も、お志を お捨てなされいで、お始めなされい。われらは、今年四十九で御座るが、倒れるまで、努めて見る積で御座る」

玄白は、良澤の志を聽いて心から、恥ぢずには居られなかつた。その雄渾な志を聽いて、心から恥ぢずには居られなかつた。彼は、之れを自分に對する有難い忠言だと思はずには居られなかつた。が、彼は餘りに觸れられたくない急所に、相手が虫突に觸れて來たことに、可なりな不快を感ぜずには居られなかつた。此方が、半分は挨拶旁々、云つて居ることに、何の容赦もなく眞劍に向つて來た相手に、ある不快を感ぜずには居られなかつたのである。

二

玄白が、蘭書ターヘルアナトミアを手に入れたのは、それから五日とは經たない頃だつた。

玄白の志は、元來阿蘭陀流の醫術に在つた。彼が蘭語を學びたく思つたのも、それに依つて療術方藥に關する蘭書を讀破したい爲であつた。

從つて、彼はターヘルアナトミアを、ある內通辭から示されると、彼は驚喜の眼を刮らずには居られなかつた。濃い赤と青とで、彩られた臟腑骨節の、精巧な繪畫を見ると、彼は其處に人體に就いての凡ての秘奧が、解き明されて

あるやうに思はれた。その繪畫と繪圖との間に走しつて居る、模樣の樣な阿蘭陀の文字は、一字も半字も、讀めなかつたけれども、彼の心は烈しい好奇と感激とに充たされずには居なかつた。

彼は、心の底からそれに垂涎した。價は、二十五人扶持の彼に取つては、力に餘る三兩と云ふ大金だつた。が、彼は前後の思慮もなかつた。懷中して居た一朱銀を、手金として、その通辭に渡すと、彼は金策のために、濱邸へ走せ歸つた。

彼が、驅け付けて行つたのは、家老岡新左衞門の邸であつた。岡は、聊てから玄白に好意を持つて居た。彼に玄白の懇願を聽くと、

「それは求めて置いて、用立つものか。用立つものならば、價は上より下し置かれるやう、取計つて得させよう」と、云つた。

さう答へられると、玄白も感謝した。

「されば、必ずかうと云ふ日當は御座りませねども、是非とも用立つものにして、お目に掛けるで御座らう」と、警はずには居られなかつた。

丁度、座に小倉左衞門と云ふ男が、居合はした。

「それは、何卒調へて遣はされたい。杉田氏はそれを空しくする人では御座るまい」と、助言して呉れた。

ターヘルアナトミアを、自分のものにした玄白は、雀躍して欣んだ。

三

三月三日の事であつた。玄白は、その日も長崎屋へ出向いて居た。將軍家の阿蘭陀人御覽が、明日、滯りなく終つたので、加比丹を初、二人の書記役、大小の通辭達も、みなのび〳〵とした氣持になつて居たので、會談が何時になく賑つた。到頭、おしまひに加比丹が、珍酡と云ふ珍らしい酒を出して、皆を饗應つた。

その日は、良澤の顚が見えない外、一座の者は、中川淳庵、小杉玄適、嶺春泰、鳥山松圓など、皆醫師ばかりであつたので、到話は多岐に彌らずして、緊張して居た。殊に、書記役の一人のパブルは、外科の巧者であつたので、皆はパブルを圍んで、貪るやうに、いろ〳〵な質問を發して居た。

殊に、嶺春泰は、刺絡の術を、熱心に訊いて居た。

春の永い日が暮れて、阿蘭陀人達が、食事のために、退いたとき、皆は緊張した對話から、ホッとして我に歸つて居た。彼等が、急いで歸り支度にかゝつて居る時だつた。中川淳庵の私宅から、小者が赤紙の附いた文箱を持つて、驅け付けて來た。

淳庵は、その至急を示した文箱を、一寸不安な顏付で、取り上げたが、中の書狀を讀んで居る裡に、彼の不安な顏は、欣びで崩れてしまつた。

「諸君！　お欣びなされい！　かねての宿願が、叶ひ申したぞ。明日、骨ケ原で腑分がある！　腑分がある！」

彼は、歡悅の聲を揚げながら、一座の者にその書狀を差し示した。それは、いかにも町奉行曲淵甲斐守の家士得能萬兵衞から、明四日千住骨ケ原にて、手醫師何某が、腑分をすることを、內報して來た書狀だつた。

「腑分が！　腑分が！」

皆は、口々に欣びの聲を出した。

淳庵、玄適、玄白など、阿蘭陀流の醫術に志すものに取つては、觀臟は年來の宿願だつた。が、その機會は容易に得られなかつたのだ。

殊に、彼等は今日此頃、パブルから、身體內景の有樣を、新しく聞いて居たので、腑分に到する宿望は、更に油を注がれたやうに、燃えて居た。

殊に、玄白は賄分と聽くと、自分の心が、飛揚するのを抑へることが、出來なかつた。彼は、ターヘルアナトミアを手にして以來、賄分の日を、一日千秋の思で待つて居た。彼は、ターヘルアナトミアの繪圖が、古人の諸說と悉く違つて居るのを知つて居た。彼は、それを實地に照して、一日も早く確めたかつたのである。

一座の人々の顏は、欣びに輝いて居た。

「それでは、今夜は直ちに歸宅して休息いたし、明日早天に、山谷町出口の茶屋で待ち合はすことにいたさう」

淨庵は、座中を見廻して云つた。一座は、直ぐそれに同意した。

その時に、玄白の頭の中に、ふと良澤の顏が浮んだ。彼は、良澤がやはり、觀臟の希望の切なことを知つて居た。一座の誰にも、劣らないほど、切なのを知つて居た。諚令、良澤が、この席に居合はさずとも、明日の一擧に洩すべき人でないことを、感じて居た。

が、彼は良澤の名を、氣輕に口にすることが出來なかつた。良澤に對する輕い反感のために、たやすく口にする事が出來なかつた。その上、彼の心の一隅には、日頃一座に對して嵩飛車な、見下したやうな態度を取つて居る良澤が、大切な企に洩れることを、いゝ見せしめだと思ふ心が、かすかではあるが動いて居た。

それに、誰もが良澤のことに、氣が付いて居ない以上、自分が特に注意するにも、當らないと思つて居た。

が、一座がその儘に、立ち上りさうになると、玄白の心は、だん〳〵苦しくなつて居た。輕い苛責が彼の心を鞭打つた。彼は、良澤に對する自分の態度の卑しさに、氣づかずには居られなかつた。

彼は、到頭默つては居られなかつた。

「前野氏が居る！　前野氏が居る！　前野氏へも、何とかいたして知らせたいもので御座る」

さう云つたとき、玄白は自分自身、救はれたやうな明るい氣持になつた。

「おゝ前野氏が居る！　前野氏へは、是非一報いたさで失念致して居た。前野氏へは、是非一報いたさいで叶はぬ事ぢや」

玄適が、直ぐそれに應じた。が、他の者は強て、氣が乘つて居るやうでもなかつた。淨庵は、云ひ澤のやうに云つた。

「前野氏にも、知らせたうは御座るが、前野氏の麹町の住居までは、餘程の道程で御座る。もう初更も過ぎて居るほどに、知らすべき便は御座らぬ。前野氏には、また此夫の機も御座らう」

玄白は、もう默つて居ようかと思つた。自分の心持丈は、これで濟んで居る。前野を、是非とも、明日の企に與らせねばならぬほどの、義理も責任もないと思つて居たが、彼は自分の心の底に、良澤の來ないことを、欣ぶやうな心が、潛んで居ることに氣付いて居る丈に、そのまゝ默つて居るのが、疚しかつた。

「いや、知らすべき便がないとは、限り申さぬ。本石町の木戸際には、定めし辻籠が居ることで御座らう。手紙を認へ、辻籠の者に置捨に致さすれば、念がとどかぬことは御座るまい」

玄白の考は、時に取つての名案だつた。

「それは、天晴のお心付きぢや」

一座の者は、皆それに贊成した。玄適が、直ぐ手紙を書きにかゝつた。

玄白は、自分で良澤を呼びながら、一方それを悔いて居るやうな心持が、動いて居ないこともなかつた。が、ふと自分の持つて居るターヘルアナトミアのことを考へると、また別な心持が動いた。彼は、その珍書を、皆の前で、披露するときの、得意な心持を考へた。暮に、良澤の前で――いつも、それとなく感服されて居るやうに思ふ良澤の前で、ターヘルアナトミア

を聞いて見せる自分の心持を考へて見た。

彼は、やつぱり良澤を呼んでいゝ事をしたと思つた。

四

三月四日の朝、玄白は寅の二つに近い頃、新大橋の藩邸を出て、淺草橋から藏前を通つて、廣小路に出て、馬道から山谷町の出口の茶屋に着いたのは、春の引き明けの薄紫の空に、淺草寺の明六つの鐘が、かう〳〵と鳴り渡つて居る頃であつた。

茶屋の座敷に上つて見ると、もう玄適と良澤とが、朝寒の部屋に、火鉢を圍ひながら向ひ合つて居た。

麹町半河町に住んで居る良澤が、自分より先きへ來て居るのを見ると、玄白は心中少からず、驚かずには居られなかつた。

良澤は、玄白が入つて來るのを見ると、何時になく丁寧に會釋した。

「杉田氏！　昨夜は、貴所の肝煎で、使を下さつたさうで、有難く存じ居る。お陰で、拙者も斯樣な、會ひがたき企に與り申して、大慶に存じ居る所で御座る」

さう、眞正面から感謝されると、玄白は自分の今迄の、良澤に對する心持を、心の裡でや や恥しく思はずには居られなかつた。

玄適が、横から口を挾んだ。

「杉田氏！　前野氏は、昨夜から、一睡もなされないさうで御座る。使の者が參つたのが、子に近い頃で、お宅を出られたのが、丑二つ頃ぢやと申す。その間も、今日の企てのことを思はれると、心が躍るやうで、一睡もされなんださうで御座る」

玄白は、良澤の執心が、自分以上に、然しいことを知ると、どんな點でも、良澤には及ばないと云つたやうな、寂しさを感ぜずには居られなかつた。

が、さうした寂しさも、自分が懷中して居るターヘルアナトミアのことを、考へると、直ぐ慰められた。今日の參會に、此の珍書を持つて居る者は、自分一人だと思ふと、良澤に對するさうした寂しさも直ぐ消えてしまつた。

その裡に淨庵が見えた。小半刻ばかり經つた頃に、春泰と良圓とが、連れ立つてやつて來た。六人の顏が揃ふと、打ち連れ立つて骨ケ原に向つた。

春の早朝の微風に颯を吹かせながら、六人は興奮してよく喋べつた。六人とも、中年を越した者ばかりであつたけれども、彼等の心持は、期待のために、躍つて居た。六人の歩調が、何時の間にか、早くなつて居た。小男の淨庵が、ともすれば、遅れ勝であつた。

玄白は、いつターヘルアナトミアを、取り出して、皆に披露しようかと思つて居た。彼は、先刻山谷町の茶屋で、披露しようと思ひながら、ついその時機を得なかつた。

骨ケ原の刑場に近づくと、街道に面した鼠木の上に、刑死して間もないやうな老婆の首が、かけられて居た。その胴體が、今日賄分けせられるのだと氣が付くと、六人は一寸不快な感じを懷かずには居られなかつた。

非人頭が、六人を刑場の入口にある與力詰所へ案内した。賄分けの準備が整ふまで、六人は其處で、待たなければならぬのだつた。

玄白は、今ここで、と思ひながら、懷中のターヘルアナトミアに手をかけようとした。

が、それと同時に、良澤が思ひ出したやうに、右の手に持つて居た風呂敷包みを、解きながら云つた。

「左樣！　左樣！　各々方に、御披露するものが、御座つた。先年長崎へ參つた折、求め歸つて家藏いたし居る、河圖陀佛說の書で御座るが」

さう云ひながら、彼は風呂敷包みの中から、取り出した一本を、皆の前に指し示した。

玄適が、好奇の眼を輝かしながら、それを受取つた。五人の眼が、一齊にそれに注がれた。が、玄白は一目見ると、自分の眼を疑はずには居られなかつた。それは、自分が懐中して居る、ターヘルアナトミアと、寸分違はぬ同版同刷の書であつた。

彼は、茫然として、語がなかつた。良澤に對して、主張し得ると思つて居た彼が、最後の據りどころは、脆くも蹂み躙られてしまつたのであつた。が、玄白は、懐中して居る自分の本を出さない譯にも行かなかつた。

「前野氏は、豫てから御所持で御座つたか。實は、拙者もこのほど、一本を求め申して御座る」

玄白は何氣ないやうに、披露した。が、彼が昨夜から、樂しみにして居た披露する折の得意さ、嘲がましさなどは、露塵も感じられなかつた。

韮を噛むやうな氣持であつた。

が、良澤は、それを見ると、心から驚いたらしかつた。彼は玄白の差し出した本を取り上げながら、表紙や扉を打ち返して見た。

「これは紛ぎれもなく同本ぢや。不思議な奇遇で御座る。奇遇で御座る」

さう云ひながら、良澤は幾度も手を拍つた。良澤の態度は、天空の如く開濶だつた。

「貴所と、某とが期せずして、ターヘルアナトミアを所持いたし居るなど、これは阿蘭陀醫術が、開くべき吉瑞とも申すべきで御座る」

良澤は、さう語をつゞけて哄笑した。彼は、書中の一圖を玄白に指し示しながら云つた。

「御覽なされい！　これが、ロングと申し肺で御座る。これがハルトと申し心で御座る。これはマーグと申し胃で御座る。これは、ミルトと申し脾で御座る。醫經に申す、五臟六腑、肺の六葉、兩耳肝の左三葉、右四葉などの說とは、似ても似ぬことで御座る。今日こそ、漢說が正しいか、阿蘭陀の繪圖が正しいか、試すべき時期で御座る」

良澤の顏は、究理に對する興奮で輝いて居た。玄白も、良澤の高朗な熱烈な氣持に接して居ると、自分の心の裡の妙なこだはりなどは、何時の間にか忘れて居た。

五

やがて、六人は打ち連れて、觀臟の場所へ行つた。

刑場の一部に、席を以て、粗末な假小屋が、設けられて居た。手醫師の何某が、三人の、二人の與力と一緒に待つて居た。

死體は案の如く、首丈は臺木の上に、かけられて居る老婆のそれであつた。老婆は青茶婆と云つて、幾人となく貫ひ子を殺した大罪の女であつた。若い時、艷名を歌はれたと云はれる丈に、五十を越して居ると云ふにも拘はらず、白い肥肉の身體には、まだ少しの皺も見えなかつた。

刀を執る者は、處松と云ふ九十に近いだつた。刑死人の死體の脂肪が、にじみ出て居るのではあるまいかと思はれるやうな、赤黑い皮膚をした健やかな老人であつた。

彼は、若い時から、腑分けは幾度も手にかけ、數人を解いたことがあると自慢をした。

究理のために、勇み立つて居る六人ではあつたけれども、その首のない、生白い無恰好な死體を見たときに、皆は思はず、眉を皆けずには居られなかつた。眼や鼻から受ける醜惡な感じで、六人の胸は閉された。が、良澤も淳庵も、玄白も、必死な色を消して、さうした感じに堪へて居た。

老人の遺多は、廢ぎすました出刃を、逆手に持つと、獸の肉をでも亂くやうに、死體の胸を、

つぶ〳〵と切り開いて行つた。まだ首が離れてから、半刻と經つて居ない死體からは、出刃の切先の進むに連れて、かたまりかけて居る血が、とろ〳〵と溢じみ出た。

胸が、第一に切り割かれた。良澤も玄白も、ターヘルアナトミアの胸の繪圖を開きながら、眞赤に開かれて行く死體の胸と、一心に見比べてゐた。

それが、良澤と玄白とに取つて、何と云ふ不思議であつたらう。出刃の切先に切られて行く骨の一つも、筋の一つも、肉の間に網の如く走しつて居る白い奇怪な線條も、白く浮き上つて居る脂肪も、びろ〳〵と胸膈一杯に、氣味惡く擴がつて居る肺も、左肺の下から窺いて居る、眞赤な桃の實の如き心の臟も、ターヘルアナトミアの繪圖と、一分一點の違もなかつた。

良澤も玄白も、他の四人も深い感嘆のために、聲も出なかつた。

續いて、腹が剖かれた。そこに見出された胃、奇怪な形に蹲踞つて居る腸、腸胃の陰にかくれた名も知らぬ臟腑まで阿蘭陀圖と、寸分の違もなかつた。

老屠が、出刃を持つ手を止めると、良澤は初て、我に歸つたやうに叫んだ。

「至極ぢや。至極ぢや。醫書の繪圖と、寸分の違も御座らぬ。和漢千載の諸說は、みな取るに足らぬ妄說と、定まり申した。醫術はもはや阿蘭陀に止めを刺し申した」

「至極ぢや。至極ぢや！」

皆は、良澤の感激に聲を合はせた。

刑場からの歸途、春泰と良圓とは、一足遲れたため、良澤と玄適と、玄白の四人連であつた。四人は、同じ感激に浸つて居た。それは、多妙不思議な阿蘭陀の醫術に對する讃嘆の心であつた。

刑場から、六七町の間、皆は默々として銘々自分自身の感慨に浸つて居たが、淺草田圃に差しかゝると、淳庵が感に堪へたやうに云つた。

「今日の實驗、たゞ〳〵驚き入るの外はないことで御座る。かほどの事を、これまで、心付かずに、打ち過したかと思へば、此上もなき恥辱に存ずる。われ〳〵醫を以て、主君々々に仕へるものが、その術の基本とも申すべき、人體の眞形をも心得ず、今日まで一日々々と、その業を務め申したかと思へば、面目もないことで御座る。何とぞ、今日の實驗に基づき、大凡にも身體の眞理を辨へて、醫をいたせば、醫を以て天地間に身を立つる申譯にもなることで御座る」

良澤も玄白も淳庵も、玄適の述懷に同感せずには居られなかつた。玄白は、その後を承けて云つた。

「いかにも、尤もの事せぢや、それに付けても拙者は、如何にも致して、このターヘルアナトミアの一卷を、翻譯いたしたいものぢやと存ずる。これだに、翻譯いたし申せば、身體內外のこと、分明を得て、今日以後療治の上にも、大益あることゝ存ずる」

良澤も、心から打ち解けて居た。

「いや、杉田氏の仰せ、ずもで御座る。實は、拙者も年來蘭書讀みたき宿願で御座つたが、丈を同うする良友もなく、慨き思ふのみにて、日を過して御座る。もし、各々方が、志を合はせ下されば、何よりの幸ひぢや。幸ひ、先年長崎留學の砌、醫語少々は記憶いたして御座るほどに、それを種と致し、共々此のターヘルアナトミアを、讀みかゝらうでは御座らぬか」と、云つた。

玄白も、淳庵も、玄適も、手を拍つてそれに同じた。彼等は、異常な感激で結び合はされた。

「然らば、善はいそげと申す。明日より拙宅へ

お越しなされい！」

良澤は、その巨きい眼を輝しながら云つた。

六

約の如く、その翌日を初とし、四人は平河町の良澤の家に、月五六回づつ相會した。

良澤を除いた三人は、阿蘭陀文字の二十五字さへ、最初は定かには覺えて居なかつた。

良澤は、三人の人々に、蘭語の手ほどきをした。彼は、迫に長崎へ留學したことがある丈に、多少の蘭語と、章句語脈のことも、少しは心得て居たけれども、それも殆ど云ふに足りなかつた。一月ばかり經つと、良澤が三人に教へることは、もう何も殘つて居なかつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は初めて、ターヘルアナトミアの書に向つた。

が、開卷第一の頁から、たゞ茫洋として、艪なき船の大洋に乘出せしが如く、何處から手の付けやうもなく、あきれにあきれて居る外はなかつた。

が、二三枚めくつた所に、仰けに伏した人體全象の圖があつた。彼等は考へた。人體内景のことは知りがたいが、表部、外象のことは、その名所も一々知つて居ることであるから、圖に於ける符號と說の中の符號とを、合せ考へることが一番取付き易いことだと思つた。

彼等は、眉、口、脣、耳、腹、股、踵などに附いて居る符號を、文章の中に探した。そして、眉、口、脣などの言葉を、一つ〳〵覺えて行つた。

が、さうした單語丈は、分つても前後の文句は、彼等の乏しい力で、一向に解し難た。一句一章を、春の長き一日、考へあかしても、彷彿として明らめられないことが屢々あつた。四人が、二日の間、考へぬいて、やつと解いたのは「眉トハ目ノ上ニ生ジタル毛ナリ」と云ふ一句だつたりした。四人は、そのたわいもない文句に哄笑しながらも、銘々嬉し涙が眼の裡に、浸んで來るのを感ぜずには居られなかつた。

眉から目と下つて、鼻の所へ來たときに、四人は、鼻とはフルヘッヘンドせしものなりと云ふ一句に、突き當つてしまつて居た。

無論、完全な辭書はなかつた。たゞ、良澤が、長崎から持ち歸つた小册に、フルヘッヘンドの譯註があつた。それは、「木の枝を斷ちたる迹、その迹フルヘッヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土聚りて、フルヘッヘンドをなす」と云ふ文句だつた。

四人は、その譯註を、引き合はしても、容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド！　フルヘッヘンド！」

四人は、折々その言葉を、口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。四人は目を見合せたまゝ、一語も交へずに考へぬいた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。

「解せ申した。解せ申した。方々、斯樣で御座る。木の枝を斷り申したる迹、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、これも堆くなるで御座らう。されば、鼻は面中にありて、堆起するもので御座れば、フルヘッヘンドは、堆しと云ふことで御座らうぞ」と云つた。

四人は、手を拍つて欣びあつた。玄白の眼には涙が光つた。彼の欣びは、連城の玉を、獲るよりも勝つて居た。

が、神經などと云ふ言葉に至つては、一月考へ續けても解らなかつた。

彼等は最初、難解の言葉に接するごとに、丸に十文字を引いて印とした。それを、轉十文字と呼んで居た。初一年の間、どの頁にもどの頁にも、轉十文字が、無數に散花した。

が、彼等の先驅者としての勇猛精進は、凡て

を、征服せずには居なかつた。一ケ月六七會の定日を、怠りなく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈も、明かに、書中の轉十文字は、殘少くかき消されて居た。

先驅者としての苦闘は、やがて先驅者のみが知る欣びで酬はれて居た。語句の末が明になるに從つて、次第に蔗を嚙ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が彼等の心に浸み付いて居た。

彼等は、邦人未到の學問の沃土に、彼等のみ足を踏み入れ得る欣びで、會集の期日毎に、兒女子の祭見に行く心地にて、夜の明くるのを待ち兼ねるほどになつて居た。

七

玄白が、最初良澤に對して懷いて居た輕い反感などは、もう迹形もなかつた。彼は良澤の學人とその篤學に、心からなる尊敬を拂つて居た。

が、譯澤の業が、進んで行くのに從つて、玄白はだん〳〵自分の志と、良澤のそれとが、離れて居るのに氣が付いた。

玄白の志は、ターヘルアナトミアを、一日も早く飜譯して、治療の實用に立て、世の醫家の發明の種にすることだつた。彼は、心の裡に思つて居た。漢學が、日本へ傳來して大成するまでには、數代數十代の努力を要して居る。それと同じやうに、蘭學の大成も、數代を要するに違ないと思つて居た。彼は、さうした一代に期しがたい大業を志すよりも、一事一書に志を集めて、一代に成就することを期するに如かじと思つて居た。五色の絲の亂れしは、美しけれども、實用に供するには、赤とか黃とかの一色に決し、他は皆切り棄つるに如かずと思つて居た。

從つて、彼はターヘルアナトミアの譯に、餘念もなかつた。彼は、一日會して、解し得たところは、家に歸つて、直ちに譯した。

が、良澤の志は、遠大だつた。ターヘルアナトミアの如き、蘭學の大成に在つた。彼は、阿蘭陀語の書籍何にても讀破したきは、殆ど眼中になかつた。彼は、通達し、彼の書籍何にても讀破した悉くに、通達し、彼の書籍何にても讀破した大望を懷いて居た。

最初、一二年は、良澤と玄白との間に、何等意見の扞格もなかつた。が、彼等の力が進むに從つて、二人はいつも同じやうな口爭ひを續けて居た。

「此の所の文意はよく解り申した。いざ先きへ進まうでは御座らぬか」

玄白は、常に先きを急いで居た。が、良澤は、悠揚として落着いて居た。

「いや。お待ちなされい。文意は通じても、語義が通じ申さぬ。凡そ、語義が通じ申さいで、文意のみが通ずるは、當推量と申すもので御座る」

良澤は、頑として動かなかつた。

八

四年の月日は過ぎた。

玄白は、ターヘルアナトミアの譯を終へること、十二回に及んだ。が、篇中、未解の場所五ケ所、難解の場所十七ケ所あつた。玄白は、只管に上梓を急いだ。が、良澤は、未解難解の場所を、解するまではとて、上梓を肯んじなかつた。

良澤と玄白とは、それに就て幾度も論じ合つた。が、二人は幾何論じあつても、一致點を見出さなかつた。それは、二人の蘭學に對する態度の根本的な相違だつた。

玄白は、到頭自分一人の名前で、ターヘルアナトミアの譯たる解體新書を上梓する決心

をした。

が、遂に彼は良澤の名を無視する譯には行かなかつた。飜譯の筆記こそ、玄白の手に依つて行はれたものの、飜譯の功は、半ば良澤に歸すべきものだつたから。

玄白は、良澤を訪うて序文を懇願した。が、良澤は序文をも、次のやうに云つて斷つた。

「いや、拙者曾て、九州を遊歷いたした折、太宰府の天滿宮へ參詣いたした節、斯樣に申して、起誓したことが御座る。良澤が、蘭學に志を立て申したは、眞の道理を究めよう爲で、名聞利益の爲では、御座らぬゆゑ、この學問の成就するやう冥護を乘れたまへと、斯樣に祈り申したのぢや。この誓ひにも、背き申すゆゑ、序文の儀は平に、許させられい！」

それを、聽いた玄白は、寂しかつた。が、彼は自分の態度を卑下する氣には、少しもなれなかつた。彼は、良澤の態度を、尊敬した。が、それと同時に、彼は自分の態度を肯定せずには居られなかつた。

彼は、晩年醫學興隆の世に會つた時の手記に、自分の態度を、次のやうに主張した。

「翁は、元來疎漫にして不學なるゆゑ、可成り、に蘭記を飜譯しても、人のはやく理會し、曉解するの益あるやうになすべき力はなく、されども人に比しては、我本意も通じがたく、やむことなく拙陋を顧みずして、自ら書き綴れり。其中に精密の義もあるべしと思へるところも、僻しがたきところを、擧げ置けるのみ。譬へば、京へ上らんと思ふには、東海東山二道あるを知り、西へ〳〵と行けば、終には京へ上り付くと云ふ所を、第一とすべし。その道筋を敎へる迄なりと思へば、その荒增を唱へ出せしなり。首めて唱る時に當りては、なか〳〵後の譏りを恐るゝやうなる、碎々たる了簡にて企事は出來ぬものなり。くれ〳〵も大體に本づき、合點の行くところを譯せし迄なり。梵譯の四十二章、經も、漸く今の一切經に及べり。之が、翁が、その頃よりの宿志にして企望せし所なり。世に良澤と云ふ人なくば此道開くべからず。されど翁の如き、素意大略の人なければ、此道かく遠かに開くべからず、是もまた天助なるべし」

入れ札

上州岩鼻の代官を斬り殺した國定忠次一家の者は、赤城山へ立て籠つて、八州の捕方を避けて居たが、其處も防ぎ切れなくなると、忠次を初め、十四五人の乾兒は、辛く一力の血路を、斬り開いて、信州路へ落ちて行つた。

夜中に利根川を渡つた。渡川の橋は、捕方が固めて居たので、一里ばかり下流を渡つた。水勢が烈しいため、兩岸に綱を引いて渡つたが、それでも乾兒の一人は、つい手を離したため流されてしまつた。

渡川から、伊香保街道に添うて、道もない裏山を、榛名にかゝつた。一日一晩で、やつと榛名を越えた。が、榛名を越えてしまふと、直ぐ其處に大戸の御番所があつた。

信州へ出るには、この御番所が、第一の難關であつた。此の關所をさへ越してしまへば、向うは信濃境まで、山又山が續いて居る丈であつた。

忠次達が、關所へかゝつたのは、夜の引き明けだつた。わづか、五六人しか居ない役人達は、忠次達の勢に怖れたものか、彼等の通行を一言も咎めなかつた。

關所を過ぎると、道に皆は、ほつと安心した。本街道を避けて、裏山へかゝつて來るに連れて、夜がしら〳〵と明けて來た。丁度、上州一帶に、春靄が朦朧化うもする春の終の頃であつた。山上から見下すと、街道に添うた村々には、青い桑畑が、朝靄の裡に、何處までも續いて居た。

關東縞の袷に、鮫鞘の長脇差を佩して、脚絆草鞋で、嚴重な足どしらへをした忠次は、菅のふき下しの笠を冠つて、先頭に立つて、威勢よく歩いて居た。小鬢の所に、純痣のある淺黑い顏が、一月に近い辛苦で、少し窶れが見えたため、一層凄味を見せて居た。乾兒も、大抵同じやうな風體をして居た。が、忠次の外は、誰も菅笠を冠つては居なかつた。中には、片袖の半分斷れかけて居る者や、脚絆の一方ない者や、白つぽい縞の着物に、所々血を滲ませて居るものなども居た。

街道を避けながら、兩も街道を見失はないやうに、彼等は山から山へと辿つた。大戸の關から、二里ばかりも來たと思ふ頃、雜木の茂つた小高い山の中腹に出て居た。ふと振り顧ると、今まで見えなかつた赤城が、山と山の間に、ほのかに浮び出て居た。

「赤城山も見收めだな。おい、此所いらで一服しようか」

さう云ひながら、忠次は足下に大きい切り株を見付けて、どつかりと、腰を降した。彼の眼は、暫らくの間、四十年見なれた懷しい山の姿に囚はれて居た。赤城山が利根川の翻谷へと、緩い勾配を作つて居る一帶の高原には、彼の故郷の國定村も、彼が實出しの當時、島村伊三郎を斬つた境の町も、彼が一月前に、代官を斬つた岩鼻の町もあつた。

國越をしようとする忠次の心には、さすがに淡い哀愁が、感ぜられて居た。が、それよりも、現在一番彼の心を苦しめて居ることは、乾兒の始末だつた。赤城へ籠つた當座は、五十人に近かつた乾兒が、日數が經つに連れ、二人三人潛かに、山を降つて逃げた。捕方の總攻めを喰つたときは、廿七人しか殘つて居なかつた。それが、五六人は召捕られ、七八人は何處ともなく落ち延びて、今殘つて居る十一人は、忠次のために

は、水火をも辭さない金鐵の人々だつた。國を賣つて、知らぬ他國へ走しる以上、此先あまり、いゝ芽も出さうでない忠次のために、一緒に關所を破つて、命を投げ出して哭れた人々だつた。が、代官を斬つた上に、關所を破つた忠次として、十人餘の乾兒を連れて、他國を横行することは出來なかつた。人目に觸れない裡に、乾兒の始末を付けてしまひたかつた。が、みんなと別れて、一人限になつてしまふことも、いろ〳〵な點で不便だつた。自分の目算通に、信州追分の今井小藤太の家に、ころがり込むにした所が、國定村の忠次とも云はれた貨元が、乾兒の一人も連れずに、獨を出すことは沽券にかゝはることだつた。手頃の乾兒を二三人連れて行くとしたら、一體誰を連れて行かう。さう思ふと、彼の心の裡では、直ぐその獨觸が定つた。平生の忠次だつたら、

「おい！　淺に、喜藏に、魚助とが、俺と一所に來るんだ！　外の野郎達は、銘々思ひ通に落ちて哭れ！　路用の金は、別けてやるからな！」

と、何の拘泥もなく云へる筈だつた。が、忠次は赤城に籠つて以來、自分に對する乾兒達の忠誠を、しみ〴〵感じて居た。鰹節や生米を嚙じつて露命を繋ぎ、岩窟や樹の下で、雨露を凌いで居た幾日と云ふ長い間、彼等は一言も不平を漏さなかつた。忠次の身體が、赤城山中の地藏山で、危險に瀕したとき、みんなは命を捨てて働いて哭れた。平生老ぼれて、物の役には立つまいと思はれて居た關雲の忍松までが、見事な働きをした。

さうした乾兒達の健氣な働きと、自分に對する心持とを見た忠次は、その中の二三人を引き止めて、他の多くに暇をやることが、何うしても氣がすゝまなかつた。皆一樣に、自分のために、一命を捨てゝかゝつて居る人々の間に、自分が甲乙を付けることは、何うしても出來なかつた。剛愎な忠次も、打ち續く艱難で、少しは氣が弱くなつて居る故もあつたのだらう。別れるのなら、いつそ皆と同じやうに、別れようと思つた。

彼は、さう決心すると、

「おい！　みんな！」と、周圍に散かつて居る乾兒達を呼んだ。烈しい叱り付けるやうな聲だつた。嗔嗔の時などにも、叱咤する忠次の聲丈は、狂奔して居る乾兒達の耳にもよく徹した。

草の上に、腰まつたり、寢ころんだり、銘々思ひ〳〵の休息を取つて居た乾兒達は、忠次の一喝で、みんな起き直つた。數日來の烈しい疲勞で、とろ〳〵眠りかけて居るものさへあつた。

「おい！　みんな」

忠次は、改めて呼び直した。「壺皿見透し」と、若い時仇名を付けられて居た、忠次の大きい眼がギロリと動いた。

「みんな！　一寸耳を貸して貰ひてえのだが、俺あこれから、信州へ一人で落ちて行かうと思ふのだ。お前達を、連れて行きてえのは山々だが、お役人をたゝき斬つて、天下のお關所を破つた俺達が、お天道樣の下を、十人二十人つながつて歩くことは、許されねえ。もつとも、二三人は、一緒に行つて貰ひてえとも思ふのだが、今日が日まで、同じ辛苦をしたお前達みんなの中から、汝は行け汝は來るなと云ふ區別は付けたくねえのだ。連れて行くからなら、一人殘らず、みんな一緒に連れて行きてえのだ。別れるからなら、恨みつこのないやうに、みんな一樣に別れてしまひてえのだ。さあ、鼓に使ひ殘りの金が、百五十兩ばかりあらあ。みんなに、十二兩宛、哭れてやつて、殘つたのは俺が貰つて行くんだ。銘々に、志を立てゝ落ちて哭れ！　臨分、身體に氣を付けろ！　忠次が何處かで捕まつて、江戸送りにでもなつたと聞いたら、線香の一本でも上げて哭れ！」

忠次は、元氣にさう云ふと、腕卷の中から、

五十兩包みを、三つ取り出して、熊笹の上に、ずしりと投げ出した。

が、誰もその五十兩包みに、手を出すものはなかつた。みんなは、忠次の突然な申出に、何う答へていゝか迷つて居るらしかつた。一番に、乾兒達の沈默を破つたのは、大間々の淺太郎だつた。

「そりや、親方惡い了簡だらうぜ。一體俺達が、妻子眷族を見捨てゝ、此處までお前さんに、從いて來たのは、何の爲だと思ふのだ。みんな、お前さんの身の上を氣遣つて、お前さんの落着く所を、見屆けたいと思ふ一心からぢやないか。いくら、大戸の御番所を越して、もうこれから信州までは、大丈夫だと云つたところで、お前さんばかりを、一人で手放すことは、出來るものぢやねえ。尤も、かう物凄な野郎ばかりが、つながつて歩けねえのは、道理なのだから、お前さんが、此奴だと思ふ野郎を、名指してお哭んなせえ。何も親分乾兒の間で、遠慮することなんか、ありやしねえ。お前さんの大事な場合だ！　恨みつらみを云ふやうな、ケチな野郎は一人だつてありやしねえ。なあ兄弟！」

みんなは、異口同音に、淺太郎の云ひ分に贊意を表した。が、さう云はれて見ると忠次は何更選みかねた。自分の大事な場所である丈に、彼等の名前を指すことは、彼等に對する信義の義別を、露骨に表はす事になつて來る。それで、選に洩れた連中と――内心、忠次を怨むかも知れない連中と――其儘、再會の機も抑し難く、別れてしまはねばならぬ事を考へると、忠次は何うしても、氣が進まなかつた。

忠次は口を噛んだ儘、何とも答へなかつた。親分と乾兒との間に、不安な沈默が暫らく續いた。

「あゝ、いゝ事があらあ」釋迦の十藏と云ふ未だ二十二三の男が叫んだ。彼は忠次の番を貰つてから、未だ二年にもなつて居なかつた。

「籤引がいゝや、みんなで籤を引いて、當つた者が親分のお供をするのがいゝや」

當座の妙案なので、忠次も、乾兒達も、十藏の方を一寸見た。が、嘉助といふ男が直ぐ反對した。

「何を云つてやがるんだい！　籤引だつて！　手前の樣な青二才に籤が當つて見ろ、反つて、親分の手足纏ひぢやないか。籤引なんか、俺あ眞つ平だ。此際時に一番物を云ふのは、腕っ節だ。おい親分、くだらねえ遠慮なんかしねえで、一言、嘉助ついて來いと、云つてお哭んなせい」

四斗俵を兩手に提げ乍ら、足駄を穿いて歩くと云ふ嘉助は一行中で第一の大力だつた。忠次が心の裡で選んで居る三人の中の一人だつた。

「嘉助の野郎、何を大きな事を云つてやがるんだい。腕っ節ばかりで、世間は渡られねえぞ。まして、此れから、知らねえ土地を遍歷つて、上州の國定忠次で御座いと云つて歩くには、駈引萬端の軍師がついて居ねえ事には、どうにもならねえのだ。幾ら手前が、大力だからと云つて、ドヂ許りを踏んで居ちや、旅先で、飯にはならねえぞ」

さう云つたのは、松井田の喜藏と云ふ、分別盛りの四十男だつた。忠次も喜藏の才覺と、分別とは認めて居た。彼は、心の裡で喜藏も三人の中に加へて居た。

「親分、俺あお供は出來ねえかねえ。俺あ腕っ節は强くはねえ。又、喜藏の樣に軍師ぢやねえ。が、お前さんの爲には、一命を捨てゝもいゝと、心の内で、とつくに覺悟を極めて居るんだ」

關雲の忍松が、其處迄云ひかけると、乾兒達は、周圍から、口々に罵つた。

「何を云つてやがるんだい、親分の爲に命を投げ出して居る者は、手前一人ぢやねえぞ、巫山戲た事をぬかすねえ」

さう云はれると、忍松は一言もなかつた。半晌白の頭を、テレ隠しに撫いて居た。

さうして居るうちに、生時ばかり細つた。日光山らしい方角に出た朝日が、もう餘程さし登つて居た。忠次は、默々として、みんなの云ふ事を聽いて居た。二三人連れて行くとしたら、彼は嫌引では連れて行きたくなかつた。やつぱり、信頼の出來る乾兒を選びたかつた。彼は不圖一策を思ひ付いた。それは、彼が自ら選ぶ事なくして、最も優秀な乾兒を選み得る方法だつた。

「お前達の樣に、さうザワ〳〵騒いで居ちや、何時が來たつて、果てしがありやしねえ。俺一人を手離すのが不安心だと云ふのなら、お前達の間で入れ札をして見ちやどうだい。札數の多い者から、三人丈連れて行かうぢやねえか。こりや一番愈みつらみがなくつて、いゝだらうぜ」

忠次の言葉が終るか終らないかに、

「そいつあ思ひ付きだ」乾兒のうちで一番人望のある喜藏が賛成した。

「そいつあ趣向だ」大間々の淺太郎も直ぐ賛成した。

心の裡で、籤引を望んで居る者も數人あつた。が、忠次の、怨みつらみの無いやうに而も役に立つ乾兒を、選ばうと云ふ肚が解ると、みんなは異議なく入れ札に賛成した。

喜藏が矢立を持つて居た。忠次が懷から、鼻紙の半紙を取り出した。それを喜藏が受取ると、長脇差を抜いて、手際よくそれを小さく切り分けた。さうして、一片宛みんなに配つた。

先刻からの經路を、一番默な心で見て居たのは稲荷の九郎助だつた。彼は年輩から云つても、忠次の身内では、第一の兄分でなければならなかつた。が、忠次からも、乾兒からも、そのやうには扱はれて居なかつた。去年、大前田の一家と一寸した出入のあつた時、彼は喧嘩場から、不覺にも大前田の身内の者に、引つ擒がれた。それ以來彼は多年培つて居た自分の聲望がめつきり落ちたのを知つた。自分から云へば、遙かに後輩の淺太郎や喜藏に段々凌がれて來た事を、感じて居た。そればかりでなく、十年前迄は、兄弟同樣に賭場から賭場を、一緒に漂浪して歩いた忠次迄が何時となく、自分を輕んじて居る事を知つた。皆は表面こそ「阿兄！　阿兄！」と立てゝ居るもの、心の裡では、自分を重んじて居ないことが、あり〳〵と感ぜられた。

入れ札と云ふ聲を聽いたとき、九郎助は悪いことになつたなあと思つた。今迄、表面丈は兎も角も保つて來た自分の位置が、鏘骨に崩されるのだと思ふと、彼は厭な氣がした。十一人居る乾兒の中で、自分に入れて呉れさうな人間を考へて見た。が、それは彌助の他には思ひ當らなかつた。彌助も九郎助と同樣に、古い顔であつて、後輩の淺太郎や喜藏などが、グン〳〵頭を擡げて來るのを、常から快からず思つて居るから、かうした場合には、屹度自分に入れて呉れるだらうと思つた。が、彌助丈は自分に入れて呉れるとしても、彌助の一枚丈で、三人の中に這入ることは考へられなかつた。淺太郎には四枚は這入るだらうと思つた。喜藏に三枚這入るとして、十一枚の中、後へ四枚殘る。その中、自分の一枚のけると三枚殘る。若し、その中二枚が、自分に入れられて居れば、三人の中に加はることが出來るかも知れないと思つた。が、彌助の他に、自分に入れて呉れさうな人は、どう考へても當がなかつた。ひよつとしたら、並川の才助がとも思つた。あの男の若い時には、可成り世話を焼いてやつた覺えがある。が、それは六七年も前の事で、今では「淺阿兄、淺阿兄」と、淺にばかりくつ付いて居る。さう思ふと、彌助の入れて呉れる一枚の他には、今一枚を得る當は、何うにもつかなかつた。乾兒の中で年頭でもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に

落ちることは――自分の信望が少しも無いことがまざ〳〵と表れることは、もう既定の事實のやうに、九郎助には思はれた。不堪忍な寂しい感じに堪へられなくなつて來た。

一本しか無い矢立の筆は、次から次へと廻つて來た。

「おい！　阿兄！　筆をやらあ」

ぼんやり考へて居た九郎助の肩を、つゝきながら横に居た彌助が、筆を渡して呉れた。彌助は筆を渡すときに、九郎助の顔を見ながら、意味ありげに、ニヤリと笑つた。それは、たしかに好意のある微笑だつた。「お前を入れたぜ」と云ふやうな、意味を持つた微笑であるやうに九郎助は思つた。さう思ふと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなつた。後の一枚が、自分の生死の境、榮辱の境であるやうに思はれた。忠次に着いて行つたところで、自分の身に、いゝ芽が出ようとは思はれなかつたが、入れ札に洩れて、年甲斐もなく置き捨てにされることが何うしても堪らなかつた。淺太郎や喜藏の人望に、自分の上にあることが、マザ〳〵と分ることが、何うしても堪らなかつた。

かれは、筆を持つて、ぼんやり考へた。

「おい！　阿兄！　早く廻してくんな！」

横に坐つて居る淺太郎が、彼に云つた。阿兄！　と云ひながらも、語調丈は、目下を叱して居るやうな口調だつた。九郎助は、毎度のことながらむつとした。途端に相手に對する烈しい競爭心が――嫉妬がムラ〳〵と彼の心に渦巻いた。

筆を持つて居る手が、少しブル〳〵顫へた。彼は、紙を身體で掩ひかくすやうにしながら假名で「くろすけ」と書いた。

書いてしまふと、彼はその小さい紙片をくるくると丸めて、賽中に置いてある空になつた割籠の蓋の中に入れた。が、入れた瞬間に、苦い悔恨が胸の中に直ぐ起つた。

「賭博は打つても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな」

口癖のやうに、怒鳴る忠次の聲が、耳のそばで、ガン〳〵鳴りひびくやうな氣がした。彼は皆が、自分の顔を、ジロ〳〵見て居るやうな氣がして、何うしても顔を上げることが出來なかつた。

吉井の傳助は、無筆だつたので、彼は伸よしの才助に、小聲で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

皆が、札を入れてしまふと、忠次が、

「喜藏！　お前讀み上げて見ねえ！」と言つた。

皆は、緊張のために、眼を輝した。過半數のものは諦めて居たが、それでも銘々、うぬぼれ持つて居た。妄想を見詰めるやうな目付で、喜藏の手許を睨んで居た。

「あさ、あゝ淺太郎の事だな、淺太郎一枚！」

さう叫んで喜藏は、一枚札を別に置いた。

「淺太郎二枚！」彼は讀いてさう叫んだ。

又、淺太郎が出たのである。淺太郎が、此の二三年忠次の親任を得て、影の形に付き從ふやうに、忠次が彼を身邊から放さなかつたことは、乾兒の者が皆よく知つて居た。淺太郎の聲が、つゞくと忠次の淺黒い顔に、ニッと微笑が浮かんだ。

「喜藏が一枚！」

喜藏は、自分の名が出たのを、嬉しさうに、ニコリと笑ひながら叫んで、

「嘘ぢやねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次が又、喜藏だ！」

喜藏は得意げに、又紙札を高く差上げた。

「喜助が一枚！」

第三の名前が出た。忠次は、心の中で、私に選んで居る三人が、入れ札の表に現はれて來るのが、嬉しかつた。乾兒達が自分の心持を、

察して居て呉れるのが嬉しかつた。
「何だ！　くろすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」
喜藏は、聲高く叫んだ。九郎助は瓶から火が出るやうに思つた。生れて初て感ずるやうな羞恥と、不安と、悔恨とで、胸の裡が掻きむしられるやうだ。自分の手蹟を、喜藏が見覚えては、居はしないかと思ふと、九郎助は立つても坐つても居られないやうな氣持だつた。が、喜藏は九郎助の札には、こだはつて居なかつた。
「淺が三枚だ！　その次は、喜藏が三枚だ！」
喜藏は、大聲に叫びつゞけた。札が次々に讀み上げられて、喜藏の手にたつた一枚殘つたとき、淺が四枚で、喜藏が四枚だつた。嘉助と九郎助とが、各自一枚宛だつた。
九郎助は、心の裡で懸命に彌助の札が出るのを待つて居た。彌助の札が出ないことはないと思つて居た。もう一枚さへ出れば、自分が、三人の中に這入るのだと思つて居た。
が、最後の札は、彼の切ない期待を裏切つて、嘉助に投ぜられた札だつた。
「さあ！　みんな聞いてくれ！　淺と喜藏とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑はしいと思ふ奴は自分で調べて見るといゝや」喜藏は最後の決定を傳へながら、一座を見廻した。
誰も調べて見ようとはしなかつた。誰よりも先に、九郎助はホッと安心した。
忠次は自分の思ひ通りの人間に、札が落ちたのを見ると滿足して、切り株から、立ち上つた。
「ぢや、みんな、腑に落ちたんだな。それぢや、淺と喜藏と嘉助とを連れて行かう。九郎助は、一枚入つて居るから連れて行きたいが、最初云つた言葉を變改する事は出來ねえから、勘辨しな。さあ、先刻からえらい手間を取つた。ぢや、みんな金を別けて銘々に志すところへ行つて呉れ」
乾兒の者は、忠次が出してあつた裡から、銘銘に十二兩宛を別けて取つた。
「ぢや、俺達は一足先に行くぜ」忠次は選まれた三人を、庵くと、みんなに最後の會釋をしながら、頂上の方へぐん〳〵上りかけた。
「親分、御機嫌よう。御機嫌よう」
去つて行く忠次の後から、乾兒達は口々に呼びかけた。
忠次は、振り向きながら、時々、被つて居る菅笠を取つて振つた。その長身の身體は、山の中腹を掩うて居る小松林の中に、暫くの間は見え隠れして居た。
取り殘された乾兒達の瓶には、それ〴〵失望の影があつた。
「淺達が付いて居りや、大した間違はありやしねい！」
口々に同じやうなことを云つた。が、やつぱり、銘々自分が入れ札に洩れた淋しさを持つて居た。
が、忠次達の姿が見えなくなると、四五人は諦めたやうに、草叢の方へ落ちて行つた。
九郎助は、忠次と別れるとき、目禮したまゝぢつと考へて居た。落選した失望よりも、自分の淺ましさが、ヒシ〳〵骨身に徹へた。札が、二三人に蒐まつて居るところを見ると、みんな親分の爲を計つて、淺や喜藏に入れたのだ。親分の心を汲んで、淺や喜藏を選んだのだ。さう思ふと、自分の名をかいた卑しさが、愈々堪へられなかつた。
朝の微風が吹いて來て、入れ札の紙が、熊笹を離れて、ひら〳〵と飛びさうになつた。
「あゝ、こんなものが殘つて居ると、とんだ手がかりにならねえとも限らねえ」
さう云ひながら、九郎助は立ち上つて散ばつて居る紙片を取り蒐めると、めちゃ〳〵に引斷つて、投げ捨てた。九郎助の瓶は、凄いほど

に蒼かつた。
「俺あ、秩父の方へ落ちようかな」
九郎助は獨言のやうに云つた。彼は仲間の誰とも瓶を合して居るのが嫌だつた。秩父に遠緣の者が居るのを幸に、其處で百姓にでもなつてしまひたかつた。
彼は、草津へ行つた途中とは、反對に榛名の西南の麓を目ざして、ぐん〳〵山を降りかけた。
彼が、二三町も來たときだつた。後から聲をかけるものがあつた。
「おい阿兄！　稲荷の阿兄！」
彼は、立ち止つて振り顧つた。見ると、彌助が、息を切らしながら、追ひかけて來たのであつた。彼は彌助の瓶を見たときに、烈しい憎惡が、胸の裡に湧いた。大切な場合に自分を裏切つて居ながら、また身の振方をでも相談しようとするらしい相手の、図々しい態度を見ると、彼はその得手勝手が、叩き切つてやりたいほど、癪に障つた。
「俺あ、よつぽど草津から越後へ出ようと思つたが、よく考へて見ると、熊谷在に伯父が居るのだ。少しは、熊谷は危險かも知れねえが、故郷へかへる足溜りには持つて來いだ。それで俺も武州の方へ出るから、途中まで付き合つて呉れねえか」
九郎助は、返事をする事さへ嫌だつた。默つてすたこら歩いて居た。
彌助は、九郎助が機嫌が惡いのを知ると、傍へ寄つた。
「俺あ、今日の入れ札には、最初から嫌だつた。親鬼の時から一緒に育つたお前を連れて行くと云はねえ法はねえ。淺や喜藏は、いくら腕つ節や、才覚があつても、云はば、お前に比ぶればホンの小僧つ子だ。たとひ、入れ札にするにしたところが、野郎達が、お前を入れねえと云ふことはありやしねえ。十一人の中でお前の名をかいたのは、この彌助一人だと思ふと、俺あ彼奴等の心根が、全くわからねえや」
默つて聞いた九郎助は、火のやうなものが、身體の周圍に、閃めいたやうな氣がした。
「此の野郎！」
さう思ひながら、脇差の柄を、左の手で、グッと握りしめた。もう、一言云つて見ろ、拔打ちに、斬つてやらうと思つた。が、九郎助が火のやうに、怒つて居ようとは夢にも知らない彌助は、平氣な瓶をして寄り添つて、歩いて居た。
柄を握りしめて居る九郎助の手が、段々緩んで來た。考へて見ると、彌助の嘘を咎めるのには、自分の恥しい卑しさを打ち開けねばならない。
その上、自分に大嘘を吐いて居る彌助でさへ、自分があんな卑しい事をしたのだとは、夢にも思つて居なければこそ、こんな白々しい嘘を吐くのだと思ふと、九郎助は自分で自分が情けなくなつて來た。口先丈の嘘を平氣で云ふ彌助でさへが考へ付かないほど、自分は卑しいのだと思ふと、頭の上に輝いて居る晩春のお天道樣が、一時に暗くなるやうな味氣なさを味はつた。
山の多い上州の空は、一杯に晴れて居た。峰から峰へ渡る幾百羽と云ふ小鳥の群が、黄い翼をひらめかしながら、九郎助の頭の上を、ほがらかに鳴きながら通つて居る。行手には榛名が、空を劃つて蒼々と、聳えて居た。

父歸る

時 明治四十年頃。

所 南海道の海岸にある小都會。

人

黒田賢一郎　二十八歳
その弟　新二郎　二十三歳
その妹　おたね　二十歳
彼等の母　おたか　五十一歳
彼等の父　宗太郎　五十一歳

情景 中流階級のつゝましやかな家、六疊の間、正面に箪笥があつて其上に目覺時計置いてある、前に長火鉢あり、湯罐から湯氣が立つて居る。卓子寒出してある。賢一郎役所から歸つて和服に着更へたばかりと見え、寛ろいで新聞を讀んで居る。母のおたか繕物をして居る、午後七時に近く戸外は暗し、十月の初。

賢一郎 おいあさんおたねは何處へ行つたの。

母 仕立物を屆けに行た。

賢一郎 まだ仕立物をしとるの、もう人の家の什事やこし、せんでもえゝのに。

母 そやけど嫁入の時に、一枚でも餘計えゝ着物を持つて行きたいのやろ。

賢一郎 (新聞の裏を返しながら)此間云うとつた口は何うなつたの。

母 たねが、ちいと相手が、氣に入らんのやろ、向うは異れ〳〵云うて、せがんどつたんやけど。

賢一郎 財産があると云ふ人やけに、えゝ口やがなあ。

母 けんど、一萬や、二萬の財産は使ひ出したら何の盆にもたゝんけえな。家でもおたあさんが來た時には公債や地所で、二三萬圓はあつたんやけど、お父さんが道樂して使ひ出したら、掟につけて振る如しちや。

賢一郎 (不快なる記憶を呼び起したる如く默して居る)……。

母 私は自分で慾々しとるけに、たねは財産よりも人間のえゝ方へやらうと思うとる、財産がなくても亭主の心掛がよかつたら、一生苦勞せいでも濟むけにな。

賢一郎 財産があつて、人間がよけりや、なほいゝでせう。

母 そんな事が望めるもんけ、おたねがなんぼ器量よしでも家には金がないんやけにな、此頃の事やけに少し支度をしても、三百圓や五百圓は直ぐかゝるけにな。

賢一郎 おたねも、お父樣の爲に子供の時は隨分苦勞をしたんやけに、嫁入の支度丈でも出來る丈の事はしてやらないかん。私達の貯金が千圓になつたら半分はあれにやつてもええ。

母 そんなにせいでも、三百圓かけてやつたらえゝ。其後でお前にも嫁を貰うたら私も一安心するんや、私は亭主運が惡かつたけど、子供運はえゝ云うて皆云うて呉れる。お父さんに行かれた時は何うしようと思つたがなあ……。

賢一郎 (話題を轉ずる爲に)新は大分遲いな。

母 宿直やけに、遲うなるんや。新は今月からまた月給が殖る云うとつた。

賢一郎 さうですか、あいつは中學校でよく出來たけに、小學校の先生やこしするのは不滿やらうけど、自分で勉强さへしたら、なんぼでも出世は出來るんやけに。

母 お前の嫁も探して貰うとんやけど、えゝのがなうてな。園田の娘ならえゝけど、少し向うの方が格式が上やけに、呉れんかも知れんでな。

賢一郎 まだ二三年はいゝでせう。

母 でもおたねを外へやるとすると、ぜひにも貰はないかん。夫で片が附くんやけに。お父さんが出奔した時には三人の子供を抱へて何うしようと思つたもんやが……。

賢一郎 もう昔しの事を云うても仕方がないんやけえに。

(表の格子戸開き新二郎歸つて來る、まだ若き小學教師にて眉目秀れたる青年なり)

新二郎 只今。

母 やあおかへり。

賢一郎 大變遲かつたやないか。

新二郎 今日は調べものが澤山あつて、閉口してしまうた。あゝ肩が凝つた。

母 先刻から御飯にしようと思うて待つとつたんや。

賢一郎 御飯がすんだら風呂へ行つて來るといい。

新二郎 (和服に着更へながら)おいあさん、たねは。

母 仕立物を持つて行つとんや。

新二郎 (和服になつて寛ぎながら)兄さん、今日僕は不思議な噂を聞いたんですがね。杉田校長が古新町で家のお父さんによく似た人にあつたと云ふんですがね。

母と兄 うーむ。

新二郎 杉田さんが古新町の旅籠屋が並んどる所を通つとると、前に行く六十ばかりの老人がある。よく見ると何うも見たやうな事があると思うて、近づいて横顔を見ると家のお父さんに似て居たと云ふんです。何うも宗太郎さんらしい、宗太郎さんなら右の頬にほくろがある筈ぢやけに、ほくろがあつたら聲をかけようと思うて、近よらうとすると水神さんの横町へコツ〳〵とはひつてしまうたと云ふんです。

母 杉田さんならお父樣の幼な友達で、一緒に揆の稽古をして居た人やけに、見違ふ事もないやらう、けどもうお前二十年にもなるんやけにな。

新二郎 杉田さんもさう云うとつたです、何しろ二十年も逢はんのやけにしつかりした事は云へんけど、子供の時から交際うた宗太郎さんやけにまるきり見違へたとも云へん云うてな。

賢一郎 (不安な眸を輝かして)ぢや、杉田さんは言葉はかけなかつたのだね。

新二郎 ほくろがあつたら名乘る心算で居たのやつて。

母 まあ、そりや杉田さんの見違ひやらうな。同じ町へ歸つたら自分の生れた家に歸らんことはないけにな。

賢一郎 然し、お父樣は家の敷居は一寸超せないやらう。

母 私はもう死んだと思うとんや、家出してから二十年になるんやけえ。

新二郎 何時か、岡山で逢つた人があると云ふんでせう。

母 あれも、もう十年も前の事ぢや。久保の忠太さんが岡山へ行つた時家のお父さんが、鄭子や虎の動物を述れて興行しとつたとかで、

忠太さんを料理屋へ呼んで御馳走をして家の様子を聞いたんやて、其時は金時計を帶にはさげたり、絹物づくめでエライ勢であつたと云うとつた。それからは何の音沙汰もないんや、あれは戰爭のあつた明くる年やけに、もう十二三年になるな。

新二郎 お父さんはなか〳〵變つとつたんやな。

母 若い時から家の學問はせんで、山師のやうな事が好きであつたんや、あんなに借金が出來たのも、道楽ばつかりでないんや、支那へ千金丹を賣り出すとかと云うて損をしたんや。

賢一郎 （やゝ不快の表情をして）おたあさんお飯を食べませう。

母 あゝさうや〳〵。つい忘れとつた。（臺所の方へ立つて行く、姿は見えずに）杉田さんが見たと云ふのも何ぞ間違やろ。生きとつたら年が年やけに、ハガキの一本でもよこすやろ。

賢一郎 （やゝ眞面目に）杉田さんが、その男に逢うたのは何日の事や。

新二郎 昨日の晩の九時頃ぢやと云ふ事です。

賢一郎 どんな身なりをして居つたんや。

新二郎 あんまり、えゝなりぢやないさうです。羽織も着て居らなんだと云ふ事です。

賢一郎 さうか。

新二郎 兄さんが覺えとるお父さんはどんな樣子でした。

賢一郎 私は覺えとらん。

新二郎 そんな事はないでせう。兄さんは八つであつたんやけに。僕だつてボンヤリ覺えとるのに。

賢一郎 私は覺えとらん。昔は覺えとつたけど、一生懸命に忘れようと、かゝつたけに。

新二郎 杉田さんは、よくお父樣の話をしますぜ。お父さんは若い時は、えゝ男であつたさうですな。

母 （臺所から、食事を運びながら）さうや、お父樣は評判なえゝ男であつたんや、お父さんが、大殿樣のお小姓をして居た時に奥女中がお箸箱に無駄を添へて、送つて來たと云ふ話があるんや。

新二郎 何のために、箸箱を奥れたんやらう。

母 丑の年やけに、今年は五十八ぢや。家にぢつとして居れば、もう樂隱居をしてる時分ぢやがな。

（三人食事にかゝる）

母 たねも、もう歸つてくるやらう。もうめつきり寒うなつたな。

新二郎 おたあさん、今日淨瑠寺の椋の木で百舌が啼いとりましたよ。もう秋ぢや。……兄さん、僕はやつぱり、英語の檢定をとる事にしました。數學にはえゝ先生がないけに。

賢一郎 えゝやらう。やはり、エレクソンさんの所へ通ふのか。

新二郎 さうしようと、思つとるんです、宮教師ぢやと月謝がいらんし。

賢一郎 うむ、何しろ、一生懸命にやるんだな。父親の力は借らんでも、一人前の人間にはなれると云ふ事を知らせる爲に、勉强するんぢやな。私も高等文官をやらうと思ふとつたけど、規則が改正になつて、中學校を出とらな、受けられん云ふ事になつたから、諦めとんや、お前は中學校を卒業しとるんやけに、一生懸命やつて奥れないかん。

（この時、格子が開いて、おたねが歸つて來る、色白く十人並以上の娘なり）

おたね 只今。

母 遲かつたなう。

おたね また次のものを頼まれたり、何かしとつたもんやけに。

母 さあ御飯おたべ。

おたね （坐りながら、やゝ不安なる表情にて）兄さん、今歸つて來るとな、家の向側に年寄の人が居て、家の玄關の方をぢーと見て居るんや。（三人とも不安な顏になる）

賢一郎 うーむ。

新二郎 どんな人だ。

おたね 暗くて、分らなんだけど、背の高い人や。

新二郎 （立つて次の間へ行き、窓から覗く）

賢一郎 誰か、居るかい。

新二郎 いゝや、誰も居らん。

（兄弟三人沈默して居る）

母 あの人が家を出たのは盆の三日後であつたんや。

賢一郎 おたあさん、昔の事はもう云はんやうにして下さい。

母 私も若い時は悔んで居たけども、年が寄るとなんとなしに心が弱うなつて來てな。

（四人默つて食事をして居る。不意に表の戸がガラッと開く、賢一郎の顏と、母の顏とが最も多く激動を受ける、然しその激動の内容は著しく違つて居る）

男の聲 御免！

おたね はい！（然し彼女も起ち上らうとはしない）

男の聲 おたかは居らんかの。

母 へえ！（吸ひ附けられたやうに玄關へ行く。以下聲ばかり聞える）

男 おたかか。

母 まあ！ お前さんか、えらう！ 變つたなう」

（二人とも涙含みたる聲を出して居る）

男 まあ！ 丈夫で何よりぢや。子供達は大きくなつたやらうな。

母 大けうなつたとも、もう皆立派な大人ぢや。上つてお見まあせ。

男 上つてもえゝかい。

母 えゝとも。

（二十年振りにて歸れる父宗太郎、憔悴したる有樣にて老いたる妻に導かれて室に入り來る。新二郎とおたねとは目をしばたゝきながら、父の姿をしみ〳〵見詰めて居たが）

新二郎 お父樣ですか、僕が新二郎です。

父 立派な男になつたな。お前に別れた時はまだ碌に立てりもしなかつたが……。

おたね お父さん、私がたねです。

父 女の子と云ふことは聞いて居たが、えゝ器量ぢやなあ。

母 まあ、お前さん、何から話してえゝか、子供もこんなに大きうなつてな、何より結構やと思うとんや。

父 親はなくとも子は育つと云ふがよう云うてあるな、はゝゝゝゝ。

（然し誰もその笑に合しようとするものはない、賢一郎は卓に倚つたまゝ、下を向いて默して居る）

母 お前さん。賢も新もよう出來た子でな。賢はな、二十の年に普通文官云ふものが受るし、新は中學校へ行つとつた時は三番と降つた事がないんや。今では二人で六十圓も取つて奥れるし、おたねはおたねで、こんなに器量よしやけに、えゝ處から口がかゝるしな。

父 そら何より結構な事や。俺も、四五年前迄は、人の二三十人も連れて、ずーと巡業して廻つとつたんやけどもな、奥で見世物屋が丸潰になつた爲にエライ損害を受けてな。夫からは何をしても思はしくないわ、其内に老先が短くなつて來る、女房子の居る所が戀しうなつてウカ〳〵と歸つて來たんや。老先の長い事もない者やけに惜よう頼むぜ。（賢一

郎を注視して）さあ賢一郎その盃を一つさして呉れんか、お父さんも近頃はえゝ酒も飲めんでな。うん、お前丈は殆に見覺えがあるわ。

（賢一郎應ぜず）

母　さあ、賢や、お父さんが、あゝ仰しやるんやけに。さあ、久し振りに親子が逢ふんぢやけに祝うてな。

（賢一郎應ぜず）

父　ぢや、新二郎、お前一つ、盃を呉れえ。

新二郎　はあ。（盃を取り上げて父に差さんとす）

賢一郎　（決然として　止めとけ、さすわけはない。

母　何を云ふんや、賢は。

（父親、烈しい目にて賢一郎を睨んで居る。新二郎もおたねも下を俯いて默つて居る）

賢一郎　（昂然と）俺達に父親がある譯はない。そんなものがあるもんか。

父　（烈しき怒を抑へ（ながら）何やと！

賢一郎　（やゝ冷かに）俺達に父親があれば、八歳の年に築港からおたあさんに手を引かれて投身をせいでも濟んどる。あの時おたあさんが誤つて水の淺い處へ飛び込んだればこそ、助つて居るんや。俺達に父親があれば十の年から給仕をせいでも濟んどる。俺達は父親がない爲に、子供の時に何の樂しみもなしに暮して來たんや。新二郎、お前は小學校の時に墨や紙を買へいで、泣いて居たのを忘れたのか。教科書さへ滿足に買へいで寫本を持つて行つて友達にからかはれて泣いたのを忘れたのか。俺達に父親があるもんか、あればあんな苦勞はしとりやせん。

（おたか、おたねも泣いて居る、新二郎涙ぐんで居る、老いたる父も怒から悲しみに移りかけて居る）

新二郎　然し、兄さん、おたあさんが、第一あ

賢一郎　（なほ冷酷に）お母さんは女子やけに何あ折れ合つて居るんやけに、大抵の事は我慢して呉れたら何うです。

う思うとるか知らんが、俺に父親があるとしたら、夫は俺の敵ぢや。俺達が小い時に、ひもじい事や辛い事があつておたあさんに不平を云ふとお母さんは口癖のやうに「皆お父さんの故ぢや、恨むのならお父さんを恨め」と云うて居た。俺にお父さんがあるとしたら夫は俺の子供の時から苦しめ拔いた敵ぢや。俺は十の時から騙廳の給仕をするし、お母さんはマッチを張るし、何時かもお母さんのマッチの仕事が一月ばかり無かつた時に親子四人で書飯を拔いたのを忘れたのか。俺が一生懸命に勉强したのは皆その敵を取りたいからぢや、俺達を捨てゝ行つた男を見返してやりたいからだ。父親に捨てられても一人前の人間にはなれると云ふ事を知らしてやりたいからぢや。俺は父親から少しだつて愛された覺はない、俺の父親は俺が八歳になる迄家を外に飲み歩いて居たのだ、その揚句に不義理な借金をこさへて情婦を連れて出奔したのぢや、女房と子供三人の愛を合はしてもその女に敵はなかつたのぢや。いや、俺の父親が居なくなつた後には、お母さんが俺の爲に預けて置いて呉れた十六圓の貯金の通帳まで無くなつて居つたもんぢや。

新二郎　（涙を呑みながら）然し兄さん、お父様はあの通り、あの通りお年を召して居られるんぢやけに……。

賢一郎　新二郎！　お前はよくお父様などと空涙しい事が云へるな。見も知らない他人がひよつくりは入つて來て俺達の親ぢやゝ云うたからとて、直ぐ父に對する感情を持つことが出來るんか。

新二郎　然し兄さん、肉親の子として、親が何うあらうとも、養うて行く……。

賢一郎　義務があると云ふのか、自分でさんざん面白い事をして置いて、年が寄つて動けなくなつたと云うて歸つて來る、俺はお前が何と云つても父親はない。

父　（忿然として物を云ふ、然し夫は飾つた怒りで何の力も伴つて居ない）賢一郎！　お前は生みの親に對してよくそんな口が利けるなう。

賢一郎　生みの親と云ふのですか。あなたが生んだと云ふ賢一郎は二十年も前に築港で死んで居る。あなたは二十年前に父としての權利を自分で棄てゝ居る。今の私は自分で築き上げた私ぢや、私は誰にだつて世話になつて居らん。

（凡て無言、おたかとおたねのすゝりなきの聲が聞えるばかり）

父　えゝわ。出て行く。俺だつて二萬や三萬の金は取り拔うて來た男ぢや。どこに落ちぶれたかと云うて喰ふ位な事は出來るわ。えらう邪魔したな。（悄然として行かんとす）

新二郎　まあ、お待ちまあせ、兄さんが嫌だと云ふのなら僕が何うにかしてあげます。兄さんだつて親子ですから今に機嫌の直る事もあるでせう。お待ちまあせ。僕がどうな事をしても養うて上げますから。

賢一郎　新二郎！　お前はその人に何ぞ世話になつた事があるのか。俺はまだその人から拳骨の一つや、二つは貰つた事があるがお前は塵一つだつて貰つては居ないぞ。お前の小學校の月謝は誰が出したのだ。お前は誰の養育を受けたのぢや、お前の學校の月謝は、兄さんがしがない給仕の月給から拂つてやつたのを忘れたのか。お前や、たねのほんたうの父親は俺だ、父親の役目をしたのは俺ぢや。その人を世話したければするがえゝ、その代り兄さんはお前と口は利かないぞ。

新二郎　然し……。

賢一郎　不服があれば、その人と一緒に出て行くがえゝ。

（女二人とも泣きつゞけて居る。新二郎默す）

賢一郎　俺は父親がない爲に苦しんだけに、弟や妹にはその苦しみをさせまいと思うて、夜も寢ないで親孝行したけに、弟も妹も山の學校は卒業させてある。

父　（怒）もう何も云ふな。わしが歸つて邪魔なんやらう、わしやつて無理に子供の厄介にならんでもえゝ、自分で養うて行く位の才覺はある。さあもう行かう、おたか！　夫婦で暮せよ、お前はわしに捨てられて知つて仕合せやな。

新二郎　（去らんとする父を追ひて）あなたお金はあるのですか。晩の御飯もまだ喰べとらんのぢやありませんか。

父　（哀訴するが如く昨を光らせながら）えゝわ〳〵。

（玄關に降りんとしてつまづいて、緣臺の上に腰をつく）

おたか　あつ、あぶない！

新二郎　（父を抱き起しながら）之から行く處があるのですか。

父　（全く銷沈して腰をかけたまゝ）のたれ死するには家は入らんからなう。……（獨言の如く）俺やつて此の家に足踏が出來る義理ではないんやけど、年が寄つて、弱つて來ると故郷の方へ自然と足が向いてな。此街へ歸つてから今日で三日ぢやがな、夜になると俺の家の前で立つて居たんぢやが戸が高うては入れなかつたのぢや……然しやつぱり、はらん方がよかつた、一文なしで歸つて來ては

誰にやつて馬鹿にされる……俺も五十の聲がかゝると國が戀しくなつて、せめて千と二千と纏つた金を持つて歸つてお前達に詫をしようと思つたが、年が寄ると夫丈の働きも出來んでな。……（漸く立ち上つて）まあえゝ。自分の身體位始末のつかんことはないわ。（踉蹌として立ち上り顧みて老いたる妻を一目見たる後、戸をあけて去る。後の四人暫く無言）

母　（哀訴するが如く）賢一郎。

おたね　兄さん！

賢一郎　新！　行つてお父様を呼び返して來い。

（新二郎、飛ぶが如く戸外へ出る。三人强い緊張の裡に待つて居る。新二郎や着白な顔をして歸つて來る）

新二郎　南の道を探したが見えん、北の方を探すから兄さんも來て下さい。

賢一郎　（驚駭して）なに見えん！　見えん事があるものか。

（兄弟二人狂氣の如くに出で去る）

——幕——

屋上の狂人

人物

狂人　勝島義太郎　二十四歳

その弟　末夫郎　十七歳の中學生

その父　義助

その母　およし

隣の人　藤作

下男　吉治　二十歳

歴女と稱する女　五十歳位

時及び所　明治三十年代、瀬戸内海の讃岐に屬する島

舞臺　この小さき島にては屈指の財産家なる勝島の家の裏庭。家の内部は結ひ廻らした竹垣に遮ぎられて見えない。高い屋根ばかりが初夏の濃緑な南國の空を劃ぎつて居る。左手には海が光つて見える。この家の長男なる義太郎は正面に見ゆる屋根の頂上に躍躍して海上を凝視して居る。家の内部から父の聲が聞える。

義助　（姿は見えないで）義め、また屋根へ上つとるんやな。こなにカン〳〵照つとるのに。暑氣するがなあ。（緣側へ出て）吉治！

吉治　（右手から姿を現す）へえ何ぞ用ですか。吉治は居らんのか。

義助　義太郎を降して呉れんか。こなに暑い日に帽子も被らんで、暑氣するがなあ。何處から屋根へ上るんやろ、此間云うた納屋の屋根の所は針金を張つたんやろな。

吉治　そらもうちやんとえゝやうにしてありますんや。

義助　（竹垣の折戸から舞臺へ出て來ながら屋根を見上げて）あなに燒石のやうな瓦の上に坐つて何んともないんやろか。義太郎！　早う降りて來い、そなな暑い所に居つたら暑氣して死んでしまふぞう。

吉治　若旦那！　降りまあせよ、そなな所に居つたら身體の毒やがなあ。

義助　義やあ。早う降りて來んかい。何しとんやそなな所で。早う降りんかい。義やあ！

義太郎　（ケロリとしたまゝ）何や。

義助　何やでないわい。早う降りて來いよ、お日さんにカン〳〵照り附けられて暑氣するがなあ。さあ、直ぐ降りて來い、降りて來んと下から竿でつゝくぞう。

義太郎　（駄々をこねるやうに）嫌やあ。面白い事がありよるんやもの。金毘羅さんの正念坊さんが雲の中で踊つとる。緋の衣を着て天人樣と一緒に踊りよる。わしに來い〳〵云ふんや。

義助　阿呆な事云ふない。お前にとりついとる狐が騙しよるんやがなあ。降りんかい。

義太郎　（狂人らしい欣びに溢れて）面白うやりよるわい。わしも行きたいなあ。待つといで。わしも行くけいになあ。

義助　そなな事を云うとるとまた何時かのやうに落ち刷るぞ、氣違の上にまだ片輪にまでなりやがつて、親に迷惑ばつかしかけやがる。降りんかい阿呆め。

吉治　旦那さん、そなに怒つたつて、相手が若旦那やもの利くもんですか。それよりか若旦

那の好きなあぶらげを買うて來ませうか、あれを見せたら直ぐ降りるけに。

義助 それより竿で突ついてやれ、かまやせんわい。

吉治 そいなむごい事が出來るもんな。若旦那は何も知らんのや。皆愚いて居る者がさせて居るんやけに。

義助 屋根のぐるりに忍び返しを附けたらどうやらうな。どうしても上れんやうに。

吉治 どな事しても若旦那には利き目がありやしません、本傳寺の大屋根へ足場なしに上るんやもの。こいな低い屋根やこしはお茶の子や。愚いとる者が上らせるんやけに何うしたつて利きやせん。

義助 さうやらうかな。彼奴には往生するわい。氣違でも家の中にぢつとしとるんならええけれど、高い所へばつかし上りやがつて、まるで自分の氣違を廣告しとるやうなもんや。勝鳥の天狗氣違云うたら、高松へ迄噂が聞えとる云うて末が云ひよつた。

吉治 鳥の人は狐がとり憑いとる云ふけど、俺は合點が行きませんがなあ。狐が木登りすると云ふ事は、聞いた事がないけになあ。

義助 俺もさう思うとんや。俺の心當りは別にあるんや。義の生れる時になな、俺はその時珍らしい船來の元込銃でな、此の鳥の猿を片つ端しから射ち殺したんや。その猿が憑いとるんや。

吉治 さうやらうな。それでなけりや、あいに木登りのおたつしやなわけはないからな、足場があらうがあるまいが、どいなな所へでも上るんやけにな。梯子乘りの上手な作でも、若旦那には敵はん云ひよりますわい。

義助 (苦笑して) 阿呆なことを云ふない。屋根へばかり上つとる息子を持つた親になつて見い。およしでも俺でも、始終彼奴の事を苦にしとんや。(再び扉を上げて) 義太郎! 早う降りて來んかい。義太郎! 降りんかい。屋根へ上つとると人の聲は聞えんのや、まるで夢中になつとるんや。彼奴が登つて困るんで家の木は皆伐つてしまうたけれど、屋根ばかりはどうすることも出來んわい。

吉治 私の小さい頃には、御門の前に高い公孫樹が御座んしたなあ。

義助 うむ、あの樹かい。あれは鳥中の目印になつた樹やがな。何時であつたかあの樹の天邊へ義太郎が登つてな。拾四五間もある上でポカンと枝の上に腰かけて居るやないか。俺もおよしも彼奴の命はないもんやと思うて、あきらめて居るとまたスル〳〵降りて來てな。皆あきれて物が云へなかつたんや。

吉治 へゝえ。まるで人間業で御座んせんな。

義助 だから俺は猿が憑いとる思うとんや。(扉をあげて) 義やあ。降りんかい。(ふと氣を變へて) 吉治! お前上つて呉れんかい。

吉治 けど他人が上ると若旦那はきつうお腹を立てるけんな。

義助 えゝわ。怒つてもえゝわい。上つて引つ張り降して來い。

吉治 へい〳〵。

(吉治梯子を持つて來るために退場。その時隣の人藤作がはひつて來る)

藤作 旦那さん。今日は。

義助 やあ。えゝお天氣やな。昨日降した朝はどうやつたな。大小かゝつたかな。

藤作 根つからかゝりやしまへなんだわ。もう季が過ぎとるけにな。

義助 さうやらうなあ もうちつと遲いわい。

藤作 もう鮎がとれ出すな。昨日清吉の網に、二三本もかゝりましたわい。

義助 さうけい。

藤作 (義太郎を見て) また若旦那は屋根で御座んすか。

義助 さうや、不相變上つとるわい。上げたらはないんやけど、座敷牢の中へ入れとくと、水を離れた鯰のやうにして居るんでな、ついむごうなつて出してやると直ぐ屋根や。

藤作 けど若旦那のやうなのは、傍の迷惑にならんけによどざんすわな。

義助 あんまり迷惑にならんこともないてな。親兄弟の恥になるでな、こないに高い所へ上つてをらんで居るとなあ。

藤作 けど弟さんの末さんが、町の學校でよう出來るんやけに、旦那もあきらめがつくと云ふもんやな。

義助 末次郎が人並に出來るんでわしも辛抱しとんや。二人とも氣違であつたら生きとる甲斐がないがな。

藤作 實はな。旦那さん。よく利く巫女さんが昨日から鳥へ來とるんでな。若旦那も一遍御祈禱して貰うたら、何うやらうと思うて來ましたんだがな。

義助 さうけ。けど御祈禱も今迄何遍受けたか分らんけどもな、ちよつとも利かんでな。

藤作 今度御座らつしやつたのは、金毘羅さんの巫女さんであらたかなもんやつゝな。神さまが乘りうつるんやて云ふから山伏の祈禱とは違ふでな。試めして見たらどんなもんですやろ。

義助 さうやなあ。御覆はどの位入るもんやろ。

藤作 瘧らな、要らん云うて居りますでなあ。瘧つたら應分に出せ云うとります。

義助 末次郎は御祈禱やこい利くもんか云うとるけど、損にならんことやけに軽んで見てもえゝがなあ。

(この時吉治梯子を持つてはひつて來る。竹垣の内へはひる)

藤作 そんなら私は金吉の處に居る巫女さんを呼んで來ますけにな。若旦那を下しといてお呉れやす。

義助 お苦勞樣やなあ。そんならえゝやうに頼のんまつせ。藤作を見送つた後) さあ義! おとなしう降りるんだぜ。

吉治 (屋根へ上つてしまつて) さあ若旦那。私と一緒に降りませう。こいな所に居ると晩には大熱が出るからな。

義太郎 (外道が近よるのを怖れる佛徒のやうに) 嫌やあ。天狗樣が皆わしにおいで〳〵をしとる。お前やこいしの來る所ぢやないぞ。何と思うとるんや。

吉治 阿呆な事云はんとさあお降りまあせ。

義太郎 わしに一寸でも觸ると、天狗さまに引き裂かれるぞ。

吉治 (義太郎に急に迫つてその肩口を捕へながら下の方へ引き下す。義太郎は捕へられてからは、殆ど何の抵抗をもしない) さあ荒ばれるとお怪我をなさりまつせ。

義助 氣附けて下すんやぜ。

吉治 (義太郎を先に立てながら降りて來る。義太郎の右の足は負傷のため跛になつてる) 巫女さん云うても一寸も利かん奴も御座んすからなあ。

義助 義はよう、金毘羅さんの神さんと話しする云ふけになあ。金毘羅さんの巫女さん云うたら、利くかも知れんと思うてな。扉を張り上げて) およしや、一寸出て來いよ。

およし (内部にて) 何ぞ用け。

義助 巫女さんを軽んだんぢやがなあ、どうやらう。

およし (折戸から出て來る) そらえゝかも知れん。どいな事でひよいと癒るかも知れんけにな。

義太郎　（不滿な顏色にて）お父う、どうしたから下すんや。今丁度、俺を迎に五色の雲が舞下る所であつたんやのに。

義助　阿呆！　何時かも五色の雲が來た云ひよつて屋根から飛んだんやらう。それでその通り片輪になつとるんや。今日は金毘羅さんの巫女さんが來て、奮劇に憑いとるもんを退ひ出して異れるんやけに、屋根へ上らんと待つて居るんやぞ。

（その時藤作、巫女を案内して來る。巫女は五十ばかりなる陰險な顏色をした妖女の如き女）

藤作　且那さん之が先刻云うた巫女さんや。

義助　やあ今日は。よう御出下されました。どうも困つた奴で御座んしてな、あなた。全く親兄弟の恥さらしでな。

巫女　（無造作に）何にあなた、心配せんかつて私が神さんの御威德で直ぐ癒して上げますわ。（義太郎の方を向きながら）この御方で御座んすか。

義助　左樣で御座んす。もう二十四になりますのにな。高い所へ上る外は何一つようしませんのや。

巫女　何時からこんな御病氣で御座んしたかな。

義助　もう生れついての事で御座んしてな。小い時から高い所へ上りたがつて、四つ五つの頃には床の間へ上る、御佛壇へ上る、棚の上に上る。七つ八つになると木登りを覺える。十五六になると山の天邊へ上つて一日降りて來ませんのや。それで天狗樣やとか神樣やとか、そんなものと話して居るやうな、獨り言を絕えず云うとりますのや。一體どうした聞で御座んせうな。

巫女　やつぱり狐が憑いとるのに違御座んせん。どれ！　私が御祈禱をして上げます。（義太郎の方へ歩みよつて）よくお聞きなさい！　私は當國の金毘羅大權現樣のお使の者ぢやけに、私の云ふ事は皆神さんの仰しやる事ぢや。

義太郎　（不滿な顏をして）金毘羅の神さん云うて、お前達うたことがあるけ？

巫女　（白眼んで）何を失禮な事を云ふのぢや。神樣のお姿が目に見えるもんか。

義太郎　（得意さうに）俺は何遍も逢うとるわい。金毘羅さんは白い衣物を着て金の冠を被つとるおぢいさんや。俺と一番伸のえゝ人や。

巫女　（上手に出られたのでやゝ狼狽しながら、義助の方を見て）之は狐憑もひどい狐憑や。どれ私が神樣に何つて見る。

（巫女呪文を唱へ奇怪の身振りをする、義太郎はその間吉治に肩口を捕へられながらケロリとして相鬪せざるものの如し。巫女は狂亂の如く狂ひ廻はりたる後、昏倒する。再び立ち上つた彼女はキヨロキヨロとして周圍を見廻す）

巫女　（以前とは全く違つた聲音で）我は當國象頭山に鎭座する金毘羅大權現なるぞ。

皆　（義太郎を除いて皆腰を屈めて）へゝつ。

巫女　（嶮嚴に）此の家の長男には鷹の城山の狐が憑いて居る。樹の枝に吊して置いて青松葉で燻べてやれ。わしの申す事違ふに於ては神罰立ち所に至るぞ。（巫女再び昏倒する）

皆　へゝつ。

巫女　（再び立上りながらケロリとして）何ぞ神さまが仰しやりましたかな。

義助　どうもあらたかな事で御座んした。

巫女　神樣の仰しやつた事は早速なさらんと、知つてお罰が當りますけに、念のために申して置きますぞ。

義助　（やゝ當惑して）吉治！　そんなら青松葉を切つて來んかな。

およし　なんぼ神さんの仰しやる事ぢや云うて、そんなむごい事が出來るもんかいな。

巫女　燻べられて苦しむのは、憑いとる狐や。本人は何の苦痛も御座んせんな。さあ早く用意をなさい。（義太郎の方を向いて）神樣のお聲を聞いたか、苦しまぬ前に立ち去るがえゝぞ。

義太郎　金毘羅さんの聲はあんな聲でないわい。お前のやうな女子を神さんが相手にするもんけ。

巫女　（自尊心を傷けられて）今に苦しめてやるから待つて居れ。土狐の分際で神さまに惡口を申し居るにくい奴ぢや。

（吉治、青松葉を一抱へ持つて來る、およし、オロ〳〵して居る）

巫女　神さんの仰せは大切に思はぬと罰が當りますぞ。

（義助、吉治を相手に不承々々に松葉に火を付け、嫁がる義太郎をその煙の近くへ拉して行く）

義太郎　お父う何するんや。嫁やあ。嫁やあ。

巫女　それをそのお方の聲ぢやと思ふと燻べにくい。皆狐の云ふ聲ぢやと思はないかん。そのお方を苦しめて居る狐を苦しめると思うてやらな、いきません。

およし　なんぼなんでもむごい事やな。

（義助、吉治と協力して義太郎の御を燻の中へ突き入れる。その時母屋の方で末次郎の聲がきこえる）

末次郎　（母屋の内部から）お父さん、おたあさん。歸つて來ましたぜ。

義助　（一寸狼狽して、義太郎を放してやる）末が歸つて來た。日曜でないのにどうしたんやらう。

（末次郎折戸から御を出す。中學の制服を着た、色の淺黑い凛々しい少年。異常な有樣に直ぐ氣がつく）

末次郎　何うしたんです、お父樣。

義助　（きまりわるさうに）えゝ。

末次郎　何うしたんです、松葉なんか燻べて。

義太郎　（苦しさうに呻をして居たが弟を見ると救主を得たやうに）末か。お父うや、吉がよつてたかつて俺を松葉で燻べるんや。

末次郎　（一寸顏色を變へて）お父さん！　まつたこんな馬鹿な事をするんですか。私があれほど云うといたぢや、御座んせんか。

義助　そやけどもな、あらいたかな巫女さんに神さんが乘り移つてな……。

末次郎　何を馬鹿なことを。兄さんが理窟が云へんかつてそんな馬鹿なことをして。（巫女を後目にかけながら燃えて居る松葉を蹴り散す）

巫女　お待ちなさい。その火は神樣の仰せで點いとる火ですぞ。

末次郎　（冷笑しながら踏消してしまふ）……。

義助　（やゝ語氣を變へて）末次郎！　私はな、ちつとも學問がないもんやけにな、學校でよう出來るお前の云ふことは何でも聽いとるけんどな、なんぼなんでも、かりにも神さんの仰せで點けとる火やもの、足蹴にせんやかつてえゝやないか。

末次郎　松葉で燻べて何が癒るもんですかい。狐を追ひ出す云うて、人が聞いたら笑ひますぜ。日本中の神さんが寄つて來たとて、風邪一つ癒るものやありやせん。こんな詐欺師のやうな巫女が、金ばかり取らうと思つて……。

義助　でもな、お醫者さまでも癒らんけにな。

末次郎　御醫者さんが癒らん云うたら癒りやせん。夫は私が何遍も云ふやうに、兄さんが此の病氣で苦しんどるのなら、どんな事をして

も癒して上げないかんけど、屋根へさへ上げといたら朝から晩まで喜びつゞけに喜んどるんやもの。兄さんのやうに毎日喜んで居られる人が日本中に一人でもありますか、世界中にやつてありやせん。それに今兄さんを癒して上げて正氣の人になつたとしたら、どんなもんやろ。二十四にもなつて何も知らんし、イロハのイの字も知らんし、ちつとも腦はなし、おまけに自分の片輪に氣がつくし、日本中で恐らく一番不幸な人になりますぜ。夫がお父さんの望ですか。何でも正氣にしたらえゝかと思つて、苦しむために正氣になる位馬鹿なことはありやせん。（巫女を横目にかけて）藤作さん、あなたが連れて來たのなら、一緒に歸つて下さい。

巫女　（侮辱を非常に憤慨して）神のお告げを勿體なく取り扱ふものには神罰立ち所ぢや。（呪文を唱へて以前のやうな身振りをなし一度昏倒した後立ち上る）我は金毘羅大權現なるぞ。只今病人の弟が申せしことは皆己が利慾の心よりなり。兄の病氣の回復するときは此家の財產が皆兄の物となる故なり。

末次郎　奮然として巫女を突き倒し）何をぬかすんぢや、馬鹿つ！　（二三度蹴る）

巫女　（立ち上りながら急に元の樣子になつて）あいた！　何するんや、無茶な事するない。

末次郎　詐欺め、かいたりめ！

藤作　（二人を隔てながら）まあ坊ちやん、お待ちなさい。さうお腹を立ていでも。

末次郎　（まだ興奮して居る）馬鹿な事ぬかしやがつて！　貴樣のやうなかたりに兄弟の情が分るか。

藤作　さあ、一度引きとる事にしませう。俺があんたを連れて來たのが惡かつたんや。

義助　（金を藤作に渡しながら）何分まだ子供ぢやけに何うぞ勘辨してお呉れやす。彼奴はどうも氣が短かうてな。

巫女　神樣が乘り移つて居る最中に、私を足蹴にするやうな、大それた奴は今晩迄の命も危いぞ。

末次郎　何をぬかすんや。

およし　（末次郎をさゝへながら）默つておいでよ。（巫女に）どうもお氣の毒しましたや。

巫女　（藤作と一緒に去りながら）私を蹴つた足から腐り始めるのや。（二人去る）

義助　（末次郎を見て）お前あいな事をしてゐがあたることはないか。

末次郎　あんなかたりの女子に神さんが乘り移るもんですか。無茶な僞をぬかしやがる。

およし　私は初から怪しい奴ぢや思うとつたんや、神さんやつたらあいなむごいこと云ふもんけ。

義助　（何の主張もなしに）そら、さうやな。でもな末！　お前兄さんは一生お前の厄介やぜ。

末次郎　何が厄介であるもんですか。僕は成功したら鷹の城山の天邊へ高い〳〵塔を作へて、そこへ兄さんを入れて上げる　もりや。

義助　それはさうと、義太郎は何處へ行つたんやろ。

吉治　（屋根の上を指しながら）彼處へ行つとられます。

末次郎　（微笑して）不相變やつとるなう。（義太郎は前の厩舎の間にいつの間にか屋根へ上つて居たらしい。下の四人義太郎を見て微笑を交ゆ）

末次郎　普通の人やつたら通べられたらどなに怒るかも知れんやけど兄さんは忘れとる、兄さん！

義太郎　（狂人の心にも弟に對しては特別の愛情がある如く）末やあ！　金毘羅さんに聞

いたら、あいな女子知らん云うとつたぞ。

末次郎　（微笑して）さうやらう。あいな巫女よりも兄さんの方に神さんが乘り移つとんや。（雲を放れた金色の夕日が屋根へ一面に射かかる）えゝ夕日やな。

義太郎　金色の夕日の中に義太郎の姿はある　鄙きを持つて居る）末見いや。向うの雲の中に金色の御殿が見えるやろ。ほら、見えてるやろ、ほら、一寸見い！　綺麗やなあ。

末次郎　（やゝ不狂人の悲哀を感ずる如く）あゝ見える見える。えゝなあ。

義太郎　（歡喜の狀態で）ほら！　御殿の中から俺の大好きな笛の音がきこえて來るぜ！　好え音色やなあ。

（父母は母屋の中にはひつてしまつて狂せる兄は屋上に、賢き弟は地上に共に金色の夕日を見つめて居る）

——幕——

藤十郎の戀（一幕三場）

人物

坂田藤十郎　都万太夫座の座元、三が津聽藝頭と讃へられたる名人

露浪千鶴　立女形、美貌の若き俳優

中村四郎五郎　同じ座の立役

嵐三十郎　同上

澤村長十郎　同上

袖崎源次　同じ座の若女形

露浪あふよ　同上

坂田市彌　同上

小野川宇源次　同じ座のわかしゅ形

藤田小平次　同上

仙臺彌五七　同じ座の道化方

服部二郎右衛門　同じ座の惡人形

金子吉左衛門　同じ座の狂言つくり

万太夫の若太夫　万太夫座の持主

樂屋頭取　樂屋番　二三人

その他大勢の若衆形、色子など

宗清の女中大珍

宗清の女房お梶　四十に近き美しき女房

その他重要ならざる二三の人物

時代　元祿十年頃

場所　京師四條河原中島

第一場

四條中島　都万太夫座の座附茶屋宗清の大廣間、二月の末のある晩。都万太夫座の役者達に依つて、彌生狂言の飾つないぎの饗宴が開かれて居る。百目蠟燭の燃えて居る銀の燭臺が、幾本となく立て並べられて居る。舞臺の上手に床の間を後に、どんすの鏡蒲團の上に、悠然と坐つて居るのは、坂田藤十郎である。裳を茶筅に結つた色白の美男である。下には鼠繻子の引かへしを著、上には黒羽二重の兩面芥子人形の加賀紋の羽織を打ちかけ、宗傳唐茶の帽帶をしめて居る。藤十郎の右には、一座の立女形たる露浪千壽が坐つて居る。白小袖の上に、紫縮緬の二つ重ねを著、天鵞絨の羽織に、紫の野良帽子をいたゞいた風情は、宛ら女の如く艷めかしい。二人の左右に、中村四郎五郎、嵐三十郎、澤村長十郎、袖崎源次、露浪あふよ、坂田市彌、小野川宇源次、藤田小平次、仙臺彌五七、服部二郎右衛門、金子吉左衛門などが居ならんで居る。席末には若衆形や色子などの美少年が侍して居る。万太夫座の若太夫は杯盤の間を、取り持つて居る。

幕が開くと、若衆形の美少年が鼓を打ちながら、五人囃を揃へて、左の小唄を謠節で歌ふ。

唄「人と契るなら、薄く契りて末遂げよ。もみぢ葉を見よ、薄きが散るか、濃きが散るか、濃きが先づ散るものでそろ」

（歌ひ終ると、役者達拍手をして賞ふ。下手の障子をあけ、宗清の女中赤紙の附いた文箱を持つて出る）

女中　藤十郎樣に、お文がまゐりました。

若太夫（中途で受取りながら）火急の用と見えて。（藤十郎に渡す）

藤十郎（受取りて）おゝいかにも、火急の用事と見えまする。一寸披見いたしまする、皆の衆御免なされませ。なに〳〵、連子どの、巢林より、さては近松樣からの書狀ぢや。（口の中に默讀する、暫後に至りて膝を上げる）此度の狂言われも心に戀り候まゝかくは急飛脚を以て、一筆呈上仕り候、少長どのに仕負けられては、獨り御身樣の不覺のみにてはこれなく、歌舞伎の濫觴たる京歌舞伎の名折れにもなること、ゆめ〳〵御油斷なきやう御工夫專一に願ひ上げ候、（暫く考へて又讀み返す）京歌舞伎の名折れにもなること、うむ、何の仕負けてよいものか。はゝゝ……が、近松樣も　此の藤十郎を思はるればこそ、いかい御心勞ぢや。

千藤（言葉も女の如く）左樣でムりますとも、此度の狂言には、迫の近松樣も三日三晩、肝腦を碎かれたとの事ぢや。ほんに、仇やおろそかには思はれぬわいなう。

彌五七（道化方らしく誇張した身振で）されば こそ、前代未聞の密夫の狂言ぢや。傾城買にかけては日本無類の藤十郎さまを、今度はかつきりと氣を更へて、密夫にしようとする工夫ぢや。傾城買の戀が、春の夜の戀なら、之はきつい暑さの盛夏の戀ぢや。身を焦すほど烈しい戀ぢや。

四郎五郎　夏の日の戀と云ふよりも、恐ろしい冬の夜の戀ぢや。命をなげての戀ぢや。

三十郎　命がけの戀ぢやとも。まかり違へば、粟田口で磔にかゝらねばならぬ恐ろしい命がけの戀ぢや。

源次　昨日も宮川町を通つて居ると、わたしの前を、香具賣らしい商人が、二人連高に話しして行く。傾城買の四十八手は、何一つ心得ぬことのない藤十郎樣が、密夫の所作を、どなに仕活すか、さぞ見物樂をアッと云はせることだらうと、夢中になつての高話ぢや。

長十郎　藤十郎の紙衣姿も、毎年見ると、少しは堪能し過ぎると、惡口を云ひくさつた公卿樂だちも、今度の新しい狂言にはさぞ驚くことでムりませう。

二郎右衛門　それにしても、春以來大入續きの半左衛門座の中村七三郎どのに、今度の狂言で一泡吹かせることが出來ると思ふと、それが何よりの樂しみぢや。半左衛門座に、引き附けられた見物樂の大波が、万太夫座の方へ寄せ返すかと思ふと、それが何よりの樂しみぢや。

四郎五郎　まうは申すものの、新しい狂言だけに、藤十郎さまの苦心も、並大抵ではあるまい。昔から、樂道のいきさつ、傾城買、禮事、道化と歌舞伎狂言の趣向は、大抵極まつて居たものを、底から覆すやうな門左衛門さまの新趣向ぢや。それに京で名高い、大經師のいきさつを、そのまゝ取入れた趣向ぢやもの、此の狂言が當らいで、何としようぞなう。

若太夫（得意になりながら）四郎五郎さまの云はれる通りぢや。（藤十郎の前に、ゐざり寄りながら）前段ひに、もう一つ受けて下されませ。傾城買の所作は、日本無類の御身樣ぢやが、道ならぬ戀のいきかたは、又格別の御趣向がムりませうな。はゝゝ。

（藤十郎、役者たちの談話を聽いて居る頃から、だん〳〵不愉快な表情を示し始めて居る。若太夫の差した杯を、だまつたまゝ受けて飲み乾す）

（藤十郎の不機嫌に氣が附いて、やゝ取りなすやうに）ほんに、若太夫の云ふ通り、藤十郎樣にはその邊の御思案が、もうちやんと

附いて居る筈ぢや。われらなど、たゞ藤十郎様を頼りにして、傀儡のやうに動いて行けばよいのぢや。

芳太夫 （千壽の取りなしに、力を得たやうに）今度の狂言に比べますと、大當りだと云ふ傾城淺間ケ嶽の狂言などは、淺薄な性もない趣向でムりまする。密夫の狂言とは、迫は門左衛門様でムりまする。それに附けましても、坂田様にはかうした變つた戀の覺えも、ムりませうな、はゝゝゝ……。

藤十郎 （先刻から、益々不愉快な惰ましげな表情をして居る。若太夫の最後の言葉に、傷つけられたやうにむつとして）左様なこと、何のあつてよいものか、藤十郎は、生れながらの色好みぢやが、まだ人の女房と懇ろした覺えはムらぬわ。

若太夫、（座興の積りで云つたことを眞向から、突き放され、興さめて默つてしまふ）

千壽 （再び取りなすやうに）ほんに、坂田様の云はれる通りぢや。此の千壽とても、主ある女房と懇ろしたことは、ないわいな。

他の役者たち （皆一齊に笑ふ）……。

彌五七 それは誰とても同じ事ぢや。女房がすれば格別、主ある女房に云ひ寄つて、危い思ひをするよりも、宮川町の唄女、室町あたりの若後家、祇園あたりの花車、四條五條の町娘、役者の相手になる上臈たちは、星の數ほどあるわ。はゝゝ。

源次 だがなう、一盞二妾三婢四妻と云うて、盜み喰ひする味は、また別ぢやと云ふほどに、人の女房とても捨てたものではない。

長十郎 さては、そなたには覺えがあると見える。

源次 何の、覺えがあつてよいものか。だがなう、碌が恐ければ、世に密夫の沙汰は絶えようものを、絶えぬ證據は、今度の狂言に出るおさん茂右衛門ぢや。色事の道は又別ぢやはゝゝゝ。

芳太夫 （自分の惰氣たことを、隱さうとして）座が淋しい。さあ……若衆達、速舞なと舞はしやんせ。

三四人の若衆 あいなう。（立つて舞ひ始める）

（藤十郎、默々として、ひそかに狂言の工夫をめぐらす如き有様なれしが、一座の注意が連鎖に惹かれたる間に、ひそかに座を立つ。正面の障子をあけて、靜かに廊下に出づ）

（若衆達は、舞ひつゞけて居る。鼓の音が、烈しく賑かになる。役者たちも、浮れ氣味になる）

彌五七 （可笑しき樣子にて立上りながら）わしも連舞ひの群に入らうぞ。

四郎五郎 美しき若衆達と、禿げた彌五七どの。これは一段と面白い取り合はせぢや。鼓はわしが打たうぞ。

（若衆達と一緒に、彌五七、道化たる身振にて舞ふ。皆、笑ひさゞめく裡に、舞臺廻る）

第二場

宗清の離座敷。左に鴨の河原の一部が見える。右に母屋の方へ續く長い廊下がある。網行燈の光が、美しい調度を更かしく照して居る。

幕が開くと、藤十郎は右の廊下を、腕組みをしながら歩いて來る。時々、立止まつて考へる。廊下の柱に靠れて、考へる。又々、二三歩、歩みながら、簡單な所作の形を附けて見たりする。漸く離座敷に來る。障子を開けて、人は居らぬか

と確めた後靜に這入る。懷中から書抜きを取出す。

藤十郎 （書抜きを讀みながら、形を附けて見る）かくなり果つる上からは、縱令水火の苦しみも……（工夫附かざる如く、書抜きを投げ出して、考へ始める。立つて、女の手を取る如き形をして見る。又書抜きを開いて、ぢつと見詰める）死出三途の道なりとも、御身とならば厭はじこそ……（又絶望したる如く、書抜きを投げ捨てゝ頭を抱へて沖思する。氣を更へて立ち上り無言にて動いて見る。工夫遂に附かざる如く、後へ手を突いて坐りながら、低い嘆息の言葉を洩す。到頭工夫を一時中止したる如く、床の間に置いてあつた脇息を手を延ばして取り、それに右の肱を寄せながら、身を横にする）

（暫く何事もない。母屋の大廣間で打つて居る鼓の音や、太鼓の音などが、微かに聞えて來る。藤十郎は、靜に目を閉ぢる。ふと廊下に人の音が聞える。藤十郎は、一寸目を開き、又書抜きを顔に當て、寢た振をしてしまふ。廊下に現れたのは、宗清の女房お梶である。足早に近づくと、何の會釋もなく障子を開ける。藤十郎の姿を見て驚く）

お梶 あれ、藤様でムりましたか。いかい粗相をいたしました。御免下さりませ。（直ぐ去らうとする。ふと、氣が附いたる如く）ほんに女子共の氣の附かぬ。このやうに冷える所で、さうして御座つては、お風邪など召すとわるい。どれ、私が夜の具をかけて進ぜませう。（部屋の片隅の押入から夜具を出さうとする）

藤十郎 （宗清の女房であると知ると、起き直つて居ずまひを正しながら）おゝこれは、御内儀でありましたか。いかい御造作ぢやなう。

お梶 何んの造作で御座りませう。さあ、横になつてお休みなさりませ。

（藤十郎はふと、お梶の顔を見る。色のくつきりと白い細面に、眉の跡が美しい。最初は恍然として居た藤十郎の瞳が、だん〳〵險しく〳〵なつて來る。お梶は、藤十郎の不思議な緊張に少しも氣附かぬやうに、羽二重の夜具を、藤十郎の背後から、ふうはりと著せる）

お梶 さあ、お休みなさりませ。彼方へ行つたら、女どもに水なと運ばせませうわいな。（何氣なく去らうとする）

藤十郎 （瞳がだん〳〵光つて來る。お梶の去るのを、ぢつと見て居たが、急に思ひ附いたやうに後から呼びかける）お梶どの。お梶どの。ちと待たせられい。

お梶 （一寸驚いたが、併し無邪氣に）何ぞ御用があつてか。（と坐る）

藤十郎 （夜具を後へ押しやりながら）ちと、御意を得たいことがある程に、もう少し近く來てたもらぬか。

お梶 （少し不安を感じたる如く、もじ〳〵して餘り近よらない。が、やはり無邪氣に）改まつて、何の用ぞいなう。おほゝゝゝゝ。

藤十郎 （低いけれども、力强い聲で）ちと、そなたに聞いて貰ひたい仔細があるのぢや。もう少し、近う進んでたもれ。

お梶 藤様としたことが、又眞面目な顔をして何ぞ、てんがうでも云ふのだらう。（ゐざり寄りながら）かう進んだが、何の用ぞいなう。

藤十郎 （全く眞面目になつて）お梶どの、今宵は藤十郎の懺悔を聽いて下されませぬか。この藤十郎は、二十年來、そなたに隱して居たことがあるのぢや。それを今宵は是非にも聽いて貰ひたいのぢや。思ひ出せば古い事ぢや、そなたが十六で、われらが二十の歳の秋

ちやつたが、祇園祭の折に、河原の掛小屋で、二人一緒に、連舞を舞うたことがあるのを、よもや忘れはしやるまいなあ。（ぢつとお梶の顔を見詰める）

お梶　（昔を想ふ如く、やゝ恍然として）ほんにあの折はなう。

藤十郎　われらが、そなたを見たのは、あの時が初めてぢや。宮川町の歌女のお梶どのと云へば、いかに美しい若女形でも、足下にも及ぶまいと、曾々人の噂には聽いて居たが、初めて見れば聞きしに勝るそなたの美しさぢや。器量自慢であつたこの藤十郎さへ、そなたと連れて舞ふのは、身が退けるほどに、思うたのぢや……（ぢつと、さし俯く）

お梶　（顔を火の如く赤くしながら、さし俯いて言葉なし）……。

藤十郎　必死に緊張しながら）其時からぢや、そなたを、世にも稀なる美しい人ぢやと思ひ染めたのは。

お梶　（羞し俯きながら、愈々うなだれて、身體をかすかに、わなゝかせる）……。

藤十郎　（戀をする男とは、何うしても受取れぬほどの澄んだ冷たい眼附で、顔さへ擡げぬ女を、刺し透すほどに、鋭く見詰めながら、聲丈には、烈しい熱情に顫へて居るやうな響を持たせて）そなたを見染めた當座は、折があらば云ひ寄らうと、始終念じては居たものの、若衆方の身は、親方の掟が嚴しうてなあ、すぐ時も己が心には、委せぬ身體ぢや。たゞ心丈は、焼くやうに思ひ焦がれても、所詮は機を待つより外はないと、思ひ諦めて居る内に、二十の聲を聞くや聞かずに、そなたは此家の主人、清兵衛殿の思はれ人となつてしまはれた。その折のわれらが無念は、今思ひ出しても、此の胸が張り裂くるやうに、苦しうおぢやるわ。（かう云ひながら、藤十郎は座にも堪へぬげに、身悶えをして見せる。が、彼の二つの眸だけは、爛々たる冷たい光を放つて、女の息づかひから、容子を恐ろしき迄に、見詰めて居る）

お梶　（やゝ蒼褪いた如く、顔を半ば上げる。一旦蒼ざめ切つてしまつた顔が、反動的に段々薄赤くなつて來て居る。二つの眸は火の如く凄じい）……。

藤十郎　（言葉丈は熱情に顫へて）人妻になつたそなたを、戀ひ慕ふのは、人間の道ではないと心で強う制御しても、止まらぬは凡夫の思ひぢや。そなたの噂をきくに附け、面影を見るにつけ、二十年のその間、そなたのことを、忘れた日はたゞ一日もおぢやらぬのぢや。（彼は舞臺上の演技にも、打ち勝つたほどの巧みな所作を見せながら、而も人妻をかき口説く恐怖と不安とを、交へながら、小鳥の如く嫌んで居る女の方に詰めよせる）が、此の藤十郎も、緩合色好みと云はるゝとも、人妻に戀をしかけるやうな非道な事はなすまじいと、明暮燃えさかる心を、ぢつと抑へて來たのぢやが、われらも今年は四十五ぢや。人間の定命はもう近い。これほどの戀を……二十年來忍びに忍んだこれほどの戀を、此世で一言も打ち開けいで、何時の世離にか語るべきと、思ふに附けても、物狂はしうなる迄に、心が擾れ申してかくの有樣ぢや。なう、お梶どの、藤十郎をあはれと思召さば、たつた一言情ある言葉を。なあ！　お梶どの。（狂ふ如く身悶えしながら、女の近くへ身をすり寄せる。が瞳だけは刃のやうに澄み切つて居る）

お梶　わ：つ。（と云つたまゝ、泣き伏してしまふ）

藤十郎　（泣き伏したお梶を、ぢつと見詰めて居る。その唇のあたりには、冷たい表情が浮んで居る。が、それにも拘らず、聲と動作とは、戀に狂うた男に適はしい熱情を持つて居る）なうお梶どの。そなたは、藤十郎の嘘偽りのない本心を、聽かれて、藤十郎の戀を、あはれとは思さぬか。二十年來、忍びに忍んで來た戀を、あはれとは思さぬか。さりとは、強いお人ぢやなう。

お梶　（すゝり泣くのみにて答へず）……。

（二人とも、おし默つたまゝで、暫くは時刻が移る。灯を慕つて來た千鳥の、銀の鈴を使ふやうな聲が、手に取るやうに聞えて來る）

藤十郎　（自嘲するが如く、淋しく笑つて）これは、いかい粗相を申しました。が、此の藤十郎の切ない戀を、情なくなされると迚、さても氣強いお人ぢやなう。舞臺の上の色事では、日本無雙の藤十郎も、そなたにかゝつては、たわいもなう振られ申したわ。はゝゝゝゝゝ。

お梶　（ふと顔を上げる。必死な顔色になる。低い消え入るやうな聲で）それでは藤樣、今仰しやつたことは皆本心かいな。

藤十郎　（追に必死な蒼白な面をしながら）何の、てんがうを云うてなるものか。人妻に云ひ寄るからは、命を投げ出しての戀ぢや。（浮腰になつて居る彼の膝が、微かに顫へる）

（必死の覺悟を定めたらしいお梶は、火のやうな瞳で、男の顔を一目見ると、いきなり傍の紗行燈の灯を、フッと吹き消してしまふ。闇の裡に恐ろしい躊躇と沈默とが、二人の間にある。お梶は身體を、わな〳〵顫はせながら、男の近づくのを待つて居る。藤十郎の顔も眼が上ずッてしまつて、足がかすかに顫へる。漸く立ち上る。お梶の方へ歩みよる。お梶は必死になる。が、藤十郎は、その傍をスルリと通りぬけて　手探りに廊下へ出る）

（男の去らんとするに、氣が附いて）藤樣！　藤樣！（と低く呼びながら、追ひ縋らうとする）

（藤十郎、お梶の追ふに氣が附いて、背後の障子を閉める。お梶障子に縋り附いたまゝ、身を悶えつゝ泣き崩れる。藤十郎やゝ狼狽しながら、獸の如く足早に逃れ去る。お梶の泣く聲に交じるやうに、千鳥の聲が聞える）

第三場

第二場より、七日ばかり過ぎたる一日。

都。万太夫座の樂屋。上手に役者達の部屋、部屋の入口が見える。その中で、一番目立つのは梅鉢の紋の附いた暖簾のかゝつた藤十郎の部屋である。舞中に、樂屋番の部屋がある。下手に万太夫座の舞臺に通ずる出入口がある。淺黄の暖簾が垂れて居る。彼方の舞臺にては幕が開く前と見え、鼓と太鼓と笛の音とが斷續して聞える。幕が開くと、狂言方や下廻りの役者達が、五六人右左に忙しく行き交ふ。樂屋番が、衣裳屬の物などを、役者の部屋へ運んで行く。

万太夫座の若太夫が、藤十郎の部屋から出て來る。出會頭に頭取と挨拶する。

頭取　おめでたうムんす。今日も明六つの鐘が鳴るか鳴らぬに、木戸へは一杯の客樂でムりまする。

万太夫　めでたいなう。ほんに藤十郎どのぢや。密夫の身のこなしが、とんとたまらぬと京女郎たちの噂話ぢや。

頭取　これでは、半左衛門座の人々も、あいた口が、閉がらぬことでムりませう。この評判なら百日はおろか二百日でも、打ち續けるは

定でムりまするなう。

若太夫 何にしてもめでたい事ぢやなう。樂屋中よく氣を附けてなう、組相のないやうになう。こんな大入りの時に、限つて火事盜難などの過ちがありがちでなう。

頭取 へい〳〵。合點でムりまする。

（二人左右に別れる。下手の出入口から、丁稚を連れた手代風の男が入つて來る）

手代風の男 （頭取を呼びかけて）あゝもしもし。藤十郎樣のお部屋は、何處でムりまするか。

頭取 どちらからぢや。お部屋は直ぐ彼處ぢやが。

手代風の男 四條室町の備前屋の手代でムりまする。

頭取 おゝ室町の大臺のお使ひでムりまするか。さあ！ お通りなさりませ。左から二つ目の部屋ぢや。

手代風の男 なるほどな、梅鉢の紋が附いて居りますなう。

（手代風の男、藤十郎の部屋へはひつて行く。藤十郎の部屋の直ぐ隣から、大經師以春に扮した中村四郎五郎と、召使お玉に扮した袖崎源次とが出て來る）

四郎五郎 （源次の袖を捕へながら、一寸所作をして）何うもお前にじやれかゝる所がうまく行かぬのでなう。今日は三日前ぢやが、まだ形が付かぬでなう。昨日、藤十郎どのに、數へを乞うて見ると、自分で工夫が肝心ぢやと、云はしやれた。さあ、幕の開く前に、もう一度稽古に附き合うてたもらぬか。

源次 おゝ安い事ぢや。何度でも附き合はう。藤十郎どのに、工夫を訊ねると何時も、強いお小言ぢや。みんな 自分で工夫せいとはあの方の極まり文句ぢや。

四郎五郎 おゝ一昨年の事ぢや、山下京右衛門が、江戸へ下る暇乞ひに藤十郎どのの所へ來て、わがみも其許を萬事手本にしたゆゑに、藝道もずんと上達しましたと云はれると、藤十郎どのは何時ものやうに、一寸御を繋められたかと思ふと、「人の眞似をする者は、その眞似るものよりは必定劣るものぢや。そなたも、自分の工夫を專一にいたされよ」と、にとりともせずに眞向からぢや。あの折の京右衛門どののいれいき方を、思ひ出すと今でも可笑しくなるのぢや。

源次 藤十郎どのから、お小言を喰はぬ前に、もう一工夫して見よう。

四郎五郎 （急に芝居の身振をなし）これさ、どつこいやらぬ。本妻の情氣と饂飩に胡椒はおさだまり、何とも存ぜぬ。紫色はおろか身中が、かば茶色になるとても、君ゆゑならば厭はぬ。

源次 （應じて芝居の身振りをしながら）どうなりとさしやんせ。こちやおさん樣に云ふほどに。あれおさん樣〳〵。

四郎五郎 （やはり身振りを續けながら）やれやかましい其外おさんわにの口、くちの序に口々（急に役者に立ち返りながら）何うも茲の所が、うまく行かぬのぢや。

（芝居茶屋の花車女に案内され、若き町娘下手の入口よりは入つて來る）

花車女 おゝ源次さま。丁度よいところぢや。それ〳〵、此間一寸お耳に入れた東洞院の近江屋のお嬢樣でムりまする。

源次 （四郎五郎に、氣兼ねをしながら）もう幕が開きますほどに、又にして下さりませ。

花車女 ほんに情ない事を、云はれますなう。折角樂屋まで、來られましたのに、一寸言葉なりと交はして下さりませ。

源次 （もじ〳〵しながら、娘に對して）ほんに、ようお出でなさりました。

町娘 （同じく恥ぢらひながら、默つて頭を下げる）……

花車女 さあ、一寸私の茶屋まで、入らせられませい。ほんの一寸ぢや、手間はとらせませぬほどに。

源次 さうはして居られませぬわい。もう直ぐ開きまする。

花車女 何のまだ開きまするものかいなう。さあ御座りませ。（無理に源次の手を取りて、下手の入口より娘を伴うて去る）

（助右衛門に扮した仙臺彌五七、手代丁稚に扮した三四人の俳優と揃うて、右手より出て來る）

甲 この頃の娘は油斷がならぬ事ぢや。役者を惑うて樂屋まで、つめ〳〵とは入つて來る。

乙 それにしても、袖崎どのは果報ぢや。男知らずの町娘から、あのやうに惚はれては、滿更悪いうはあるまい。はゝゝゝ。

丙 それにしても、見物人のどよみやう。小屋が、割れるやうな大入と見える。

四郎五郎 （相手の源次を失うて、ぼんやり立つて居たが）江戸の少長に、此の大入りの樣子が見せたいなう。

彌五七 ほんにさうぢや。此の狂言に比べると、淺間ケ嶽の狂言などは、子供だましぢや。

四郎五郎 淺間ケ嶽に立つ煙もだん〳〵薄うなつて行くのぢや。はゝゝゝ。

（霧波千壽、美しいおさんに扮して、靜かに部屋から出て來る。金剛が附いて居る）

彌五七 昨日一寸ある所で、聞いた噂ぢやが、藤十郎どのは、今度の狂言の工夫に惱んだ揚句、ある茶屋の女房に戀をしかけ、密夫の心持や、動作の形を附けたと云ふ事ぢやが、眞實かなう。

郎五郎 わしは、しかとは知らぬが、千壽どのは、聞いたであらう。その噂は實正かなう。

千壽 そんな噂は、わしも人伝には聞いたがなう。藤樣は、口をつぐんで何も云はれぬのでなう。が、あの宗清の酒盛があつた晩の事ぢやが、藤樣は狂言の工夫に屈託して、酒宴の席を中座され、そなた達は、迚々醉ひつぶれて、別間へ退かれた後の事ぢやなう。藤樣が、蒼い顔して、息を切らせながら、酒宴の席へ歸つて來られると、立てつゞけに、大杯で三四杯呷つてから云はれるのに、「千壽どの、安堵めされい、狂言の工夫が附き申した」と云はれたが、平生の藤樣とは思はれぬほどの恐い顔附ぢやつたが、あの晩に……。（と千壽が首を傾けて居るとき、下手の入口から、宗清のお梶が、ひそかには入つて來るのに氣がついて、口をつぐむ）

彌五七 （役者の道化振りを發揮して）これはこれはお梶どの。ようお出でなされました。一寸お尋ねしまする、藤十郎どのが、狂言の稽古の相手は貴女樣では御座りませぬか。

お梶 （緊張しながら、兩もつゝましやかに）何で御座りまする。藪から棒のお尋ねで御座りまするなう。

彌五七 （矢張り道化た身振りで）藤十郎どのが、今度の狂言の稽古に人の女房に偽りの戀をしかけ、密くと見て、逃げたとの事で御座りまする。もしやお心當りが御座りませぬか。

お梶 （つゝましやかに、憲度をみださず）偽りにもせよ、藤十郎樣の戀の相手に、一度でもなれば、女子に生まれた本望で御座りますわい。

彌五七 よくぞ、仰せられた。はゝゝ。

千壽 （やゝ取りなすやうに）ほんに、日頃から貞女の噂高いそなたでなければ、さしづめ疑がかゝる所で御座りますなう。樂屋へ御用で

御座りまするか。さあお通りなさりませ。

お梶 あのう、嵐三五郎さまに、お客様からの言傳を。

千壽 さやうで御座りまするか。さあ、お通りなさりませ。

（お梶會釋して通り過ぎる。役者の部屋の方へ行かんとして、部屋を立ち出でたる藤十郎と顔を見合はす。二人とも、瞬間的に立ち竦む。お梶一寸目禮して行き過ぎる。藤十郎、暫く後姿を見詰むる）

四郎五郎 （藤十郎の立ち出でたるを見て）今も、そなた様の噂をしてぢや。今度の狂言について、樂屋の内外に擯がつた噂を、御存じか。

藤十郎 （座元らしい威嚴を失はないで）一向聞きませぬな。

彌五七 噂の本尊のそなた様が知らぬとは、面妖な。

千壽 藤様には、云はぬがよいわいな。

彌五七 云はいでも、何時かは知れる事ぢや。藤十郎さま、お聞きなさりませ。今度の狂言の工夫に、そなた様がある人妻に戀をしかけたとの噂ぢや。

藤十郎 （快活に笑つて）埒もない穿鑿ぢや。いつぞやも、わしが嵐三五郎の手負武者を介抱すると、あまり手際がよいと云うて、やれ藤十郎は外科の心得があるなどとやかましい沙汰ぢや。心得がなうても、心得のあるやうに眞實に見せるのが、役者の藝ぢや。油賣りになれば、油賣つた心得がなうても、油賣りになつて見せるのは藝ぢや。密夫の心得がなうて、密夫の狂言が出來ねば、盜人の心得がなうては盜人の狂言は出來ぬ譯合ぢや。公卿衆になつた心得がなうては、舞臺の上で、公卿衆にはなれぬ譯合ぢや。埒もない沙汰ぢや。口性ない、京童の埒もない沙汰ぢや。そのやうな沙汰が傳つては、藤十郎の身近に居る人様のお内儀に、どのやうな迷惑をかけやうも計られぬわ。かまへて、打ち消して下さりませ。

千壽 ほんに、藤様が云はれる通りぢや。

彌五七 迫は藤十郎ぢや。なるほどなあ。心得がなうては狂言が出來ぬとなれば、役者は上は摧政賜白から、下は下列下郎のはしまで、一度はなつて見なければ、役者にはなれぬ筈ぢや。なるほどなあ。

手代風の男 （藤十郎の部屋から出て來て）それでは、失禮いたしますで御座りまする。

藤十郎 御苦勞で御座りました。大盡様に、よう禮を云うて下さりませ。

（手代風の男、丁稚と共に去る。幕の開くこと急々近くなりしと見え、道具方樂屋番等の往來繁くなる）

藤十郎 （千壽を顧みて）千壽どの。あの闇の中で、そなたと初めて手を取り合ふとき、今少し逆上した風を見せてたもらぬか。女はあのやうなときは、男よりも身を世もあらぬやうに逆上するものぢやほどになら。

千壽 （素直に）あいなら、合點ぢや。今日は作者の門左衞門様も、御見物ぢやほどに、一段心を籠めてして見ますわいなう。

藤十郎 さあ、もう幕が開くに程もあるまい。（千壽の手を取りて行かんとす、急に、樂屋内が騒ぎ出す。「自害ぢや。自害ぢや。女の自害ぢや」と、道具方や下廻りの役者達が、役者の部屋の方へ駈け込む）

顧取 （周章てゝ駈け込みながら）あゝ、驛を立てゝはならん。見物が騒ぎ出すと、舞臺の方がめちやくちやぢや。靜かに、靜かに。（皆の後から奥の方へ這入る）

彌五七 （やつぱり道化方らしいやゝ上ついた

濃度で）はて面妖な。自害、しかも女の自害とは。樂屋には、牝猫一疋居らぬ筈ぢやがなう。

千壽 （同じく不思議さうに）女の自害！ はて女の自害！

藤十郎 （思ひ當ることある如く、やゝ蒼白になりながら默つて居る）……。

（道具方樂屋番など、お梶の死體を擔いで來る。口々に、「宗清のお内儀ぢや」と云ふ）

千壽 （駈いて駈け寄りながら）なに！ 宗清のお内儀！ （ふと氣の附いたやうに、藤十郎の方を振り返る）

藤十郎 （千壽の振り返つた眼を避くるやうに、目をそらして居る）……。

彌五七 いかにも宗清のお内儀ぢや。短刀で胸の下をたつた一突きぢや。

四郎五郎 今茲で話して行かれたのに、ほんの暫く間の最期ぢや。藤十郎さま、御覽なされませ、いかな仔細かは分りませぬが、女子には稀な見事な最期ぢや。

藤十郎 （引き附けられたやうに、歩み寄りながら、ぢつと死顔に見入る。言葉なし）……。

若太夫 （息せきながら、駈け込んで來る）何事ぢや、何事ぢや。なに、女の自害！ やあ宗清のお内儀ぢや。いかな仔細かも知らぬが、なにも万太夫座の樂屋で、自害せいでもよいものを。

千壽 ほんに、樂屋に死にに來ないでも。（ふと藤十郎の顔を見て默る）……。

彌五七 こんな不吉な事が、世間に知れると、折角湧き立つた狂言の人氣に、傷が附かぬものでもない。

若太夫 ほんにそれが心配ぢや。皆様、他言は無用にして下さりませ。

藤十郎 （默つて死體を見詰めて居たが、急に氣を更へて）何の、心配な事があるものか。藤十郎の藝の人氣が、女子一人の命などで傷けられてよいものか。（千壽の手をとりながら）さあ、千壽どの、舞臺ぢや。

千壽 （眞實の女の如くやさしく）あいなう。（藤十郎、つか〳〵と舞臺の上へと急いだが、また引返して死體を一目見、遂に思ひ決したる如く、退場す。同時に幕の開く拍子木の音が聞えて靜かに幕が下りる）

義民甚兵衛（三幕）

人物

農夫　甚兵衛　廿九歳、甚しき跛者
その弟　甚吉　廿五歳
同　甚三　廿二歳
同　甚作　廿歳
甚兵衛の継母　おきん　五十歳前後
隣人　老婆　およし　六十歳以上
庄屋　茂兵衛
村人　勘五郎
村人　藤作
一揆の首領　甲、乙
役吏、村人、一揆、その他多勢

時代　文政十一年十二月

場所　讃岐國香川郡弦打村

第一幕

甚兵衛の家。藁葺きの、大なれども汚き百姓家、左に土間、土間につゞいて臺所あり、臺所の右は八畳の居間、畳も柱も黒く光つてゐる。入口の柱には、金毘羅大神宮の大なる札を貼つてゐる。その札も、黒くくすぶつてゐる。八畳の奥は障子で奥に部屋のあることを示してゐる。家財道具は殆んどなし。

母屋の左に接近して、一棟の建物がある。割られて、牛小屋と納屋とになつてゐる。牛はゐない。

おきん　畜生！　また大根を、二三本盗みやがつた！　作、今度見付けたら背骨の折れるほど、どやし付けてやれ！　何處の何奴やらう。

甚作　新田の櫪が、昨日夕方裏の畑のところを、ウロ〳〵してゐたけに、彼奴かも知れんぞ。飼餌で殖えたのは、畑泥棒ばつかりぢや。

おきん　大根やつて、今年は米の飯よりも大事ぢや、百本ばかりある大根が、冬中のおもな食物ぢやけになあ。

甚三　おつ母、本津の藤兵衛の家ぢやもう食物が盡きたけに、來年の籾種にまで、手を付けたと云ふぞ。

おきん　藤兵衛が家でけ、えゝ氣味ぢや。藤兵衛の鳴め、俺が何時か小豆一升借せ云うて、籾んだのに、借せんと云うて、はね付けやがつたものな。

（おきん、臺所へは入り水甕より水を汲んで大根を洗つてゐる。隣家の老婆およじ、は入つて來る。ボロ〳〵の衣物を着て、疼せはてゝゐる）

およし　甚作さん達、何してゐるんぢや。

甚作　これから魚掏ひに行くんぢや。

およし　お前の所ぢや、まだそなことが出來るから、えゝな、わしの所ぢや、老人夫婦で、泥鰌一疋捕ることやて出來やせん。喰べるものは、もう何にも、なしになつてしまうた。

甚三　およし婆さん、羨むなよ。これでな、二人で一日中小溝を漁つてもな、細い泥鰌の二十疋も取ればえゝ方ぢやぞ。

およし　さうかな。

甚三　この近所ぢや、銘々で取り盡くして、川には、小鮒一つやて、居りやせんわ。山には、山の芋どころか、のびるだつて餘計は殘つて居らんぜ。

およし　もう一月もしたら、何喰ふやらうぜ。

甚三　大方壁土でも喰つてゐるやらう。

甚作　瀧の宮の方ぢや、もう松葉喰うとるだ。

およし　民百姓が、こなに苦しんどるのに、お上ぢやまだ御年貢を取るつもりで居るんぢやてなう。

甚作　お年貢米の代りに人間の乾干しを收めるとえゝぜ。

およし　明和の飢饉ぢやて、これほどではなかつたなう。

甚三　あの時には、お救ひの小屋が立つたと云ふぢやないか。

およし　さうぢや、さうぢや。わしもな、お救ひ小屋のお粥を貰うたがなあ、ひどい飢饉ぢやつたけれどもな、今度ほどは困らなかつたぞ、みんな、お上がよかつたからぢや。御家老樣が、偉い御家老樣だつたでな、お藏米を惜しけもなくお下げになつたのぢや。

甚三　今度は、お藏米どころか、こちとらを、逆さにして鼻血まで、搾り出さうとしてゐる。

およし　わしもなあ、長生したおかげで、喰ふや飲まずの辛い目に逢ふことぢや。（ふと、この家に來た用向に氣がついて、云ひ憎さうに）おきんさん、わしは、お願みがあつて來たんぢやがな。

おきん　（直ぐ警戒するやうな顔をして）何ぢや！

およし　あのな、えらい云ひ憎い願みぢやがな、お前とこの大根を、一本借して貰へんかな。

おきん　（默つてゐる）……。

およし　村中で、みんな羨んどる。おきんさんところぢや、よう大根作つた云うてな。飢饉で何も出來なかつたのに、大根丈はよう出來た。

おきん　おきんさんは、よう氣が付いたと云うてな。

おきん　（大根を大切さに庖丁で、切りながら）おぬしには、この初日にも一本借してやつたな。

およし　あゝさう〳〵、わしもよう覺えてゐるでな、御時世がようなつたら、十倍にも百倍にもして、返さうと思つとるんぢや。ぢやけどな、おきんさん、わしは度々無心云ひたうはないぢやけどな、家の茶がな、二三日前から、病ひつくてな、――喰ふものを喰はんぢやけに、病ひつくのも當り前ぢやがな、……それでな、青物が喰ひたい〳〵云うて口ぐせのやうに云うとるでな、何ぞ、喰べられるやうな草があるかと思うてな、野面を走り廻つたけども、冬の眞中ぢやで何もないんぢや。わしの亭主、助けると思うてな、大根一ツ融通してくれんかな。御時世が直つたらな、十本にでも百本にでもして返すけにな……。

おきん　（默つて、大根を鍋に入れる）……。

およし　なあ、おきんさん、わし達、助けると思つてな。

おきん　（冷然として）まあ、堪忍して貰はうけな。

およし　（驚いて）えゝ何やと。

おきん　御時世が直つて、大根を一本返して貰ふより、今の一本の方が大事ぢやけにな。

およし　（弱々しき反抗で）えらうまあ、無慈悲なことを云ふなう。

おきん　云はいでかなう。この時節に、食物の事では、親子兄弟でもな、血眼になつとるんぢや。

およし　大根一本が、それほど惜しいかなう。

おきん　ふゝむ、何云つてゐるだ。おぬしの方が、それほど欲しがつてゐるぢやないか。この頃では、甚吉の家の大根云うてな、みんな評判してな、一本でも二本でも盗まうとしとるんぢや。家中、代り番こに、ねず番しとるんぢや。一朱銀の一つも持つて來るがえゝ、大根の一本や二本奚れてやるけにな。

およし　（憤然として）人情を知らんのにも程があるなう。

おきん　何云つてゐるぞ。この時節に、人情だの義理だの云つとると、乾干しになつて死んでしまふわ。本津の儀太郎を見いな、米俵、山のやうに積んであつても、一合一勺だつて、此方等に惠んでくれたかなう。一石百五十匁もしたら、賣らうと思つとるんぢやないか、此方等のやうな、水呑百姓が大根一本だつて、人に奚れられるけ。無駄口利かんと、早う歸つたらえゝわ。

甚作　（見かねて）お母、そなな無愛想なこと云はんで、一本位借してやれな。まだ一みねはあつたんぢやないか。

おきん　何、入らんこと云ふのぢや。みんなお前達が、可愛いけに、大根の一本も惜むんぢやないか。ぐづ〳〵云はんと、早う出かけて泥鰌の一疋でもよけいに取つて來い。

甚三　甚作行かう。およし婆さ、家のお母一克者ぢやけに、云ひ出したら、後へ引かんけにな、今日は諦めて、歸るとえゝわ。

およし　何が、一克者ぢや。三途川の婆はあのやうに、欲の深い奴ぢや。（歸りかけて）今にみろ、わし達が飢ゑて死ぬときには、うんとこさと呪つてやるからな。

おきん　えゝわ、なんぼなと呪へ。おぬしのやうなおいぼれに、呪はれたつて、何の恐いことがあるもんけ。

およし　業つくばりめ。

おきん　おいぼれめ。おぬし達早う飢ゑて死ねよ、それ丈、藪がのびて、他の者が困かるわ。

およし　（口惜しがつて）女子のくせに、よう無慈悲なことが云へるな。えゝわ、えゝわ。今に思ひ知らせてやるけに。（退場する）

おきん　この大根と粟とで、春まで命をつなぐんぢや。一本だつて、他人にやつて堪るけ。（大根を入れた鍋を、竈にかけ火を點ける）

甚三　ぢや、お母、行つて來るぞ。

おきん　あゝ行つて來い！

（二人の兄弟、「前掛き」と魚籠とを持つて出て行く。入れ違ひに村の勘五郎慌しく入つて來る）

勘五郎　おきんさん、甚吉どんは居らんかなう。

おきん　居らん。今朝、早うからな、落松葉をな、お城下へ賣りに出たよ。

勘五郎　落松葉を、うむ、そなものでも金になるけ。

おきん　百にもならねえだ。それでもな、粟の二合や三合は買へるけにな。

勘五郎　甚三も甚作も居らんかなう。

おきん　二人とも居らん。何ぞ用け。

勘五郎　お母、恐しいことが起つたぞ。綾郡二十三ケ村に、御年貢御免を嘆願の一揆が起つたぞ。

おきん　なるほどなう。一揆でも起らうぞ。ええ氣味ぢや。

勘五郎　それでな、段々お城下の方へ押し寄せて來る云ふのぢや。

おきん　なるほどなう。

勘五郎　それでな、もう端岡までは、來ると云ふ噂ぢやけに、この村でも、荷擔するか荷擔せんか、今の裡に定めとかうて云うてな。八幡さまで、村の若い衆の集りがあるんぢや。

おきん　恐ろしいことになつたなう。

五三　一揆もえゝがなう、後が恐いからなう。あんまり、有頂天になつて、やつとると、後で礫ぢやからなう。

おきん　恐ろしい、恐ろしい。飢ゑて死ぬと礫と執らが、えゝぢやろ。

勘五郎　ぢや、俺は、急ぐけにな、みんな歸つて來たら、よこして奚れんかなう。村の集りに、はづれると後が惡いぞ。

およ！　えゝわ。分つた。甚三と甚作とを探して、直ぐやるけにな。

勘五郎　ぢや、えゝか、暮六つまでには、集るんぢやぞ。

（勘五郎去る。およし、不安らしく考へ込みたる後兄弟をたづねるべく、つゞいて退場する。――間――牛小屋に物音がする。やがて、この家の長男の甚兵衛が、其處から現はれる。つぎはぎした膝までしか來ない着物を着てゐる。憔悴してゐる。右脚甚しく短く、ちんばを引く。ひそかに周圍を見廻したる後、豪所に忍び寄り、鍋の蓋を開け、まだ半煑えの大根を、ガツ〳〵食り喰ふ。暫くすると、背負籠を肩にしたる次男甚吉、表から歸つて來る。兄が大根を喰つて居るのを見付ける）

甚吉　何するだ！　この泥棒猫め！

（兄の襟筋を掴み、引きずり出す）

甚兵衛　（やゝ愚鈍らしく）われこそ何するだ！

甚吉　おのれ、お母の目を掠めて盜み喰をしやがる。われに、大根を喰はせてたまるけ。

甚兵衛　わしやて、大根喰ひたいだ。この大根作つたの俺ぢや。

甚吉　何を世迷言を云ふだ。作つたのは、われでもな、この家や、畑はおれの物ぢやぞ。この畑に出來るものは、みんな俺の物ぢやぞ。

甚兵衛　何云ふだ。新田の藤兵衛伯父が云うた。われは長男ぢやけにな、みんなわれの物ぢや云うて。

甚吉　（烈しくこづき廻しながら）不具者の癖に何云ふだ。爺さんが、生きてゐたときに、庄屋さまに願うて、家屋敷とも俺の物になつてゐるのだ。われは牛小屋で、くすぶつてりや、いゝんだ。不具者のくせに、出しやばるなよ。（烈しくこづき廻す）

甚兵衛　（激怒し）お母と兄弟三人とで共謀しやがつて、長男のわしの物を、みんな取つてゐるのだぞ。この家の緣の下の塵までわしの物ぢや。

甚吉　何を、阿呆くさいことを云ひやがるんぢや。

（更に烈しく、こづき廻す。甚兵衛こづかれながら、手を振り上げて、甚吉の顎を毆つ）

甚吉　おのれ、毆ちやがつたな。

（二人烈しく搏闘す。甚兵衛も、絶えず壓迫されながらも、抵抗をつゞける。其處へ母と一緒に兄弟歸つて來る）

甚三　吉兄い。何うしたんぢや。

甚吉　（甚兵衛を壓へながら）この不具者めがな、今鍋の大根を、盜んで喰うてゐやがるんぢや。それでな、俺が怒鳴り付けるとな、俺に喰つてかゝりやがつてな、俺の頭を毆ちやがつたんぢや。

おきん　本當けい。この阿呆のど不具め。大根やこしお前の口へは入るものぢやねえだぞ。お前なんかに、粟の飯一杯も惜しいけどな、同じ人間の皮、被つてるけにな、毎日一杯宛惠んでやつとるんぢや。それを、有難いとも思はんでようも〳〵盜み喰ひしやがつた。吉、根性骨にしみるほど、どやしつけてやれ。

甚三　おつ母、昨日畑の大根取つたのもこいつ

かも知れんぞな。

おきん さうぢや、さうぢや、それに違ひない。みんなして、牛小屋の中へ追ひ込んでな。

甚兵衛 （全く抵抗力を失ひながら）何ぼ不具ぢやとて、長男の俺を牛小屋へ住はせて、粟の飯たつた一杯づつあてがうて……。

おきん 何云ふぞ。この飢饉の時節に、粟の飯一杯ぢやとて、惜しいぞ。吉、その頼げた一つひねつてやれ。

（甚吉、云はれた通りにする）

甚兵衛 あゝ痛い！ 痛い！

おきん さあ、皆して、投り込んでしまへ！ これからは、粟の飯も勿體ないや。水丈で澤山ぢや。

（三人、母に云はれた如く甚兵衛を手込にして、牛小屋へ入れる）

甚兵衛 何うするだ！ 何するだ！ われ達！ この兄を何うするだ！

甚吉 何が、兄だい！ われのやうな不具の阿呆を誰が兄に持つものけ。

甚兵衛 何するだ！ 何するだ！

甚三 （次兄に加勢しながら）えゝ、默つて、この中にすつこんで居れ！

甚作 （同じく手を假して、擔ぎ上げながら、二人の兄よりは、やゝ優しく）盜み喰ひやこしするけに、こなな目に會ふのぢや。大人しう、小屋の中へ、はいつて居るがえゝぞ。

（三人、腕いてゐる甚兵衛を、牛小屋へ擔ぎ込んでしまふ）

甚兵衛 何するだ、何するだ。（叫びながら、擔ぎ込まれる）

おきん 出られないやうに、戸を閉めて、しんばり棒、かうとけ。明日から、粟の飯一杯もやらんぞ。（やゝ聲を低めて）今時飢え死んだとて、誰も不思議がりやせんわい。

（甚吉、戸を閉め、棒を探してきて、しんばり棒をかふ。この前より、周圍が漸く薄暗くなり初める）

おきん 吉、聞いたか。綾郡に一揆が起つたと云ふことを。

甚吉 聽いたとも。御城下でえらい騒ぎぢや。香東川の堤で、昨日に二度も行き會うたぞ。

おきん それでなら、御城下に押し寄せる道筋ぢやけに、この村へも迫付け來るでなら、荷擔するか荷擔せんか、評議するためになら、八幡樣で暮六つから集りがあるから、來い云うてな、勘五郎どんが、ふれて來たぞ。

甚吉 一揆のかたう人か。こなな時、下手まどつくと首が飛ぶし、それかと云うて、後込みしとると、一揆からひどい目に會ふしなう。

おきん 兎に角、行つて來るがえゝぞ。それでなう、身をたしなんで、出しやばらんがえゝぞ。先ばしりして、わしに心配させるでねえぞ！

甚吉 ぢや、ボツ〳〵行かうか。

おきん 飯喰うてからにせい。評定が、長びくかも知れんけに。

甚吉 あゝ、ど不具めと、取組み合うて、えらいことお腹を空かせたぞ。

おきん （臺所へ入り、鍋の蓋を開けて見て）あの阿呆め！ 三切も、喰ひやがつた。われ達に、三切づつやらうと思つてゐたら、當らんやうになつたぞ。

（兄弟三人、臺所に腰をかけ、粟飯を茶碗に盛りながら、大根を鍋よりはさみ出しながら喰ふ）

甚三 一揆も、やつてゐるときは、景氣がえゝがなう、後でまた、礫や打首が二三十人はあるべい。

おきん 觸らぬ神に、祟りなしぢや。なるべくなら、誰も出んで濟むとえゝがなう。

甚作 さうもなるべい。村で荷擔するとなると、家では若い者が揃つとるけになう、一人や二

人は出ねばなるまい。

（この前より、周圍が、ほの明るく暮がしくなる。遠方が、火事でもあるやうに明るくなる。雜音が、だん〳〵高くなる。遠い寺の鐘が鳴り始める）

甚作 （驚け出しながら）何やらう、何やらう。火事かしら。向うが眞赤ぢや。

甚吉 えゝ、何ぢやと。（出て來る）ほゝう、赤いな。何うしたんぢやらう。何處ぞで火事を出したのか知らん。

おきん えゝ、火事ぢやと。（出て來る）

（甚七も出て來る。親子四人とも、遠方を見て、不安に襲はれる。寺の鐘烈しく鳴る。牛小屋の戸が、ガタ〳〵動く）

甚兵衛の聲 開けてくれ！ 開けてくれ！

甚吉 阿呆め！ お前は、其處ですつこんで居ればえゝんぢや。

（村中が、ます〳〵明るくなる。人聲が嵐のやうに高まつて來る。犬がけたゝましく吠える。寺々の鐘が殷々と鳴る。甚作驚け出す。やがて、歸つて來る）

甚作 （蒼くなつて、歸つて來る）えらいこつちや！ えらいこつちや。街道筋は、一面の炬火ぢや。

甚吉 えゝ、何ぢやと。

（このとき、「一揆ぢや！ 一揆ぢや！ 一揆が來たぞう！」と、云ふ叫びが遠く近く聞えて來る）

おきん あゝ到頭、來たんぢやなう。恐ろしいことになつたなう。

甚三 御城下を、夜討ちにするんぢやなう。

おきん まさか、此方等に仇はしやすまいなう。

甚吉 何、そなな心配があるもんか。一揆は此方等の味方ぢやないか。

おきん われ達、みんな隱れとれ！ 荷擔人させられたら、後が難儀ぢやけに。

甚吉 まだ、えゝ。まだ、えゝ。此方へ來るのには間がある。

（このとき、村人の一人、あわたゞしく驚けて來る）

甚吉 おゝわれや、藤作ぢやねえか。

藤作 おゝ。この村も、荷擔ぢやぞ。えゝか、一軒で、一人宛、人數を出すんぢやぞ。えゝか、一炬火と竹槍とを用意しとけ。えゝか、後から、一揆の、統領が廻つて來るけになる。

甚吉 （蒼白になりながら）合點ぢや。

藤作 荷擔の村が、二百十二ヶ村になつたぞ。夜更けにお城下へ押し寄せて、御家老達の家を叩き壞す云うとるぞ、はやう、用意せい。

甚吉 えゝか、分つたか。

（藤作、驚け去る。）

甚吉 分つた、分つた。

おきん （狼狽しながら）何うせう、何うせう。

甚吉 仕方が、ねえ。わし行くぞ。

おきん 阿呆云ふな。後嗣のお前に萬一のことがあつたら何うするんぢや。われは行くぢやねえ。

甚三 兄貴は、家に居るが、えゝ。わしが行くだ。わしが。

おきん われも行くでねえ。荷擔して、後で打首にでもなつたら、何うするだ。

甚三 そなな心配がいるもんけ。何萬と云ふ人數ぢやもの。たゞ、附いて行つた丈で打首になんかなつて堪るけい。

（急に、炬火の火が近づいてくる。一揆達が近づいて來た、物音が聞える。寺の鐘、尙殷々と鳴りつゞける）

おきん こちらへ來るだ、こちらへ來るだ。われ達、みんな隱れとれ。おつ母が、えゝやうにするだ。わしに委しとけ。わしが、えゝやうにするだ。わしが、われ達、誰も行かんで、えゝやうにするけに。

甚吉　阿呆云ふな！　お母のやうな、年寄に委しとけるけ。

おきん　えゝ。默つとれ、お前達、は入つとれ云うたら、は入つとれ。は入つとれ！

（おきん、息子達三人を、押し込むやうに、奥の間へ入れる。そして、臺所へ行く。出刃庖丁を持つて、母屋と牛小屋の間から、奥庭へ行くと、炬火の薪と手頃の竹竿を持つて出て來る。尖端を、出刃でとがらせる。それから、牛小屋の戸のしんばり棒を、はづす。このとき、覆面をし手槍を持つた一揆の首領二人、炬火を持つて多くの一揆に圍まれながら出て來る。村人勘五郎が案内してゐる）

勘五郎　（首領に）へえ。この家にも男手が、ございまする。

首領の一人　わしは、綾郡さる村に住む豪士ぢや。今度諸人助けのために、御年貢米御免の歎願の一揆を起した者ぢや。同心か不同心か、孰らぢや。同心するに於ては、道々、所々在々の大百姓の家を叩き壞して、金銀米穀を別けてやる。

他の一人　同心なら、同心の印に荷擔人一人を出せ。不同心なら直ぐこの家を叩き壞す。其方達を打ち殺す。孰らぢや。

おきん　（顫へながら）へえい、へえい、同心でございますとも。わし達小百姓には、救ひの神さまでござります。ありがたう、ございます。おありがたうございます。荷擔人を出しますとも。（牛小屋の前へ進み戸を開ける）おお、甚兵衛、お前、そなな所へ隱れて居らいで、出て來いや。何もこはいことありやせん。わし達の難儀を救うて下さる神さまぢや。早う出て來い。

（甚兵衛の手を掴んで曳きずり出す）

おきん　さあ！　これを持つてな。このお方達の後から、ついて行け！　（竹槍と炬火とを渡す）

甚兵衛　わしやこはい。わしやこはい。

おきん　何を云ふぞ。お前、ぐづ〳〵云うたら、竹槍で突き殺されるぞ。（竹槍を强ひて押し付けながら）はやう、しつかり持たんけいな。

甚兵衛　わしやこはい。こはい。

首領の一人　臆病者め！　恐がることはない。一揆の人數は綾郡字多郡を合せて、五萬三千人ぢや、何の恐いことがあるものか。

おきん　うんと叱つて、貰ひたいでなう。これは生れつき臆病者でな。（甚兵衛に）さあ、しやんとして行つて來い。この方々に、附いて行くと、白い飯が、何ぼでも喰べられるぞ。

（甚兵衛、その言葉に少しく元氣づき、三四歩歩く）

首領の他の一人　その者は、不具者ぢやないか。

おきん　何の、不具者でもな、山や野良の働きは、人一倍でな、他人の二倍もの仕事しまするでな。ちんば引いても、走るのは、人一倍ぢやぞな。

勘五郎　おきんさん、甚吉は、何うしただ。

おきん　先刻も云うたぢやないか。御城下へ松葉賣りに行つてな、まだ歸つて來んでなう。

首領の一人　不具でもよい。論議してゐては手間どる！　さあ、次の家へ案内されい。

勘五郎　さあ、こちらへおいでなされい。

首領の他の一人　（甚兵衛に）後からついて來い。はゝゝゝゝ、山本勘介と云ふちんばの軍師が昔あつた。お前もちんと働いてくれ。はゝゝゝ。その代り、白い飯を何ぼでも喰はしてやるぞ。（歩き出す）

甚兵衛　（やゝ遲れて母に恨めしげに）わしを打首にするつもりかの。

おきん　何を云ふだ！　お前に、たんと、白い飯を喰はしてやりたいのぢや。はやう、とつと附いて行け！

（甚兵衛、愚鈍な顔にも、母親を恨めしげに見返しながら、手槍を杖ついて、ヨタヨタと出てゆく。おきん、胸を撫で下ろしながら、後を見送つてゐる。兄弟三人、奥の間から出て母親の後へ、そつと忍んでくる）

甚吉　おつ母！

おきん　おゝびつくりした。

甚三　うまくやつたなあ。おつ母。

おきん　はゝゝゝゝ。

甚吉　ほんまにうまくやつたの。あの不具者が、竹槍をついて、ちんば引き〳〵附いて行くのを考へると、吹き出したくなるなう。

おきん　はあゝゝゝ。あの不具者も、廿九になるまで養うてやつた甲斐があつたなう、思はん役に立つたわ。この一揆で御年貢は御免になるわ。米も安くなるわ。此方親子は高見から一揆を見物して居るわ。あゝうまいことした。甚作、厄逃れのお祝ひに、神棚へお燈明でもあげいよ。

甚三　一揆の大將が云うとつた。昔、山本勘介云うて、エライ軍師があつたと云うてなら。けど、おつ母の方が、もつと偉い軍師ぢやなう。

おきん　どうぢや。年が寄つても、こなものぢや。はゝゝゝゝ。

兄弟三人　あはゝゝゝゝ。

甚吉　あの不具者め。あはゝゝゝゝ。

親子四人　あはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

——幕——

第二幕

第一幕より十日ばかりを經たるある日の夜。弦打村庄屋茂兵衛の家の廣間。村人達が縁側にも庭にも充ちてゐる。座敷には所々に百目蠟燭が燃えてゐる。庭には篝火が、三個所ばかりに焚かれてゐる。人數の割合に、靜寂である。みんなが、不安と恐怖とに囚はれてゐるのが分る。

村年寄甲　（縁側に立つて見廻しながら）もう皆集つたかなう。本津の吾作は來たか。

村人一　來ただ。鼓に來てゐるぞ。

村年寄　新田の新吉が見えんなう。

村人二　まだ來とらんが、先刻來るときに誘ふとな、山へ行つとるけに、歸つたら直ぐよこせる云うたぞ、鎌が。

村年寄乙　上筮居の甚兵衛が、見えんぞな。

村人三　うん。甚兵衛どんが、來とらん。

村人四　あなな氣の毒な人、來いでもえゝぢやないか。

村人五　また、あなな阿呆來たとて、しやうがない。

村人六　阿呆々々云ふない。少し阿呆ぢやけに何可哀さうぢやないか。

村人七　さうぢや。阿呆ぢやけど、えゝ人ぢや。繼母や兄弟達に苛められるので、いよ〳〵阿呆になるんぢや。

村人六　さうぢやとも。長い間、苛めぬかれたでなう。家や田畑は、弟に取られるしな、喰物も、ロク〳〵喰はされんし、なんぞ口答へすると、弟三人がよつてたかつて、殴ち打擲するんだものな。

村人五　けど、阿呆ぢやもの、しやうがないわ。

村人六　阿呆でも、長男は長男ぢやものな。

村人八　死んだ甚七が、あんまりおきん婆に、甘かつたから、いかんのぢや。

村人六　さうぢや。死んだ爺もわるいんぢや。だがなう、今度の一揆にやつてあのおきん婆の仕打はどうぢや。是腰のたつしやな息子が三人もあるのにな、自分の息子は出さんでな、

常日頃、苛めぬいとる甚兵衛どんを、出すんぢやものな。

村人四、七、八　さうぢや、さうぢや。ひどい仕打ぢや。

村人六　わしや、何も知らん甚兵衛どんが、竹槍杖ついて、ちんば引き〳〵隨いて來るのを見ると、涙がこぼれたぞな。

村人七　俺も、可哀相で見て居られなんだぞ。

勘五郎　勘五郎どん、お前どうしただ。お前が一揆の大將を、甚兵衛どんの家へ案内した云ふぢやないか。なんで、この家には足腰のたつしやな若い者が、三人も居ると、云うてやらんのぢや。

勘五郎　そら、後から氣の付くことぢや。わしも、竹槍を盡しつけられて案内しとるんぢやらう、命がけぢやないか。早う、案内役を逃げたい思ふ一心で、何でも早う濟めばよいと、思うとつたけになう。

村人七　ほんたうに、あのおきん婆、一揆の大將に輯んで、突き殺して貰ひたかつたなう。

村人四、六、八　ほんまぢや、ほんまぢや。

村人七　考へても、腹が立つでなう。

勘五郎　だが、庄屋どんや名主どんは遲いなう。

村年寄甲　なんぞ、難儀ことになつとるかも知れんぞう。

村年寄乙　松野八太夫樣が馬から落ちくぜた所が、もう半丁も向うだとよかつたんぢや。彼處の地藏堂の所が、村境ぢやけにな。ホンの半丁位の違で、この村に難儀がかゝるんぢや。

村人八　お上も、無理ぢやないか、郡奉行樣が、一揆に殺されたのが、弦打村の地境の内だからと云うて、弦打村から下手人を出せ云うて、あんまり聞えんぢやないか。

村年寄乙　ぢやけど、さうでもせな、下手人が出んのぢや。下手人が出んと、お上の御威光にかゝるけにな。

村人七　えらい、災難ぢやなう。

勘五郎　えゝことは、二つないわ。一揆のお蔭で御年貢御免になつたかと思ふと、直ぐこんな無理な御詮議ぢや。

勘五郎　一昨日、御坊川で一揆の發頭人が五人も磔になつたと云ふから、下手人が出たら、磔に逃れんなう。

（一座、しんとしてしまふ。その時甚兵衛が、末弟の義作と一緒に來る）

村人七　あゝ甚兵衛どんが來た、甚兵衛どんが來た。

村人八　相變らず、ニコ〳〵しとるわい。あの人は、他人には、いつも愛想がえゝわ。

（甚兵衛、蒼白な顏に微笑を湛へ、皆にペコ〳〵頭を下げて、隅の方へ坐る）

村人八　甚兵衛どん、遲かつたなう。

甚兵衛　（默つてうなづく）……。

（義作、甚兵衛に寄添うて坐らうとする）

村人七　義作、わりや、何しに來ただ。

義作　おつ母が、附いて行け云ふけにな。

村人七　何やつて、おつ母がそななこと云ふんぢや。今日の集りは、一揆に隨いて行つたもの丈の集りぢやぞ。

義作　ぢやけどもな、おつ母が、兄やは少し足らんけにな、寄合の席へやこし、一人でやるのは、心元ない云ふけにな。

村人七　えらう、勝手なこと、云ひやがる奴ぢやなう。そなに心元ない、甚兵衛を、何うして又、一揆にやこし、潤りで出したんぢや。あんまり、得手勝手なことをしてゐると天罰が、恐ろしいぞと、おつ母に云つてやれ。

義作　（言葉なく默してしまふ）……。

勘五郎　ほんまぢや。おつ母になな、少し云つてやれよ。あんまりひどい事をするとな、人間がゆるしても、神さまが許さん云うてな。

（義作は、顏を赤めて、さしうつむいて

しまふ。甚兵衛はニコ〳〵笑つてゐる）

村人九　あゝ、街道筋に提灯が見えるぞう。庄屋どん達が、歸つたんぢや。

村人十　おゝ見える。迎ひに行かう。

（一座緊張して、待つてゐる。やがて、迎ひに行つた村人が、悄然として歸つて來る。それに續いて、庄屋と三名の名主とが銘々手錠を入れられ、郡奉行の役人に守られて、首をうなだれて歸つて來る。一座仰天する）

村人達　（口々に）どうしたんぢや。どななおとがめで、そなな目に合うたんぢや。

村年寄甲　茂兵衛さま、一體これはどうしたんぢや。

茂兵衛　仔細はあとでお話する。先づ、おしづまり下され。

村年寄甲　おゝ靜まるとも、昔靜かにせ。村の一大事ぢやけに、みんな靜かにしてくれ。

（村年寄達、庄屋を庇うて、座敷へ上げ、郡奉行の役人達を案内する。庄屋正面へ出る。村人達、水を打つたやうに靜かになる）

茂兵衛　（老眼をしばたゝき、一座を見廻しながら）かやうな委で、御一統にお目にかゝり面目ないなうござる。

村人一　何の、そなな謙酌が入るもんけ、村のために、そなな身にならつしやつたことは分つてゐるでな！

村人達　ほんまぢや、ほんまぢや。そなな會釋は入らんぞつ！　それよりも早う、話しとくれ。

村年寄甲　しつ、靜に。

茂兵衛　さう云はれては、なほ更面目ない。わし等の申し開き拙いによつて、かやうに村中一統の難儀になつたのぢや。

村人一　庄屋どん、そなな事よりも、今日の首尾、その手錠の仔細を早う話してくれ！　氣にかゝつて仕樣がないわ。

茂兵衛　さう、おせきなさるな。話すなと云うても、話さずには居れんことぢや。實はな、今日新郡奉行覓左太夫樣のお役宅へ出たのぢや。ところが、御奉行樣の御せらるゝには、お上が今度の一揆に對しての御沙汰は、恩威並びに行ふと云ふ御趣意ぢやと、かう仰せられるのぢや。それでな、年貢米は、嘆願に依つて、免除する代りに、一揆の發頭人は、一昨日御坊川で磔にした。又、松野八太夫樣に、磔を打つた下手人は、草を分けても、詮議するとかう仰せられるのぢや。

（一座から烈しい嘆息がきこえる）

それでな、御奉行樣の仰せらるゝには、一揆が香東川の堤にさしかゝつた時は、弦打村の百姓が、眞先だとかおつしやるのぢや。

村人達　（口々に）それや、嘘ぢや。……なんぼ御奉行樣の仰せでも、それは間違うとる。……大間違ひぢや、大間違ひぢや。

（村人達口々に打ち消す）

茂兵衛　まあ！　默つて聞いて下され。一揆の發頭人達が、さう白狀したとお奉行樣が仰せられてるのぢや。

村人達　（銘々に嘆息する）……。

茂兵衛　それにな、何よりも惡いことは松野樣が、落馬遊ばした處が、地藏堂の手前で、まぎれもなう弦打村の境内ぢや。御奉行樣も云はれるのぢや、弦打村の者が先手にゐたと云ひ、松野殿の果てられたところが、村の境内と云ひ、嫌疑が其方達に懸るのを不祥と諦めいと、かう仰せられるのぢや。それでな、御奉行樣内々の仰せでは、村中で評議して下手人を出すに於ては、褒美として、お救ひ米の高も他所よりは、心をつけてやると、かう仰せられるのぢや。が、若し三日の裡に下手人が相知れぬに於ては、庄屋を初め名主、村年寄一統を、

下手人の代りに磔に上げるかも、知れないぞとかう仰せられるのぢや。

（嘆息嗟嘆の聲高し）

茂兵衛　その上吟議中、其方達に手錠を申し付けると云ふ御沙汰で、この有様ぢや。（眼を烈しくしばたゝく）それでな、わしが思ふに、あの騒動中に誰の打つた礫が、松野様に當つたか、打つた當人にも分かるものぢやないと思ふ。が、御一統の内で礫を打つた心覺えのある人は、五人や十人はあると思ふ。その中でな、村の難儀を救つてやらうと思ふお人は、名乗つて出て貰ひたいんぢや。

（一同、水を打つたやうに靜まりかへつてしまふ）

茂兵衛　御一統の内でな、礫を打つた覺えのある人は、村一統を救ふと思うてな、名乗り出て貰ひたいんぢや。

村年寄甲　難儀なことになつたものぢやなう。

村年寄乙　恐ろしい災難ぢやなう。

名主一　皆さん、今聞かれる通りぢや。お奉行様は、まだかう仰せられた。下手人が、指知れぬときは、村一統の者を、くゝり上げて、あく迄も、糺問する積りぢやとなう。

（一同顔見合はせ蒼白になつてしまふ）

村人五　わしは、左の手に松火を持ち、右の手に竹槍を持つてゐただけに、礫を投げようつて、投げられやせなんだ。

村人二、三　わしやつてさうぢや。

村人四　わしやつてさうぢや。わしは、松野様のおん馬が見えたとき、すこ飛びに逃げたわ。

村人七　わしは、又ずつと後れてゐたけに、松野様のおん馬はおろか、御家中の衆やこし、まるで見かけなかつたわ。

勘五郎　おい〳〵みんな。自分の身の明しを立てるよりも、今は、村の難儀を考へるときぢやぞ。

藤作　さうぢや。よう云つた、よう云つた。自分の身一つ逃れるよりも、村の難儀を逃れる工夫するのが肝心ぢや。

茂兵衛　（それに力を得たごとく）さうぢや。今勘五郎殿や、藤作どのの云はれる通りぢや。この村に、お奉行様の委を見かけて、石を投つやうな、大それた暴れ者の居らん事は、わしが誰よりも、よう知つとる。が、時の災難で、不祥な嫌疑を受けたのを不運と諦めて、村一統を救ふつもりで誰ぞ、名乗つて出て貰ひたいのぢや。……（間）……　さう云つた處で、おいそれと名乗つて出られるものでない、命を放り出すのぢやけになら。が、昔佐倉領の宗五郎様は、自分の命を投げ出して、百姓衆の命を救ふたけに、今でも神様に祭られて居る。誰ぞ、自分の身一つ投げ出し、村一統の難儀を救うて呉れる人はないか。

（一座、寂として聲なし、たゞ、嗟嘆の聲が洩れるのみ）

茂兵衛　御一統、誰も石を投げた仁はないか。

名主一　えゝないか。誰ぞ、石を投げたものは、居らんか。石を投げた覺のある人はその石が松野様に中つたと諦めて、名乗つて出てくれ。

茂兵衛　えゝ、どなたもないか。

（一座、顔を見合はすのみ、一人も聲を發するものなし）

茂兵衛　それならば、仕様がない。是非に及ばぬ事ぢや。村一統知らぬ存ぜぬで、どなにひどい責苦にでもかゝるのぢや。その代り、みなもその覺悟してな、入牢の腹を定めて下されな。俺も、事に依つては、磔にでも何にでもなる覺悟をするけにな。

（皆悲慘な氣に打たれる。そして、神搖して、口々に呟き出す）

村人五　藤作、わりや石投げたぢやねえか。

藤作　（驚いて）滅相もないこと、ぬかすな。

われこそ、眞先に行つたけに、石投げたぢやねえか。

村人五　何をぬかす、この阿呆め。

藤作　お前こそ何ぬかすだ！

（二人全く摑み合ひにならうとして、傍人から止められる）

村年寄甲　誰ぞ村の難儀を救ふ人ないか。あの騒動のとき、石投げた人ないか。

村年寄乙　村のために、誰ぞ出て呉れい。誰ぞ出て呉れ。

（一座また靜まつて聲を發するものなし）

茂兵衛　ぢや、皆覺えがないと云ふなら、わしや、さう云つてお奉行様に　お返事申上げる外はないぞ。念のためにもう一度丈、訊かう。あの騒動のときに、誰ぞ石を投げたものはないか。あの騒動のときに、誰ぞ石を投げたものはないか。石を投げた人は、村のためぢやと思つて名乗つて出てくれ。

（茂兵衛は、最初より茫然として、人々の話を聞いてゐない。たゞ庄屋の最後の聲が大きいので、ふと耳をかたむける）

村年寄甲　さあ、今ぢやぞ。石を投げた覺のある人は出てくれ。

村年寄乙　村を救うてくれるのなら、今ぢやぞ。今出てくれんと、村はえらい難儀になるんぢや。

（村年寄の絶叫する聲を聞いて、茂兵衛ムクゝと立ち上る。茂作驚いて制止しようとする）

茂兵衛　何やと。騒動のときに、石を投げた者ないか云ふのけ。

村年寄甲、乙　さうぢや、さうぢや。

茂兵衛　（子供の如く無邪氣に）俺や投げたぞ。

村年寄、村人達　えゝ、茂兵衛どん、お前投げたか。

茂兵衛　投げたとも。わしや二つ投げたぞ。

村年寄、村人達　ほんまか、ほんまか。（驚喜す）

茂作　（馳けよつて）兄や、何云ふんぢや。（駄いて兄の口を制せんとする）

茂兵衛　（うるささうに、弟を跳ねのけながら）えゝ、彼方へのいとれ。わしや、投げたぞ。おまけに、一つの方はこなしてつかい奴ぢや。

藤作　五郎どん、われも投げてゐたぢやねえか。

勘五郎　（愕然として）滅相な、わりや何云ふだ。

藤作　（同じく）ほんまぢや。人迷して何云ふだ。

茂兵衛　さうけ、人迷だつたか。わしや皆投げてゐたけに、わしも眞似して投げたんぢや。

勘五郎　（騒擾ながら）滅多なことを云ふな。それや、皆他村の衆ぢや。

茂兵衛　さうけ。

茂作　兄や、わりや、何も知らないで、そなな事云ふが、いふたいへんな事になるぞ。よう、今の嘘ぢやと云へゝ早う云へ！

茂兵衛　嘘ぢやねえ。われこそ、何云ふだ。早う家へ歸つとれ！

茂作　よし、歸つておつ母に云つてやる。

（茂作飛ぶやうに馳け去る）

茂兵衛　茂兵衛殿、此方へござらつしやれ。

茂兵衛　おゝ何ぢや、庄屋どん。

茂兵衛　おぬし、石を投げたに相違ないか。

茂兵衛　おゝ、投げたとも、一つはこなにでつかい奴ぢや。

茂兵衛　誰を目當に投げたんぢや。

茂兵衛　誰彼なしぢや。わしや、皆が投げてゐたけに一緒に投げたんぢや。

茂兵衛　茂兵衛どの。おぬしは、この村の難儀を救うてくれるか。

茂兵衛　わしや、何が何だか知らねえだ。

茂兵衛　おぬしが、松野様に、石を投げたと云うて奥れると、この村の者が、みんな助かるのぢや。この村の者は、お前を神さまのやうに、一生あがめるのぢや。どうぢや、松野様に石を投げたと云うてくれるか。

甚兵衛　俺や、何だか知らねえが、えいだとも。

村人達　（口々に）甚兵衛どん、拜みますぞ。拜みますぞ。お前さんの恩を一生涯忘れんぞ。

甚兵衛　わしは、さう云うてくれると、嬉しいだ、嬉しいだ。こなに嬉しいことは生れて初てだ。（快く微笑す）

茂兵衛　（役人達の方へ向いて）お聞きの通りでござりまするが、この者が松野様に、石を投げたに相違ございませぬ。

役人　少し、愚鈍の者と見えるが、申立に誤りはあるまいな。

茂兵衛　愚鈍とは申せ、至つて、正直者にございまする。

役人　よし。役所に召しつれて、よく調べるであらう。甚兵衛とやらに縄打て！

（此の時、甚吉達三人の兄弟、あわたゞしく馳け付けて來る）

甚吉　（甚兵衛に、飛び付いて引き据ゑる）この阿呆め！　何云ふだ。何をロクでもないことを喋べるんだ。親兄弟の首に、縄がかゝるのを知らんのけ。

甚兵衛　何するんだ、何するんだ。わしや石を投げたんぢや。投げたんに違ひないんぢや。

甚吉　何ぬかす。この阿呆め！

（甚兵衛を叩かうとする。村人七、八、止める）

村人七、八　何するんぢや。假にも、兄たるものに、手を掛ける奴があるけ。

甚吉　お前さん達ぢや、お前さん達ぢや。こなな阿呆の云ふことを取り上げて、こなな阿呆を下手人にして、罪を逃れようとして。庄屋どんも、聞えんぞ。阿呆は、えゝけど、阿呆につながる親兄弟の顔儀を何うするんぢや。

村人七　何やと。こなな阿呆ぢやと。そなな阿呆を、何うして一揆に出したんぢや。おぬしのやうな悧巧な息子が、三人もあるのに、そなな阿呆を何故一揆に出したんぢや。甚兵衛が、石を投げたと云ふのも、みんなお前達が、投げさしたんぢやないか。

甚吉　えゝ！　何ぬかす。お前達が皆、よつてたかつて、この阿呆になすり付けたんぢやないか。

村人八　何ぬかす。そなな阿呆なら、なぜ一揆にやるんぢや。

村人達　さうぢや、さうぢや。

甚吉　（甚兵衛に取りすがつて）早う、云うたことを取り消せ。松野様に、石を投げたと云ふと、お前は磔ぢやぞ。

甚兵衛　（さのみ驚かず）磔やとてえゝわ。村の衆が、みんな欣んで奥れるんぢやもの。

甚吉　阿呆め！　俺の云ふことを聞いて、早う取り消せ。早う、取消せ、お前のために云うてやるんぢやぞ。

甚兵衛　あは……わしのため！　あは……わし二十九になるけれどお前がわしのために、ええことしてくれたこと、一つもありやせん。

甚吉　えゝ何ぬかす。この阿呆め。……お庄屋様、お役人様、兄の申すことは、みんな嘘でな。こりや、阿呆ぢや、足らんのぢや。こなものの云ふこと　お取り上げになつては困りまする。お願ひでござりまする。（坐つて狂氣のやうに頭を下げる）

甚兵衛　（弟にならつて頭を下げながら）お庄屋様、お役人様、ほんまぢや。わしや、こなでつかい石投げたんぢや、馬に乘つたお武士が來たけになら、それを目がけてこなでつかい石投げたんぢや。

甚吉　何云ふだ。この阿呆め。お前のやうな不具者に石が投げられるけ。

甚兵衛　何云ふだ、お前は一揆に隨いて來んぢやもの。わしがした事が、お前に分るけ……。わしや、こなでつかい奴を……。

甚吉　（兄に摑みかゝる）何かぬす……。（村人達、甚吉を取押へる）

役人　その者は、何者ぢや。

茂兵衛　甚兵衛の弟では、ござりまするが、甚兵衛が愚鈍な者でござりますゆゑに、此のものが家を取つて居りまする。

役人　甚兵衛は、重罪の嫌疑ぢやほどに、親子兄弟も、免れまい。（手下の捕吏に）あの者を召捕り置け！

甚吉　それは、聞えません。それは聞えません。こなな阿呆の云ふことを聞いて。こなな阿呆が、お奉行様に石を投げ打つやうな、そなな大それた……。

甚兵衛　（縄にかゝりながら）わしや、こななでつかい奴を……。

村人達　甚兵衛どの、拜みますぞ、拜みますぞ。

甚兵衛　おゝ、わしはな、こなな、でつかい奴を……。

役人　その弟どもを、召捕れ。

甚吉　（口惜し泣きに泣きながら）わし達迄、難儀をかけるのか。阿呆め！　ど不具め！

甚兵衛　わしは、こななでつかい奴……（手で石の大きさを示さうとするが、もう兩手が縛られて動かない）

村人達　甚兵衛どん、拜みますぞ、拜みますぞ。みんな、拜んで居りますぞ。

茂兵衛　甚兵衛どの、わしからも、禮を云ひますぞ。おぬしを快して、見殺しにしませぬぞ。御領分中の百姓衆の名前を借りて、きつと願に出まするぞ。

甚兵衛　何を云ふぞ。わしは皆の衆にさう云はれると、たゞうれしいだ、うれしいだ。

甚吉　（無念の形相で、睨みすゑながら）この阿呆の、ど不具め！

甚兵衛　わしは、こななでつかい奴をな……。（くゝられた手を動かさうとする）

（村人達が感謝と賞嘆との聲の裡に）

——幕——

第三幕

第二幕より數日を經たる、十二月の末。香東川原刑場。小石の多い川原に竹矢來が、作られてゐる。彼方に水の枯れた川原がつゞき、背景に冬枯れた山が見える。木枯が、川原を傳うて吹いて來る。

幕開けば、初は矢來の外側を見せ次いで舞臺を半廻して、矢來の內側を見せる。矢來の外には多くの見物人が群衆してゐる。弦打村の庄屋、名主、年寄、村人達も其の中に交つてゐる。

村人一　庄屋どん。百餘ケ村の庄屋達が連署の嘆願もやつぱり冗ぢやつたのかなう。

茂兵衛　俺や、さう聞かれると面目ないがなう。お奉行様に何ぼ泣きついても、冗ぢやつた。

名主　お上ぢや、誰でもかまはん、下手人を磔にして、御威光を見せれば、えゝんぢや。

村人二　なんぼ考へても、甚兵衛どんは可哀相ぢや。あの時は、皆めい〳〵に石を投げたんぢやけになう。たゞ甚兵衛どん丈が、正直でズケ〳〵云うてしまうたんぢやけになう。

村正寄　まあ、えゝわ。わしや芝山の觀音さんが、村中を助けて下さるために、甚兵衛どんに、乘り移つたんぢやと、思うとるんぢや。

茂兵衛　もう、何ぼ嘆いても取り返しが付かん

わ。甚兵衛どんに、死んで貰うて、その代り、後をようするんぢや。

名主一 さうぢや、後で村の神様に祭るんぢや。

茂兵衛 祭るとも、祭るとも。ほんまに讃岐釼の宗五郎様ぢや。義民の鑑ぢや。

村人三 それにな、外の人ぢやつたら、それにつながつて、首打たれる親兄弟が、可哀相ぢやがなう。あのおきん爺や甚吉は、あんまり可哀相ぢやないわ。長年甚兵衛どんを、苛めた罰ぢやと思ふと、却つて氣色がえゝわ。

村人一、五 おゝさうぢや。それがあるわ。

村人六 わしはな、甚兵衛どんに喰べて貰はうと思うて、こななもの持つて來たんぢや。（竹の皮に包んだ握り飯を見せる）

名主一 おゝ、それやえゝ思ひ付きぢや。甚兵衛どんも飢餓で、ロクなもの喰べとらんけに、欣ぶに違ひないわ。

村人六 わしや、さう思つたけになう、大事な大事な來年の麥種の中から、三合ばかり飯にたいたのぢや。

茂兵衛 おゝ、それやえゝことしてくれた。この茂兵衛が禮を云ひますぞ。

（此時、彼方より群集の喧騒が聞える）

村人一、二 あゝ來た！　來た！　甚兵衛どんが來た。

（群集、口々に甚兵衛の名を呼びながらその方へ波を打つて動く。やがて、裸馬に乘せられた甚兵衛母子が着く。馬から降りる。群集の間を過ぎる）

茂兵衛 甚兵衛どん、わし達は、皆來て居るぞ。

名三一 わし達は、皆陰ながら、拜んどるぞ。

村年寄二 心强う思うて下されや。わし達はみんな來て居るぞ。

村人達 わし達は、みんな拜んどるぞ……。お前さんのこと一生涯忘れんぞ。あとで、お前さんを神さんに祭るだ。

甚兵衛 （快ゝき微笑を含んで村人達に會釋する）……。

茂兵衛 甚兵衛どん、わしやな、百餘ケ村を馳けずり廻つて、お前さんの命乞ひの訴狀に連署して貰うて、お上へ差上げたんぢやがなう、到頭、お前さんを、こなにしてしまうたんぢや。堪忍して下されや、なあ甚兵衛どん。

甚兵衛 なに、えゝわ、えゝわ。わしや皆の衆にさう云はれると、うれしいだ。

村人達 （口々に）甚兵衛どん、有りがたう！　有りがたう！　お禮申すだ、お禮申すだ。快く成佛して下されや。

（甚兵衛、絶えず、ニコ〳〵しながら、矢來の中へ入る。おきん及び甚吉續いて現はれる）

村年寄一 おきんさん、お前さんも氣の毒ぢやなう。が、村一統を救ふと思うて、死んで下されや。

おきん （憤然として）何ぬかしやがるんぢや。皆よつてたかつて、阿呆をおだて、寃の罪に落して、親兄弟まで、こなな目に合して置きながら、何ぬかしやがるんぢや。

甚吉 おつ母の云ふ通ぢや。わし達を、こななひどい目に合して置きながら、ようも見に來られたなう。

おきん 覺えとれ！　わしはな、首は飛んでも、七生まで村中へ祟つてやるからなあ！

村人一 何云ふだ。みんなわれ達が、人のえゝ甚兵衛を、苛めぬいたぢではないか。

村人達 さうぢや！　さうぢや！

おきん 何！（くゝられて居ながら、村人達に飛びかゝらうとする）

縄取りの役人 （縄を引きながら）神妙にいたせ！

おきん （恨めしさうに村人達に）覺えとれ、よう覺えとれ！　死んだつて　恨みを晴らしてやるからな。

（おきん母子、刑場の中へ歩み入る。舞臺半廻り、刑場の内部が見える。磔柱が、矢來に立てかけられてゐる。五人の囚人、甚兵衛を先に一列に引き据ゑられてゐる。刑吏達が後からへつて來る。刑吏の長、庄几に腰を掛ける）

刑吏の長 用意は整うて居るか。

刑吏一 萬事整うて居りまする。

刑吏の長 それでは、罪狀を讀み上げい！

刑吏二 （聲高く讀み上げる）

弦打村百姓　甚兵衛

其方儀、去る十三日領内百姓共一揆騒動致し、飲酒仕り、右一揆に荷擔致し、香東川堤に於て上役人松野八太夫に投石、殺害致し、飲始末、不届恐入御領主を一仕方、不届至極につき、磔申付くる者也

同　人　母　きん
同　人　弟　甚吉
同　じく　甚三
同　じく　甚作

其方儀甚兵衛身寄につき、獄門申付くる者也。

刑吏の長 最期も近づいたほどに、何ぞ遺言があれば聞き屆けて遣はすぞ。

おきん わしや、こなことで、打首になるのは不承知ぢや。なんぼ、お上のなされ方でもあんまりぢや、あんまりぢや。

刑吏 この期に及んで、未練を申すな。本人が白狀に及びたる上は、縁につながる不幸と諦めて居れ！

おきん 何仰しやるんぢや。こなな阿呆の云ふこと、お取上げになつたりして、あんまりぢや。聞えんわ、聞えんわ。お上のなされ方が聞えんわ。（甚兵衛に）この阿呆。

甚兵衛 （氣がないやうに笑ふ）あはゝゝゝ。

おきん 何が可笑しいんぢや、この阿呆め！　親兄弟を、こなひどい目に會はして、この阿呆め！

甚兵衛 あはゝゝゝ。

おきん えゝ、この不孝者めが！

刑吏一 騒がしい。控へい！

おきん （恨めしさうに默る）

刑吏の長 甚兵衛！　その方は、何ぞ遺言はないか。

甚兵衛 （微笑しながら）わしや、何もないだ。村の衆が、みんな欣んで下さるけに、わしや嬉しいだ、嬉しいだ。

（その時、村人の六、矢來の中へ馳け入る）

村人六 お願ひでございます、お願ひでございやす。

刑吏一 何ぢや、何事ぢや。

村人六 お願ひでございます。これを一つ甚兵衛どんに、食べさせて下さりませ。

（竹の皮包の握り飯を出す）

刑吏一 如何、致しませう。

刑吏の長 苦しうない。甚兵衛に、與へつかはせ。

刑吏一 （甚兵衛に與へながら）村の衆の志ぢや。快く喰べたがよい。

甚兵衛 （無邪氣に欣ぶ）ほゝう、これわしに與れるか。

刑吏の長 手をゆるめてやれ！

（刑吏一、甚兵衛の前腕丈けを自由にする）

甚兵衛 ほゝう。わしや、こなな白い飯生れて始めてぢや。これ喰べてもえゝか。ほんまに喰べてもえゝか。

刑吏一 快く喰べるがよい。

甚兵衛 （うまさうに喰べながら）おゝ、わしこ

ななうまい物、喰べたことがないぞ。頬つぺたが、落ちさうだ……。ほんまに、こななうまい物、喰べたことがないだ……（つゞけ様に五つ六つ、喰べる。ふと、母達に氣が付く）……おゝ、おつ母、甚吉！　お前達ほしうないか。

甚吉　何ぬかしやがるんぢや。阿呆め、首の飛ぶ間際に、そなな物が喉を通るけ。

おきん　ほんまに、この阿呆め！　どこまで、親を馬鹿にしやがるんぢや。

甚兵衛　はあ……。さうけ、嫁か。ぢや、わし皆、喰べてやらう。あゝうまい、うまい。顎が落ちさうぢや。村の衆ありがたう！

村人達　（口々に）何云うとんぢや。よう喰べてくれた。此方等こそ拜んどるぞ。

刑吏の長　申置くことがなければ、母と弟共を最後の庵へ直せ。

おきん　（慌てゝ）一寸待つて下されませ。お願ひがござりまする。

刑吏の長　何ぢや。

おきん　死際のお願ひでござりまする。どうぞこの親不孝者を、先きへ突いて殺して下されませ。せめてもの腹癒せに、この不孝者が、磔柱の上で、苦しむのを見させて下さりませ。

村人達　（口々におきんを慰る）……何を云ふ、鬼婆め。……お前の方から先きに死んでしまへ……。

刑吏の長　折角の願ひぢやが、聞き屆けることはまかりならぬ。かやうな場合、重科の者を、後にするのが定法ぢや。それ、その者達を、あれへ引き据ゑい！

おきん　えゝ口惜しい。此奴が、突かれるのが見られないのか。

刑吏三　えゝ、やかましい！　神妙にあれへ直れ！

（刑吏達、母子四人を上手の方へ連れ去つてしまふ。首斬役、刀を抜いてその後から従ふ）

甚兵衛　（微笑を含んで、その後から見送る）おつ母も、甚吉も先きへゆくのか、長い間、わし苛めて奥れてありがたう、ありがたう。あはゝゝゝ。

（首を切る掛聲、太刀音、つゞいて聞える。見物、どよめいて聲を上げる）

甚兵衛　（顔色、やゝ蒼白になつたが、笑ひを絶たない）あはゝゝ。わしや、腹が、すつとしたが。わしをな、二十何年も苛めぬいたおつ母も、甚吉も、もうあなになつてしまうた。おゝおつ母、甚吉、甚三、甚作、どなな氣持ぢや、あはゝゝ（甚兵衛哄笑しつゞける）……今度はわしの番ぢや。早う、磔柱に付けて下されや。

村人達　（急に動揺す）甚兵衛どん。ありがたう、拜みますぞ。御恩は忘れませんぞ。……南無阿彌陀佛！　南無阿彌陀佛！

（刑吏達、磔柱を起し、それに甚兵衛をくゝりつけようとする）

甚兵衛　何が、南無阿彌陀佛ぢや。皆喜んで、下さつしやれ。わしや、こななえゝ氣持のしなことはないや。あはゝゝゝ。

（群衆達の讃嘆、悲嘆の裡に、甚兵衛の笑ひ、いよ〳〵高くなつて行く）

——幕——

眞似（一幕三場）

人物

聖フランチェスコ
兄弟ジョバンニ
その他の人々

所及び時

アッシジの郊外。千二百七八年頃

第一場

ある春の朝。十一呎に足らぬ會堂の前。背景に二三の小さき茅葺の屋根。フランチェスコ、汚れたる褐色の衣を着、ヒーザーの莖を束にしたる箒で、會堂の前を掃いてゐる。兄弟レオ出て來る。

レオ　お師匠様、一寸托鉢に行つて參ります。

フランチェスコ　おゝフラテ・レオか。今朝は孰ちの方角へ。

レオ　ベルジアの方へ行からかと思つてゐます。

フランチェスコ　あ、さう。行つておいでなさい！　神よ、フラテ・レオの上に、一日の平安と幸福とを賜はらんことを。アメン。

レオ　ありがたうございます、では行つて參ります。

（レオ去る。フランチェスコ、また箒を動かしてゐる。弟子パチフィコ銀を携いで來る）

フランチェスコ　おゝフラテ・パチフィコ。

パチフィコ　昨日、スパジオの山の麓を通りかかると、女がたゞ一人畑を打つてゐるのです。畑を耕すものがないのだと云ふのです。

フランチェスコ　なるほど。それで今日お前は、其處へ行つて、働いて上げようと云ふんだな。

パチフィコ、左様でございます。

フランチェスコ　それは結構です。早く行つて働いてお上げなさい。

パチフィコ　父フランチェスコ、私を祝福して下さい。

フランチェスコ　おゝ神よ、フラテ・パチフィコが、一日の勞働に、從順と勤勉の德を與へ給はむことを。アメン。

パチフィコ　ありがたうございます。行つて參ります。

（フランチェスコ、また箒を動かしてゐる。突然百姓妻をしたジョバンニが、飛び込んで來る）

ジョバンニ　一寸、物を訊きますだ。フランチェスコさまの御堂は此處ですかい。

フランチェスコ　さうです。

ジバンニ　フランチェスコさまは、何處に御座らつしやるだ。

フランチェスコ　私が、フランチェスコです。

ジョバンニ　こらはあ、お前さまが、フランチェスコさまですか。こらはあ、お見それ申しました。どうぞ、その箒を貸して下さい。

フランチェスコ　（少し驚く）いゝえ、私が今掃いてゐるところです。

ジョバンニ　どうぞ、俺に貸して下さりませ。

フランチェスコ　貸せません。私は働きたいのです。働くのが私の勤めです。

ジョバンニ　いゝや、俺に貸して下さい。俺こそ働きたいだ。

フランチェスコ　一體貴君は、何處からお出でになつたのです。

ジョバンニ　そんな事より、先づその蓆を貸して下され。

（ジョバンニ、無理にフランチェスコから蓆を引つたくり、會堂の前を掃き廻す）

フランチェスコ　（あきれて見てゐたが）一體貴君は、何處からお出でになりました。

ジョバンニ　俺は、スポレトの近くの村の百姓でがす。お前さまのことを皆が賞めるので、俺もお前さまのやうになりたくて、やつて來たでがす。今日は、キャベツを積んで、アッシジの町へ來たところ、お前さまの御堂が、近くだと聞いて、車も牛もおつぽり出して飛んで來ただ。

フランチェスコ　それは〳〵。それで、私の處へ來て何うしようと云ふのです。

ジョバンニ　お弟子になりたいだ。

フランチェスコ　貴君などは、私の處へ來られなくても私達の兄弟です。貧しくて勤勉で誠良で、そして働いてゐる貴君は。

ジョバンニ　いゝや、俺は貴君のやうに偉い聖人さまになりたいだ。

フランチェスコ　それは困りました。私は、偉い人間ではありません。私はたゞキリストのせられた事の眞似を及ばずながらしてゐるのです。

ジョバンニ　俺も及ばずながら、これから貴君の眞似をするだ。

フランチェスコ　私は、貴君に眞似をせられるほど完全な人間ではないのです。

ジョバンニ　いゝや、俺の村の衆は、皆貴君をほめてゐるだ。キリスト樣の再來のやうに云うてゐるだ。フランチェスコ樣の眞似さへして居れば、天國へでも行かれるやうに云うてゐるだ。

フランチェスコ　（當惑して）そんなことを云はれると、恥しくて穴へでもは入りたくなります。でも、わざ〳〵さう決心して、私の處へ來て下すつた貴君を、追ひ返すことは出來ません。よろしい！　それでは、私の眞似をして下さい。私も、貴君にどんな行ひを眞似られても、恥しくないやうに心をつけませう。そして、前よりももつと心をこめて、キリストの眞似をすることにしませう。そして、私の眞似をなさる貴君が間接に、キリストの眞似をしてゐることになるやうに致しませう。（ひざまづく）おゝ神さま、あはれなる小さき者らにおん身のいとし子なるキリストのなされしよき行ひの凡てを、模倣する勇氣と力とを與へたまへ。アメン。

ジョバンニ　（フランチェスコの方をジロ〳〵見ながらひざまづき、云ふ通りを眞似る）おゝ神さま。あはれなる小さき者に、御身のいとし子なるキリストのなされしよき行ひの凡てを、模倣する勇氣と力とを與へたまへ。アメン。

フランチェスコ　（ジョバンニの眞似に氣づき）あはゝゝゝ。

ジョバンニ　あはゝゝゝ。

フランチェスコ　これからはお互に兄弟です。どうぞよろしく。さあ、あちらへ行きませう。

ジョバンニ　これからは、お互に兄弟です。どうぞよろしく。さあ、あちらへ行きませう。

（フランチェスコ、微笑を含みながら退場。ジョバンニ、その姿勢を眞似ながら退場す）

第二場

フランチェスコの住んでゐる茅葺の小屋やゝ腐し　片隅に醜い病人が、床の上に寢てゐる。フランチェスコひざまづいて無言にお祈りをしてゐる。ジョバンニも、傍に居てその眞似をしてゐる。

フランチェスコ　（立ち上つて嘆をする）えつへん！

ジョバンニ　（同じく立ち上つて眞似る）えつへん！

（フランチェスコ、腕組みしながら、室内を歩く。ジョバンニその後から、同じやうな姿でついて行く）

フランチェスコ　さて今日は……かうつと。

ジョバンニ　さて今日は……かうつと。

フランチェスコ　（小さき祭の所へ行つて、外を見る）いゝお天氣だな。

ジョバンニ　（同じやうにする）いゝお天氣だな。

フランチェスコ　あゝ、さう〳〵私はペルナルドに用事があつた。

ジョバンニ　私はペルナルドに用事があつた。

フランチェスコ　私は一寸行つて來ようかな。

ジョバンニ　私は、一寸行つて來ようかな。

フランチェスコ　おや〳〵。貴君はペルナルドを御存じですか。

ジョバンニ　（おどろいて）いや〳〵、知りませねえだ。

フランチェスコ　知らなければ用事のある筈は、ないではありませんか。

ジョバンニ　なるほど。でも、貴君が御用があるのに、俺がないと思ひましただ。

フランチェスコ　（微笑し）なるほど。でも、そんなに、一々私の眞似をしなくつてもよろしい。たゞ私の行ひ丈の眞似をすればよろしい。私の嘆だとか言葉だとか歩きつきだとか、そんなことを一々眞似ることは入りません。私のよい行ひ丈を眞似して下さい。私のお勤めとか、私の祈禱とか私の兄弟に對する態度とか、病人に對する介抱とか、そんなもの丈を眞似して下さい。分りましたか。

ジョバンニ　分りましただ。よく分りましただ。

（フランチェスコ、臺所に行き牛乳を盛りたるコップを持ち來り、病人の枕元にて無言に祈りたる後、牛乳のコップを與へる）

フランチェスコ　牛乳を一杯お上りなさい。如何ですか。氣分は、少しでもよくなりましたか。

病人　はい。おかげさまで、だん〳〵良くなるやうです。いたゞきます。（牛乳を飲み干す）

フランチェスコ　何處か痛むところがあつたら、遠慮なく仰しやつて下さい。

病人　いゝえ。結構です。何處も痛むところはありません。

フランチェスコ　さうですか。それでは、私はフラテ・ペルナルドの所まで行つて來ます。ジョバンニさん。貴君は、私の留守の間、よくこの病人に氣をつけて上げて下さい。

ジョバンニ　はい〳〵。かしこまりましただ。

フランチェスコ　直ぐ歸つて來ます。

病人　どうぞお早く。

（フランチェスコ出て行く。ジョバンニ、しばらくもぢ〳〵してゐたが、やがて臺所に行き、牛乳を盛りたるコップを持ち來り、病人の枕元にて無言に祈りたる後、牛乳のコップを與へる）

ジョバンニ　牛乳を一杯お上りなさい。

病人　うん、飲んでやらう。（ひつたくるやうに

して、ガブ〳〵飲む）

ジョバンニ　如何です、氣分は少しでもよくなりましたか。

病人　べらぼうめ。こんな業病を病んでゐて、氣分のよくなることなんかあるもんかい。

ジョバンニ　何處か痛むところはありませんか。

病人　痛いところどころか、身體中痛くない處なんか一個所だってありやしない。第一に、この足をさすってくれ。

ジョバンニ　この足は、たゞれてゐるだ。こんな汚い足、さすれやしねえ。

病人　（半身を起す）何だ、さすらない！　この土百姓め。それでフランチェスコの弟子か。さすれったら、さすれ。

ジョバンニ　嫌だ〳〵。こんな汚い足！

病人　さすらないな。此奴め！

（病人、足でジョバンニを蹴る。）

ジョバンニ　おのれ蹴ったな。

病人　蹴ったが、何うしたい。

ジョバンニ　（病人に飛びかゝる）この野郎、病人らしく大人しくしろ。

病人　この野郎、看病人らしく大人しくしろ。

ジョバンニ　なにくそ、この野郎。

病人　なに、此奴め！

（二人搭闘してゐる處に、フランチェスコ歸って來る。二人恥しげに、搭闘を止める）

フランチェスコ　ジョバンニ、貴君は何をしてゐたのです。

ジョバンニ　お師匠樣、俺はお師匠さまのした通り、この男にしただ。すると、この男が、お師匠さまにした通りに、俺にしねえで汚らしい足をさすれ云ふだ。

フランチェスコ　さうですか。それは、早速さすつて上げねばなりませぬ。私達は、病人をどんなに愛しても愛し切れません。病人の云ふことは何でも聽いて上げねばなりません。（病人の傍に近寄り）どの足です。

病人　いゝえ、結構です。それには及びません。先刻ホンの一寸痛んでゐた丈です。

フランチェスコ　さうですか。それではジョバンニ、よく氣を付けて介抱して上げて下さい。私はベルナルドと一緒にポンチウンクラへ臨終の祈禱に行って來ます。

（フランチェスコ出て行く。ジョバンニ、やゝ手持無沙汰に病人よりなるべく遠い處（行ってゐる）

病人　おい、百姓！　早く足をさすれ！

ジョバンニ　お前さんは、今癒つたと云うたではねえか。

病人　何を云つてやがるんだ。こんな業病の痛みが、さうやす〳〵と癒つて堪るものか。

ジョバンニ　……。

病人　早くさすれ。さすらないと、フランチェスコが歸つて來ると、云ひ付けるぞ。

ジョバンニ　（いや〳〵傍へ近寄る）どれ、足を出しなさい。どの足だ……。

病人　兩方ともだ……。

（ジョバンニ、いや〳〵ながら足をさすつてゐる）

病人　フランチェスコの厄介になるのもいゝが、食物がまづいのが一番閉口だ。乞食をしてゐた頃の方が、もつとうまい物にありつけた。

ジョバンニ　ぢや、何うして乞食をしてゐないだ？

病人　でも、かうしてねころがつてゐる方が、結局樂だからな。

ジョバンニ　なるほど。

病人　みんな銘々に樂なことをするといゝんだ。フランチェスコは、またフランチェスコ

で、俺達の世話をして、いゝ氣持になってゐるめだ。

ジョバンニ　なるほど。

病人　馬鹿！　貴樣までがなるほどと云ふ奴があるかい。まぬけた百姓面をしてゐるなあ。

ジョバンニ　何！

病人　貴樣でも、自分の面の惡口を云はれると、腹を立てるな。あはゝゝゝ。あゝ、お腹が空くな。何か肉類が喰ひたいな。豚の脂身のところを、わんぐりと喰ひたいな。おい百姓、手前何處かへ行って、豚肉を取って來い！

ジョバンニ　だって……。

病人　だってと云ふ奴があるかい。フランチェスコ樣が、何と仰しやったのだ、病人の云ふことは何でも聞かねばならないと云つたぢやないか。

ジョバンニ　なるほど。

病人　なるほどぢやない。はいと云つて、直ぐ行って來い。

ジョバンニ　でも、何處から取って來よう。

病人　其處ら當りに、ウキ〳〵鳴いてゐるぢやないか。そいつを手當り次第に、引きずり倒して、股のところを削いで來い。

ジョバンニ　なるほど。

病人　早く行って來い。

ジョバンニ　よし行って來る。

（ジョバンニ、臺所へ行き庖丁を持ってかけ出す）

病人　あはゝゝゝ。馬鹿な百姓だな。到頭行きやがった。あゝ云ふ奴がゐるので、俺達が樂が出來るのだ。

第三場

第二場と同じ部屋。一時間ばかり時が經つてゐる。病人寢てゐる。ジョバンニ豚の足を持って、駈け込んで來る。

ジョバンニ　ほら、取って來たぞ。見ろ、こんなうまさうな奴だ。

病人　うむ、偉い。話せる。お前は、フランチェスコよりも、俺にはありがたいや。早く行ってあぶって來てくれ。お前にも半分やらあ。

ジョバンニ　よし、待ってゐるだ！

（百姓達四人、ドヤ〳〵と駈け込んで來る）

百姓一　おい！　今此處へ豚の足を持って、逃げ込んで來た奴はゐなかい。

病人　俺は知らないよ。俺はちっとも知らないよ。

百姓二　なに、此處に寢てゐて知らないと云ふ奴があるもんか。知らないと云や、家探しだ。

百姓三　よし、こんな小さい小屋、容はねえ。（皆奥へゆく。直ぐ臺所から、豚の片足を握ってゐるジョバンニを引きずり出して來る。百姓達、ジョバンニを打つ）

百姓一　太い野郎め。

百姓二　こん畜生！

百姓三　泥棒め。大泥棒め！

百姓四　何うして、俺の家の豚の足を盜んだ。

ジョバンニ　えゝこら、何うして盜んだ。

ジョバンニ　だって、病人が豚を喰ひたいと云ふだもの。

百姓一　病人が喰ひたいと云うたら、他人の物を盜んでも、えゝと云ふのかい。

ジョバンニ　フランチェスコ樣が、病人の云ふことは何でも聽けと仰しやっただ。

百姓二　馬鹿！　病人の云ふことだって、盜んでまで喰はせろとは云はないだらう。

百姓三　この大泥棒め！

（皆に、小づき廻はされるところへ、フランチェスコとベルナルドと歸つて來る）

フランチェスコ 何うしたのです。何うしたのです。まあ、待つて下さい。一體何うしたのです。

百姓 おゝフランチェスコさんだ。貴君だつて、責任がある。この男が、私達の豚の足を盜んだのだ。

ジョバンニ お師匠樣、病人が豚の足を喰ひたいと云ふだ。俺や困ると思つたけれど、お師匠さまが病人の云ふことは何でも聽いてやれ仰しやつたで、俺は一生懸命に豚を見つけて、手あたり次第に、足を一本切つて來ただ。

百姓一 そら、ちやんと白狀したでねえか。

フランチェスコ それはまあ、大變なことをしてくれましたね。

百姓一 大變どころぢやねえ、晝日中他人の家の豚を盜むなんて。お役人さまに渡して牢屋へ打ちこんで貰ひたいだ。

フランチェスコ 本當に申譯ありません。どうぞ堪忍して下さい。私はどんな償ひでもいたします。どうぞお辨して下さい。（ジョバンニに）お前は、どうしてそんな恐ろしいことをしたのです。私達の兄弟で、モーゼの第一戒を犯したのは、お前が初めてです。早く、皆さんにお詫びを云ひなさい！

ジョバンニ でも、お師匠さま、病人の云ふことは何でも……。

フランチェスコ まあそれはそれとし、早くおわびを云ひなさい！

ジョバンニ （不承々々に）どうも、俺が惡うがした。

ベルナルド 私達の兄弟をゆるして下さい。この男は、おろかしさのためにこんなことをしたのです。

フランチェスコ （ひざまづいて）どうぞ、この男をゆるしてやつて下さい。私が、病人の云ふことは、何でも聽けと云ひつけましたので、こんな間違ひが出來たのです。神さまのために、この男のおろかさと單純さとから犯した罪をゆるしてやつて下さい。豚の償は、どんなにでも致しますから。

ベルナルド ほんたうに、堪忍して下さい。

百姓一 豚を償ふと云ふならゆるしてやらう。こんど、こんな事をしたら勘辨しないから。ぢや間違なく豚を返して下さい。

フランチェスコ 畏りました。

（百姓達去る。ジョバンニもぢ〳〵して居る。フランチェスコ、ジョバンニの方へ向く）

フランチェスコ 何うして、貴君は、こんな恐ろしいことをしたのです。貴君は、私のよい行ひとか、お勸めとか、お祈りとか、そんなことだけを眞似するのではなかつたのですか。他人のものを盜むなんて、恐ろしいことです。たとひ、病人の望みにしても、貴君がそんな恐しいことをしてもいゝと云ふことはありません。でも、私は貴君を憎みません。貴君は淨いおろかしさのために、このことをしたのです。私は神さまが、あなたの罪をおゆるし下さるやうに祈りませう。

フランチェスコ （ひざまづいて恭しく高らかに、情熱的に祈る）神さま、あなたのあはれなる小さき僕の一人が、犯したる罪をおゆるし下さい。あれは、本當に何も知らなかつたのです。彼は淨らかなおろかさと單純さのために、それをよい事として犯したのです。貴君の大なる愛に依つて、彼の罪をゆるし、彼が再びかうした恐ろしい過ちを犯さないやうに、みちびきたまへ。アメン。

ジョバンニ （中途から同じやうに、ひざまづいて高らかに祈る）……あれは、本當に何も知

らなかつたのです。彼は、淨らかなおろかさと單純さとのために、それをよいこととして犯したのです。貴君の大なる愛に依つて、彼の罪をゆるし、彼が再びかうした恐ろしい過ちを、犯さないやうに、みちびきたまへ。アメン。

フランチェスコ （おどろいて立ち上る）一體、誰のために祈つてゐるのです。彼とは、誰のことです。

ジョバンニ 俺は、貴君の祈りの眞似をしてゐるのです。

フランチェスコ （呆氣にとられてゐたが、やがてほの〳〵と微笑す）おゝ私は、貴君に神さまのおゆるしを祈る必要はなかつた。貴君はその淨らかなおろかさに依つて、神と共にある。おゝフラテ ジョバンニ！

（ジョバンニの肩に右の手をかける）

ジョバンニ おゝ貴君はその淨らかなおろかさに依つて、神と共にある。おゝフラテ・フランチェスコ！

（フランチェスコの肩に右の手をかける）

——幕——

眞珠夫人（前篇）

一　奇禍

汽車が、大船を離れた頃から、信一郎の心は、段々烈しくなつて行く焦燥しさで、滿たされて居た。國府津迄の、まだ五つも六つもある驛毎に、汽車が小刻みに、停車せねばならぬことが、彼の心持を可なり、いら立たせて居るのであつた。

彼は、一刻も早く靜子に、會ひたかつた。そして彼の愛撫に、溺れて居る彼女を、思ふさま、いたはづてやりたかつた。

時は六月の初であつた。汽車の線路に添うて、潮のやうに起伏して居る山や森の綠は、少年のやうな若々しさを失つて、むつとするやうなあくどさで、車窓に迫つて來て居た。たゞ、所々植付けられたばかりの早苗が、輕いほのぼのとした綠を、初夏の風の下に、漂はせて居るのであつた。

常ならば、箱根から伊豆半島の溫泉へ、志ざす人々で、一杯になつて居る筈の二等室も、春と夏との間の、湯治には半端な時節であるのと、一週間ばかり雨が、降り續いた揚句であるとで、それらしい乘客の影さへ見えなかつた。たゞ佛蘭西人らしい老年の夫婦が、一人息子らしい十五六の少年を連れて、車室の一隅を占めて居るのが、信一郎の注意を、最初から惹いて居る丈である。彼は、若い男鹿の四肢のやうに、スラリと纏まつた少年の姿を、飽かず眺めたり、父と母とに逃みに話しかける簡單な會話に、耳を傾けたりして居た。此の一行の外には、洋服を着た會社員らしい二人連と、田舍娘とその母親らしい女連が、乘り合はして居る丈である。

が、あの湯治附纏と云つたやうな、男も女も、大鳥の擬か何かを着て、金や白金や寶石の裝身具を身體のあらゆる部分に、燦かして居るやうな人達が、乘り合はして居ないことは信一郎にとつて結局氣樂だつた。彼等は、屹度鄙高に、喋べり散らしたり、何かを喰べ散らしたり、無作法に振舞つたりすることに依つて、現在以上に信一郎の心持をいら〳〵させたに違ひなかつたから。

日は、深く驕つて居た。汽車の進むに從つて、隱見する相模灘はすゝけた銀の如く、底光を帶びたまゝ澱んで居た。先刻まで、見えて居た天城山も、何時の間にか、灰色に塗り隱されて了つて居た。相模灘を陽して居る水平線の朦りには、雨をでも含んで居さうな、晴鬱な雲が低迷して居た。もう、午後四時を廻つて居た。

「靜子が待ちあぐんで居るに違ひない」と、思ふ毎に、汽車の廻轉が、殊更遲くなるやうに思はれた。信一郎は、いら〳〵しくなつて來る心を、ぢつと押へ付けて、湯河原の湯の宿に、自分を待つて居る若き愛妻の面影を、空に描いて見た。何よりも先づ、その石竹色に濕んで居る頬に、微笑の先驅として、浮かんで來る笑靨が現はれた。それに續いて、慣ましい唇、高くはないけれども穩やかな品のいゝ鼻。が、そんな目鼻立よりも、韻全體に現はれて居る處女らしい含羞性、それを思ひ出す毎に、信一郎自身の表情が、たるんで來て、其處には居合はさぬ妻に對する愛撫の、微笑が、何時の間にか、浮かんで

居た。彼は　それを誰かに、氣付かれはしないかと、恥しげに車内を見廻はした。が、例の佛蘭西の少年が、その時、

「お母親さん！」と摩高に呼びかけた外には、乘合の人々は、銘々に何かを考へて居るらしかつた。

汽車は、海近い松林の間を、蘚々と驅け過ぎて居るのであつた。

二

湯の宿の柵干に身を靠せて、自分を待ちあぐんで居る愛妻の面影が、汽車の車輪の廻轉に連れて消えたりかつ浮かんだりした。それほど、信一郎は新しく婚した靜子に、心も身も奪へて居たのである。

つい三月ほど前に、田舍で擧げた結婚式のことを考へても、上京の途すがら奈良や京都に足を止めた蜜月旅行らしい幾日かの事を考へても、彼は靜子を獲たことが、どんなに幸福を意味して居るかをしみ〳〵と悟ることが出來た。

結婚の式場で示した彼女の、處女らしい羞しさと、淨らかさ、それに續いた同棲生活に於て、自分に投げて來た全身的な信頼、日が經つに連れて、埋もれて居た寶玉のやうに、だんだん現れて來る彼女のいろ〳〵な美質、さうしたことを、取とめもなく考へて居ると、信一郎は一刻も早く、目的地に着いて初々しい靜子の優き通るやうなくいり顎の邊を、輕く撫してやりたくて、仕樣がなくなつて來た。

一催か一週間、離れて居ると、もうそんなに逢ひたくて、堪らないのか」と、自分自身心の中で、さうも反問すると、信一郎は駄々つ子か何かのやうに、じれ切つて居る自分が氣恥しくないこともなかつた。

が、新婚後、まだ幾日にもならない信一郎に取つては、催一週間ばかりの短い月日が、どんなに長く、三月も四月もに相當するやうに思はれた事だらう。靜子が、急性肺炎の病後のために、醫者から溫泉行を、勸められた時にも、信一郎は自分の手許から、妻を半日でも一日でも、手放して置くことが、不安な淋しい事のやうに思はれて、仕方がなかつた。それかと云つて、結婚のために半月以上も、勤先を缺勤して居る彼には休暇を貰ふ口實などは、何も殘つて居なかつた。彼は　止むなく先週の日曜日に妻と女中とを、湯河原へ伴ふと、直ぐその日に東京へ歸つて來たのである。

今朝着いた手紙から見ると、もうスツカリ好くなつて居るに違ひない。明日の日曜に、自分と一緒に歸つてもいゝと、云ひ出すかも知れない。輕便鐵道の驛までは、迎へに來て居るかも知れない。いや、靜子はそんなことに、氣の利く女ぢやない。あれは、おとなしく慣しく待つて居る女だ、屹度、あの湯の新築の二隣の棚干にもたれて、藤木川に懸つて居る木橋をぢつと見詰めて居るに違ひない。そして、馬車や自動車が、あの橋板をとゞろかす毎に、靜子も自分が來たのではないかと、彼女の小さい胸を轟かして居るに違ひない。

信一郎の、かうした愛妻を中心とした、いろいろな想像は、重く垂下がつた夕方の雲を、劈くやうな鋭い汽笛の聲で破られた。窓から首を出して見ると、一帶の松林の樹の間から、國府津に特有な、あの凄味を帶びた眞蒼な海が、暮れ方の光を暗く照り返して居た。

秋の末か何かのやうに、見渡すかぎり、陸や海は、蕭條たる色を帶びて居た。が、信一郎は國府津だと知ると、蘇つたやうに、座席を蹴つて立ち上つた。

三

汽車がプラットホームに、横付けになると、多くも居なかつた乘客は、我先きにと降りてしまつた。此の驛が止まりである汽車は、見る

見る裡に、洗はれたやうに、虚しくなつてしまつた。

が、停車場は少しも混雑しなかつた。五十人ばかりの乗客が、改札口のところで、暫らく斑にたゆたつた丈であつた。

信一郎は、身支度をして居た爲に、誰よりも遲れて車室を出た。改札口を出て見ると、驛前の廣場に湯本行きの電車が發車するばかりの氣勢を見せて居た。が、その電車も、此の前の日曜の日の混雑とは丸切り違つて、まだ腰をかける餘地さへ殘つて居た。が、信一郎はその電車を見たときにガタリ〳〵と傳聞場毎に止まる、のろ〳〵した途中の事が、直ぐ頭に浮かんだ。その上、小田原で乗り換へると行く手にはもつと難物が控へて居る。それは、右は山左は海の、狹い崖端を、蜈蚣か何かのやうにのたくつて行く輕便鐵道である。それを考へると、彼は電車に乗らうとした足を、思はず踏み止めた。湯河原まで、何うしても三時間かゝる。湯河原で降りてから、あの田舍道をガタ馬車で三十哩、どうしても十時近くなつてしまふ。彼は汽車の中で感じたそれの十倍も二十倍ものいら〳〵しさが自分を待つて居るのだと思ふと、何うしても電車に乗る勇氣がなかつた。彼は、少しも豫期しなかつた困難にでも逢つたやうに急に憂氣してしまつた。丁度その時であつた。つか〳〵と彼を追ひかけて來た大男があつた。

「もし〳〵如何です。自動車にお召しになつては」と、彼に呼びかけた。

見ると、その男は富士屋自動車と云ふ帽子を被ぶつて居た。信一郎は、急に投げ舟にでも逢つたやうに救はれたやうな氣持で、立ち止まつた。が、彼は賃錢の上の掛引のことを考へたので、さうした感情を、飯へは少しも出さなかつた。

「さうだねえ。乗つてもいゝね。安ければ」と彼は可なり餘裕を以て、答へた。

「何處までいらつしやいます」

「湯河原まで」

「湯河原までぢや、十五圓で參りませう。本當なれば、もう少し頂くのでムいますけれども、此方からお勸めするのですから」

十五圓と云ふ金額を聞くと、信一郎は自動車に乗らうと云ふ心持を、スッカリ無くしてしまつた。と云つて、彼は貧しくはなかつた。一昨年法科を出て、三菱へは入つてから、今では相當な給料を貰つて居る。その上、郷國にある財産からの收入を合はすれば、月額五百圓近い收入を拵つて居る。が、十五圓と云ふ金額を、湯河原へ行く時間を、わづか二三時間縮める爲に拂ふことは餘りに贅澤過ぎた。たとひ愛妻の靜子が、いかに待ちあぐんで居るにしても。

「まあ、よさう。電車で行けば譯はないのだから」と、彼は心の裡で考へて居る事とは、全く反對な理由を云ひながら、洋服を着た大男を振り捨てゝ、電車に乗らうとした。が、大男は執念く彼を放さなかつた。

「まあ、一寸お待ちなさい。御相談があります。實は、熱海まで行かうと云ふ方があるのですが、その方と合乗して下さつたら、如何でせう、それならば大變格安になるのです。それならば、七圓丈出して下されば。」

信一郎の心は可なり動かされた。彼は、電車の踏み段の棒にやらうとした手を、引つ込めながら云つた。「一體、そのお客とはどんな人なのだい？」

四

洋服を着た大男は、信一郎と同乗すべき客を、迎へて來る爲に、驛の眞向ひにある待合所の方へ行つた。

信一郎は、大男の後姿を見ながら思つた、どうせ、旅行中のことだから、どんな人間との

合乗でもたかが三四十分の辛抱だから、介意ないが、それでも感じのいゝ、道伴であつて呉れゝばいゝと思つた。傲然とふんぞり返るやうな、成金風の湯治階級の男なぞであつたら、堪まらないと思つた。彼はでつぷりと肥つた男が、實印を刻んだ金指環をでも、光らせながら、大男に連れられて、やつて來るのではないかしらと思つた。それとも、意外に美しい女か何かぢやないかしらと思つた。が、まさか相當な位置の婦人が、合乗を承諾することもあるまいと、思ひ返した。

彼は一寸した好奇心を唆られながら暫らくの伴侶たるべき人の出て來るのを、待つて居た。

三分ばかり待つた後だつたらう、やつと、交渉が纏つたと見え、大男はニコ〳〵笑ひながら、先きに立つて待合所から立ち現れた。その刹那に、信一郎は大男の肩越に、チラリと角帽を被ぶつた學生姿を見たのである。彼は同乗者が學生であるのを欣んだ。殊に、自分の母校——と云ふ程の親しみは持つて居なかつたが——の學生であるのを欣んだ。

「お待たせしました。此の方です」

さう云ひながら、大男は學生を、信一郎に紹介した。

「御迷惑でせうが」と、信一郎は快活に、挨拶した。學生は頭を下げた。が、何にも物は云はなかつた。信一郎は、學生の顔を、一目見て、その高貴な容貌に打たれざるを得なかつた。恐らく貴族か、でなければ名門の子弟なのだらう。品のよい鼻と、黒く澄み渡つた眸とが、爭はれない生れのけ高さを示して居た。殊に、けだし人懷しさうな眸が、此の青年を見る人に、いい感じを與へずには居なかつた。クレイヴネットの外套を着て、一寸した手提鞄を持つた姿は、又なく瀟洒に打ち上つて見えた。

「それで貴君樣の方を、湯河原のお宿までお送りして、それから引き返して熱海へ行くことに、此方の御承諾を得ましたから」と、大男は信一郎に云つた。

「さうですか。それは大變御迷惑ですなと、信一郎は改めて學生に挨拶した。やがて、二人は大男の指し示す自動車上の人となつた。信一郎は左側に、學生は右側に席を占めた。

「湯河原までは、四十分、熱海までは、五十分で參りますから」も、大男が云つた。

運轉手の手は、ハンドルにかゝつた。信一郎と學生とを、乗せた自動車は、今發車したばかりの電車を追ひかけるやうに、凄じい爆音を立てたかと思ふと、まつしぐらに國府津の町を疾驅した。

信一郎は、もう四十分の後には、愛妻の許に行けるかと思ふと、汽車中で感じた焦燥しさや、いらだたしさは、後なく晴れてしまつて、自動車の輕動に連れて身體が躍るやうに、心も輕く樂しい期待に躍つた。が、信一郎の同乗者たるかの青年は、自動車に乗つて居る樣な意識は、少しもないやうに、身を縮めて一隅に寄せたままその秀でた眉を心持ひそめて、何かに思ひ耽けつて居るやうだつた。車窓に移り變る情景にさへ、一瞥をも與へようとはしなかつた。

五

小田原の街に、はいる迄、二人は默々として相並んで居た。信一郎は、心の中では、此青年に一種の親しみをさへ感じて居たので、何うにかして、話しかけたいと思つて居たが、深い憂愁にでも、囚はれて居るらしい青年の容子は、信一郎にさうした機會をさへ與へなかつた。

殆ど、一尺にも足りない距離で見る青年の顔付は、愈〳〵そのけ高さを加へて居るやうであつた。が、その顔は何うした原因であるかは知らないが、蒼白な血色を帶びて居る。二つの眸は、何かの悲しみのため力なく澱んで居る

やうにさへ思はれた。

信一郎はなるべく相手の心持を優すまいと思つた。が、一方から考へると、同じ、自動車に二人切りで乘り合はして居る以上、默つたまま相對して居ることは、何だか窮屈で、かつは不自然であるやうにも思はれた。

「失禮ですが、今の汽車で來られたのですか」

と、信一郎は漸く口を切つた。會話のための會話として、判り切つたことを尋ねて見たのである。

「いや、此の前の上りで來たのです」と、青年の答へは、少し意外だつた。

「ぢや、東京からいらつしたんぢやないんですか」

「さうです。三保の方へ行つて居たのです」

話しかけて見ると、青年は割合ハキ〳〵と、然し事務的な受け答をした。

「三保と云へば、三保の松原ですか」

「さうです。彼處に一週間ばかり居たしたが、飽きましたから」

「やつぱり、御保養ですか」

「いや保養と云ふ譯ではありませんが、どうも頭がわるくつて」と云ひながら、青年の表情は晴い陰鬱な調子を帶びてゐた。

「神經衰弱ですか」

「いやさうでもありません」さう云ひながら、青年は力無ささうに口を緘んだ。簡單に言葉では、現はされない原因が、存在することを暗示するかのやうに。

「學校の方は、ズーッとお休みですね」

「さうです、もう一月ばかり」

「尤も文科ぢや出席してもしなくつても、同じでせうから」と、信一郎は、先刻青年の襟に、Lと云ふ字を見たことを思ひ出しながら云つた。

青年は、立入つていろ〳〵訊かれることに、一寸不快を感じたのであらう、又默り込まうとした。が、法科を出たものの、少年時代からずつと文藝の方に親しんで來た信一郎は、此の青年とさうした方面の話をも、して見たいと思つた。

「失禮ですが、高等學校は」暫らくして、信一郎はまたから口を切つた。

「東京です」青年は振り向きもしないで答へた。

「ぢや私と同じですが、お顏に少しも見覺えがないやうですが、何年にお出になりました」

青年の心に、急に信一郎に對する一脈の親しみが湧いたやうであつた。華やかな青春の時代を、同じ向陵の寄宿寮に過ごした者のみが、感じ合ふ特種の親しみが、青年の心を濕ほしたやうであつた。

「さうですか、それは失禮しました。僕は一昨年高等學校を出ました。貴君は」

青年は初めて微笑を洩した。淋しい微笑だつたけれども愛笑には違ひなかつた。

「ぢや、高等學校は丁度僕と入れ換はりです。お顏を覺えて居ないのも無理はありません」さう云ひながら、信一郎はポケットから紙入を出して、名刺を相手に手交した。

「あゝ渥美さんと仰しやいますか。僕は生憎名刺を持つて居ません。青木淳と云ひますと、云ひながら、青年は信一郎の名刺をぢつと見詰めた。

六

名乘り合つてからの二人は、前の二人とは別人同士であるやうな親しみを、お互に感じ合つて居た。

青年は羞み家であるが、その癖人一倍、人懷い性格を持つて居るらしかつた。單なる同乘者であつた信一郎には、冷めたい横顏を見せて居たのが、一日同じ學校の出身であると知ると、直ぐ先輩に對する親しみで、懷いて來るやうな初心な優しい性格を、持つて居るらしかつた。

「五月の十日に、東京を出て、もう一月ばかり、當もなく宿り歩いて居るのですが、何處へ行つても落着かないのです」と、青年は訴へるやうな口調で云つた。

信一郎は、青年のさうした心の動搖が、屹度青年時代に有勝な、人生觀の上の疑惑か、でなければ戀の悶えか何かであるに違ひないと思つた。が、何う云つて、それに答へてよいか分らなかつた。

「一層のこと、東京へお歸りになつたら何うでせう。僕なども精神上の動搖のため、海へなり山へなり安息を求めて、旅をしたことも度々ありますが、一人になると、却つて孤獨から來る淋しさ迄が加はつて、愈堪へられなくなつて、又都會へ追ひ返されたものです。僕の考へでは、何かを紛らすには、東京生活の混亂と騷擾とが、何よりの藥ではないかと思ふのです」と、信一郎は自分の過去の、二三の經驗を思ひ浮べながらさう云つた。

「が、僕の場合は少し違ふのです。東京に居ることが何うにも堪らないのです。當分東京へ歸る勇氣は、トテもありません」

青年は、又默つてしまつた。心の中の何處かに、可なり大きい傷を受けて居るらしい青年の容子は、信一郎の眼にもいたましく見えた。

自動車は、もうとつくに小田原を離れて居た。氣が付いて見ると、暮れかゝる太平洋の波が、白く碎けて居る高い崖の上を輕便鐵道の線路に添うて、疾驅して居るのであつた。

道は、可なり狹かつた。右手には、青葉の層々と茂つた山が、往來を壓するやうに迫つて居た。左は、急な傾斜を作つて、直ぐ眞下には、海が見えて居た。崖がやゝ滑かな勾配になつて居る所は蜜柑畑になつて居た。しら〳〵と咲いて居る蜜柑の花から湧く、高い匂が、自動車の疾驅するまゝに、車上の人の面を打つた。

「日暮までに、熱海に着くといゝですか」と、信一郎は暫らくしてから、沈默を破つた。

「いや、若し遲くなれば、僕も湯河原で一泊しようと思ひます。熱海へ行かなければならぬと云ふ譯もないのですから」

「それぢや、是非湯河原へお泊りなさい。折角お知己になつたのですから、ゆつくりお話したいと思ひます」

「貴方は永く御滯在ですか」と、青年が訊いた。

「いゝえ、實は妻が行つて居るのを迎へに行くのです」と、信一郎は答へた。

「奥さんが！」さう云つた青年の顏は、何故だか、一寸淋しさうに見えた。青年は又默つてしまつた。

自動車は、風を捲いて走つた。可なり危險な道路ではあつたけれども、日に幾回となく往返して居るらしい運轉手は、東京の大路を走るよりも、邪魔物のないのを、結句氣樂さうに、奔放自在にハンドルを廻した。その大膽な操縱が、信一郎達をして、時々ハッと息を呑ませることさへあつた。

「輕便かしら」と、青年が獨語のやうに云つた。

いかにも、自動車の爆音にもまぎれない、森々と云ふ聲が、山と海とに反響して、段々近づいて來るのであつた。

七

森々ととどろく輕便鐵道の汽車の音は、段々近づいて來た。自動車が、ある山鼻を廻ると、眼の前にもう眞黑な車體が、見えて居た。絶えず吐く黑い煙と、喘いで居るやうな恰好とは、何かのろい臭い生き物のやうな感じを、見る人に與へた。信一郎の乘つて居る自動車の運轉手は、此の時代遲れの交通機關を見ると、丁度お伽噺の中で、龜に對した兎のやうに、いかにも相手を馬鹿にし切つたやうな態度を示した。彼は擦れ違ふために、少しでも速力を加減するこ

とを、背んじなかつた。彼は速力を少しも緩めないで、輕便の軌道と、右側の岸壁の間とを、すばやく通り抜けようと、ハンドルを廻しかけたが、それは、彼として、明かな遺算であつた。其處は道幅が、殊更狹くなつて居るために、輕便の軌道は、山の崖近く覆かれてあつて、軌道と岩壁との間には、車體を容れる間隔は存在して居ないのだつた。運轉手が、此の事に氣が付いた時、汽車は三間と離れない間近に迫つて居た。

「馬鹿！　危い！　氣を付けろ！」と、汽車の機關士の烈しい罵聲が、狼狽した運轉手の耳朶を打つた。彼は周章てた。が、迫に間髪を容れない瞬間に、ハンドルを反到に急轉した。自動車は辛く衝突を免れて、道の左へ外れた。信一郎はホッとした。が、それはまたゝく暇もない瞬間だつた。左へ躱した自動車は、躱し方が餘りに急であつた爲、機みを打つてそのまゝ、左手の岩崖を墜落しさうな勢ひを示した。道の左には、半間ばかりの熊笹が繁つて居て、その端からは十丈に近い斷崖が、海へ急な角度を成して居た。

最初の危機には、冷靜であつた運轉手も、第二の危險には度を失つてしまつた。彼は、狂人のやうに意味のない言葉を發したかと思ふと、運轉手臺で身をもがいた。が、運轉手の死物狂ひの努力は間に合つた。三人の生命を託した車臺は、急廻轉をして、海へ陷ることから免れた。が、その反動で五間ばかり走つたかと思ふと、今度は右手の山の岩壁に、凄じくぶつ突つたのである。

信一郎は、恐ろしい音を耳にした。それと同時に、烈しい力で、狹い車内を、二三回左右に叩き付けられた。眼が眩んだ。しばらくは、たゞ嵐のやうな渾沌たる意識の外、何も存在しなかつた。

信一郎が、漸く氣が付いた時、彼は狹い車内で、海老のやうに折り曲げられて、一方へ叩き付けられて居る自分を見出した。彼はやつと身を起した。頭から胸のあたりを、ボンヤリ撫で廻はした彼は、自分が少しも傷付いて居ないのを知ると、まだフラ〳〵する眼を定めて、自分の横に居る筈の、青年の姿を見ようとした。

青年の身體は、直ぐ其處にあつた。が、彼の上半身は、半分開かれた扉から、外へはみ出して居るのであつた。

「もし〳〵、君！　君！」と、信一郎は青年を車内に引き入れようとした。その時に、彼は異樣な苦悶の聲を耳にしたのである。信一郎は水を浴びたやうに、ゾッとした。

「君！　君！」彼は、必死に呼んだ。が、青年は何とも答へなかつた。たゞ、人の心を掻きむしるやうな低いうめき聲が、籠いて居る丈であつた。

信一郎は、驅命の力で、青年を車内に抱き入れた。見ると、彼の美しい顏の半面は、薄氣味の惡い紫赤色を呈して居た。それよりも、信一郎の心を、脅やかしたものは、脣の右の端から、頤にかけて流れる一筋の血であつた。而もその血は、脣から出る血とは違つて、内臓から迸つたに違ひない赤黑い血であつた。

返すべき時計

一

信一郎が、青年の身體をやつと車内に引き入れたとき、運轉手席から路上へ、投げ出されて居た運轉手は、漸く身を起した。額の所へ擦り傷の出來た彼の顏色は、凡ての血の色を無くして居た。彼はオド〳〵車内をのぞき込んだ。

「何處もお負傷はありませんか。お負傷はありませんか。」

「馬鹿！　負傷どころぢやない。大變だぞ」と、

信一郎は怒鳴りつけずには居られなかつた。彼は運轉手の放膽な操縱が、此の慘禍の主なる原因であることを、信じたからであつた。

「はつはつ」と運轉手は恐れ入つたやうな聲を出しながら、窓にかけて居る附手をブル〳〵慄はせて居た。

「君！　君！　氣を確にしたまへ」

信一郎は懸命な聲で青年の意識を呼び返さうとした。が、彼は低い、ともすれば、絶えはてさうなうめき聲を續けて居る丈であつた。

口から流れて居る血の筋は、何時の間にか、段々太くなつて居た。右の頬が見る間に腫れふくらんで來るのだつた。信一郎は、ボンヤリつッ立つて居る運轉手を、再び叱り付けた。

「おい！　早く小田原へ引返すのだ。全速力で、早く手當をしないと助からないのだぞ」

運轉手は、夢から醒めたやうに、運轉手席に着いた。が、發動機の壞れて居る上に、前方の車輪までが、曲つて居るらしい自動車は、一寸だつて動かなかつた。

「駄目です。とても動きません」と、運轉手は郎を持つ人のやうに顫へ聲で云つた。

「ちや、一番近くの醫者を呼んで來るのだ。眞鶴なら、遠くはないだらう。醫者とさうだ、警察へ屆けて來るのだ。又小田原へ電話が通ずるのなら、直ぐ自動車を寄越すやうに賴むのだ」

運轉手は、氣の抜けた人間のやうに、命ぜらるゝ儘に、フラ〳〵と駈け出した。

青年の苦悶は、續いて居る。半眼に開いて居る眼は、上ヅッた白眼を見せて居る丈であるが、信一郎は、たゞ青年の上半身を抱き起して居る丈で、何うにも手の付けやうがなかつた。もう、臨終に間もないかも知れない青年の額かたちを、たゞ茫然と見詰めて居る丈であつた。

信一郎は青年の奇禍を傷むのと同時に、アハよく免れた自身の幸福を、欣ばずには居られなかつた。それにしても、何うして扉が、開いたのだらう。其處から身體が出たのだらう。上半身が、半分出た爲に、衝突の時に、扉と車體との間で、强く胸部を壓し潰ぶされたのに違ひなかつた。

信一郎は、ふと思ひついた。最初、車臺が海に面する斷崖へ、轉落しようとしたとき、青年は車から飛び降りるべく、咄嗟に右の窓を開けたに違ひなかつた。もし、さうだとすると、車體が最初怖れられたやうに、海中に墜落したとすれば、死ぬ者は信一郎と運轉手とで、助かる者は此青年であつたかも知れなかつた。

車體が、急轉したとき、信一郎と青年の運命も咄嗟に轉換したのだつた。自動車の初めの合乘に青年と信一郎とは、恐ろしい生死の活劇に好運惡運の兩極に立つた譯だつた。

信一郎は、さう考へると、結果の上からは、自分が助かるための犠牲になつたやうな、青年のいたましい姿を、一層あはれまずには居られなかつた。

彼は、ふとウキスキイの小壜がトランクの中にあることを思ひ出した。それを、飲ますことが、かうした重傷者に何う云ふ結果を及ぼすかは、ハッキリと判らなかつた。が、彼としては此の場合に爲し得る唯一の手當であつた。彼は青年の頭を座席の上に、ソッと下すとトランクを開けて、ウキスキイの壜を取り出した。

二

口中に注ぎ込まれた數滴のウキスキイが、利いたのか、それとも偶然さうなつたのか、青年の白く濁んで居た眸が、だん〳〵意識の光を帶び始めた。それと共に、意味のなかつたうめき聲が切れ〳〵ではあるが、言葉の形を採り始めた。

「氣を確にしたまへ！　氣を！　君！　君！　青木君！」信一郎は、力一杯に今覺えたばかり

の青年の名を呼び續けた。

青年は、ぢつと眸を凝すやうであつた。劇しい苦痛の爲に、ともすれば飛び散りさうになる意識を、懸命に取り蒐めようとするやうだつた。彼は、ぢいつと、信一郎の顔を、見詰めた。やつと自分を襲つた禍の前後を思ひ出したやうであつた。

「何うです。氣が付きましたか。青木君！　氣を確にしたまへ！　直ぐ醫者が來るから」

青年は意識が歸つて來ると、此の苟の旅の道連の親切を、しみ〳〵と感じたのだらう。

「あり――ありがたう」と、苦しさうに云ひながら、感謝の微笑を漏へようとしたが、それは劃なく襲うて來る苦痛の爲に、跡なく崩れてしまつた。腸をよぢるやうな、苦悶の聲が、續いた。

「少しの辛抱です。直ぐ醫者が來ます」

信一郎は、相手の苦悶のいた〳〵しさに、狼狽しながら答へた。

青年は、それに答へようとでもするやうに、身體を心持起しかけた。その途端だつた。苦しさうに咳き込んだかと思ふと、頸から洋服の胸へかけて、流れるやうな多量の血を吐いた。それと同時に、今迄充血して居た顔が、サッと蒼ざめてしまつた。

青年の顔には、既に死相が讀まれた。内臓が、外部からの劇しい衝動の爲に、内出血をしたことが、餘りに明かだつた。

醫學の心得の少しもない信一郎にも、もう青年の死が、單に時の問題であることが分つた。青年の顔に血色がなかつた如く、信一郎の面にも、血の色がなかつた。彼は、彼と偶然知己になつて、直ぐ死に去つて行く、ホンの瞬間の友達の運命を、ぢつと見詰めて居る外はなかつた。

太平洋を壓して居る、密雲に閉ざされたまゝ、日は落ちてしまつた。夕闇の迫つて居る崖端の道には、人の影さへ見えなかつた。瀕死の負傷者を見守る信一郎は、ヒシ〳〵と身に迫る物凄い寂寥さを感じた。負傷者のうめき聲の絶間には、崖下の岩を洗ふ浪の音が淋しく聞えて來た。

吐血をしたまゝ、仰向けに倒れて居た青年は、ふと頭を擡げて何かを求めるやうな容子をした。

「何です！　何です！」

信一郎は、掩ひかぶさるやうにして訊いた。

「僕の――僕の――鞄！」

口中の血に咽せるのであらう、青年は噦ぎ噦ぎ絶え入るやうな聲で云つた。信一郎は、車中を見廻した。青年が、携へて居た旅行用の小形の鞄は、座席の下に横倒しになつて居るのだつた。信一郎は、それを取り上げてやつた。青年は、それを受け取らうとして、兩手を出さうとしたが、彼の手はもう、彼の思ふやうには、動きさうにもなかつた。

「一體、此の鞄を何うするのです」

青年は、何か答へようとして、口を動かした。が、言葉の代りに出たものは、先刻の吐血の名殘りらしい少量の血であつた。

「開けるのですか。開けるのですか」

青年は、肯かうとした。が、それも肯かうとする意志丈を示したのに、過ぎなかつた。信一郎は鞄を開けにかゝつた。が、それには鍵がかかつて居ると見え、容易には開かなかつた。が、此場合瀕死の重傷者に、鍵の在處を尋ねるなどは、餘りに心ないことだつた。信一郎は、滿身の力を振つて、捻ぢ開けた。金物に付いて、革がべり〳〵と、二三寸引き裂かれた。

三

「何を出すのです。何を出すのです」

信一郎は、藥品をでも、取り出すのであらうと

思つて訊いた。が、青年の答は意外だつた。

「雜記帳を」

青年の聲は、かすかに咽喉を洩れると、云ふ程度に過ぎなかつた。

「ノート？」

信一郎は、不審りながら、鞄を振き廻した。いかにも、鞄の底に、三帖綴の大學ノートを入れてあるのを、見出した。

青年は、眼で肯いた。彼は手を出して、それを取つた。彼は、それを破らうとするらしかつた。が、彼の手は、たゞノートの表紙を滑べり廻る丈で、一枚の紙さへ破れなかつた。

「捨てゝ――捨てゝ下さい！　海へ、海へ」

彼は、懸命に苦しげな聲を、振りしぼつた。そして、哀願的な眸で、ぢいつと、信一郎を見詰めた。

信一郎は、大きく肯いた。

「承知しました。何か、外に用がありませんか。何でもして上げますよ」

信一郎は、大聲で、而も可なり感激を以て、青年の耳許に叫んだ。本當は、何か遺言はありませんかと、云ひたい所であつた。が、さう云ひ出すことは、此のうら若い負傷者に取つて、餘りに氣の毒に思はれた。が、さう云つてもよいほど、青年の呼吸は、迫つて居た。

信一郎の言葉が、青年に通じたのだらう、彼は、それに應ずるやうに、右の手首を、高く差し上げようとするらしかつた。信一郎は、不思議に思ひながら、差し上げようとする右の手首に手を觸れて見た。其處に、冷めたく堅い何かを感じたのである。夕暮の光に透して見ると、青年は腕時計をはめて居るのであつた。

「時計ですか。此時計を何うするのです」

烈しい苦痛に、歪んで居る青年の面に、又別な苦悶が現はれて居た。それは肉體的な苦悶とは、又別な――肉體の苦痛にも劣らないほどの――心の、魂の苦痛であるらしかつた。彼の蒼白だつた面は、微弱ながら、俄に興奮の色を示したやうであつた。

「時計を――時計を――返して下さい」

「誰にです、誰にです」

信一郎も、懸命になつて訊き返した。

「お願ひ――お願ひ――お願ひです。返して下さい。返して下さい！」

もう、斷末魔らしい苦悶の裡に、青年は此世に於ける、最後の力を振りしぼつて叫んだ。

「一體、誰にです？　誰にです」

信一郎は、總り付くやうに、訊いた。が、青年の意識は、再び彼を離れようとして居るらしかつた。たゞ、低い切れ〳〵のうなり聲が、それに答へた丈だつた。信一郎は、今此の答へを得て置かなければ、永劫に得られないことを知つた。

「時計を誰に返すのです。誰に返すのです」

青年の四肢が、ピクリ〳〵と痙攣し始めた。もう、死期の目睫の間に迫つて居ることが判つた。

「時計を誰に返すのです。青木君！　青木君！　しつかりし給へ。誰に返すのです」

死の苦しみに、青年は身體を、左右にもだえた。信一郎の言葉は、もう瀕死の耳に通じないやうに見えた。

「時計を誰に返すのです。名前を云つて下さい。名前を云つて下さい。名前を――」

信一郎の聲も、狂人のやうに上ずつてしまつた。その時に、青年の口が、何かを云はうとして、モグ〳〵と動いた。

「青木君、誰に返すのです？」

永久に、消え去らうとする青年の意識が、ホンの瞬間、此世に呼び返されたのか、それとも死際の無意味な囈語であつたのだらうか、青年は、

「瑠璃子！　瑠璃子！」と、子供の片言のやうに、口走ると、それを世に殘した最後の言葉として、劇しい痙攣が來たかと思ふと、それがサワと潮の引くやうに、衰へてしまつてガクリとなつたかと思ふと、もう、ピクリともしなかつた。死が、遂に來たのである。

四

信一郎は、ハンカチーフを取り出して、死者の顎から咽喉にかけての、血を拭つてやつた。

だん〳〵蠟色に、白んで行く、不幸な青年の面をぢつと見詰めて居ると、信一郎の心も、青年の不慮の横死を悼む心で、一杯になつて、ほた〳〵と、涙が流れて止まらなかつた。五年も十年も、親しんで來た友達の死顏を見て居る心と、少しも變らなかつた。何と云ふ、不思議な運命であらうと、信一郎は思つた。親しい友達は、元より、親兄弟、いとしき妻夫、愛兒の臨終にさへ、いろ〳〵な事情や境遇のために、居合はさぬ事もあれば、間に合はぬ事もあるのに、ホンの三十分か、四十分の知己、ホンの暫時の友人、云はゞ路傍の人に過ぎない、旬の旅の道伴でありながら、その死床に侍して、介抱をしたり、遺言を聞いてやると云ふことは、何と云ふ不思議な機緣であらうと、信一郎は思つた。

が、青年の身になつて、考へて見ると、一寸した小旅行の中途で思ひがけない奇禍に逢つて、淋しい海邊の一角で、親兄弟は勿論親しい友達さへも居合はさず、他人に外ならない信一郎に、死水を――それは水でなく、數滴のウヰスキイだつたが――取られて、望み多い未來を、不當に豫告なしに、切り取られてしまつた情なさ、淋しさは、どんなであつただらう。彼は、息を引き取るとき、親兄弟の優しい慰藉の言葉に、どんなに渴望したことだらう。殊に、母か姉妹か、或は戀人かの女性としての優しい愛の言葉を、どんなに欲しただらう。彼が、口走しつた瑠璃子と云ふ言葉は、屹度さうした女性の名前に違ひないと思つた。

その裡に、信一郎の心に、青年の遺した言葉が考へられ始めた。彼は、最初にかう疑つて見た。他人同然の彼に、何うして時計のことを云つたのだらう。若し、時計が誰かに返さるべきものなら名乘り合つたばかりの信一郎などに賴まないでも、親族の人の手で、當然返さるべきものではなからうか。が、信一郎は、直ぐかう思ひ返した。青年は、ノートの內容も、時計を返すことも、遺族の人々には、知られたくなかつたのだらう。親兄弟には、飽くまでも、秘密にして置きたかつたのであらう。而も、秘密に時計を返すには、信一郎に賴む外には、何の手段もなかつたのだ。人間が人間を信じることが、一つの美德であるやうに、此青年も必死の場合に、心から信一郎を信賴したのだらう。いや、信賴する外には、何の手段もなかつたのだ。

信一郎は、青年の死際の懇命の信賴を、心に深く受け入れずには居られなかつた。名乘り合つたばかりの自分に、心からの信賴を置いて居る。人間として、男として、此の信賴に背く譏には、行かないと思つた。

人が、臨終の時に捧ずる信賴は、基督正教の信徒が、死際の懺悔と同じやうに、神聖な重大なものに、違ひないと思つた。當今、三十分四十分の交際であらうとも、賴まれた以上、忠實に、その信賴に酬いねばならぬと思つた。

さう思ひながら、信一郎は死者の右の手首から、恐る〳〵時計を脫して見た。時計も、それを腕に捲く腕輪も、銀か白銅らしい金屬で出來て居た。ガラスは、その持主の悲慘な最期に似て、微塵に碎け散つて居た。夕暮の光の中で、透して見ると、腕輪に附いて居る止め金が、衝突のとき、皮肉を切つたのだらう。輕い出血があつたと見え、その白つぽい時計の胴に、所々眞

赤な血が、淀んで居た。今までは、興奮のために、夢中になつて居た信一郎も、それを見ると、今更ながら、青年の最期の、むごたらしさに、思はず戰慄を禁じ得なかつた。

五

が、時計を返すとして、一體誰に返したらいいのだらうかと、信一郎は思つた。青年が、死際に口走しつた瑠璃子と云ふ名前の女性に返せばいゝのかしら。が、瑠璃子と云つたのは、時計を返すべき相手の名前を、云つたのだらうか。時計などとは何の關係もない、青年の戀人か姉か、妹かの名ではないのかしら。

「時計を返して呉れ」と云つたとき、青年の意識は可なり確だつた。が、息を引き取る時には、青年の意識は、もう正氣を失つて居た。

「瑠璃子……」と、叫んだのは、たゞ狂つた心の最後の、偶然な囈語で、あつたかも知れなかつた。が、瑠璃子と云ふ名前は、青年の心に死の刹那に深く喰ひ入つた名前に違ひなかつた。丁度、腕時計が、死の刹那に彼の手首の肉に、喰ひ入つて居たやうに。

信一郎は、再度その小形な腕時計を、手許に迫る夕闇の中で透して見た。ぢつと、見詰めて居ると最初銀かニッケルかと思つた金屬は、銀ほどは光が無く、ニッケルほど薄つぺらでないのに氣が付いた。彼は指先で、二三度撫でて見た。それは、紛ぎれもなく白金だつた。しかも撫でて居る指先が、何かツブ〳〵した物に觸れたので、[illegible]を凝すと、銳い光を放つ一顆の寶石が、鏤められて居た。而も、それは金で象眼された小さい短劍の柄に當つて居た。それは希臘風の短劍の形だつた。復讐の女神ネメシスが、逆手に掴んで居るやうな、短劍の形だつた。信一郎は、その時異な、不思議な象眼に、劇しい好奇心を、唆られずには居られなかつた。時計の元來の所有者は、女性に違ひなかつた。が、その象眼は、何と云ふ女らしからぬ、銳い意匠だらう。

日は、もうとつぷりと、暮れてしまつた。海上にのみ、一脈の薄明が、漂うて居るばかりだつた。運轉手は、なか〳〵歸つて來なかつた。淋しい海岸の一角に、まだ生あたゝかい死屍を、たゞ一人で見守つて居ることは、無氣味な事に違ひなかつた。が、先刻から興奮し擦けて居る信一郎には、それが左程、厭はしい事にも、氣味の惡い事にも思はれなかつた。彼はある感激をさへ感じた。人として立派な義務を盡して居るやうに思つた。

信一郎は、ふとかう云ふ事に氣が付いた。たとひ、青年からあゝした依託を受けたとしても、たゞ默つて、此の高價な白金の時計を、死屍から持ち去つてもいゝだらうか。もし、臨檢の巡査にでも、咎められたら、何と返事をしたらいいだらう。死人に口なく、死に去つた青年が、自分のために、辯解して呉れる筈はない。自分は、人の死屍から、高貴な物品を、剝ぎ取る恐ろしい卑しい盜人と思はれても、何の云ひ譯もないではないか。青年の遺言を受けたと抗辯しても、果して信じられるだらうか。

さう考へると、信一郎の心は、だん〳〵迷ひ始めた。妙ないきがかりから、他人の秘密にまで立ち入つて、返すべき人の名前さへ、判然とはしない時計などを預つて、つまらぬ心配や氣苦勞をするよりも、たゞ乘り合はした一個の旅の道伴として、遺言も何も、聽かなかつたことにしようかしら。

が、かう考へたとき、信一郎の心の耳に、「お願ひで――お願ひです。時計を返して下さい」と、云ふ青年の、血に咽ぶ聲末魔の悲壯な聲が、再び鳴り響いた。それに應ずるやうに、信一郎の良心が、一貴樣は卑怯だぞ。貴樣は卑怯だぞ」と、低く然しながら、力强く囁いた。

「さうだ。さうだ。兎に角、瑠璃子と云ふ女性を探して見よう。たとひ、それが時計を返すべき人でないにしろ、その人は屹度、此の青年に一番親しい人に違ひない。その人が、屹度時計を返すべき本當の人を、數へて哭れるのに違ひない。又、自分が時計を盗んだと云ふやうな、不當な疑ひを受けたとき、此人が屹度辯解して哭れるのに違ひない」

信一郎は、「瑠璃子」と云ふ三字を頼りにして、自分の物でない時計を、ポケット深く、藏めようとした。

その時に、急に近よつて來る人聲がした。彼は、惡い事でもして居たやうに、ハッと驚いて振り返つた。警察の提灯を圍んで、四五人の人が、足早に駈け付けて來るやうだつた。

六

駈け付けて來たのは、オド〳〵して居る運轉手を先頭にして、年若い巡査と、醫者らしい袴をつけた男と、警察の小使らしい老人との四人であつた。

信一郎は、彼等を迎へるべく扉を開けて、路上へ降りた。

巡査は提灯を車内に差し入れるやうにしながら、

「何うです。負傷者は？」と、訊いた。

「先刻息を引き取つたばかりです。何分胸部をひどく、やられたものですから、助からなかつたのです」と、信一郎は答へた。

暫らくは、誰もが口を利かなかつた。運轉手が、ブル〳〵顫へ出したのが、ほの暗い提灯の光の中でも、それと判つた。

「兎も角、一應診て下さい」と、巡査は醫者らしい男に云つた。運轉手は顫へながら、車體に取り付けてある洋燈に、點火した。周圍が、急に明るくなつた。

「お伴ぢやないのですね」醫者が、檢視をするのを見ながら、巡査は信一郎に訊いた。

「さうです。たゞ國府津から乘合はしたばかりなのです。が、名前は判つて居ます。先刻名乘り合ひましたから」

「何と云ふ名です」巡査は手帳を開いた。

「青木淳と云ふ文科大學生です。宿所は訊かなかつたけれど、どうも名前と頷付から考へると、青木淳三と云ふ貴族院議員のお子さんに違ひないと思ふのです。無論斷言は出來ませんが、特物でも調ぶれば直ぐ判るでせう」

巡査は、信一郎の云ふ事を、一々肯いて聽いて居たが、

「遺蹟の事情は、運轉手から一通り、聽きましたが、貴君からもお話を願ひたいのです。運轉手の云ふことばかりも信ぜられませんから」

信一郎は言下に「運轉手の過失です」と云ひ切りたかつた。過失と云ふよりも、無責任だと云ひ切りたかつた。が、戰きながら、信一郎と巡査との問答を、身の一大事とばかり、聞耳を立てゝ居る運轉手の、罪を知つた容子を見ると、さう強くも云へなかつた。その上、運轉手の罪を、幾何辯護に叫んでも、青年の魂、る筈もなかつた。

「運轉手の過失もありますが、どうも此方が自分で扉を、開けたやうな形跡もあるのです。扉さへ開かなかつたら、死ぬやうなことはなかつたと思ひます」

「なるほど」と、巡査は何やら手帳に、書き付けてから云つた。「いづれ、親族の方から起訴にでもなると、貴君にも證人になつて戴くかも知れません。御名刺を一枚戴きたいと思ひます」

信一郎はをはるゝまゝに、一枚の名刺を與へた。

丁度その時に、醫者は血に塗みれた手を氣にしながら、車内から出て來た。

「ひどく血を吐きましたね。あれぢや負傷後、幾何も生きて居なかつたでせう」と、信一郎に云つた。

「さうです。三十分も生きて居たでせうか」

「あれぢや助かりつこはありません」と、醫者は投げるやうに云つた。

「貴君もとんだ災難でした」と、巡査は信一郎に云つた。「が、死んだ方に比ぶれば、むしろ命拾ひをしたと云つてもいゝでせう。湯河原へ行らつしやるさうですね。それぢや小使に御案内させますから、眞鶴までお歩きなさい。死體の方は、引受けましたから、御自由にお引き取り下さい」

信一郎は、兎に角當座の責任と義務とから、放たれたやうに思つた。が、ポケットの底にある時計の事を考へれば、信一郎の責任は何時果されるとも分らなかつたが。

信一郎は車臺に近寄つて、默禮した。不幸な青年に最後の別れを告げたのである。

巡査達に挨拶して、二三間行つた時、彼はふと海に捨つるべく、青年から頼まれたノートの事を思ひ出した。彼は驚いて、取つて返した。

「忘れ物をしました」彼は、やゝ狼狽しながら云つた。

「何です」車内を覗き込んで居た巡査が振り顧つた。

「ノートです」信一郎は、やゝ上ずつた聲で答へた。

「これですか」先刻から、それに氣の付いて居たらしい巡査は、座席の上から取り上げて哭れた。信一郎は、そのノートの表紙に、ペンで青木淳とかいてあるらしいのを見ると、ハッと思つた。が、光は暗かつた。その上、巡査の心にさうした疑は微塵も存在しないらしかつた。彼は、やつと安心して、自分の物でない物を、自分の物にした。

七

眞鶴から湯河原迄の、輕便の汽車の中でも、驛から湯の宿までの、田舍馬車の中でも、信一郎の頭は、混亂と興奮とで、一杯になつて居た。その上、街突のときに、受けた打撃が現はれて來たのだらう、頭がヂキ〳〵と痛み始めた。

青年のうめき聲や、吐血の刹那や、蒼白んで行つた死顔などが、ともすれば幻覺となつて、耳や目を襲つて來た。

靜子に久し振に逢へると云つたやうな樂しい平和な期待は、偶然な血腥い出來事のために、滅茶苦茶になつてしまつたのである。靜子の初初しい面影を、描かうとすると、それが何時の間にか、青年の死顔になつて居る。「靜子！　靜子！」と、口の中で呼んで、愛妻に對する意識を、ハッキリさせようとすると、その聲が何時の間にか「瑠璃子！　瑠璃子！」と、云ふ悲痛な斷末魔の聲を、思ひ浮べさせたりした。

馬車が、嗜い田の中の道を、左へ曲つたと思ふと、眼の前に、山懷にほのめく、湯の街の灯影が見え始めた。

信一郎は、愛妻に逢ふ前に、何うかして、亂れて居る自分の心持を、整へようとした。なるべく、穏やかな平靜な顔になつて、自分の激動を妻に傳染すまいとした。血腥い青年の最期も出來るならば話すまいとした。それは優しい妻の胸には餘りに、鋭すぎる事實だつたから。

藤木川の左岸に添うて走つた馬車が、新しい木橋を渡ると、橋袂の湯の宿の玄關に止まつた。

「奥樣がお待ち兼でムいます」と、妻に付けてある女中が、宿の女中達と一緒に玄關に出迎へた。ふと氣が付くと、玄關の突き當りの、二階への階段の中段に、降りて出迎へようか（それともそれが可なりはしたない事なので）降りまいかと、躊躇つて居たらしい靜子が、信一郎の

顱を見ると、蹶然と炎つて、はち切れさうな嬉しさを抑へて、いそ〳〵と駈け降りて來るのであつた。

「いらつしやいませ。何うして、かう遲かつたの」靜子は一寸不平らしい樣子を嬉しさの裡に見せた。

「遲くなつて濟まなかつたね」

信一郎は、勉はるやうに云ひ捨てゝ、先に立つて妻の部屋へは入つた。

その時に、彼はふと青年から頒まれたノートを、まだ夏外套のポケットに入れて居るのに、氣が付いた。先刻眞鶴まで歩いたとき、引き裂いて捨てよう〳〵と思ひながら、小使の手前、どうしても果し得なかつたのである。當惑の爲に、彼の表情はやゝ曇つた。

「御氣分が惡さうね。何うかしたのですか。湯衣にお着換へなさいまし。それとも、お寒いやうなら、褞袍になさいますか」

さう云ひながら靜子は甲斐々々しく信一郎の脱ぐ上衣を受け取つたり、襯衣を脱ぐのを手傳つたりした。

その中に、上衣を衣架にかけようとした妻は、ふと、

「あれ！」と、可なりけたゝましい聲を出した。

「何うしたのだ」信一郎は驚いて訊いた。

「何でせう。これは、血ぢやなくて」

靜子は、眞蒼になりながら、洋服の腕のボタンの所を、電燈の眞近に持つて行つた。それは紛ぎれもなく血だつた。一寸四方ばかり、ベツトリと血が浸じんで居たのである。

「さうか。やつぱり付いて居たのか」

信一郎の聲も、やゝ顫ひを帶びて居た。

「何うかしたのですか。何うかしたのですか」

氣の弱い靜子の聲は、可なり上ヅツて居た。

信一郎は、妻の氣を落着けようと、可なり冷靜に答へた。

「いや何うもしないのだ。たゞ、自動車が屋にぶつ突かつてね。乘合はして居た大學生が負傷したのだ。」

「貴君は、何處もお負傷はなかつたのですか」

「運がよかつたのだね。俺は、かすり傷一つ負はなかつたのだ」

「そしてその學生の方は」

「重傷だね。助からないかも知れないよ。まあ奇禍と云ふんだね」

靜子は、夫が免れた危險を想像する丈けで、可なり激しい感動に襲はれたと見え、目を瞬たまゝ、暫らくは物も云はなかつた。

信一郎も、何だか不安になり始めた。奇禍に逢つたのは、大學生ばかりではないやうな氣がした。自分も妻も、平和な氣持を、滅茶々々にされた事が、可なり大きい禍であるやうに思つた。が、そればかりでなく、時計やノートを受け繼いだ事に依つて、青年の恐ろしい運命をも、受け繼いだやうな氣がした。彼は、樂しく期待した通り靜子に逢ひながら、優しい言葉一つさへ、かけてやる事が出來なかつた。

夫と妻とは、蒼白になりながら、默々として相對して居た。信一郎は、ポケットに入れてある時計が、何か魔の符でもあるやうに、氣味惡く感ぜられ始めた。

美しき遲參者

一

青年の横死は、東京の各新聞に依つて、可なり精しく傳へられた。青年が、信一郎の想像した通り青木男爵の長子であつたことが、それに依つて證明された。が、不思議に同乘者の名前は、各新聞とも洩して居た。信一郎は結局それを氣安いことに思つた。

信一郎が、靜子を伴つて歸京した翌日に、青

木家の葬儀は青山の齋場で、執り行はれることになつて居た。

信一郎は、自分が青年の最期を介抱した當人であると云ふ事を、名乘つて出るやうな心持は、少しもなかつた。が、自分の手を枕にしながら、息を引き取つた青年が、傷ましかつた。他人でないやうな氣がした。十年の友達であるやうな氣がした。その人の面影を偲ぶと、何となくなつかしい涙ぐましい氣がした。

貴族の人々とは、緣もゆかりもなかつた。が、弔はれて居る人とは、可なり强い因緣が、繼はつて居るやうに思つた。彼は、心からその葬ひの席に、列りたいと思つた。

が、其の上、もう一つ是非とも、列るべき必要があつた。青年の葬儀である以上、姉も妹も、瑠璃子と呼ばるゝ女性も、返すべき時計の眞の持主も、（もしあれば）青年の戀人も、みんな列つて居るのに違ない。青年に、由緣のある人を物色すれば、時計を返すべき持主も、案外容易に見當が付くに違ない。否、少くとも瑠璃子と云ふ女丈は、容易に見出し得るに違ない、信一郎はさう考へた。

その日は、廓然と晴れた初夏の一日だつた。もう夏らしく、白い層雲が、むく〳〵と空の一角に湧いて居た。水色の空には、强い光が、一杯に充ち渡つて、生々の氣が、空にも地にも溢れて居た。たゞ、青山の葬場に集まつた人丈は、活活とした周圍の中に、しめつぽい靜かな陰影を、投げて居るのだつた。

青年の不幸な夭折が、特に多くの會葬者を、惹き付けて居るらしかつた。信一郎が、定刻の三時前に行つたときに、早くも十數臺の自動車と百臺に近い俥が、齋場の前の廣い道路に乘り捨てゝあつた。控席に待合はして居る人々は、もう五百人に近かつた。それだのに、自動車や俥が、幾臺となく後から〳〵、到着するのだつた。死んだ青年の父が、貴族院のある體たの有力な幹部である爲に、政界の巨頭は、大抵網羅して居るらしかつた。貴族院議長のT公爵の顱や、軍令部長のS大將の顱が、信一郎にも直ぐそれと判つた。葉卷を横銜へにしながら、場所柄をも考へないやうに哄笑して居る巨漢は、逓信大臣のN氏だつた。それと相手になつて居るのは、戰後の歐洲を、廻つて來て以來、風雲を持つて居るらしく思はれて居るG男爵だつた。その外首相の顱も見えた。內相も居た。陸相も居た。實業界の名士の顱も、五六人は見覺えがあつた。が、見渡したところ信一郎の知人は一人も居なかつた。彼は、受附へ名刺を出すと、控場の一隅へ退いて、式の始まるのを待つて居た。

誰も彼に、話しかけて來れる人はなかつた。接待をして居る人達も、名士達の前には、頭を幾度も下げて、その會葬を感謝しながら、信一郎には、たゞ儀禮的な一排を酬いた丈だつた。

誰からも、顧みられなかつたけれども、信一郎の心には、自信があつた。千に近い會葬者が、集まらうとも、青年の臨終に侍したのは、自分一人ではないか。青年の最期を、見屆けて居るのは、自分一人ではないか。青年の信賴を受けて居るのは自分一人ではないか。その死床に侍して介抱してやつたのは、自分一人ではないか。もし、死者にして靈あらば、大臣や實業家や名士達の社交上の會葬よりも、自分の心からなる會葬を、どんなに欣ぶかも知れない。さう思ふと、信一郎は自分の會葬が、他の何人の會葬よりも、意義があるやうに思つた。彼はさうした感激に耽りながら、ぢつと會葬者の群を眺めて居た。急に、皆が靜かになつたかと思ふと、憂々たる馬蹄の響がして、靈柩を載せた馬車が、貴族達に守られて、齋場へ近づいて來るのだつた。

二

靈柩を載せた馬車を先頭に、一門の人々を載せた馬車が、七八臺も續いた。信一郎は、群衆を擦り脫けて、馬車の止まつた方へ近づいた。次ぎ〳〵に、馬車を降りる一門の人々を、仔細に注視しようとしたのである。

靈柩の直ぐ後の馬車から、降り立つたのは、今日の葬式の喪主であるらしい青年であつた。一目見ると、横死した青年の肉親の弟である事が、直ぐ判つた。それほど、二人はよく似て居た。たゞ學習院の制服を着て居る此青年の背丈が、國府津で見たその人の兄よりも、一二寸高いやうに思はれた。

その次ぎの馬車からは、二人の女性が現はれた　信一郎は、その孰れかが瑠璃子と呼ばれはしないかと、熱心に見詰めた。二人とも、死んだ青年の妹であることが、直ぐ判つた。兄に似て、二人とも端正な美しさを持つて居た。年の上の方も、まだ二十を超して居ないだらう。その美しい眼を心持泣き腫して、雪のやうな喪服を纏うて、俯きがちに、しほたれて歩む姉妹の姿は、悲しくも又美しかつた。

それに、續いてどの馬車からも、一門の夫人達であらう、白無垢を着た貴婦人が、一人二人宛降り立つた。信一郎は、その裡の誰かが、屹度瑠璃子に逢ひないと思ひながら、一人から他へと、慌しい眼を移した。が、たゞいら〳〵する丈で、ハツキリと確める術は、少しもなかつた。

靈柩が式場の正面に安置せられると、會葬者も銘々に、式場へ雪崩れ入つた。手狹な式場は見る〳〵、一杯になつた。

式が始まる前の靜けさが、其處に在つた。會葬者達は、銘々慣しみの心を、表に現はして衆や緋の衣を着た老僧達の、居並ぶ祭壇を一齊に注視して居るのであつた。

式場が靜粛に緊張して、今にも讀經の第一聲が、この靜けさを破らうとする時だつた。突如として、式場の空氣などを、少しも顧慮しないやうなけたゝましい、自動車の響が場外に近づいた。祭壇に近い人々は、迫に振向きもしなかつた。が、會葬者の殆ど過半が、此無遠慮な闖入者に對して叱責に近い注視を投げたのである。

自動車は、式場の入口に横附けにされた。伊太利製らしい、優雅な自動車の扉が、運轉手に依つて拂せられた。

會葬者の注視を引いた事などには、何の恐れ氣もないやうに、裏を掲げた白孔雀のやうな、け高さと上品さとで、その踏段から地上へと、スタタと降り立つたのは、まだうら若い一個の女性だつた。降りざまに、その面を掩うて居た黑い薄絹のヴェールを、かなぐり捨てゝ無造作に自動車の中へ投げ入れた。人々の環視の裡に、微笑とも嬌羞とも付かぬ表情を、湛へた面は、くつきりと皎く輝いた。

白襟紋付の瀟洒な衣は、そのスラリとした姿を一層氣高く見せて居た。彼女は、何の悪怯れた容子も見せなかつた。打ち並ぶ名士達の間に、細く殘された通路を、足早に通り抜けて、祭壇の右の婦人達の居並ぶ席に就いた。

會葬者達は、場所柄の許す範圍で、銘々熱心な眼で、此の美しい無遠慮な遲參者の姿を追つた。が、さうした眼の中でも、信一郎のそれが、一番熱心で一番輝いて居たのである。

彼は、何よりも先きに、此女性の美しさに打たれた。年は二十を多くは出て居なかつただらう。が、さうした若い美しさにも拘はらず、人を壓するやうな威嚴が、何處かに備はつて居た。

信一郎は、頭の中で自分の知つて居る、あらゆる女性の顏を浮べて見た。が、そのどれもが、此婦人の美しさを、少しでも冒すことは出來な

かつた。

泰西の名畫の中からでも、拔け出して來たやうな女性を、信一郎は驚異に似た心持で暫らくは、茫然と會衆の頭越しに見詰めて居たのである。

三

信一郎の注意が、その美しき女性に、釘付けにされたやうに、會葬者の眸も、一時は此の女性の身邊に注がれた。が、その裡に衆僧が一齊に始めた讀經の朗々たる聲は、皆の心持を死者に對する敬虔な哀悼に引き統べてしまつた。

が、此女性が、信一郎の心の裡に起した動搖は、お經の聲などに依つて却々靜まりさうにも、見えなかつた。

彼は、直覺的に此女性が、死んだ青年に對して、特殊な關係を持つて居ることを信じた。此女性の美しけれども、颯爽たる容姿が、あの返すべき時計に鏤刻されて居る、鋭い短劍の形を想ひ起さしめた。彼は、讀經の聲などには、殆ど耳を傾けずに、群衆の頭越しに、女性の姿を、無命に見詰めたのである。

が、見詰めて居る中に、信一郎の心は、それが瑠璃子であるか、時計の持主であるかなどと云ふ疑問よりも、此の女性の美しさに、段々囚はれて行くのだつた。

此の女性の顏形は、美しいと云つても、昔から居る日本婦人の美しさではなかつた。それは、日本の近代文明が、初て生み出したやうな美しさと表情を持つて居た。明治時代の美人のやうに、個性のない、人形のやうな美しさではなかつた。その眸は、飽くまでも、理智に輝いて居た。顏全體には、熱した文明の婦人に特有な、智的な輝きがあつた。

婦人席で多くの婦人の中に立つて居ながら、此の女性の背後丈にはほの〳〵と明るい後光が、射して居るやうに思はれた。

年頃から云へば娘とも思はれた。が、何處かに備はつて居る貫しがたい威嚴は、名門の夫人であることを示して居るやうに思はれた。

信一郎が、此の女性の美貌に對する耽美に溺れて居る裡に、葬式のプログラムはだん〳〵進んで行つた。死者の兄弟姉妹を先に一門の燒香が終りかゝると、此の女性もしとやかに席を離れて死者の爲に一抹の香を焚いた。

やがて式は了つた。會葬者に對する挨拶があると、會葬者達は、我先にと歸途を急いだ。式場の前には俥と自動車とが、暫くは右往左往に、入り亂れた。

信一郎は、急いで退場する群衆に、わざと取殘された。彼は群衆に押されながら、意識して、彼の女性に近づいた。

女性が、式場を出外づれると、彼女はそこで、四人の大學生に取り捲かれた。大學生達は皆死んだ青年の學友であるらしかつた。彼女は、何か二言三言言葉を換すと乘るべき自動車に片手をかけて、華やかな微笑を四人の中の、誰に投げるともなく投げて、その嫋やかな身を飜して忽ち車上の人となつたが、つと上半身を出したかと思ふと、

「本當にさう考へて下さつては、妾困りますのよ」と、嬌然と云ひ捨てると、扉をハタと閉ぢたが、自動車はそれを合圖に散りかゝる群衆の間を縫うて、徐ろに動き始めた。

大學生達は、自動車の後を、暫らく立ち止まつて見送ると、その儘肩を揃へて歩き出した。信一郎も學生達の後を追つた。學生達に話しかけて、此女性の本體を知ることが時計の持主を知る、唯一の機會であるやうに思つたからである。

學生達は、電車に乘る積だらう、式場の前の道を、青山三丁目の方へと歩き出したのであつた。信一郎は、それと悟られぬやう一間ばかり、

間隔を以て歩いて居た。が、學生達の聲は、可なり高かつた。彼等の會話が、切れ〳〵に信一郎にも聞えて來た。

「青木の變死は、偶然だと云へばそれまでだが、僕は死んだと聞いたとき、直ぐ自殺ぢやないかと思つたよ」と、一番肥つて居る男が云つた。

「僕もさうだよ。青木の奴、やつたな！　と思つたよ」と、他の背の高い男は直ぐ賛成した。

四

「僕の所へ三保から寄越した手紙なんか、全く變だつたよ」と、たゞ一人夏外套を着て居る男が云つた。

信一郎は、さうした學生の會話に、好奇心を唆られて、思はず間近く接近した。

「兎に角、ヒドく憎氣て居たことは、事實なんだ。誰かに、失戀したのかも知れない。が、彼奴の事だから、誰にも打ち明けないし、相手の見當は、サッパリ付かないね」と、肥つた男が云つた。

さう聞いて見ると、信一郎は、自動車に同乘したときの、青年の態度を直ぐ思ひ出した。その悲しみに、閉された面影が、アリ〳〵と眼に浮かんだ。

「相手つて、まさか我々の莊田夫人ぢやあるまいね」と、一人が云ふと、皆高々と笑つた。

「まさか。まさか」と皆は口々に打ち消した。

其處は、もう三丁目の停留場だつた。四人連の内の三人は、其處に停車して居る電車に、無理に押し入るやうにして乘つた。たゞ、後に殘つた一人丈、眼鏡をかけた、昔の話を默つて聽いて居た一人丈、友達と別れて、電車の線路に沿うて、青山一丁目の方へ歩き出した。信一郎は、その男の後を追つた。相手が、一人の方が、話しかけることが、容易であると思つたからである。

牛町ばかり、付いて歩いたが、何うしても話しかけられなかつた。突然、話しかけることが、不自然で突飛であるやうに思はれた。彼は、幾度も中止しようとした。が、此機會を失しては、時計を返すべき緒が、永久に見付け得られないやうにも思つた。信一郎は到頭思ひ切つた。先方が、一寸振り返るやうにしたのを、機會につか〳〵と傍へ歩き寄つたのである。

「失禮ですが、貴君も青木さんのお葬ひに？」

「さうです」先方は突然な問を、意外に思つたらしかつたが、不愉快な容子は、見せなかつた。

「やつぱりお友達でいらつしやいますか」信一郎はやゝ安心して訊いた。

「さうです。ずつと、小さい時からの友達です。小學時代からの竹馬の友です」

「なるほど。それぢや、嘸お力落しでしたらう。」

と云つてから、信一郎は少し躊躇して居たが、

「つかぬ事を、承はるやうですが、今貴郎方と話して居た婦人の方ですね」と云ふと、青年は直ぐ訊き返した。

「あの自動車で、歸つた人ですか。あの人が何うかしたのですか」

信一郎は少しドギマギした。が、彼は訊き續けた。

「いや、何うもしないのですが、あの方は何と仰しやる方でせう」

學生は、一寸信一郎を憫れむやうな微笑を浮べた。ホンの瞬間だつたけれども、それは知るべきものを知つて居ない者に見する憫れみの微笑だつた。

「あれが、有名な莊田夫人ですよ。御存じなかつたのですか。曾て司法大臣をした事のある唐澤男爵の娘ですよ。唐澤さんと云へば、青木君のお父樣と、同樣に團體に屬して居る貴族院の老政治家ですよ。お父樣同士の關係で、青木君

とは近しかつたんです」

さう云はれて見ると、信一郎も、莊田夫人なるものの寫眞や消息を婦人雜誌や新聞の婦人欄で幾度も見たことを思ひ出した。が、それに對して、何の注意も拂つて居なかつたので、その名前は何うしても想ひ浮ばなかつた。が、此の場合名前まで訊くことが、可なり變に思はれたが、信一郎は思ひ切つて訊ねた。

「お名前は、確か何とか云はれたですね」

「瑠璃子ですよ、我々は、玉桂の瑠璃子夫人と云つて居ますよ。ハ、ハ、」と、學生は事もなげに答へた。

五

群場に於ける遲參者が、信一郎の直覺して居た通、瑠璃子と呼ばるゝ女性であることが、此大學生に依つて確められると、彼はその女性に就いて、もつといろ〳〵な事が、知りたくなつた。

「それぢや、青木君とあの瑠璃子夫人とは、さう大したお交際でもなかつたのですね」

「いや、そんな事もありませんよ。此半年ばかりは、可なり親しくして居たやうです。尤もあの奥さんは、大變お交際の廣い方で、僕なども、青木君同樣可なり親しく、交際して居る方です」

大學生は、美貌の貴婦人を、知己の中に數へ得ることが、可なり得意らしく、誇らしげにさう答へた。

「ぢや、可なり自由な御家庭ですね」

「自由ですとも、夫の勝平氏を失つてからは思ふまゝに、自由に振舞つて居られるのです」

「あ！　ぢや、あの方は未亡人ですか」信一郎は、可なり意外に思ひながら訊いた。

「さうです。結婚してから半年か其處らで、夫は、死に別れたのです。それに續いて、先妻のお子さんの長男が氣が狂つたのです。今では、莊田家はあの奥さんと、美奈子と云ふ十九の娘さん丈です。それで、奥さんは離緣にもならず、娘さんの親權者として莊田家を切廻して居るのです」

「なるほど。それぢや、後妻に來られた譯ですね。あの美しさで、あの若さで」と、信一郎は事々に、意外に感じながら、さう呟いた。

大學生は、それに對して、何か說明しようとした。が、もう二人は青山一丁目の、停留場に來て居た。學生は、今發車しようとして居る電車に、乘りたさうな容子を見せた。

信一郎は、最後の瞬間を利用して、もう一歩進めて見た。

「突然ですが、ある用事で、あの奥さんに、一度お目にかゝりたいと思ふのですが、紹介して下さる譯には……」と、言葉を切つた。

大學生は、信一郎のさうしたやゝ不自然な、ぶつきら棒な願ひを、美貌の女性の知己になりたいと云ふ、世間普通な色好みの男性の願ひと、同じものだと思つたらしく、一寸嘲笑に似た笑ひを洩さうとしたが、直ぐそれを噛み殺して、

「貴君の御身分や、御希望を精しく承らないと、僕として一寸紹介して差上げることは出來ません。尤も、莊田夫人は、普通の奥さん方とは違ひますから、突然尋ねて行かれても、乞度造つて呉れるでせう。御宅は、麹町の五番町です」

さう云ひ捨てると、その青年は身體を捷く動かしながら、將に動き出さうとする電車に巧に飛び乘つてしまつた。

信一郎は、一寸おいてきぼりを喰つたやうな、稍〻不快な感情を待ちながら、暫らく其處に佇立した。大學生に話しかけた自分の態度が、下等な新聞記者か何かのやうであつたのが、恥しかつた。どんなに、あの女性の本名が知りたくても、もつと上品な態度が取れたのにと思つた。

が、さうした不愉快さが、段々消えて行つた後に、瑠璃子と云ふ女性の本體を摑み得た滿足が其處にあつた。而も、瑠璃子と云ふ女性が、今も尙ハンカチーフに包んで、ポケットの底深く潛ませて、持つて來た時計の持主らしい、凡ての資格を備へて居ることが、何よりも嬉しかつた。琺瑯を鏤めた白金の時計と、今日見た瑠璃子夫人の姿とは、ピタリと合ひすぎるほど、合つて居た。今日にでも、夫人を訪ぬれば、夫人は此度、死んだ青年に對する哀悼の涙を浮べながら、あの時計を受取つて呉れるに違ない。そして、自分と青年との不思議な因緣に、感激の言葉を發するに違ない。さう思ふと、信一郎の眸にあざやかな夫人の姿が、歷々と浮かんで來た。彼は一刻も早く、夫人に逢ひたくなつた。其處へ、彼のさうした決心を促すやうに九段兩國行きの電車が、軋つて來た。此電車に乘れば、麴町五番町迄は、一回の乘換さへなかつた。

六

電車が、赤阪見付から三宅坂通り、五番町に近づくに從つて、信一郎の眼には、葬場で見た美しい女性の姿が、いろ〳〵な姿勢を取つて、現れて來た。返すべき時計のことなどよりも、美しき夫人の面影の方が、より多く彼の心を占めて居るのに氣が付いた。彼は自分の心持の中に、不純なものが交りかけて居るのを感じた。「お前は時計を返す爲に、あの夫人に逢ひたがつて居るのではない。時計を返すのを口實として、あの美しい夫人に逢ひたがつて居るのではないか」と云ふ叱責に似た聲を、彼は自分の心持の中に感じた。それほど、瑠璃子と呼ばれる女性の美しさが、彼の心を惱ましまどはした。が、信一郎は懸命にそれから逃れようとした。自分の責任は、たゞ青年の遺言通に、時計を眞の持主に返せばいゝのだ。莊田瑠璃子が、どんな女性であらうとあるまいと、そんな事は何の問題でもないのだ。たゞ、夫人が本當に時計の持主であるかどうかが、問題なのだ。自分はそれを確めて、時計を返しさへすれば、責任は盡きるのだ。信一郎は、さう强く思ひ切らうとしても、白い孔雀を見るやうな、薄たけた若き夫人の姿は、彼が思ふまいとすればするほど、愈鮮明に彼の眼底を去らうとはしなかつた。

青い葉櫻の林に、キラ〳〵と夏の風が光る英國大使館の前を過ぎ、青草が美しく茂つたお濠の堤に沿うて、電車が止まると、彼は急いで電車を降りた。彼の眼の前に五番町の廣い通が、午後の太陽の光の下に白く輝いて居た。彼は、一寸した興奮を感じながらも、暫くは其處に立ち止まつた。紳士として、突然訪ねて行くことが、餘りにはしたないやうにも思はれた。手紙位で、一應面會の承諾を得る方が、自然でかつは、禮儀ではないかと思つたりした。が、さうした順序を踏んで、相手が、會はないと云へば、それ切りになつてしまふ。少しは不自然でも、直截に訪問した方が、却つて容易に會見し得るかも知れない。殊に、今は死んだ青年の葬儀から歸つたばかりであるから、此の夫人もきつと青年のことを、考へて居るに違ない。其處へ、自分が青年の名に依つて尋ねて行けば、案外快く引見するに違ない。さう考へると信一郎は、崩れかゝつた勇氣を振ひ興して、五番町の表通と横町とを軒並に、物色して歩いた。彼は、五番町の端てを涉つた。が、何處にも、莊田と云ふ表札は、見出さなかつた。三十分近く無駄に歩き廻つた末、彼は到頭通り合はした御用聽らしい小僧に尋ねた。

「莊田さんですか。それぢやあの然留場の直ぐ前の、白煉瓦の洋館のお屋敷がそれです」と、小僧は言下に教へて呉れた。

その家は、信一郎にも最初から判つて居た。信一郎は、電車から降りたとき、直ぐその家に眼を與つたのであるが、花崗岩らしい大きな石門から、楓の並樹の間を、爪先上りになつて居る玄關への道の奥深く、青い若葉の蔭に聳ゆる宏壯な西洋館が――大きい邸宅の揃つて居る此界隈でも、他の建物を壓倒して居るやうな西洋館が莊田夫人の家であらうとは夢にも思はなかつた。

彼は、豫想以上に立派な邸宅に氣壓されながら、暫らくはその門前に佇立した。玄關への青い芝生の中の道が、曲線をして居る爲に車寄せの樣子などは、見えなかつたが、ゴシック風の白煉瓦の建物は瀟洒に而も莊重な感じを見る者に與へた。開け放した二階の窓にそよいで居る青色の窓掩ひが、如何にも淸々しく見えた。二階の緣側に置いてある籐椅子には、燃ゆるやうな蒲團が敷いてあつて、此家の主人公が、美しい夫人であることを、示して居るやうだ。

は入らうか、は入るまいかと、信一郎は幾度も思ひ惱んだ。手紙で訊き合して見ようか、それでも事は足りるのだと思つたりした。彼が、宏壯な邸宅に壓迫されながら思はず踵を廻さうとした時だつた。噴泉の湧くやうに、突如として樹の間から洩れ始めた朗々たるピアノの音が信一郎の心をしつかと摑んだのである。

七

樹の間を洩れて來るピアノの曲は、信一郎にも聞き覺えのあるショパンの夜曲だつた。彼は、廻さうとした踵を、釘付けにされて、暫らくはその哀麗な響に、心を奪はれずには居られなかつた。朗々たるピアノの音は、高く低く緩やかに戰しく、時には若葉の梢を馳け拔ける五月の風のやうに囁き、時には青い月光の下に、俄に迸り出でたる泉のやうに激した。その絕えんとして、又續く快い旋律が、目に見えない紫の絲となつて、信一郎の心に、後から後から、投げられた。それは美しい女郎蜘蛛の吐き出す絲のやうに、蠱惑的に彼の心を囚へた。

彼の心に、鍵盤の上を梭のやうに驚けめぐつて居る白い手が、一番に浮かんだ。それに續いて、莽場でヴェールを取り去つた剎那の白い鄙かしい狐が浮んだ。

彼は時計を返すなどと云ふことより、兎に角も、夫人に逢ひたかつた。たゞ訳もなく、惹き付けられた。たゞ、會ふことが出來さへすれば、その事實でも、非常に大きな欣びであるやうに思つた。

躊躇して居た足を、踏み返した。思ひ切つて門を潛つた。ピアノの音に連れて、浮れ出した若き舞踏者のやうに、彼の心もあやしき興奮で、ときめいた。白い大理石の柱の並んで居る車寄せで、彼は一寸躊躇した。が、その次ぎの瞬間に、彼の指はもう扉の横に取付けてある呼鈴に觸れて居た。

鼓まで來ると、ピアノの音は、愈間近く聞えた。その冴えた觸鍵が、彼の心を强く囚へた。

呼鈴を押した後で、彼は妙な息苦しい不安の裡に、一分ばかり待つて居た。その時、小さい靴の足音がしたかと思ふと、扉が靜かに押し開けられた。名刺受の銀の盆を手にした美しい少年が、微笑を含みながら、頭を下げた。

「奥さまに、一寸お目にかゝりたいと思ひますが、御都合は如何でムいませうか」

彼は、さう云ひながら、一枚の名刺を渡した。

「一寸お待ち下さいませ」

少年は丁寧に再び頭を下げながら、玄關の突き當りの二階を、栗鼠のやうに、すばしこく駈け上つた。

信一郎は少年の後をぢつと、見送つて居た。骰子は投げられたのだと云つたやうな、思ひ詰

めた心持で、その二階に消える足音を聞いて居た。

忽ちピアノの音が、ぱつたりと止んだ。信一郎は、その刹那に鋭しい胸騒ぎを感じたのである。その美しき夫人が、彼の姿を初めて知つたと云ふことが、彼の心を騒がしたのである。彼は、再びピアノが鳴り出しはしないかと、息を凝して居た。が、ピアノの鳴る代りに、少年の小さい足音が、聞え始めた。愛嬌のよい微笑を浮べた少年は、トン〳〵と飛ぶやうに階段を馳け降りて來た。

「一郎、何う云ふ御用でムいませうか、一寸聞かしていたゞくやうに、仰しやいました」

信一郎は、それを聞くと、もう夫人に會ふ確な寛みを得た。

「今日、お葬式がありました青木淳氏のことで、一寸お目にかゝりたいのですが……」と、云つた。少年は、又勢ひよく階段を馳け上つて行つた。今度は、以前のやうに早くは、馳け降りて來なかつた。會はうか會ふまいかと、夫人が思案して居る樣子が、あり〳〵と感ぜられた。五分近くも經つた頃だらう、少年はやつと、二階から馳け降りて來た。

「御紹介狀のない方には、何方にもお目にかゝらないことにしてあるのですが、貴君樣を御信用申上げて、特別にお目にかゝるやうに仰しやいました。どうぞ、此方へ」と、少年は信一郎を案内した。玄關を上つた處は、廣間だつた。その廣間の左の壁には、ゴヤの描いた「踊り子」の繪の、可なり精緻な模寫が掛けてあつた。

女王蜘蛛

一

信一郎の案内せられた應接室は、青葉の反に面して居る廣い明るい部屋だつた。花模樣の青い絨氈の敷かれた床の上には、桃花心木の卓子を圍んで、水色の蒲團の取り附けてある腕椅子が五六脚置かれて居る。壁に添うて横はつて居る安樂椅子の蒲團も水色だつた。窓掩ひも水色だつた。それが純白の布で張られて居る周圍の壁と映じて、夏らしい清新な氣が部屋一杯に充ちて居た。信一郎は勸められるまゝに、扉を後にして、椅子に腰を下すと、落着いて部屋の裝飾を見廻した。三方の壁には、それ〳〵新しい油繪が懸つて居た。左手の壁にかゝつて居るのは、去年の二科の展覽會にかなり世評を騒がした浙歸朝のある洋畫家の水浴する少女の裸體畫だつた。此家の女主人公が、裸體畫を應接室に掲げるほど、社會上の因襲に囚はれて居ないことを示して居るやうに、畫中の少女は、一絲も纏つて居ない肉體を、冷たさうな泉の中に、その兩膝の所迄、すゞ〳〵と浸して居るのであつた。その他、卓子の上に置いてある灰皿にも、爐棚の上の時計にも、草花を投げ入れてある花瓶にも、此家の女主人公の纖細な銳い趣味が、一々現はれて居るやうに思はれた。

杜絶えたピアノの音は、再び續かなかつた。が、その音の主は、なか〳〵姿を現はさなかつた。少年が、茶を運んで來た後は、暫らくの間、近づいて來る人の氣勢もなかつた。三分經ち、五分經ち、十分經つた。信一郎の心は、段々不安になり、段々いら〳〵して來た。自分が、餘りに奇を好んで紹介もなく面會を見たばかりの夫人を、訪ねて來たことが、輕卒であつたやうに、悔いられた。

その裡に、ふと氣が付くと、正面の爐棚の上の姿見に、自分の顏が映つて居た。彼が何氣なく自分の顏を見詰めて居た時だつた。ふと、サラ〳〵と云ふ衣擦れの音が、したかと思ふと背後の扉が音もなく開かれた。信一郎が、周章て立ち上らうとした時だつた。面正の姿見に早く

も映つた白い美しい顏が、鏡の中で信一郎に、嫣然たる微笑の會釋を投げたのである。

「お待せしましたこと。でも、御葬式から歸つて、まだ着替へも致して居なかつたのですもの」

長い間の友達にでも云ふやうな、男を男とも思つて居ないやうな夫人の聲は、蝶蕊と卿々しさに充ちて居た。しかも、その聲は、何と云ふ美しい籌と魅力とを持つて居ただらう。信一郎は、意外な親しさを投げ付けられて最初からドギマギしてしまつた。

「いや突然伺ひまして……」と、彼は立ち上りながら答へた。聲が、妙に上ヅツて、少年か何かのやうに、赤くなつてしまつた。

深海色にぼかし模樣の錦紗縮緬の着物に、黒と緑の飛燕模樣の帶を締めた夫人は、そのスラリと高い身體を、くねらせるやうに、椅子に落着けた。

「本當に、盛んなお葬式でありましたこと。でも淳さんのやうに、あんなに不意に、死んでは堪りませんわ。あんまり、突然で丸切り夢のやうで御座いますもの」

初對面の客に、ロク〳〵挨拶もしない中に、夫人は何のこだはりもないやうに、自由に喋べり續けた。信一郎は、婦人からスツカリ先手を打たれてしまつて、暫らくは何にも云ひ出せなかつた。彼は、我にもあらず、十分受け答もなし得ないで、たゞモヂ〳〵して居た。夫人は、相手のさうした躊躇などは、眼中にないやうに、自由で快活だつた。

「淳さんは、たしかまだ二十四で御座いましたよ。確か五黄で御座いましたよ。五黄の申で御座いませうかしら。姜と同じに、よく新聞の九星を氣にする方で御座いましたのよ。オホ、ホ、」

信一郎は、美しい蜘蛛の精の繰り出す絲にでも、懸つたやうに、話手の美しさに醉ひながら、暫らくは茫然として居た。

二

夫人は、口でこそ青年の死を悼んで居るものの、その華やかな容子や、表情の何處にも、それらしい翳さへ見えなかつた。たゞ一寸した知己の死を、死んでは少し淋しいが、然し大したことのない知己の死を、話して居るのに過ぎなかつた。信一郎は、可なり拍子抜けがした。瑠璃子と云ふ名が、青年の臨終の床で叫ばれた以上、如何なる意味かで、青年と深い交渉があるだらうと思つたのは、自分の思ひ違ひかしら。夫人の容子や態度が、示して居る通り、死んでは少し淋しいが、然し大したことのない知己に、過ぎないのかしら。さう、疑つて來ると、信一郎は、青年の死際の囈語に過ぎなかつたかも知れない言葉や、自分の想像を纏りにして、突然訪ねて來た自分の輕卒な、芝居がかつた態度が氣恥しくて堪らなくなつて來た。彼は、夫人に會へば、かう云はうあゝ云はうと思つて居た、言葉が咽喉にからんでしまつて、たゞモヂ〳〵興奮するばかりだつた。

「妾、今日すつかり時間を間違へて居ましてね。氣が付くと、三時過ぎで御座いませう。驚いて、自動車で馳せ付けましたのよ。あんなに遲く行つて、本當にきまりが惡う御座いましたわ」

その癖、夫人はきまりが惡かつたやうな表情は少しも見せなかつた。あの葬場でも、それを思ひ出して居る今も。若い美しい夫人の何處に、さうした大膽な、人を人とも思はないやうな強い所があるのかと、信一郎はたゞ呆氣に取られて居る丈であつた。先刻からの容子を見ると、信一郎が何のために、訪ねて來て居るかなどと云ふことは、丸切り夫人の念頭にないやうだつた。信一郎の方も、訪ねて來た用向をどう切り出してよいか、途方にくれた。が、彼は漸く心を定めて、すゞ〳〵話し出した。

「實は、今日伺ましたのは、死んだ青木君の事に就てでございますが……」

さう云つて、彼は改めて夫人の顔を見直した。夫人が、それに對してどんな表情をするかが、見たかつたのである。が、夫人は無造作だつた。

「さう〳〵取次の者が、そんなことを申して居りました。青木さんの事つて、何でムいますの？」

帝劇で見た芝居の噂話をでもして居るやうに夫人の態度は平靜だつた。

「實は、貴女樣にこんなことをお話しすべき筋であるかどうか、それさへ私には分らないのです、もし、人違だつたら、何うか御免下さい」

信一郎は、女王の前に出た騎士のやうに慇懃だつた。が、夫人は卓上に置いてあつた支那製の團扇を取つて、煽ぐともなく動かしながら、

「ホ、、何のお話か知りませんが大層面白くなりさうでございますのね。まあ話して下さいまし。人違ひで御座いましたにしろ、お聞きいたした丈聞き穩で御座いますから」と、微笑を含みながら云つた。

信一郎は、夫人の眞面目とも不眞面目とも付かぬ態度に揶揄はれたやうに、まごつきながら云つた。

「實は、私は青木君のお友達ではありません。只偶然、同じ自動車に乘り合はしたものです。そして、青木君の臨終に居合せたものです」

「ほゝう貴君樣が……」

さう云つた夫人の顔は、迫に緊張した。が、夫人は自分で、それに氣が付くと、直ぐ身を躱すやうに、以前の無關心な態度に歸らうとした。

「さう！　まあ何と云ふ奇緣で御座いませう」

その美しい眼を大きく剳きながら、努めて何氣なく云はうとしたが、その言葉には、何となく、あるこだはりがあるやうに思はれた。

「それで、實は青木君の死際の遺言を聽いたのです」

信一郎は、夫人の示した儘かばかりの動搖に力を得て突つ込むやうにさう云つた。

「遺言を貴君樣が、ほゝう」

さう云つた夫人のけだかい顔にも、隱し切れぬ不安がアリ〳〵と讀まれた。

三

今迄は、秋の湖のやうに澄み切つて居た夫人の容子が、青年の遺言と云ふ言葉を聽くと、急に亂れてはあるが、擾め始めた。信一郎は手答へがあつたのを欣んだ。此の樣子では、自分の想像も、必ずしも的が外づれて居るとは限らないと、心强く思つた。

「衝突の模樣は、新聞にもある通ですが、それでも負傷から臨終までは、先づ三十分も間がありましたでせう。その間、運薄手は醫者を呼びに行つて居ましたし、通りかゝる人はなし、私一人が臨終に居合はしたと云ふ譯ですが、丁度息を引き取る五分位前でしたらう、青木君は、ふと右の手首に入れて居た腕時計のことを言ひ出したのです」

信一郎が、玆まで話したとき、夫人の面は、急に緊張した。さうした緊張を、現すまいとして居る夫人の努力が、アリ〳〵と分つた。

「その時計を何うしようと、云はれたので御座いますか。その時計を！」

夫人の言葉は、可なり急き込んで居た。其の美しい白い顔が、サッと赤くなつた。

「その時計を返して呉れと云はれるのです。是非返して呉れと云はれるのです」信一郎も、やや興奮しながら答へた。

「誰方にで御座いませうか。誰方に返して呉れと云はれたので御座いませうか」

夫人の言葉は、更に急き込んで居た。一度赤くなつた顔が、白く冷めたい色を帶びた。美しい眸までが鋭い光を放つて、信一郎の答へいか

にと、見詰めて居るのだつた。

信一郎は、夫人の鋭い視線を避けるやうにして云つた。

「夫が誰にとも分らないのです」

夫人の顔に現れて居た緊張が、又サッと緩んだ。暫らく杜絶えて居た微笑が、ほのかながら、その口邊に現はれた。

「ぢや、誰方に返して呉れとも仰しやらなかつたのですの」夫人は、ホッと安堵したやうに、何時の間にか、以前の落着を、取り返して居た。

「いやそれがです。幾度も、返すべき相手の名前を訊いたのですが、もう臨終が迫つて居たのでせう、私の問には、何とも答へなかつたのです。たゞ臨終に貴女のお名前を囈語のやうに二度繰り返したのです。それで、萬一貴女に、お心當りがないかと思つて參上したのですが」

信一郎は、肝心な來意を云つてしまつたので、ホッとしながら、彼は夫人が何う答へるかと、ぢつと相手の顔を見詰めて居た。

「ホ、、、、」先づ美しいその唇から、快活な微笑が洩れた。

「淨さんは、本當に賴もしい方でいらつしやいましたわ。そんな時にまで妾を覺えて居て下さるのですもの。でも、妾腕時計などには少しも覺えが御座いませんの。お持ちなら、一寸拜見させていたゞけませんかしら」

もう、夫人の顔に少しの不安も見えなかつた。澄み切つた以前の美しさが、歸つて來て居た。

信一郎は、求めらるゝまゝに、ポケットの底から、ハンカチーフに括んだ謎の時計を取り出した。

「確か女持には違ひないのです。少し、象眼の意匠が、女持としては奇拔過ぎますが」

「妹さんのものぢや御座いませんのでせうか」夫人は無造作に云ひながら、信一郎の差し出す時計を受取つた。

信一郎は躊るやうに附け加へた。

「血が少し附いて居ますが、わざと拭いてありません。衝突の時に、腕環の止金が肉に喰ひ入つたのです」

さう信一郎が云つた刹那、夫人の美しい眉が曇つた。時計を持つて居る象牙のやうに白い手が、思ひ做しか、かすかにブル〳〵と顫へ出した。

四

時計を持つて居る手が、微かに顫へるのと一緒に、夫人の顔も蒼白く緊張したやうだつた。ほんのもう、痕跡しか殘つて居ない血が、夫人の心を可なり、脅かしたやうにも思はれた。

一分ばかり、無言に時計をいぢくり廻して居た夫人は、何かと深く決心したやうに、そのひそめた眉を開いて、急に快活な樣子を取つた。その快活さには、可なりギコチない、不自然なところが、交つて居たけれども。

「あゝ判りました。やつと思ひ付きました」夫人は突然云ひ出した。

「私此時計に心覺えが御座いますの。持主の方も存じて居りますの。お名前は、一寸申上げ兼ますが、ある子爵の令孃でいらつしやいますわ。でも、私、あの方と青木さんとが、かうした物を、お取り換しになつて居ようとは、夢にも思ひませんでしたわ。屹度、誰方にも祕密にしていらしつたので御座いませう。だから青木さんは臨終の時にも、遺族の方には知られたくなかつたので御座いませう。道理で見ず知らずの貴方にお頼みになつたので御座いますわ。その令孃と、愛の印としてお取り換しになつたものを、遺品としてお返しになりたかつたのでは、御座いませんかしら」

夫人は、明瞭に流暢に、何のよどみなくも云つた。が、何處となく力なく空々しいところがあつた。が、信一郎は夫人の云ふことを疑ふ確

な證據は、少しもなかつた。

「私も、多分さうした品物だらうとは思つて居たのです。それでは、早速その令嬢にお返ししたいと思ひますが、御名前を敎へていたゞけませんでせうか」

「左樣で御座いますね」と、夫人は首を傾げたが、直ぐ「私を信用していたゞけませんでせうか、私が、女同士で、そつと返して上げたいと思ひますのよ。男の方の手からだと、どんなに恥しくお思ひになるか分らないと、存じますのよ。いかゞ？」と、承諾を求めるやうに、ニッコリと笑つた。華やかな麗美な微笑だつた。さう云はれると、信一郎はそれ以上、かれこれ言ふことは出來なかつた。兎に角、謎の品物が思つたより容易に、持主に返されることを、欣ぶより外はなかつた。

「ぢや、貴女樣のお手でお返し下さいませ。が、その方のお名前丈は、承ることが出來ませんでせうか。貴女樣を、お疑ひ申す譯では決してないので御座いますが」と、信一郎はオヅ〳〵云つた。

「ホヽヽ、貴方樣も、他人の秘密を聽くことが、お好きだと見えますこと」夫人は、忽ち信一郎を突き放すやうに云つた。その癖、顏一杯に微笑を湛へながら。「戀人を突然奪はれたその令嬢に、同情して、默つて私に委して下さいませ。私が責任を以て、青木さんの靈が、滿足遊ばすやうにお計ひいたしますわ」

信一郎は、もう一歩も前へ出ることは出來なかつた。さうした令嬢が、本當に居るか何うかは疑はれた。が、夫人が時計の持主を、知つて居ることは確かだつた。それが、夫人の云ふ通、子爵の令嬢であるか何うかは分らないとしても。

「それでは、お委せいたしますから、何うかよろしくお願ひいたします」

さう引き退るより外はなかつた。

「確にお引き受けいたしましたわ。貴方樣のお名前は、その方にも申上げて置きますわ。屹度、その方も感謝なさるだらうと存じますわ」

さう云ひながら、夫人はその血の附いた時計を、懷から出した白い絹のハンカチーフに包んだ。

信一郎は、時計が案外容易に片づいたことが、嬉しいやうな、同時に呆氣ないやうな氣持がした。少年が紅茶を運んで來たのを合圖のやうに立ち上つた。

信一郎が、勸められるのを振切つて、將に玄關を出ようとしたときだつた。夫人は、何かを思ひ付いたやうに云つた。

「あ、一寸お待ち下さいまし。差上げるものが御座いますのよ」と、呼び止めた。

五

信一郎が、暇を告げたときには何とも引き止めなかつた夫人が、玄關のところで、急に後から呼び止めたので、信一郎は一寸意外に思ひながら、振り顧つた。

「つまらないもので御座いますけれども、之をお持ち下さいまし」

さう云ひながら、夫人は何時の間に手にして居たのだらう、プログラムらしいものを、信一郎に渡した。一寸開いて見ると、それは夫人の屬するある貴婦人の團體で、催される慈善音樂會の入場券とプログラムであつた。

「御親切に對する御禮は、妾から、致さうと存じて居りますけれど、これはホンのお知己になつたお印に差し上げますのよ」

さう云ひながら、夫人は信一郎に、最後の魅するやうな微笑を與へた。

「いたゞいて置きます」

辭退するほどの物でもないので信一郎はその儘ポケットに入れた。

「御迷惑で御座いませうが、是非お出で下さいませ、それでは、その節またお目にかゝりますから」

さう云ひながら、夫人は玄關の扉の外へ出て暫らくは信一郎の歩み去るのを見送つて居るやうであつた。

電車に乘つてから、暫らくの間信一郎は夫人に對する酔から、醒めなかつた。それは確かに酔心地とでも云ふべきものだつた。夫人と會つて話して居る間、信一郎はそのキビ〳〵した表情や、優しいけれども、のしかゝつて來るやうな言葉に、云ひ知れぬ魅力をさへ感じて居た。男を男とも思はないやうな夫人に、もつとグン〳〵引きずられたいやうな、不思議な慾望をさへ感じて居たのである。

が、さうした酔が、だん〳〵醒めかゝるに連れ、冷たい反省が信一郎の心を占めた。彼は、今日の夫人の態度が、何となく氣にかゝり始めた。夫人の態度か、言葉かの何處かに、嘘僞りがあるやうに思はれてならなかつた。最初冷靜だつた夫人が、遺言と云ふ言葉を聽くと、急に緊張したり、時計を暫らく見詰めてから、急に持主を知つて居ると云ひ出したりしたことが、今更のやうに、疑念の的になつた。疑つてかゝると、信一郎は大事な青年の遺品を、夫人から體よく搾き上げられたやうにさへ思はれた。從つて、夫人の手に依つて、時計が本當の持主に歸るかどうかさへが、可なり不安に思はれ出した。

その時に、信一郎の頭の中に、青年の最後の言葉が、アリ〳〵と甦へつて來た。「時計を返して呉れ」と云ふ言葉の、語調までが、ハッキリと甦へつて來た。その叫びは、戀人に戀の遺品を返すことを、頼む言葉としては、餘りに悲痛だつた。その叫びの裡には、もつと鋭い骨を刺すやうな何物かが、混じつて居たやうに思はれた。「返して呉れ」と云ふ言葉の中に、「突つ返して呉れ」と云ふやうな凄い語氣を、含んで居たことを思ひ出した。たとひ、死際であらうとも、戀人に物を返すことを、あれほど悲痛に頼むことはない筈だと思はれた。

さう考へて來ると、瑠璃子夫人の云つた子爵令嬢と青年との戀愛關係は、畑のやうに頼りない事のやうにも思はれた。夫人はあゝした口實で、あの時計を體よく取返したのではあるまいか。本當は、自分のものであるのを、他人のものらしく、體よく取返したのではあるまいか。

が、さう疑つて見たものの、それを確める證據は何もなかつた。それを確めるために、もう一度夫人に會つて見ても、あの夫人の美しい容貌と、滾刺な會話とで、もう一度體よく迫ひ返されることは、餘りに判り切つて居た。

信一郎は、夫人の張る蜘蛛の網にかゝつた蝶か何かのやうに、手もなく丸め込まれ、肝心な時計を體よく、搾き上げられたやうに思はれた。彼は、自分の胴甲斐なさが、口惜しく思はれて來た。

彼の手を離れても、謎の時計は、やつぱり謎の尾を引いて居る。彼は何うかして、その謎を解きたいと思つた。

その瑠にふと、彼は青年が海に捨つるべく彼に依託したノートのことを思ひ出したのである。

六

青年から、海へ捨てるやうに頼まれたノートを、信一郎はまだトランクの裡に、持つて居た。海に捨てる機會を失くしたので、焼かうか裂かうかと思ひながら、ついその儘になつて居たのである。

それを、今になつて披いて見ることは、死者に濟まないことには違なかつた。が、時計の謎を知るためには、——そゝと同時に瑠璃子夫人の態度の謎を解くためには、ノートを見ることよ

り外に、何の手段も思ひ浮ばなかつた。あんな秘密な時計をさへ、自分には託したのだ。その時計の本當の持主を知るために、ノートを見る位は、許して呉れるだらうと、信一郎は思つた。

でも家に歸つて、まだ旅行から歸つたまゝに、放り出してあつたトランクを開いたとき、信一郎は可なり良心の苛責を感じた。

が、彼が時計の謎を知らうと云ふ慾望は、もつと强かつた。美しい瑠璃子夫人の謎を解かうと云ふ慾望は、もつと强かつた。

彼は、恐る〳〵ノートを取り出した。秘密の封印を解くやうな興奮と恐怖とで、オヅ〳〵表紙を開いて見た。彼の緊張した豫期は外づれて、最初の二三枚は、白紙だつた。その次ぎの五六枚も、白紙だつた。彼は、裏切られたやうなイラ〳〵しさで、全體を手早くめくつて見た。が、何の頁も、眞白な汚れない頁だつた。彼が、妙な失望を感じながら、最後までめくつて行つたとき、やつと其處に、インキの匂のまだ新しい青年の手記を見たのである。それは、ノートの最後から、逆にかき出されたものだつた。

信一郎は胸を躍らしながら、貪るやうにその一行々々を讀んだのである。可なり興奮して書いたと見え、字體が荒んで居る上に、字の書き違などが、彼處にも此處にもあつた。

――彼女は、蜘蛛だ。恐ろしく、美しい蜘蛛だ。自分が彼女に捧げた愛も熱情も、たゞ彼女の網にかゝつた蝶の身悶えに、過ぎなかつたのだ。彼女は、彼女の犠牲の悶えを、冷やかに樂しんで見て居たのだ。

今年の二月、彼女は自分に、愛の印だと云つて、一個の腕時計を與れた。それを、彼女の白い肌から、直ぐ自分の手首へと、移して與れた。彼女は、それをかけ替のない秘藏の時計であるやうなことを云つた。彼女を、純眞な女性であると信じて居た自分は、さうした賜物を、どんなに欣んだかも知れなかつた。彼女を圍んで居る多くの男性の中で、自分こそ選ばれたる唯一人であると思つた。勝利者であると思つた。自分は、人知れず、得々として之れを手首に入れて居た。彼女の愛の把握が其處にあるやうに思つて居た。彼女の眞實の愛が、自分一人にあるやうに思つて居た。

が、自分のさうした自惚は、さうした陶醉は滅茶苦茶に、蹂み潰されてしまつたのだ。皮肉に殘酷に。

昨日自分は、村上海軍大尉と共に、彼女の家の庭園で、彼女の歸宅するのを待つて居た。その時に、自分はふと、大尉がその軍服の腕を捲り上げて、腕時計を出して見て居るのに氣が附いた。よく見ると、その時計は、自分の時計に酷似して居るのである。自分は、それとなく一見を願つた。自分が、その時計を、大尉の頑丈な手首から、取り外した時の驚きは、何んなであつただらう。若し、大尉が其處に居合せなかつたら、自分は思はず呼聲を擧げたに違ない。自分が、それを持つて居る手は思はず、顫へたのである。

自分は急き込んで訊いた。

「これは、何處からお買ひになつたのです」

「いや、買つたのではありません。ある人から貰つたのです」

大尉の答は、憎々しいほど、落着いて居た。しかも、その落着の中に、得意の色がアリ〳〵と見えて居るではないか。

七

――その時計は、自分の時計と、寸分違つては居なかつた。象眼の模樣から、鏤めてあるダイヤモンドの大きさまで。それは、彼女に取つてかけ替のない、たつた一つの時計ではなかつたのか。自分は、自分の手中にある大尉

の時計を、庭の敷石に、叩き付けてやりたいほど興奮した。が、大尉は自分の興奮などには氣の付かないやうに、

「何うです。仲々奇拔な意匠でせう。一寸類のない品物でせう」と、その男性的な顏に得意な微笑を續けて居た。自分は、自分の右の手首に入れて居る、それと寸分違はぬ時計を、大尉の眼に突き付けて大尉の誇を叩き潰してやりたかつた。が、大尉に何の罪があらう。自分達立派な男子二人に、こんな皮肉な殘酷な喜劇を演ぜしめるのは、皆彼女ではないか。彼女が操る蜘蛛の絲の爲ではないか。自分は、彼女が歸り次第、眞向から時計を叩き返してやりたいと思つた。

が、彼女と面と向つて、不信を詰責しようとしたとき、自分は却つて、彼女から忍びがたい取かしめを受けた。自分は小兒の如く、翻弄され、奴隷の如く卑しめられた。而も、美しい彼女の前に出ると、啞のやうにたわいもなく、默り込む自分だつた。自分は憤と恨との爲に、わな〳〵顫へながら而も指一本彼女に觸れることが出來なかつた。自分は力と勇氣とが、欲しかつた。彼女の華奢な心臟を、一思ひに突き刺し得る丈の勇氣と力とを。

が、二つとも自分には缺けて居た。彼女を刺す勇氣のない自分は、彼女を忘れようとして、都を離れた。が、彼女を忘れようとすればするほど、彼女の面影は自分を追ひ、自分を惱ませる。

手記は玆で中斷して居る。が、半頁ばかり飛んでから、前よりももつと亂暴な字體で始まつて居る。

何うしても、彼女の面影が忘れられない。それが蜘のやうに、自分の心を噛み裂く。彼女を心から憎みながら、しかも片時も忘れることが出來ない。彼女が彼女のサロンで多くの異性に取圍まれながら、あの惱ましき姿態を惜しげもなく、示して居るかと思ふと、自分の心は、夜の如く暗くなつてしまふ。自分が彼女を忘れるためには、彼女の存在を無くするか、自分の存在を無くするか、二つに一つだと思ふ。

又一寸中斷されてから、

さうだ、一層死んでやらうかしら。純眞な男性の感情を弄ぶことが、どんなに危險であるかを、彼女に思ひ知らせてやるために。さうだ、自分の眞實の血で、彼女の僞の贈物を、眞赤に染めてやるのだ。そして、彼女の僞に殘つてゐる良心を、恥しめてやるのだ。

手記は、玆で終つて居る。信一郎は、深い感激の中に讀み了つた。これで見ると、青年の死は、形は奇禍であるけれども、心持は自殺であると云つてもよかつたのだ。青年は死場所を求めて、箱根から豆相の間を遁走つて居たのだつた。彼の奇禍は、彼の望み通に、僞りの贈り物を、彼の純眞な血で眞赤に染めたのだ。が、その血潮が、彼女の心に僅かに殘つて居る良心を、恥しめ得るだらうか。「返して呉れ」と云つたのは「叩き返して呉れ」と云ふ意味だつた。信一郎は果して、叩き返しただらうか。

彼女が、瑠璃子夫人であるか何うかは、手記を讀んだ後も、判然とは判らなかつた。が、たゞ生易しく平和の裡に、返すべき時計でないことは明かだつた。その時計の中に含まれて居る青年の恨みを、相手の女性に、十分思ひ知らさなければならない時計だつたのだ。たゞ、ポンヤリと返した丈では青年の心は永久に慰まれて居ないのだ。信一郎はもう一度瑠璃子夫人の手から取り返して、青年の手記の中の所謂「彼女」に突き返してやらねばならぬ責任を感じたのである。

が、「彼女」とは一體誰であらう。

そのかみの事

一

「あら！　お危う御座いますわ」と、赤い前垂掛の女中姿をした藝者達に、追ひ縋はれながら、莊田勝平は庭の丁度中央にある丘の上へ、登つて行つた。飲み過ごした三鞭酒のため、可なり危かしい足付をしながら。

丘の上には、數本の大きい八重櫻が、爛漫と咲亂れて、移り逝く春の名殘りを止めて居た。其處から見渡される廣い庭園には、晩春の日がうら〳〵と射して居る。五萬坪に近い庭には、幾つもの小山があり芝生があり、芝生が緩やかな勾配を作つて、落ち込んで行つたところには、美しい水の湧く泉水があつた。

その小山の上にも、籠にも、芝生の上にも、泉水の畔りにも、數寄を凝らした四阿の中にも、モーニングやフロックを着た紳士や、華美な裾模樣を着た夫人や令孃が、三々伍々打ち集うて居るのだつた。

人の心を浮き立たすやうな笛や鼓の音が、楓の林の中から聞えて居る。小松の植込の中からは、其處に陣取つて居る、三越の少年音樂隊の華やかな奏樂が、絶え間なく續いて居る。拍子木が鳴つて居るのは、市村座の若手俳優の手踊りが始まる合圖だつた。それに吸ひ付けられるやうに、裾模樣や振袖の夫人達が、その方へゾロ〳〵と動いて行くのだつた。

勝平は、さうした光景や、物音を聞いて居ると、得意と滿足との微笑が、後から後から湧いて來た。自分の名前に依つて、帝都の上流社會がこんなに集まつて居る。自分の名に依つて、大臣も來て居る。大銀行の總裁や頭取も來て居る。侯爵や伯爵の華族達も見えて居る。いろいろな方面の名士を、一堂の下に蒐めて居る。自分の名に依つて、自分の社會的位置で。

さう考へるに付けても、彼は此の三年以來自分に振りかゝつて來た夢のやうな華やかな幸運が、振り顧みられた。

戰爭が始まる前は、神戸の微々たる貿易商であつたのが、偶々持つて居た一隻の汽船が、幸運の緒を紡いで極端な遣繰りをして、一隻一隻と買ひ占めて行つた船が、お伽噺の中の白鳥のやうに、黃金の卵を次ぎ〳〵に產んで、わづか三年後の今は、千萬圓を越す長者になつて居る。

しかも、金が出來るに從つて、彼は自分の世界が、だん〳〵擴がつて行くのを感じた。今までは「其處に居るか」とも犀をかけて昊れなかつた人々が、何時の間にか自分の周圍に蒐まつて來て居る。近づき難いと思つて居た一流の政治家や實業家達が、何時の間にか、自分と同じ食卓に、就くやうになつて居る。自分を招待したり、自分に招待されたりするやうになつて居る。その他、彼の金力が物を云ふところは、到る處にあつた。綠酒紅燈の巷でも、彼は自分の金の力が萬能であるのを知つた。彼は、金さへあれば、何でも出來ると思つた。現に、此の庭園なども、都下で屈指の名園を彼が五十萬圓に近い金を投じて買つたのである。現に、今日の園遊會も、一人宛百金に近い巨費を投じて、新趣向として、都下の名士達を招んだのである。

聞えて來る笛の音も、鼓の音も奏樂の響も、模擬店でビールの滿を引いて居る人達の喚笑も、勝平の耳には、彼の金力に對する讃美の聲のやうに聞えた。「さうだ。凡ては金だ。金の力さへあればどんな事でも出來る」と、心の裡で呟やきながら、彼が日頃の確信を、一層强めたときだつた。

「いや、どうも盛會ですな」と、ビールの杯を右の手に高く翳しながら、蹌蹌と近づいて來る男があつた。それは勝平とは同鄕の代議士だ

つた。その男の選擧費用も、悉く勝平のポケットから、出て居るのだつた。

「やあ！　お藏さまで」と、勝平は傲然と答へた。「玄にも俺の金の力で動いて居る男が一人居る」と、心の中で思ひながら。

二

「よく集まつたものですね。隨分珍しい顏が見えますね。松田老侯までが見えて居ますね。我翌一昨日は、英國大使館の園遊會に行きましたがね。とても、本日の盛況には及びませんね。尤も、此名園を見る丈でも、來る價値は十分ありますからね。ハ、、、、」

代議士の澤田は眞正面からお世辭を云ふのであつた。

「い、天氣で、何よりですよ。ハ、、、、、」と、勝平は鷹揚に答へたが、內心の得意は、包隱すことが出來なかつた。

「素晴らしい庭ですな。彼處の杉林から泉水の寒手へかけての幽邃な趣は、とても市內ぢや見られませんね。五十萬圓でも、これぢや高くはありませんね」

さう云ひながら、澤田は持つて居たビールの杯を、またグイと飲み乾した。色の白い肥つた御が、咽喉の處まで赤くなつてゐる。彼は、轉げかゝるやうに勝平に近づいて右の二の腕を捕へた。

「主人公が、こんな所に、逃げ込んでゐては困りますね。さあ、彼方へ行きませう。先刻も我黨の總裁が、貴方を探してゐた。まだ挨拶をしてゐないと云つて」

澤田は、勝平をグン〳〵籠の方へ、園遊會の賑ひと混雜の方へ、引きずり込まうとした。

「いや、もう少しこの儘にして置いて下さい。今日一時から、門の處で一時半も立ち續けて居た上に、先刻三鞭酒を、六七杯も重ねたものだから、もう暫らく捨てゝ置いて下さい。直ぐ行きますよ、後から直ぐ」

さう云つて、捕へられて居た腕を、スラリと拔くと、澤田はその機みで、一間ばかりひよろひよろと下へ滑つて行つたが、其處で一寸踏み止まると、

「それぢや　後ほど」と云つたまゝ空になつた杯を、右の手で振り廻すやうにしながらふらふら、丘の麓にある模擬店の方へ行つてしまつた。

園內の數ケ所で始まつて居る餘興は、それぞれに來會した人々を、分け取りにして居るのだらう。勝平の立つて居る、此の廣い丘の上にも五六人の人影しか、殘つて居なかつた。勝平に付き纏つてゐた藝妓達も、先刻踊りが始まる拍子木が鳴ると、皆その方へ驅け出してしまつた。

が、勝平は四邊に人の居ないのが、結局氣樂だつた。彼は、其處に置いてある白い陶製の腰掛に腰を下しながら、快い休息を貪つて居た。心の中は、燃ゆるやうな得意さで一杯になりながら。

彼が、暫らくぼんやりと、咲き亂れて居る八重櫻の梢越しに、薄青く澄んで居る空を、見詰めて居る時だつた。

「玄は靜かですよ。早く上つて いらつしやい」と、近くで若い青年の聲がした。ふと、その方を見ると、スラリとした長身に、學校の制服を着けた青年が、丘の麓を見下しながら、誰かを麾いて居る所だつた。

青年は、今日招待した誰かが伴つて來た家族の一人であらう。勝平には、少しも見覺えがなかつた。青年も、此の家の主人公が、こんな淋しい處に、一人居ようなどとは、夢にも氣付いて居ないらしく、籠の方を麾いてしまふと、ハンカチーフを出して、其處にある陶製の腰掛の埃を拂つて居るのだつた。

急に、丘の中腹で、うら若い女の聲がした。
「まあ、ひどい混雜ですこと。妾いやになりましたわ」
「どうせ、園遊會なんてかうですよ。あの模擬店の雜沓は、何うです。見て居る丈でも、あさましくなるぢやありませんか」と、青年は丘の中腹を、見下しながら答へた。
それには何とも答へないで、昇つて來るらしい人の氣勢がした。青年の青葉に、一寸傷つけられた勝平は、ぢつと其方を、睨むやうに見た。最初、前髪を左右に分けた束髪の頭の形が見えた。それに續いて、細面の透き通るほど白い女の顔が現れた。

三

やがて、女は丘の上に全身を現した。年は十八か九であらう。その氣高い美しさは、彼女の頭上に咲き亂れて居る八重櫻の、絢爛たる美しさをも奪つて居た。目も醒むるやうな藤納戸色の着物の胸のあたりには、五色の色絲のかすみ模樣の繡が鮮かだつた。そのぼかされた裾には、さくら草が一面に散り亂れて居た。白地に孔雀を浮織にした唐織の帶には、帶止めの大きい眞珠が光つて居た。
「疲れたでせう。お掛けなさい」
青年は、埃を拂つた腰掛を、女に進めた。彼女は進められるまゝに、腰を下しながら 横に立つて居る青年を見上げるやうにして云つた。
「妾來なければよかつたわ。でも、お父樣が一緒に行かう〳〵云つて、お勸めになるものですから」
「僕も、妹のお伴で來たのですが、かう混雜しちゃ厭ですね。それに、此の庭だつて、都下の名園ださうですけれども、ちつともよくないぢやありませんか。少しも、自然な素直な所がありやしない。いやにコセ〳〵して居て、人工的な小刀細工が多すぎるぢやありませんか。殊に、あの四阿の建て方なんか厭ですね」
年の若い二人は、此日の園遊會の主催者なる勝平が、たゞ一人こんな淋しい處に居ようなどとは夢にも考へ及ばないらしく、勝平の方などは、見向きもしないで話し續けた。
「お金さへかければいゝと思つて居るのでせうか」
美しい令孃は、その美しさに似合はないやうな皮肉な、口の利き方をした。
「どうせ、さうでせう。成金と云つたやうな連中は、金額と云ふ事より外には、何にも趣味がないのでせう。凡ての事を、金の物差で計らうとする。金さへかければ、何でもいゝものだと考へる。今日の園遊會なんか、一人宛五十圓とか百圓とかを、入れるとか何とか云つて居るさうですが、あの俗惡な趣向を御覽なさい」
青年は、何かに激して居るやうに、吐き出すやうに云つた。
先刻から、聞くともなしに、聞いて居た勝平は、烈しい怒で胸の中が、煮えくり返るやうに思つた。彼は、立ち上りざま、惡口を云つて居る青年の細首を捕へて、邸の外へ放り出してやりたいとさへ思つた。彼は若い時、東京に出たときに、勞働をやつた時の名殘りに、殘つて居る二の腕の力瘤を思はず握でた。が、迫に彼の位置が、つい三四分前まで、あんなに誇らしく思つて居た彼の社會的位置が、彼のさうした怒を制して呉れた。彼は、ムラ〳〵と湧いて來る心を抑へながら、青年の云ふことを、ぢつと聞き澄して居た。
「成金だとか、何とかよく新聞などに、彼等の豪奢な生活を、謳歌して居るやうですが、金で贅うる彼等の生活は、何んなに單純で平凡でせう。金が出來ると、女色を漁る、自動車を買ふ、邸を買ふ、家を新築する、分りもしない骨董を買ふ。それ切りですね。中に、よつぽど心

掛のいゝ男が、寄附をする。物質上の生活などは、いくら金をかけても、直ぐ盡きるのだ。金で、自由になる藝妓などを、弄んでゐて、よく飽きないものですね」
青年は、成金全體に、何か烈しい恨みでもあるやうに、罵りつゞけた。
「飽きるつて。そりやどうだか、分りませんね。貴方のやうに、敏感な方なら、直ぐに飽きるでせうが、彼等のやうに鈍い感じしか持つて居ない人達は、何時迄同じことをやつて居ても飽きないのぢやなくつて！」女は、美しい然し冷めたい微笑を浮べながら云つた。
「貴女は、惡口は僕より一枚上ですね。ハ、、、ハ、、」
二人は相顧みて、會心の笑ひを笑ひ合つた。
默つて聞いて居た勝平の顔は、憤怒のため紫色になつた。

四

まだ年の若い元氣な二人は、自分達の會話が、傍に居合す此邸の主人の勝平にどんな影響を與へて居るかと云ふ事は、夢にも氣の付いて居ないやうに、無遠慮に自由に話し進んだ。
「でも、お招ばれを受けて居て、惡口を云ふのは惡いことよ。さうぢやなくつて」
令孃は、右の手に持つて居る華奢な象牙骨の扇を、弄りながら、青年の顔を見上げながら、道に女らしく云つた。
「いや、もつと云つてやつてもいゝのですよ」と、青年はその淺黑い男性的な凜々しい顔を、一層引き緊めながら、「第一華族階級の人達が、成金に對する態度なども、可なり卑しいと思つて居るのですよ。平生門閥だとか身分だとか云ふ愚にも付かないものを、自慢にして、平民だとか町人だとか云つて、輕蔑して居る癖に、相手が金があると、だらうが、成金だらうが、此方からペコ〳〵して接近するのですからね。僕の父なんかも、何時の間にか、あんな連中と知己になつてゐるのですよ。此間も、あんな連中に擔がれて、何とか云ふ新設會社の重役になるとか云つて、騷いで居るものですから、僕はウンと云つてやつたのですよ」
「おや！　今度は、お父樣にお鉢が廻つたのですか」
女は、青年の顔を見上げて、ニツコリ笑つた。
「其處へ來ると、貴女のお父樣なんか立派なものだ。何處へ出しても恥かしくない。いつでも清貧に安んじていらつしやる。」
青年は靴の先で散り布いて居る落花を踏み躪りながら云つた。
「父のは病氣ですのよ」女は、一寸美しい眉を落し「あんなに年が寄つても、道樂が止められんのですもの」さう云つた聲は、一寸淋しかつた。
「道樂ぢやありませんよ。男子として、立派な仕事ぢやありませんか。三十年來貴族院の閥族として、藩閥政府と戰つて來られたのですもの」
青年は、女を慰めるやうに云つた。が、先刻成金を攻擊したときほどの元氣はなかつた。二人は話が何時か、理に落ちて來た爲だらう、執ちらからともなく、默つてしまつた。青年は、他の一つの腰掛を、二三尺動かして來て、女と並んで腰をかけた。生あたゝかい晩春の微風が、襲つて來た爲だらう、花が頻りに散り始めた。
勝平は先刻から、幾度此の場を立ち去らうと思つたか、分らなかつた。が、自分に對する惡評を怖れて、コソ〳〵と逃げ去ることは、傲岸な彼の氣性が許さなかつた。張り裂けるやうな憤怒を、胸に抑へて、ぢつと青年の攻擊を聞いて居たのであつた。
彼は、つい十分ほど前まで、今日の園遊會に集まつて居る、凡ての人々は自分の金力に對

する讃美者であると思つて居た。羨美者ではなくとも、少くとも羨望者であると思つて居た。否、少くとも、自分の持つて居る金の力丈は、認めて呉れる人達だと思つて居た。今日集まつて居る首相を初め、いろ〳〵な方面の高官も、M公爵を筆頭に多くの華族連中も、海軍や陸軍の將官達も、銀行や會社の重役達も、學者や宗教家や、角力や俳優達も、自分の持つて居る金力の價値丈は認めて呉れる人だと思つて居た。認めて居て呉れゝばこそやつて來たのだと思つて居た。それだのに、齒牙にもかけたくない、生若い男女の學生が、たとひ貴族の子女であるにしろ、今日の會場の中央で、たとひ自分の顔を見知らぬにせよ、自分の目前で、自分の生活を罵るばかりでなく、自分が命綱とも思ふ金の力を、頭から否定して居る。金を持つて居る自分達の生活を、否人格まで、散々に辱めて居る。さう考へて來ると、先刻まで晴やかに華やかに、昂ぶつて居た勝平の心は、苦い韮を喰つたやうに、不快な暗いものになつてしまつた。彼は、かすり傷を負つた豹のやうな、凄い表情をしながら、二人の後姿を睨んで居た。もう一言何とか言つて見ろ、そのまゝには濟まさないぞ。彼の激昂した心がさうした呻を洩して居た。

五

さうした恐ろしい豹が、彼等の背後に蹲まつて居ようとは、氣の付いて居ない二人は、今度は四邊を憚るやうに、しめやかに何やら話し始めた。

もう一言、學生が何か云つたら、飛び出して、面と向つて云つてやらうと、逸つて居た勝平も、相手が急に靜になつたので、拍子抜がしながら、而もその儘立ち去ることも、業腹なので、二人の容子を、ぢつと睨み詰めて居た。

自分に對する侮蔑のために、カッとなつてしまつて、青年の顔も少女の顔も、十分眼に入らなかつたが、今は少し心が落着いたので、二人の顔を、更めて見直した。

氣が付いて見れば見るほど、青年は男らしく、美しく、女は女らしく美しかつた。殊に、少女の顔に見る淨い美しさは、勝平などが夢にも接したことのない美しさだつた。彼は、心の中で、金で購つた新襦袢や赤阪の、名高い美妓の面影と比較して見た。何と云ふ格段な相違が其處にあつただらう。彼等の美しさは、造花の美しさであつた。御眞珠の美しさであつた。一目丈は、どまかしが利くが二目見るともう鼻に付く美しさであつた。が、この少女は、夜毎に下る白露に育まれた自然の花のやうな、生きた新鮮な美しさを持つて居た。人間の手の及ばない海底に、自然と造り上げらるゝ、天然眞珠の如き輝きを持つて居た。一目見て美しく、二目見て美しく、見直せば見直す毎に蠱つて來る美しさを持つて居た。

勝平が、今迄金で買ひ得た女性の美しさは、此少女の前では、皆低物だつた。金で買ひ得るものと思つて居たものは、皆贋物だつたのだ。勝平は此少女の美しさからも、今迄の誇を可なり傷けられてしまつた。

それ丈ではなかつた。此二人が、戀人同士であることが、勝平にも直ぐそれと判つた。二人の交して居る言葉は、低くて聞えなかつたが、時々お互に投げ合つて居る微笑には、愛情が籠もつて居た。愛情に燃えて居ながら、而も淨く美しい微笑だつた。

二人の跪じい容子を見て居る裡に、勝平の心の中の憤怒は何時の間にか、鎮静をさへ交へて居た。

「凡ての事は金だ。金さへあればどんな事でも出來る」と思つて居た彼の誇は、根柢から搖り動かされて居た。此の二人の戀人が、今感じ合

つて居るやうな幸福は、勝平の全財產を、投じても得られるか、何うか分らなかつた。少女の顔に浮ぶ、淨いしかも愛に溢れた微笑の一つでさへ、購ふことが出來るだらうか。いかにも、新襦袢や赤阪には、彼に對して、千の媚を呈し、萬の微笑を贈る女は、幾何でも居る。が、その媚や微笑の底には、袖乞ひのやうな卑しさや、狼のやうな貪慾さが隱されて居た。此の若い男女が、交して居るやうな微笑とは、金剛石と木炭のやうに違つて居た。同じ炭素から成つて居ても、金剛石が木炭と違ふやうに、同じ笑でも質が違つて居たのだ。

青年が、勝平の金力をあんなに、罵倒するのも無理はなかつた。實際彼は、金力で得られない幸福があることを、勝平の前で示して居るのだつた。

青年の罵倒が單なる惡口でなく、勝平に取つては、苦い眞理である丈に、勝平の憤みは骨に入つた。また、罵倒した後で、罵倒する權利のあることを、勝平にマザ〳〵と見せ付けた丈に、勝平の憤は、肝に銘じた。彼は、一突き刺された鬪牛のやうに、怒つて居た。もう、自制もなかつた。彼が、先刻まで誇つて居た社會的位置に對する遠慮もなかつた。彼は樫の木に出來る木瘤のやうな拳を握りしめながら、今にも青年に飛びかゝるやうな身構へをして居た。

その時に、蹲まつて居た青年がつと立ち上つた。女も續いて立ち上りながら云つた。

「でも、何か召し上つたら何う。折角いらしつたのですもの」

「僕は、成金輩の栗を食むを潔しとしないのです。ハ、ヽ、ヽ」

青年は、半分冗談で云つたのだつた。が、憤怒に心の狂ひかけて居た勝平にとつては、最後の通牒だつた。彼は、寢そべつて居た獅子のやうに、猛然と腰掛から離れた。

六

勝平の激怒には、まだ氣の付かない青年は、連の女を促して、丘を下らうとして居るのだつた。

「もし、もし、暫らく」勝平の太い聲も、迫に頻へた。

青年は、何氣ないやうに振返つた。

「何か御用ですか」落着いた、しかも氣品のある聲だつた。それと同時に、連の女も振返つた。その美しい眉に、一寸勝平の突然な態度を咎めるやうな色が動いた。

「いや、お呼び止めいたして濟みません。一寸御挨拶がしたかつたのです」と、云つて勝平は、息を切つた。昂奮の餘に、言葉が自由でなかつた。二人の相手は、勝平の昂奮した樣子を、不思議さうにジロ〳〵見て居た。

「先刻、皆樣に御挨拶した筈ですが、貴君方は遲くいらしつたと見えて、まだ御挨拶をしなかつたやうです。私が、此家の主人の莊田勝平です」

さう云ひながら、勝平はわざと丁寧に、頭を下げた。が、兩方の手は、激怒のために、ブルブルと顫へて居た。

迫に、青年の顔も、彼に寄り添うて居る少女の顔もサッと變つた。が、二人とも少しも惡怯れたところはなかつた。

「あゝさうですか。いや、今日はお招きに與つて有難う御座います。僕は、御存じの杉野直の息子です。玆に、いらつしやるのは、唐澤男爵のお嬢さんです」

青年の顔色は、青白くなつて居たが、少しも狼狽した容子は見せなかつた。昂然とした立派な態度だつた。青年に紹介されて、しとやかに頭を下げた令嬢の容子にも、微塵狼狽へた樣子はなかつた。

「いや、先刻から貴君の御説論を拜聽して居ま

した。いろ〳〵我々には、參考になりました。へ、、」

勝平は、高飛車に自分の優越を示すために、哄笑しようとした。が、彼の笑ひ聲は、咽喉にからんだまゝ、調子外れの叫び聲になつた。

自分の罵倒が、その的の本人に聽かれたと云ふことが、明かになると、青年も遂に當惑の容子を見せた。が、彼は冷靜に落着いて答へた。

「それはとんだ失禮を致しました。が、つい平生の持論が出たものですから、何とも止むを得ません。僕の不謹愼はお詫びします。が、持論は持論です」

さう云ひながら、青年は冷めたい微笑を浮べた。

自分が飛び出して出さへすれば、周章狼狽して、一溜りもなく參つてしまふだらうと思つて居た勝平は、當が外れた。彼は、相手が思ひの外に、强いのでタヂ〳〵となつた。が、それ丈彼の憤怒は胸の裡に湧き立つた。

「いや、お若いときは、金なんかと云つて、よく輕蔑したがるものです。私なども、その覺えがあります。が、今にお判りになりますよ。金が、人生に於てどんなに大切であるかが」

勝平は、出來る丈高飛車に、上から出ようとした。が、青年は少しも屈しなかつた。

「僕などは、さうは思ひません。世の中で、高尚な仕事の出來ない人が、金でも溜めて見ようと云ふことに、なるのぢやありませんか。僕は事業を事業として、樂しんで居る實業家は好きです。が、事業を金を得る手段と心得たり、又得た金の力を他人に、見せびらかさうとするやうな人は嫌ひです」

もう、其處に何等の儀禮もなかつた。それは、言葉で行はれて居る搭聞だつた。青年の顏も蒼ざめて居た。勝平の顏も蒼ざめて居た。

「いや、何とでも仰しやるがよい。が、理窟ぢやありません。世の中のことは、お坊ちゃんの理想通に行くものではありません。貴君にも金の力がどんなに恐ろしいかが、お判りになるときが來ますよ、いや、屹度來ますよ」

勝平は、その大きい口を、きつと結びながら青年を睨みすゑた。が、青年の直ぐ傍に、立ち竦んだまゝ、默つて居る彫像のやうな姿に目を轉じたとき、勝平の心は、再びタヂ〳〵となつた。その美しい顏は勝平に對する憎惡になつた。

青年が、何かを答へようとしたとき、女は突如彼を遮ぎつた。

「もういゝぢや御座いませんか。私達が、參つたのがいけなかつたので御座いますもの。御主人には御主人の主義があり貴君には貴君の主義があるのですもの。その執れが正しいかは、銘々一生を通じて試して見る外はありませんわ。さあ、失禮をしてお暇しようぢやありませんか」

少女は、青年より以上に强かつた。其處には火花が漏れるやうな緊さがあつた。それ丈、勝平に對する侮辱も、甚だしかつた。こんな男と言葉を交へるのさへ、馬鹿々々しいと、云つた表情が、彼女の何處かに漂つて居た。孔雀のやうに美しい彼女は、孔雀のやうな威度を持つて居るのだつた。

青年も、自分の態度を、餘り大人氣ないと思ひ返したのだらう。女の言葉を、戈を收める機會にした。

「いや、飛んだ失禮を申上げました」

さう云ひ捨てたまゝ、青年は女と並んで足早に丘を下つて行つた。敵に、素早く身を躱されたやうに、勝平は心の憤怒を、少しも晴さない中に、やみ〳〵と物別れになつたのが、口惜しかつた。もつと、何とか云へばよかつた、もつと、青年を恥しめてやればよかつたと、口

惜しがつた。聽じさうに並んで、遠ざかつて行く二人を見て居ると、勝平は自分の敗れたことが、マザ〳〵と判つて來た。青年の罵倒に口惜しがつて、思はず飛び出したところを、手もなく扱はれて、うまく肩透しを喰つたのだつた。どんな點から、考へて見ても、自分にいゝ所はなかつた。敗戰だつた。醜い敗戰だつた。さう思ふと、わざ〳〵五萬を越す大金を消つて、園遊會をやつたことまでが、馬鹿らしくなつた。大臣や總裁や公爵などの挨拶を受けて、有頂天にまで行つた心持が、生若い男女のために地の底へまで引きずり込まれたのだ。

彼の憤りと恨みとが、胸の中で煮えくり返つた時だつた。その憤りと恨みとの嵐の中に、徐に鎌首を擡げて來た一念があつた。それは、云ふまでもなく、復讐の一念だつた。さうだ、俺の金力を、あれほどまで、侮辱した青年を、金の力で、骨までも思ひ知らしてやるのだ。青年に味方して、俺にあんな憎惡の眼を投げた少女を、金の力で隨までも、思ひ知らしてやるのだ。さう思ふと、彼の胸に、新しい力が起つた。

青年の父の杉野直と云ふ子爵も、少女の父の唐澤男爵も、共に聞えた貧乏華族である。黃金の戈の前、黃金の鉞の前には、何の力もない人達だつた。

が、何うして戰つたらいゝだらう。彼等の父を苛めることは何でもないことに違ひない。が、單なる學生である彼等を、苛める方法は容易に浮かんで、來なかつた。その時に、勝平の心に先刻の二人の樣子が浮かんだ。睦じく語つて居る悪人同士としての二人が、浮かんだ。それと同時に、電のやうに、彼の心にある惡魔的な考へが思ひ浮かんだ。その考へは、電のやうに消えないで、徐々に彼の頭に喰ひ入つた。

まだ、春の日は高かつた。彼が招いた人達は園内の各所に散つて、春の半日を樂しく遊び暮して居る。が、その人達を招いた彼丈は、たゞ一人悄々たる心を懷いて、長閑な春の日に、惡魔のやうな考へを、考へて居る。

「あら、まだ玆にいらしつたの、方々探したのよ」

突如、後に騷がしい女の聲がした。先刻の藝妓達が歸つて來たのである。

「さあ！　彼方へいらつしやい。お客樣が皆、探して居るのよ」

彼方へいらつしやい。お客樣が皆、探して居るのよ」

二三人彼のモーニングコートの腕に縋つた。

「あゝ行くよ行くよ。行つて酒でも飲むのだ」

彼は、氣の拔けたやうに、呟きながら、藝妓達に引きずられながら、もう何の興味も無くなつた來客達の集まつて居る方へ拉せられた。

父と子

一

「またお父樣と兄樣の爭ひが始まつて居る」さう思ひながら、瑠璃子は讀みかけて居たツルゲネフの「父と子」の英譯の頁を、閉ぢながら、段段高まつて行く父の聲に耳を傾けた。

「父と子」の爭ひ、もつと廣い言葉で云へば舊時代と新時代との爭ひ、舊思想と新思想との爭ひ、それは十九世紀後半の露西亞や西歐諸國丈の惱みではなかつた。それは、一種の傳染病として、何時の間にか、日本の上下の家庭にも、侵入して居るのだつた。

五六十になる老人の生活目標と、二十代の青年の生活目標とは、雪と炭のやうに違つて居る。一方が北を指せば、一方は西を指して居る。老人が「山」と云つても、青年は「川」とは答へない。それだのに、老人は自分の握つて居る權力で、父としての權力や、支配者としての權力や、上長者としての權力で、青年を束縛しようとする。西へ行きたがつて居る者を、自分と

同じ方向の、北へ連れて行かうとする。其處から、色々な家庭悲劇が生れる。

瑠璃子は、父の心持も判つた。兄の心持も判つた。父の時代に生れ、父のやうな境遇に育つたものが、父のやうな心持になり、父のやうな目的のために戰ふのは、當然であるやうに想はれた。が、兄のやうな時代に生れ、兄のやうな境遇に育つたものが、兄のやうに考へるのも亦當然であるやうに思はれた。父も兄も間違つては居なかつた。お互に、間違つて居ないものが、爭つて居る丈に、その爭ひは何時が來ても、止むことはなかつた。何時が來ても、一致しがたい平行線の爭ひだつた。

母が、昨年死んでから、淋しくなつた家庭は、取り殘された人々が、その淋しさを償ふために、以前よりも、もつと睦まじくなるべき筈だのに、實際はそれと反對だつた。調和者としての母が居なくなつた爲、兄と父との爭ひは、前よりも激しくなり、露骨になつた。

「馬鹿を云へ！　馬鹿を云へ！」

父のしはがれた聲り裂けるやうな聲が、聞えた。それに續いて、何かを擲つやうな物音が、聞えて來た。

瑠璃子は、その音をきくと、何時も心が暗くなつた。また父が兄の繪具を見付けて、擲つて居るのだ。

さう思つて居ると、又カンバスを引き裂いて居るらしい、帛を裂く激しい音が聞えた。瑠璃子は、思はず兩手で、顏を掩うたまゝかすかに顫へて居た。

藝術と云つたやうなものに、粟粒ほどの理解も持つて居ない父が悲しかつた。繪を描くことを、ペンキ屋が看板を描くのと同じ位に卑しく見貶して居る父の心が悲しかつた。それと同じやうに、藝術をいろ〳〵な人間の仕事の中で、一番尊いものだと思つて居る、兄の心も悲しかつた。父から、描けば勘當だと嚴禁されて居るにも拘はらず、コツ〳〵と父の眼を盜んで、寫生に行つたり、そつと研究所に通つたりする兄の心が、悲しかつた。が、何よりも悲劇であることは、さうしたお互に何の共鳴も持つて居ない人間同士が、父と子であることだつた。父が、卑しみ拔いて居ることに、子が生涯を捧げて居ることだつた。父の理想には、子が少しも同感せず、子の理想には父が少しも同感しないことだつた。

カンバスが、引き裂かれる音がした後は、暫らくは何も聞えて來なかつた。爭ひの言葉が聞えて來る裡は、それに依つて、爭ひの經過が判つた。が、急に靜になつてしまふと、却つて妙な不安が、聞いて居る者の心に起つて來る。瑠璃子は、また父が、興奮の餘り心悸が亢進して、物も云へなくなつて居るのではないかと思ふと、急に不安になつて來て、爭ひの舞臺たる兄の書齋の方へ、足音を忍ばせながらそつと近づいて行つた。

二

瑠璃子は、そつと足音を立てないやうに、襖側を傳うて兄の書齋へ歩み寄つた。とどろく胸を押へながら襖側に向いて居る窓の硝子越しに、そつと室内をのぞき込んだ。彼女が豫期した通りの光景が其處にあつた。長身の父は威丈高に、無言のまゝ、兄を睨み付けて立つて居た。痩せた面長な顏は、白く冷めたく光つて居る。腰の所へやつて居る手は、ブル〳〵顫へて居る。兄は兄で、昂然とそれに對して居た。たゞさへ、蒼白い顏が、激しい興奮のために、血の氣を失つて、死人のやうに蒼ざめて居る。

父と子とは、思想も感情もスツカリ違つて居たが、負けぬ氣の剛情なところ丈が、お互に似て居た。父子の爭ひは、それ丈激しかつた。

二人の間には、繪具のチューブが、滅茶苦茶

に散つて居た。父の足下には、三十號の畫布が、枠に入つたまゝ、ナイフで横に切られて居た。その上に描かれて居る女の肖像も、無殘にも頬の下から胸へかけて、一太刀浴びて居るのだつた。

さうした光景を見た丈で、瑠璃子の胸が一杯になつた。父が、此上兄を恥しめないように、兄が大人しく出て呉れるようにと、心私かに祈つて居た。

が、父と兄との沈默は、それは戰ひの後の沈默でなくして、これからもつと怖しい戰ひに入る前の沈默だつた。

畫布までも、引き裂いた暴君のやうな父の前に、眞面目な藝術家として兄の血は、熱湯のように、沸いたのに違ひなかつた。いつもは、父に對して、冷然たる反抗を示す兄だつたが、今日は心の底から、憤つて居るらしかつた。憤怒の色が、アリ〳〵とその秀でた眉のあたりに動いて居た。

「考へて見るがいゝ。堂々たる男子が、畫筆などを弄んで居て何うするのだ」

父は、今迄堰り詰めて居た姿勢を、少しく崩しながら、苦い物をでも吐き出すやうに云つた。

「考へて、見る迄もありません。男子として、立派な仕事です」

兄の答へも冷たく卸かつた。

「馬鹿を云へ！　馬鹿を！」父は、又カッとなつてしまつた。「畫などと云ふものは、男子が一生を捧げてやる仕事では決してないのだ。云はば餘戲なのだ。なぐさみなのだ。お前が唐澤の家の副子でなければ、どんな事でも好き勝手にするがいゝ。が、俺の子であり、唐澤の家の副子である以上、お前の好き勝手にはならないのだ。唐澤の家には、畫描きなどは出したくないのだ。俺の子は、畫描きなどにはなつて貰ひたくないのだ！」

父は、さう叫びながら、手近にある卓の端を力委せに二三度打つた。瑠璃子には、父が貴族院の演壇で獨子吼する有樣が、何處となく偲ばれた。が、相手が現在の子であることが、父の妻を可なり淋しいものにした。

「お前は、父が三十年來の苦勵を察しないのか。お前は、俺の子として、父の志を繼ぐことを、名譽だとは思はないのか。俺の志を繼いで、俺が年來の望みを、果させて呉れようとは思はないのか。お前は、唐澤の家の歴史を忘れたのか、お前にいつも話して居る、お祖父樣の御無念を忘れたのか」

それは、父が少し興奮すれば、定まつて出る口癖だつた。父は、それを常に感激を以て語つた。が、子はそれを感激を以て、聞くことが出來なかつた。唐澤の家が、三萬石の小大名ではあつたが、足利時代以來の名家であるとか、維新の際に、祖父が勤王の志が、厚かつたにも拘はらず、薩長に賣られて、朝敵の汚名を取り、悶々の裡に憤死したことや、その死床で洩した「恥を取つて呉れ」といふ遺言を體して、父が三十年來貴族院で、藩閥政府と戰つて來たことなど、それは父にとつて、重大な一生を支配する生活の刺戟だつたかも知れない。が、子に取つては、彼の畫題となる一輩の草花に現はれて居る、自然の美しさほどの、刺戟も持つて居なかつた。時代が違つて居、人間が違つて居た。何の共通點もない人間同士が、血縁でつながつて居ることが、何より大きい悲劇だつた。

「默つて居ては分らない。何とか返事をなさい！」日本の大正の玉リアは、かう云つて石のやうに默つて居る子を挑んだ。

三

「お父さん！」兄は靜に頭を擡げた。平素は、默々として反抗を示す丈の兄だつたが、今日は徹底的に云つて見ようといふ決心が、その口の

遂に動いて居た。「貴方が、幾何仰しやつても、僕は政治などには、興味が向かないのです。殊に、現在のやうな議會政治には、何の興味も持つて居ないのです。僕は、お父さんの仰しやるやうに、法科を出て政治家になるなどと云ふことには、何の興味もないのです」

兄の言葉は、針のやうに鋭く澄んで來た。

「もう少し待つて下さい。もう少し、氣長に、私のすることを見て居て下さい。その中に、貴を揃くことが、人間としてどんなに立派な仕事であるか、堂々たる男子の事業として取かしくないかを、お父さんにも、お目にかけ得る時が來るだらうと思ふのです」

「あゝよして呉れ！」父は排ひ退けるやうに云つた。「そんな事は聞きたくない。馬鹿な！ 貴を描きなどが 貴を描くことなどが、……」父は苦々しげに言葉を切つた。

「お父さんには、幾何云つても解らないのだ」

兄も投げ捨てゝやうに云つた。

「解つてたまるものか」父の手がまたかすかに顫へた。

二人が、敵同士のやうに默つて相對峙して居る裡に、二三分過ぎた。

「光一！」父は改まつたやうに呼びかけた。

「何です！」兄も、それに應ずるやうに、答へた。

「お前は、今年の正月俺が云つた言葉を、まさか忘れはしまいな」

「覺えて居ます」

「覺えて居るか、それぢやお前は、此の家には居られない譯だらう」

兄の顏は、憤怒のために、見る〳〵中に眞赤になり、それが再び蒼ざめて行くに從つて、悲壯な顏付になつた。

「解りました。出て行けと仰しやるのですか」

怒のために、兄はわな〳〵顫へて居た。

「二度と、貴を描くと、家には置かないと、あの時云つて置いた筈だ。お前が、俺の干渉を受けたくないのなら、此家を出て行く外はないだらう」父の言葉は鐵のやうに堅かつた。

瑠璃子は、胸が張り裂けるやうに悲しかつた。一徹な父は、一度云ひ出すと、後へは引かない性質だつた。それに對する兄が、父に劣らない意地張だつた。彼女が、常々心配して居た大破綻が、とう〳〵目前に迫つて來たのだつた。

父の言葉に、カッと逆上してしまつたらしい兄は、前後の分別もないらしかつた。

「いや承知しました」

さう云ふかと思ふと、彼は俯きながら、狂人のやうに其處に落ち散つて居る繪具のチューブを拾ひ始めた。それを拾つてしまふと 机の引き出しを、紅茶苦茶に掻き廻し始めた。机の上に在つた二三冊のノートのやうなものを、風呂敷に包んでしまふと、彼は父に一寸目禮して、飛鳥のやうに室から駆け出さうとした。

父が、驚いて引き止めようとする前に、狂氣のやうに室内に飛び込んだ瑠璃子は、早くも兄の左手に縋がつて居た。

「兄さん！ 待つて下さい！」

「お放しよ。瑠璃ちゃん！」

兄は、荒々しく叱するやうに、瑠璃子の手をもぎ放した。

瑠璃子が、再び取り縋らうとしたときに、兄は下へ行く階段を、激しい音をさせながら、電光の如く馳け下つて居た。

「兄さん！ 待つて下さい！」

瑠璃子が、聲をしぼりながら、後から馳け下つたとき、帽子も被らずに、玄關から門の方へ足早に走つて居る兄の後姿が、チラリと見えた。

四

兄の後姿が見えなくなると、瑠璃子はよゝ

と泣き崩れた。弱り詰めて居た氣が碎けて、涙はとめどもなく、雙頰を濕ほした。

母が亡くなつてからは、父子三人の淋しい家であつた。段々差し迫つて來る窮迫に、召使の數も減つて、たゞ忠實な老婢と、その連合の老僕とが居る丈だつた。

それだのに、僅かしか殘つて居ない齒の中から、またその目ぼしい一本が、拔け落ちるやうに、兄が居なくなる。父と兄とは、水火のやうに何處まで行つても、調和するやうには見えなかつたけれども、兄と瑠璃子とは、仲のよい兄妹だつた。母が亡くなつてからは、更に二人は親しみ合つた。兄はたゞ一人の妹を愛した。殊に父と不和になつてから、肉親の愛を換し得るのはたゞ妹だけだつた。妹もたゞ一人の兄を頼つた。父からは、得られない理解や同情を兄から仰いで居た。瑠璃子には父の一徹も悲しかつた。兄の一徹も悲しかつた。

が、何よりも氣遣はれたのは、着のみ着の儘で、飛び出して行つた兄の身の上である。理性の勝つた兄に、萬一の間違があらうとは思はれなかつた。が、貧乏はして居ても、華族の家に生れた兄は、獨立して口を糊して行く手段を知つて居る譯はなかつた。が、一時の激昂のために、カッと飛び出したものの屹度歸つて來て下さるに違ない。或は麻布の叔母さんの家にでも、行くに違ない。やつと、さう氣休めを考へながら、瑠璃子は涙を拭ひ〳〵、階段を上つて行つた。二階に居る父の事も、氣がかりになつたからである。

父はやつぱり兄の書齋に居た。先刻と寸分違はない位置に居た。たゞ、傍にあつた椅子を引き寄せて、腰を下したまゝ、ぢつと俯いて居るのだつた。たつた一人の男の子に、背き去られた父の顏を見ると、瑠璃子の眼には新しい涙が、また一時に湧いて來るのであつた。此の頃、交じりかけた白髮が急に眼に立つやうに思つた。

「齒が脫けて 演說の時に 聲が洩れて困まる」と、此頃口癖のやうに云ふ通、口の邊が淋しく凋びて居るのが、急に眼に付くやうに思つた。

一生を通じて、やつて來た仕事が、自分の子から理解せられない、それほど淋しいことが、世の中にあるだらうかと思ふと、瑠璃子は、父に言葉をかける力もなくなつて、その儘床の上に再び泣き崩れた。

最愛の娘の涙に誘はれたのであらう、老いた政治家の頰にも、一條の涙の痕が印せられた。

「瑠璃子！」父の聲には、先刻のやうな元氣はなかつた。

「はい！」瑠璃子は、涙聲でかすかに答へた。

「出て行つたかい！ 彼は？」迫に何處となく恩愛の情が纏はつて居る聲だつた。

「はい！」彼女の聲は前よりも、力がなかつた。

「いやいゝ。出て行くがいゝ。志を異にすれば親でない、子でない、血緣は讀いて居ても路傍の人だ。瑠璃子！ お前には、父さんの心持は解るだらう。お前が男であつたら、屹度父さんの志を繼いで呉れるだらうとは、平生思つて居るのだが」父は元氣に云つた。が、聲にも口調にも力がなかつた。

瑠璃子は、それには何とも答へなかつた。が、瑠璃子の胸に、一味焼くやうな激しい氣性と、父にも兄にも勝るやうな强い意志があることは、彼女の平生の動作が示して居た。それと同じやうに、貴族的な氣品があつた。昔氣質の父が時時瑠璃子を捕へて「男なりせば」の嘆を漏すのも無理ではなかつた。

まだ父が、何か云はうとする時であつた。邸前の坂路を疾驅して馳け上る自働車の爆音が聞

えたかと思ふと、やがてそれが門前で緩んで、低い警笛と共に、一輛の自動車が、唐澤家の古びた黒い木の門の中に滑り入つた。

五

父子の悲しい淋しい緊張は、自動車の音で端なく破られた。瑠璃子は、もつとかうして居たかつた。父の氣持も訊き、兄に對する善後策も講じたかつた。彼女は、自分の家の恐ろしい悲劇を知らず顔に、自動車で驟々しく、飛び込んで來る客に、輕い憎惡をさへ感じたのである。

老婢は、何かに取り紛れて居るのだらう、容易に取次ぎには出て來ないやうだつた。

「老婢は居ないのかしら！」さう呟くと、瑠璃子は自分で、取次ぎするために、階段を下りかけた。

「大抵の人だつたら、會へないと斷るのだよ。いゝかい。」

さう言葉をかけた父を振り顧つて見ると、相變らず蒼い顏へて居るやうな顏色をして居た。

瑠璃子が、階段を下りて、玄關の扉を開けたとき、彼女は訪問者が、一寸意外な人だつたのに驚いた。それは、彼女の戀人の父の杉野子爵であつたからである。

「おや入らつしやいまし」さう云ひながら、彼女は心の中で可なり當惑した。杉野子爵は、彼女にとつては懷しい戀人の父だつた。が、父と子爵とは、決して親しい仲ではなかつた。同じ政治團體に屬して居たけれども、二人は少しも親しんで居なかつた。父は、內心子爵を賤しんで居た。政商達と結託して、私利を追うて居るらしい子爵の態度を、可なり不快に思つて居るらしかつた。公會の席で、二三度可なり激しい議論をしたと云ふ噂なども、瑠璃子は何時となく聽いて居た。

さうした人を、こんな場合、父に取次ぐことは、心苦しかつた。それかと云つて、自分の戀人の父を、情なく返す氣にもなれなかつた。彼女が躊躇して居るのを見ると、子爵は不審さうに訊いた。

「いらつしやらないのですか」

「いゝえ！」彼女は、さう答へるより外はなかつた。

「杉野です。一寸お取次を願ひます」

さう云はれると、瑠璃子は一も二もなく取次がずには居られなかつた。が、階段を上るとき、彼女の心にふとある動搖が起つた。「まさか」と、彼女は幾度も打ち消した。が、打ち消さうとすればするほど、その動搖は大きくなつた。

杉野子爵の長男直也は、父に似ぬ立派な青年だつた。音樂會で知り合つてから、瑠璃子は知らず識らずその人に惹き付けられて行つた。男らしい顏立と、彼の火のやうな熱情とが、彼女に對する大きな魅惑だつた。二人の愛は、激しく而も淸淨だつた。

二人は將來を誓ひ合つた。學校を出れば、正式に求婚します。青年は口癖のやうに繰返した。

青年は今年の四月學習院の高等科を出て居る。「學校を出ると云ふことが、學習院を出ることを、意味するなら」さう考へると瑠璃子は踏んで居る足が、階段に着かぬやうに、そは〳〵した。まだ一度も、尋ねて來たことのない子爵が、わざ〳〵尋ねて來る。さう考へて來ると、瑠璃子の小さい胸は、取り止めもなく搖き擾されてしまつた。

が、つい此間青年と圖遊會で會つたとき、彼はおくびにも、そんなことは云はなかつた。正式に突然求婚して、自分を驚かさうと云ふ惡戲かしら。彼女は、そんなことまで、咽喉の間に空想した。

が、苦り切つて居る、父の顏を見たとき彼女の心は、急に暗くなつた。會、それが瑠璃子

の思ふ通りの求婚であつたにしろ、父がオイソレと許すだらうか。心の中で、賤しんで居る者の子息に、最愛の娘を與へるだらうか。子は子である。父は父である。之れ位の事理の分らない父ではない。が、兄が突然家出して、さなきだに淋しい今、自分を手離して、他家へやるだらうか。さう思ふと、瑠璃子の心に伸びた空想の翼は、また忽ち半以上切り取られてしまつた。が、萬一さうなら、又萬一父が容易に承諾したら？

「あの！　杉野子爵がお見えになりました」

彼女の息は可なりはずんで居た。

六

父は娘の心を知らなかつた。杉野子爵の突然の來訪を、迷惑がる表情があり〳〵と動いた。

「杉野！　ふーむ」父は苦り切つたまゝ容易に立たうとはしなかつた。

父が、杉野子爵に對してかうした感情を持つて居る以上、又兄の家出と云ふ傷ましい事件が起つて居る以上、綾令子爵の來訪が、瑠璃子の夢見て居る通の意味を持つて居たにしろ、容易に纏まる筈はなかつた。さう考へると、彼女の心は、黯く滅したやうに暗くなつてしまつた。

「仕方がない！　お通しなさい！」

さう云つたまゝ、父は羽織を着るためだらう、階下の部屋へ下りて行つた。

瑠璃子は、戀人の父と自分の父との間に、まつはる不快な感情を悲しみながら、玄關へ再び降りて行つた。

「お待たせいたしました。何うぞお上り下さいませ」

「いや、どうも突然伺ひまして」と、子爵は如才なく挨拶しながら先に立つて、應接室に通つた。

古いガランとした應接室には、何の裝飾もなかつた。明治十幾年に建てたと云ふ洋館は、間取りも樣式も古臭く舊式だつた。瑠璃子は、客を案內する毎に、舊式の椅子の蒲團が、破れかけて居ることなどが氣になつた。

父は、直ぐ應接室へは入つた。心の中の感情は、可なり隔つて居たが、面と向ふと、迫に打ち解けたやうな挨拶をした。瑠璃子は、茶を運んだり菓子を運んだりしながらも、主客の話が氣にかゝつた。が、話は時候の挨拶から、政界の噂事などに通んだまゝ、用向きらしい話には、容易に觸れなかつた。

立ち聞きをするやうな、はしたない事は、思ひも付かなかつた。瑠璃子は、來客が氣になりながらも、自分の部屋に退いて、不安な、それかと云つて、不快ではない心地を續けて居た。

戀人の顏が、絕えず心に浮かんで來た。過ぎ去つた一年間の、戀人とのいろ〳〵な會合が、心の中に蘇へつて來た。どの一つを考へても、それは樂しい淸淨な幸福な思出だつた。二人は火のやうな愛に燃えて居た。が、お互に個性を認め合ひ、尊敬し合つた。上野の音樂會の歸途に、ガスの光が、ほのじろく濕んで居る公園の木下闇を、ベエトーフェンの「月光曲」を聽いた感激を、語り合ひながら、迎つた秋の一夜の事も思ひ出した。新綠の戸山ケ原の楡の林の中で、その頃讀んだトルストイの「復活」を批評し合つた初夏の日曜の事なども思ひ出した。戀人であると共に、得難い友人であつた。彼女の趣味や知識の生活に於ける大事な指導者だつた。

戀人の凜々しい性格や、その男性的な容貌や、その他いろ〳〵な美點が、それからそれと、彼女の頭の中に浮かんで來た。若し子爵の來訪の用向きが、自分の想像した通りであつたら、（それが何と云ふ子供らしい想像であらう）とは、打消しながらも、瑠璃子の眞珠のやうに白い額は、見る人もない部屋の中にありながら、ほのかに

赤らんで來るのだつた。

が、來客の話は、さう永くは續かなかつた。瑠璃子の夢のやうな想像を破るやうに、廊接室の扉が、父に依つて荒々しく開かれた。瑠璃子は、客を送り出すため、急いで玄關へ出て行つた。

見ると父は、兄の家出を見送つた時以上に、蒼い苦り切つた顏をして居た。杉野子爵はと見ると、その如才のないニコ〳〵した顏に、微笑の影も見せず、周章として迫はれるやうに玄關に出て、ロク〳〵挨拶もしないで、車上の人となると、運轉手を促し立てゝ、あわたゞしく去つてしまつた。

父は、自動車の後影を憎惡と輕蔑との交つた眼付で、しばらくの間見詰めて居た。

「お父様どうか遊ばしたのですか」

瑠璃子は、おそる〳〵父に訊いた。

「馬鹿な奴だ。華族の面汚しだ」

父は、唾でも吐きかけるやうに罵つた。

七

杉野子爵に對する、父の燃ゆるやうな憎惡の聲を聞くと、瑠璃子は自分の事のやうに、オドオドしてしまつた。胸の中に、ひそかに懷いて居た子供らしい想像は、跡形もなく踏み躪られて居た。踏んで居た床が、崩れ落ちて、其儘底知れぬ深い淵へ、落ち込んで行くやうな、暗い頼りない心持がした。之迄でさへ、父と父との感情に、暗い影のあることは、無邪気な二人の心を、どんなに傷めたか、分らない。それだのに、今日はその暗い影が、明らさまに火を放つて、爆發を來したらしいのである。

「一體何うしたので御座います。そんなにお腹立ち遊ばして」

瑠璃子は、父の顏を見上げながら、オヅ〳〵訊いた。父は、口にするさへ、忌々しさうに、

「訊くな。訊くな。汚らはしい。俺達を侮辱して居る。俺ばかりではない、お前までも侮辱して居るのだ」と、齒噛をしないばかりに激昂して居るのだつた。

自分までもと、云はれると、瑠璃子は更に不安になつた。自分のことを、一體何う云つたのだらう。自分に就いて、一體何を云つたのだらう。自分のことを、一體何う侮辱したのだらう。さう考へて來ると、瑠璃子は父の癇癪を恐れながらも、默つて居る譯には行かなかつた。

「一體どんなお話が、御座いましたの。妾の事を、杉野さんは何う仰しやるので御座いますか」

「訊くな。訊くな。訊かぬ方がいゝ。聞くと却つて氣を惡くするから。あんな賤しい人間の云ふことは、一切耳に入れぬことぢや」

やゝ興奮の去りかけた父は、却つて娘を宥めるやうに優しく云ひながら、二階の居間へ行くために階段を上りかけた。父は、杉野子爵を賤しい人間として、捨てゝ置くことが出來たが、瑠璃子には、それは出來なかつた。どんなに、子爵が賤しくても、自分の戀人の父に違なかつた。その人が、自分のことを、何う云つたかは、瑠璃子に取つては是非にも訊きたい大事な事だつた。

「でも、何と仰しやつたか知りたいと思ひますの。妾のことを何と仰しやつたか、氣がかりで御座いますもの」

瑠璃子は、父を迫ひながら、甘えるやうな口調で云つた。娘の前には、目も鼻もない父だつた。母のない娘のためには、何物も惜しまない父だつた。瑠璃子が執拗に二三度訊くと、どんな秘密でも、明しかねない父だつた。

「なにも、お前の惡口を云つたのぢやない」

父は憤怒を顏に現しながらも、娘に對する言葉丈は、優しかつた。

「ぢや、何うして侮辱になりますの。あの方から、侮辱を受ける覺えがないので御座いますもの」

「それを侮辱するから怪しからないのだ。俺を侮辱するばかりでなく、清淨潔白なお前までも侮辱してかゝるのだ」

父は、又杉野子爵の態度か言葉かを思ひ出したのだらう、その人が、前にでも居るやうに、拳を握りしめながら、激しい口調で云つた。

「何うしたと云ふので御座います、お父様、ハツキリと仰しやつて下さいまし、一體どんなお話で、あの方が、私の事を何う仰しやつたのです。一體どんな用事で、入らしつたので御座います」

瑠璃子も、可なり興奮しながら、本當のことを知りたがつて、疊みかけて訊いた。

「彼の男は、お前の縁談があると云つて來たのだ」

父の言葉は意外だつた。

「妾の縁談！」瑠璃子は、さう云つたまゝ、一の句が次げなかつた。彼女は化石したやうに、父の書齋の入口に立ち止まつた。父は、瑠璃子の驚きに、深い意味があらうとは、夢にも知らずに、興奮に疲れた身體を、安樂椅子に投げるのであつた。

買ひ得るか

一

父から、杉野子爵の來訪が、縁談の爲であると、聞かされると、瑠璃子は電火にでも、打たれたやうに、ハツと驚いた。

やつぱり、自分の子供らしい想像當つたのだ。杉野子爵は、子のために、直接話を進めに來たのだ。その話の中に、子爵の不用意な言葉か、不遜の態度かが、潔癖な父を怒らしたに違ない。さう思ふと、瑠璃子はあまりに潔癖過ぎる父が、急に恨めしくなつた。少しも妥協性のない、一徹な父が恨めしかつた。自分の一生の運命を、父はすかも知れない、父の態度が、恨めしかつた。瑠璃子は父に抗議するやうに云つた。

「縁談のお話が、何うして妾を、侮辱することになりますの。またそんなお話なら、一應妾にも、話して下さつてから、お斷りになつても、遅くはないと思ひますわ」

瑠璃子は、誰に對しても、自己を主張し得る女だつた。彼女は、父にでも兄にでも、戀人にでも、自己を主張せずには、居られない女だつた。

瑠璃子の抗議を、父は憫むやうに笑つた。

「縁談！　ハ、、、、。普通の縁談なら、無論瑠璃さんにも、よく相談する。が、あの男の縁談は、縁談と云ふ名目で、貴女を買ひに來たのぢや。金を積んで、貴女を買ひに來たのぢや。怪しからん！　俺の娘を！」

父の眼は、憤怒のために、狂はしいまでに、輝いた。さう云はれると、瑠璃子は、一言もなかつた。が、さうした縁談の相手は、一體誰だらうかと、思つた。

「彼の男が來て娘をやらんかと云ふ。平素から、快く思つて居ない男ぢやが、折角來て呉れたものだから、無禮に歸るのも、思つたから、與らんこともないと云ふと、段々相手の男のことを話すのぢや。人を馬鹿にして居る。四十五で、先妻の子が、二人まであると云ふのぢや。俺は、頭から怒鳴り付けてやつたのぢや。すると、彼の男が、オヅ〳〵何を云ひ出すかと思ふと、支度金は三十萬圓まで、出すと云ふのぢや。俺は憤然と立ち上つて、彼の男を應接室の外へ引きずり出したのだ」

父の聲は、わな〳〵顫へた。

「此年になるまで、こんな侮辱を受けたことはない。貧乏はして居る。政戰三十年、家も邸も抵當に入つて居る。が、三十萬圓は慾か、千萬

一億の金を積んでも、娘を金のために、賣るものか」

父は、傍の見る眼も、傷ましいほど、激昂して居る。年老いた肉體は、餘りに激しい憤怒のために、今にも碎けさうに、緊張して居る。瑠璃子も、胸が一杯になつた。父の怒が、尤もだと思つた。が、その怒を宥むべき何の言葉も、思ひ浮ばかつた。

が、それに付けても、杉野子爵は、何の恨があつて、かうした侮辱を、年老いた父に與へるのだらう。さう思ふと、瑠璃子の胸にも、張り裂けるやうな怒りが、湧いて來た。が、それが戀人の父であると、思ひ返すと、身も世もないやうな悲しみが伴つた。

「彼の男は、金のために、あんなに賤しくなつてしまつたのだ。政商連と結託して、金のためにばかり、動いて居るらしいのだ。今日の縁談なども、纏まれば幾何と云ふ、口錢が取れる仕事だらう。ハ、、、、、」

父は、怒を嚙に換へながら、蔑むやうに哄笑した。

「何でも、今日の縁談の申込み手と云ふのが、ホラ瑠璃さんも行つただらう、此間風遊會をやつた莊田といふ男らしいのだ」

父は何氣なく云つた。が、莊田と云ふ名を聞くと、瑠璃子は直ぐ、豹の眼のやうに恐ろしい執拗な、その男の眼付を思ひ出した。冷靜な、勝氣な、瑠璃子ではあつたけれども、惡魔に類を、舐められたやうな氣味惡さが、全身をゾクゾクと襲つて來た。

二

莊田と云ふ名前を聽くと、瑠璃子が氣味惡く思つたのも、無理ではなかつた。彼女は、その人の催した園遊會で、妙な機みから、激烈しい言葉を交して以來、その男の顏付や容子が、惡夢の名殘りのやうに、彼女の頭から離れなかつた。

太いガサツな眉、二段に疊まれて居る鼻、厚い脣、いかにも自我の强さうな表情、その顏付を思ひ出して見る丈でも、イヤな氣がした。

そんな男と、云ひ爭ひをしたことが、執念深い蛇とでも、恨を結び合つたやうに、何となく不安だつた。處が、その男が意外にも自分に婚を求めて居る。さう思ふ丈でも、彼女は妙な惡寒を感じた。よく傳說の中にある、白蛇などに見込まれた美少女のやうに。

瑠璃子は、相手の心持が、容易には分らなかつた。容易に、その事を信ずることが出來なかつた。

「本當で御座いますの？　杉野さんが、本當に莊田と仰しやつたので御座いますの？」

「確かに、あの男だと云はないが、何うも彼奴の事らしい、杉野はお前の話を始める前に、それとなく莊田の事を賞めて居るのだ。何うも彼奴らしい。金が出來たのに、付け上つて、華族の娘をでも貰ひたい肚らしいが、俺の娘を貰ひに來るなんて、狂人の沙汰だ！」

父は相手の無禮を怒つたものの、先方に深い惡意があらうとは思はないらしく、先刻から見ると餘程機嫌が直つて居るらしかつた。

が、瑠璃子はさうではなかつた。此の求婚を、氣紛れだとか冗談だとか、華族の娘を貰ひたいと云ふやうな單なる虛榮心だとは、何うしても思はれなかつた。父の一喝に逃つて、逡々の體で、逃げ歸つた杉野子爵は、ほんの傀儡で、その背後に怖ろしい惡魔の手が、動いて居ることを感ずずには居られなかつた。さう思つて來ると、八重櫻の下で、自分達二人を、睨み付けた恐ろしい眼が、アリ〳〵と浮んで來た。さう思つて來ると、自分の戀人の父を、自分に對する求婚の使者にした相手のやり方に、惡魔のやうな意地惡さを、感ずずには居られなかつた。

瑠璃子は思つた。自分が傷つけた蛇は、ホン

の僅な恨を、酬ふために猛然と、襲ひかゝつて居るのだと。が、さう思ふと、瑠璃子は却つて、必死になつた。「來るならば來て見よ。あんな男に、指一つ觸れさせてなるものか」彼女は心の中でさう決心した。

「いや、杉野の奴一喝してやつたら、一縮みになつて歸つたよ。あゝ云つて置けば、二度と面向けは出來ないよ」

父は、もう凡てが、濟んでしまつたやうに、何氣なく云つた。が、瑠璃子にはさうは思はれなかつた。一度飛び付き損つた蛇は、二度目の飛躍の準備をしてゐるのだ。いや、二度目どころではない。三度目四度目五度目十度目の準備まで整つて居るのかも知れない。さう思ふと、瑠璃子は又更に自分の胸の處女の誇が、烈火のやうに激しく燃えるのを感じた。

「本當に口惜しう御座います。あんな男が、妾を。それに杉野さんが、そんな話をお取次ぎになるなんて、本當にひどいと思ひますわ」

瑠璃子は、興奮して、涙をポロ〳〵落しながら云つた。それは口惜しさの涙であり、怒の涙だつた。

「だから、聽かない方が、いゝと云つたのだ。さうだ！　杉野が怪しからんのだ。あんな馬鹿な話を取次ぐなんて、彼奴が怪しからんのだ。が、あんな墮落した人間の云ふことは、氣に止めぬ方がいゝ。縁談どころか、瑠璃さんには、何時までも、玆に居て貰ひたいのだ。殊に、光一があゝなつてしまへば、お父樣の子はお前丈なのだ。百萬圓はおろか、お父樣の首が飛んでも、お前を手離しはしないぞ。ハ、、、、、」

父は、瑠璃子を慰めるやうに、快活に笑つた。瑠璃子の心も、父に對する愛で、一杯になつて居た。何時までも、父の傍に居て、父の理想者であり、慰安者であらうと思つた。

「妾もさう思つて居ますの。何時までも、お父樣のお傍に居たいと思つて居ますの」

さう云つて瑠璃子は初めてニツコリ笑つた。以の過ぎ去つた後の平和を思はせるやうな、淑しいけれども靜かな美しい微笑だつた。

三

二つの忌はしい事件が、渦を捲いて起つた日から、瑠璃子の家は、暴風雨の吹き過ぎた後のやうな淑しさに、包まれてしまつた。

家出した兄からは、ハガキ一つ來なかつた。父は父でおくびにも兄の事は云はなかつた。人を飜んで、兄の行方を探すとか、警察に搜索願を出すなどと云ふことを、父は夢にも思つて居ないらしかつた。自分を捨てた子の爲には、指一つ動かすことも、父としての自尊心が許さないらしかつた。

かうした父と兄との間に挾まつて、たゞ一人、心を傷めるのは瑠璃子だつた。彼女は、父に隱れて兄の行方をそれとなく探つて見た。兄が、その以前父に隱れて通つたことのある、小石川の洋畫研究所も尋ねて見た。兄が、豫てから私淑して居る二科會の幹部のN氏をも訪ねて見た。が、何處でも兄の消息は判らなかつた。

兄の友達の二三にも、手紙で訊き合して見た。が、どの返事も定まつたやうに、兄に曾らく會つたことがないと云ふやうな、頼りない返事だつた。假令父とは不和になつても、自分丈には安否位は、知らせて呉れてもよいものと、彼女は兄の氣强さが恨めしかつた。が、彼女の心を傷ましめることは外にもう一つあつた。それは、これまで感情の疎隔して居た父と杉野子爵との間が、到頭最後の破裂に達したことである。あんな事件が起つた以上、再び元通りになることは、殆ど絶望のやうに思はれた。從つて、自分達の戀が、正式に認められるやうな機は、永久に來ないやうに思はれた。自分が、戀を達するときは、やつぱり兄と同じやうに、父に背